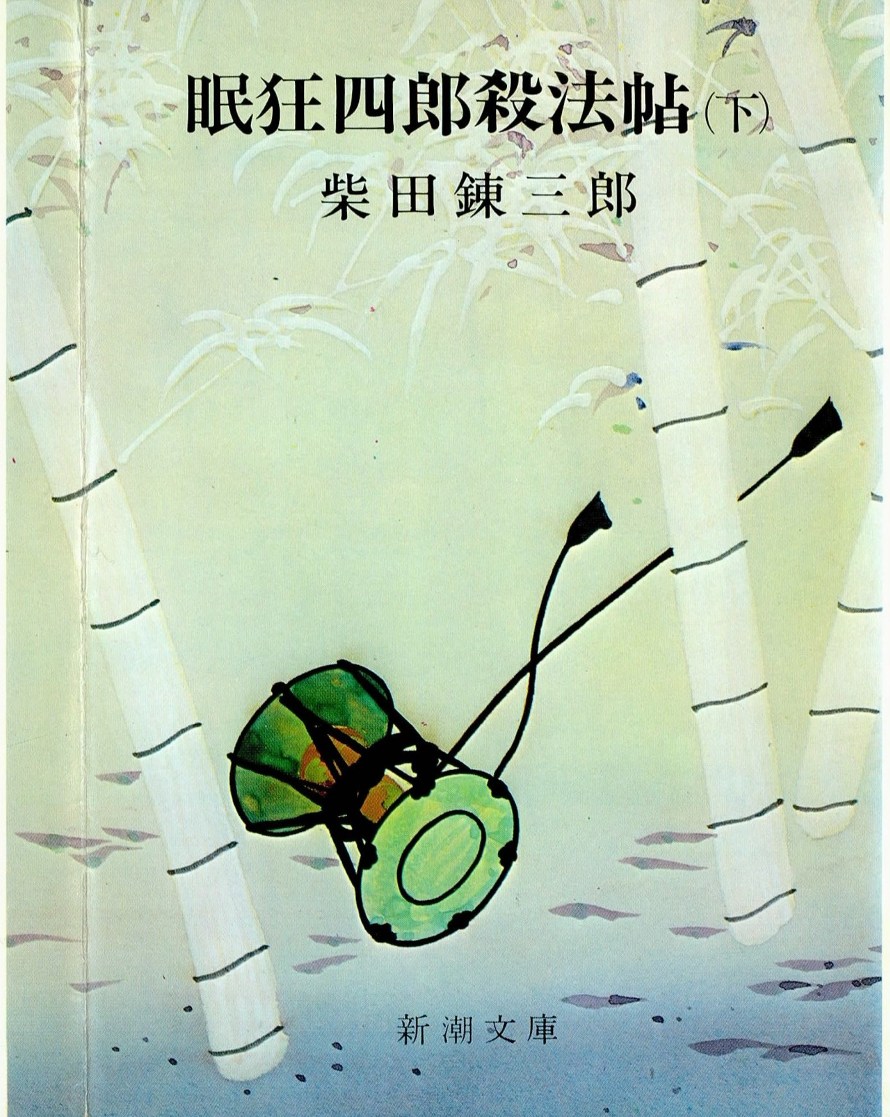
眠狂四郎殺法帖（下）

柴田錬三郎

新潮文庫

カバー　中尾　進



眠狂四郎殺法帖（下）

柴田錬三郎

新潮文庫

眠狂四郎殺法帖（下）

柴田錬三郎

し 5 15

新潮文庫 400

加賀の豪商・銭屋五兵衛の巨大な野望を打ち砕くため、北陸路に現われた眠狂四郎。入国を妨げるべく、狂四郎に挑みかかる加賀藩の剣士。そして、上杉、武田、源氏、平家ら忍法五派の秘術を尽した技競べ——。能登沖に沈められた佐渡船の砂金をめぐって、銭屋五兵衛、謎の忍者〝影〟と三つ巴の死闘を繰り広げる狂四郎。円月殺法の白刃が妖しく光るシリーズ第三作。

ISBN4-10-115015-X C0193 ¥400E 定価400円

〜〜新潮文庫〜〜
柴田錬三郎の作品

剣は知っていた（上）
〃（下）
江戸群盗伝
続江戸群盗伝
美男城
眠狂四郎無頼控（一）〜〃（六）
眠狂四郎独歩行（上）
〃（下）
眠狂四郎殺法帖（上）
〃（下）
孤剣は折れず
赤い影法師
運命峠（前）
〃（後）
剣鬼
眠狂四郎孤剣五十三次
眠狂四郎虚無日誌
眠狂四郎無情控
眠狂四郎異端状
徳川浪人伝（上）
〃（下）
御家人斬九郎
邪法剣
人間勝負（上）
〃（下）

カバー印刷　錦明印刷

新潮文庫

眠狂四郎殺法帖

下巻

柴田錬三郎著

新潮社

新潮文庫

眠狂四郎殺法帖

下巻

柴田錬三郎著

新潮社版

1944

目次

眠狂四郎殺法帖

下巻

談亭活躍

一

「談亭。市井には、金持の商人たちは、必ず、囲いものを置いているときおよびますが、それらの妾たちの、おもしろおかしいくらしぶりなど、教えてたもらぬか？」
唐突に、その所望をしたのは、館山二万石・稲葉播磨守の夫人であった。
稲葉邸から使者が来て、奥向の女中たちに、烈女節婦の逸話を語ってくれるように、と望まれた立川談亭は、今日、まかり出るや、およそ一刻ばかり、夫人を中心に、居並んだ三十人ばかりの女中たちを、しんとさせたり、笑いころげさせたりして、さていずれ近いうちにまた一席、と頭を下げた――その時であった。
稲葉播磨守は、外様譜代旗本の中でも、最も粋人であり通客であった。かねてから、談亭は、播磨守から贔屓にされ、遊里の座敷に呼ばれて、たびたび、しゃれのめした講釈ぶりを披露していたのである。
しかし、夫人に呼ばれたのは、はじめてであったし、伺候して、挨拶したとたん、
――これは？

と、訝ったものであった。
洒脱な風流人である播磨守には、およそ似合わぬ夫人であった。色気なんぞ、薬にしたくも持合わせぬ、浅黒くかわいた肌の痩せこけた、細い吊り目で尖り鼻の、ひどい反っ歯も下品な狐面だったのである。
——どういう料簡で、呼んだのか？
この疑念は、喋りたてているあいだに、ふかまった。女中たちが、笑い崩れて、もう腹の皮が痛くなるばかりのさなかにも、夫人は、にこりともせなんだのである。
そして——。
不意に、冷たい無表情で、この質問をかけて来たのであった。
「左様でございます。下世話に、貧乏人は娘三人生んだら一生安楽、と申しましてな。尤も、器量佳しであることは申すまでもなく、三日月眉に、瓜実顔、色が白うて、柳腰、すらりと立った姿に、えも云われぬ色気ってえしろものがありませぬとな。……そもそも、妾の淵源をたずねると、昔、趙師確なる道人が、羅浮山に遊んで、うたた寝しているうちに、梅の精である少女が夢の中に現れたが、その美しさは、文字通り早梅の蕾であったので、道人、夢中で、ひっとらえ、梅よ咲けかし、鶯啼かそ、ホーホケ今日は、なんて運がいいんであろ、とばかり……、へへ、どうも、浮世と申すものはこうしたもので、炒豆と女に手を出さぬ男はいない、とか、竹に雀は品よくとまる、止めて止まらぬ色の道、とか——趙師確め、とうとう、梅の精を、手活けの花にしてしまったげにございます」
まことしやかに云ってから、

「さて――その囲いかたに相成りまするが、それには、上中下に分れましてな。上位の妾宅とも相成れば、根岸か向島あたり、黒板塀を高くめぐらし、見越しの松の枝ぶりは、旦那にすてられた時に縊る用意かとみえ、柴の門を深くとざして、一年中ひらくこともないのは、旦那のほかは、雄犬いっぴき入れまいぞ、との要心とみまする。玄関口には、簾が半ば捲かれ、茶の間に入れば、まず目に入るのが、壁にかけられた一双の三味線、箱火鉢には鉄瓶の湯が沸り、帆立貝の鍋は五徳の上、猫板の上には、莨入れの匣にならんで、おっそろしく長い煙管――こいつは、吉原の格子女郎めらが、ひやかし客をひき込む手段に、格子越しに、吸いつけて、さし出すのに、短いのは不便なので、だんだん長くしたと申しますな。一番長いのは一間もあって、馴染客がそ知らん顔で、行き過ぎようとすれば、えいやっ、とばかり、雁首を、帯へひっかけて、ずるずるっと引きもどし、知らぬ神より馴染の鬼、わちきゃ、食われとうて、こうして待っていたわいな」

談亭の珍妙なしぐさに、女中たちは、どっと笑い崩れたが、夫人だけは、睨みつけるように、目を据えているだけであった。

「……さて、二階の座敷へ上れば、扁額に曰く、春如海、床の間の山水の下に、古奇を極めた鉄色の花瓶、碧が寂びて豊かな風韻を含んだ――この代物ひとつ、たたき売っても、五十両。店では爪に火をともす吝嗇で、出すことは舌も出さず。呉れることは火も呉れず、取ることなら石地蔵の胸ぐらでも取ろうという親爺も、妾に対しては、気前がいいのが相場でありましてな。鼻声ひとつ鳴らせば、着物でも櫛でも、打出の小槌のように、願うて叶わぬことはない、というあんばいになって居りまするて」

夫人の眉じりが、急に、びりりっと痙攣した。

それを視て、談亭は、

――さては？

と、ひとつの直感を脳裡に掠めさせつつ、

「座敷の次の間が、閨と相成り――云うなれば、申すなれば、此処こそ、腕によりをかけて、且つくを、海鼠のように骨無しにし、猫のようにじゃれさせ、犬のごとくへいつくばらせる女の戦さ場でありますれば、枕屏風には歌麿の十二箇月を貼るやら、博山には蘭麝を焚くやら、且ついを牀に臥かせておいて、わざと小半刻も入って行かぬのも――へへ、これを、手苦肉の計と申しまするな。さんざ、じらせて、入って来た姿が、燃えたつ緋縮緬の長襦袢に、寝化粧の匂いを、ぷんとただよわせていると来ては、野郎、目尻が下って、鼻の下が延び、牛のようによだれをたらして、小便一町糞一里、おくれちゃならぬ旅の道づれ、お前とならばどこまでも――と相成る次第にございまする」

「よい、相わかりました。……して、その妾宅に、住む人数はどれくらいじゃ？」

「概括つかまつりまして、媼やと下女と、牝猫いっぴきと、ご本尊と――合せて四人ぐらしの模様で……」

「それが、上位の妾宅と申すのじゃな？」

「中位と相成りますると、そこいらの横町新道の、下が三間に上が二間、家賃も格安になって居りましてな、階下には母親やら妹やら、旦那が来れば、息を殺しているけしきと相成り、下位ともなれば、これは、九尺二間の棟割りの裏店で、大工や左官の親方が、カンナ屑や泥をくっつけたまま上り込んで来て、おい早いところ、床をとれ――と、せきたてましてな、そのチョンの間

のひと汗かきを、破れ障子から、近所の餓鬼どもが、面白そうに覗いている光景と相成ります
る」

そう云って、談亭は、平伏した。

頭を擡げた時、夫人の姿は、その上座から消えていた。

談亭は、立って、長廊下へ出て、歩き出し乍ら、

「さてはや、いやはや——早野勘平、早駕籠で、はやさしかかるお城口、殿刃傷の報せなり。お軽は在所で夢心地、勘平さんは今頃は、どこにどうしてござろうぞ。……でもはや、いやはや、さだめがたきは浮世のならい、一生添うとは男のならい、いやじゃいやじゃは女の癖——遠くて近いが男女の仲、近くて遠いが犬と猿、近くて近いが目鼻口、遠くて遠いが唐天竺——」

と、ぶつぶつ独語をもらしていた。

二

「——というわけでありましてな、先生」

談亭が、その日の模様を、眠狂四郎に、語ってきかせたのは、それから、五日ばかり過ぎた宵であった。

神明の、矢場や芝居小屋や寄席の騒音がひびいて来る湯屋の二階であった。

箱枕に頭をのせて、仰臥し、目蓋を閉じた狂四郎は、談亭の話をきいているのか、いないのか、合槌ひとつ打とうとはしなかった。

談亭は、かまわず、

「そこで――立川談亭、つらつらおもんみるうちに、ハタと膝を打ち――打つには、打ったが、なにしろ、対手が、大名の奥方じゃ、下手に立廻われば、こっちが打たれる。で――まあ、とくと思案して、と家へもどって来たものの、どうも落着かなくなった。そこで、もう一度、膝を打って、片肌ぬぐほぞをきめて――さて、どうしたと、思いなさる？」

「…………」

「稲葉邸に、白兎ならぬ鼠がいっぴき、いるのに気がつきましてな。こいつめ、いまは殊勝げに、渡り中間になって、奉公あい勤めて居るが、四五年前までは、大名屋敷専門に荒らしていた泥的で、身のすばしこさと来たら、猿をして赤面させるくらいの野郎でげしてな。播磨守様は、その前歴をちゃんとご存じの上で、召使っておいでで――そこが、こいつを、手も足も出せなくしている所以であるわけでありますわい。……佐吉というこの野郎を、そっと呼んで、耳うちしてやった、とお思い頂きましょう」

「播磨守の構えた妾宅を、つきとめさせたか」

目蓋を閉じたまま、狂四郎が、はじめて、口をきいた。

「図星。……柳橋で去年まで左褄をとっていた菊次ってえ、滅法肌の白い、ふるいつきたいような佳い女が、ふいに姿をくらました、と思っていたら、いつの間にやら、その家にいたんですよ」

「…………」

「奥方は、たぶん、菊次を、垣間見なすったに相違ありませんや。そうでなけりゃ、あれほど、嫉妬の夜叉になる筈がないね。……ちらと、菊次を視たとたん、同じ女に生れ乍ら、自分とは月

とすっぽん、雪と炭――おのれやおのれ、この依怙(えこ)ひいきをどうしてくれよう、醜女(しこめ)の執念、やわか、この怨(うら)みをはらさでおくべきか――。なにしろね、先生は、奥方のご面相をご存じないからだが、ひと目ごらんなすったら、合点なさる。……播磨守様は、なんの因果で、あんな、泥水をのみすぎて腹を下している獺(かわうそ)みたいな女を、女房にしなすったんだか――つくづく同情申上げましたねえ」

「播磨守は、たしか、紀州の徳川の女(むすめ)だ。やむを得なかったことだ」

狂四郎は、云い、

「大名で、夫婦仲円満なのが、一組でもいたら、お目にかかりたいものだ」

と、冷やかに、吐きすてた。

恋しあって結婚した夫婦など、大名の中に、ただの一組すらもいなかった時世であった。恋愛即不義という道徳が厳然として支配していたのである。夫婦とは君父の命によって成立したのである。

夫婦は、閨房事(けいぼうじ)をはじめとする日常のくらしを愉楽するために一緒になったのではなかった。家門を維持し、且(かつ)繁栄させる目的のためにむすばれたのである。

武家に於(おい)ては、奥と表が厳然と別にされ、奥向に関する一切のことは、夫人の管掌に委(ゆだ)ねられ、主人は決して口出しをせぬ例であった。と同時に、夫人は、表に就(つ)いては、何事も、耳目を働かせることは許されなかった。したがって、武家夫婦で、生涯、同行して外出することなど、ついに一度もなかった。なんとしても同行しなければならぬ場合は、遠く離れて、左側と右側にわかれ、供も別々に連れて行ったのである。

このような義理仕立ての夫婦が、仲むつまじくなれよう道理がない。

武家の妻は、まず何よりも婦道を旨とし、良人に対する愛情の表現も、婦道よりはずれてはならなかった。

徳川幕府はじまって以来の貞婦と称われている女性は、芸州藩七世浅野安芸守吉長の夫人である。

どういう女性かと云えば——。

『松平安芸守の御内室は、加賀宰相綱紀卿の御息女也。生得武勇の心得ある方にて、乗物打物に達し、殊に長刀鍛錬のきこえあり。召仕わるる女房まで皆々勇気たくましく、一騎当千の者たちとも申すべし。……安芸守様、奥へ入らせられ、奥方の御膝を枕にして休ませ給うに、その御目覚めぬ内は、時刻移れど、少しも膝を動かし給う事なくありしと也』

当然、安芸守吉長は、この窮屈きわまる奥向を避けて、吉原通いをするようになった。

やがて、三浦屋四郎右衛門抱えの太夫花紫、同孫三郎抱えの格子歌野を落籍させて、屋敷へ引きとった。

しかし、夫人は、これについて、一言も、意見せず、嫉妬など、みじんもおもてにあらわさなかった。

安芸守は、これら遊女二人、そして芝神明前の陰間二名をひきつれて、帰国することになった。

江戸留守居役が、必死の諫言をしたが、安芸守は、さらにきき入れる様子もなかった。

帰国出立の際には、定例によって夫人への暇乞いがある筈であったが、安芸守は、その沙汰もなく、発足して行った。

夫人は、遊女陰間が美しい行装で、供揃いした歴々の諸士よりもさんざめかして出発するさまを、物見の窓から、眉宇ひとつ動かさずに、見送った。

その夜、夫人は、居間で、夜が闌くるまで、灯火をあかあかと照らして、何やら、したためていたが、白衣の前をはだけ、下腹を出して、一文字に掻切って、俯伏したのであった。

このさまを発見した女中たちが、仰天して、早く医師をと、うろたえさわぐのを、夫人は、屹と制して、切腹するほどの者が、何とて生くべきように切るものぞ、かねて覚悟の上である、かまえて騒ぐまい、はや介錯を、と望んだ、という。

こういう女性こそ、大名の奥方の亀鑑だったのである。

三

狂四郎は、不意に、むっくり起き上ると、物倦げに生あくびしてから、

「で——どうなる、というのだ、師匠の見当では？」

と、訊いた。

「殺されますよ、菊次が！」

談亭は、真剣な面持だった。

「播磨守の遊蕩は、もう幾年ぐらい、つづいて居る？」

「あっしが贔屓にして頂いてから、もうかれこれ十年になりますよ」

「奥方としては、その長いあいだ、忍耐して来た。今更、菊次を殺して、世間をさわがせ、婦道にはずれた振舞い、と指弾されるようなことはいたすまい。復讐には、別の手段をとるのではな

いか」

「別の手段と申しますと？」

「おれに、わかる筈（はず）がない。……ただ、長い年月、嫉心（しっしん）を燃やしつづけて来た女がやってのける復讐は、時には、途方もない手段かも知れぬ」

「先生、たのみます！　あたしゃ、あのお殿様が、大好きなんですよ。なんとか、ひとつ、片肌（かたはだ）ぬいで下さいましよ。ねえ！」

「ご免だな。おれには、播磨守が、女房に呪（のろ）い殺されようと、どうしようと、痛くもかゆくもないことだ」

にべもなく、はねつけた。

しかし――。

狂四郎の腰を上げさせる事態が、それから三日後に起った。

同じ湯屋の二階に、血相かえた談亭が、かけあがって来て、

「先生、大変だ！　菊次が、かどわかされちまった。……佐吉が報（しら）せて来やがったんです。稲葉邸の奥向附きの庭番衆が数人、ふん込んで、菊次を、かっさらって行っちまったそうです。……この通り、おがみます！　たのみます！」

と、平伏した。

「播磨守は、そのことを知っているのか？」

「いいえ、昨夜（ゆうべ）のことで、まだ、お屋敷では、誰も知っちゃ居りませんよ。お殿様が、ききなすったら、いったい、どういうことになるか――さあ、大変なことになっちまった！」

狂四郎は、しばらく、沈黙をまもっていたが、突然、

「間夫になるか」

と、呟いた。

談亭には、なんの意味やら、さっぱり判らなかった。

四

夜——三更をまわった頃。

狂四郎は、根岸にあるその妾宅の庭に、立っていた。

月があり、庭一帯にむした苔が、光っていた。

また、泥棒猫のまねをしなければならなくなったことに、自嘲があった。こういう忍び込みを、これまで、いくたびやってのけたろう。どうやら、浮世に於けるおのれの役割が、常に、これなのかも知れぬ。

母屋の雨戸を、一枚はずして、すっと入れた身を、闇に溶かし乍ら、二階へのぼらせるまで、みしとも音たてなかったのも、いつものことだった。

二階に、灯はなかった。

障子を開ける時、はじめて音をたてた。

「おい、菊次——なぜ、灯を消している？　ちと、早寝すぎはしないか」

狂四郎は、わざと、そう呼びかけた。

「それとも、おれが忍んで来るような気がして、待っていたのか」

ずかずかと、寄るや、いきなり、掛具をはねて、そこに寝ている者の上へ、掩いかぶさった。
対手は、「あっ！」と、小さいが、異様な悲鳴をもらして、抵抗しようとした。
狂四郎は、もう言葉を必要としなかった。
抱きすくめてみて、
――成程、談亭のやつ、下痢して居る獺、とはうまい形容をした。
と、苦笑した。
女の肉の柔らかさなど、胸にも、腹にも、臀部にすらなかったのである。
……抵抗は、急に、やまった。
これは、そうなるだろう、と狂四郎の予測したところであった。
貧相なからだは、しかし、男の愛撫に対して、烈しい反応を示した。
四半刻の奉仕をすませて、狂四郎は、その上から、さっと退くと、有明に寄って、燧石を打った。
とたんに、褥からはね起きた女が、
「い、いけませぬ！」
と、しがみついて来た。
「狼狽してもはじまるまい」
狂四郎は、冷笑した。
「貴女が、稲葉侯の奥方であることを、はじめから知っていて、やってのけた一芝居なのだ」
その言葉をきいて、女は、はじかれたように、離れた。

灯を入れた狂四郎は、しかし、女へ視線を当てるのは、遠慮して、
「今宵、貴女は、御亭主が、下屋敷へ行くと云って、出かけたのを、てっきり、この妾宅へ行った、と合点し、大急ぎで、忍び出て、早廻りして、ここへ来ると、今やおそしと、待ちかまえていた――というわけですな。あいにくだった。御亭主の代りに、菊次の間夫とみせかけた、市井無頼の素浪人が、やって来た」
「………」
「お気の毒な始末と相成った、とは申上げぬ。貴女は、御亭主に、一生秘めなければならぬ負目を持たれたが、これが、貴女をして、嫉妬の夜叉から正気にかえす効能があるとすれば、めでたい仕儀と申さねばならぬ。……いかがであろうか」
すすり泣きの声が、もれはじめてから、狂四郎は、やおら立ち上っていた。
なぜか、うそ寒い侘しさが、胸中を流れていた。

弱い狂四郎

一

俚俗に――、

『月の八日は茅場町、大師詣りや不動様』という。

江戸っ子たちは、神社、寺院へ詣でるのが好きだったのである。そして、この慣習が、縁日を盛んにした。

茅場町の日吉山王薬師前などは、夏から秋へかけて、毎晩のにぎわいをみせていた。

蒲席を敷いて薩摩蠟燭をともした玩具屋、魚油の燈火のくさい煙りをあげているおでん屋、大きな油傘をさしかけた鯣を売る店、鮓屋、油揚げ屋、十九文均一売りのなんでも屋、ほおずき屋、大通豆売り等々……。

雑多な売店のむかい側に、茶店がならび、麦湯、葛湯、卵湯など、客の好みに応じていた。

植木店は、茶店のとなりから、つらなる。

雑沓をきらう眠狂四郎が、珍しく、この縁日を通りかかって、さまざまの植木へ、なんとなく、目をとめて行く宵があった。

細葉の石菖蒲は小石の中に植え、しのぶ草はすかしを作って、縄で下げたり、花に被綿をかぶ

せて、蘆でささえをしてあった。さぼてんは、ひなげしを抱きかかえるようにしていたし、蘇鉄は麒麟角にまじっている。たちばな、万年青、翠蘭など、それぞれ、丹誠こめた手入れの出来であった。

　棚の最上段に並んだ松は、たしかに、秦の始皇帝の五太夫の位をもらった品格を示している。

　野草もまた美しい。

　女郎花は、雁来紅に伴れられて媚びているし、秋海棠は露の泪をこぼし、ふじばかまは微風に芳香をまき、鳳仙花はその名のように凡俗を絶つ品をもつ。曼陀羅花と天竺花のあいだに、だるま菊が、そっと、顔をもたげているのも、かれんである。

　これらの花に、さらに興を添えるために、草雲雀やはたおりや金鐘児、金琵琶の声が、一店一荷の籠の中からきかされている。

　狂四郎は、ゆっくりと、観て歩いて行く――。

「旦那、待って居りやした。お宅で待っておいでのお内儀様の土産には、これ――扶桑花だ。これにかぎりやすぜ」

　向う鉢巻の若い衆が、その鉢をさし出した。

「あいにくだが、独身者だ」

「じゃ、これから、惚れた女師匠のところへでも、かよいなさる――と来たら、さあ、どれがようがすかね。……おっと、これだ！　月の夜ざくら袖のつゆ、ぬれしえにしの一重帯、と来らあ。さ、万年青なんざいかがでげす？」

「隠居にいじらせておこう」

「こん——畜生っ！　じゃ、女郎花はどうだ。秋の広野のそれならで、仇し胡蝶の飛びつれて、宿も一ト夜の女郎花、つゆがとりもつ縁かいな、と来ら」

「兄哥には気の毒だが、惚れてかよう女も持って居らぬ」

「冗談じゃねえ。旦那のような、苦味走ったいい男が、この秋の夜長に、膝っ小僧を抱いて寝るテはありませんぜ」

「まさか、吉原へ、鉢植えをかかえて行くわけには参るまい」

「旦那、まかせておくんなさい。この浮世に、男と女の頭数は半分ずつでさ。旦那が女にあぶれていなさるんなら、女の方にも、一人や二人、男にあぶれているのが、いねえわけがねえ」

若い衆は、きょろきょろと、織って行く通行人たちの中を物色していたが、

「へへ、いた、いた！　潮来出島の真菰の中で、菖蒲咲くとは、しおらしや」

首をふり乍ら、寄って行った。

若い衆に、ぽんと肩をたたかれたのは、いぼじり巻きに黄楊の水櫛を横っちょにさし、路考茶縮緬の袖ぐちから緋縮緬を、ちらとのぞかせた、小粋な着つけの町女房であった。白繻子の半襟と素足がすっきりして、これは、江戸でなければ見られぬ容子であった。

世帯やつれの翳は濃いが、べつだん、どこかの岡場所で春を鬻いでいた前身をもっている女とは見られなかった。

若い衆に、何か耳打ちされて、不審げに、狂四郎を視たが、べつに、なんの感情も、おもてに現しはしなかった。

どうやら、胸でも患っているような、青く沈んだ肌であった。

若い衆に、手をひかれるままに、寄って来た女は、狂四郎の冷たい眼眸を受けるや、顔を伏せて、会釈した。
「さあさ、姐さん、気ぶっせいなつらをしていねえで、この旦那が、おめえさんに選りどり見取りさせよう、ってんだ。……桔梗はどうだ、桔梗。萩桔梗と来りゃ、いい文句があるぜ。櫛入れぬ、秋のやなぎのまくらさえ、はずれ次第のうたた寝は、誰にすねてか身のわやく、恨みつらむその後は、なんにも云わず、ひとつ夜着——」

二

狂四郎が、桔梗の鉢をかかえた女にともなわれたのは、汐香が風に送られて来る南新堀の、堀沿いの家であった。
『からもの』
と彫った看板をかかげていたが、店を閉じてから久しいたたずまいであった。
いずれは、亭主が、抜荷買いの品ものでもさばいていたものであろう。
潜りから入ってみると、店には、何ひとつ品ものは、置かれていなかった。
茶の間に上って、長火鉢の前に、坐った狂四郎は、茶をさし出す女の、いかにも物倦げな様子を視やり乍ら、
「春を売るのは、馴れて居らぬようだな」
と、云った。
「今夜が、はじめてでござんす」

　女は、俯向いて、こたえた。
「植木屋に、そそのかされて、つい、ふらふらと、その気になった、というわけか？」
「あたしは、旦那を存じあげて居ります」
「………？」
「以前、水野越前守様のお屋敷に、ちょっと、奉公して居りましたので……」
　女は、顔を擡げて、狂四郎の視線を受けとめた。
「旦那は、あたしを、堅気の女房だとお思いになって、買う気におなりになったのでござんしょう？」
「堅気ではないというのか？」
「極道者の亭主を持てば、心もからだも、滅茶滅茶にされてしまいます」
「亭主は、どうした？」
「石川島に居ります」
　石川島には、寛政のはじめに火附盗賊改め長谷川平蔵によってつくられた人足寄場があった。
　人足寄場には、無職の無宿者、入墨・敲の刑に処せられた者で行先のない者、または再犯の虞れのある者が収容されている。
　送られる時に、『其方共儀、無罪之者ニ付、佐州表へ差遣す可き処、此度厚き御仁恵を以て、加役方人足に致し、寄場へ遣し、銘々仕覚え手業を申付候。旧来の志を相改め、実意に立ちかへり、職業を出精いたし、元手にも有り附き候様に致すべく候。身元見届け候はば、年月の多少に構無く、右場所を差免じ、百姓素性の者は相応の地所を下され、江戸表出生の者は、出生の

場所へ店を持たせ、家業致させるべく候。云々』といった訓示が下される。

寄場は、元来、囚獄ではなかったのである。教育刑、及び免囚保護のための行刑施設であった。銘々仕覚えの手業をさせて、その報酬を与えてやったし、また、手業を持たぬ者には、好みの職を見習わせてやったのである。紙漉き、鍛冶、屋根葺き、大工、左官、元結作り、草履作り、縄細工、煙草切り、竹笠作り、彫物など——。炭団造りや、蛤の貝を砕いて胡粉を造るのや、油絞りなどの工場も設けてあった。だが——勿論、教化遷善の目的は立派でも、実際には、それは、白河楽翁が健在であった頃までのことで、文政末年のいまでは、やはり、囚徒を苦役にかりたてていることとすこしもかわりはなかったのである。

教化不可能の手輩が大半だったせいでもあろう。

この女の亭主も、大した罪は犯してはいないが、市井の壁蝨として手にあまるので、捕えられて、水玉人足（柿色に水玉を白く染めぬいた作業衣を着せられたので、江戸の人々は、寄場の人足たちを、そう称んだ）にされたものであろう。

当分、還って来る気づかいはあるまい。

「お前は、こうして、亭主の戻って来るのを待っているのか？」

「女房でござんすから……」

「役人から、そう命じられているわけでもあるまい」

「………」

女は、肩を落して膝の手をさすり合せ乍ら、ほっと、ひとつ、溜息をついた。

——どうやら、長居は無用のようだ。
狂四郎は、立ち上ろうとした。
とたんに、狂四郎を視る女の表情が、必死なものに変った。
「旦那、お願いでございます！　あたしを、買って下さいまし！」
「金が欲しければ、置いておく」
「いえ！　お金が欲しいのじゃありません。……貧乏はして居りますが、まだ、からだを売るほど、追いつめられているわけじゃござんせん」
「どういうのだ？」
「旦那に、買って頂いたら、それで、あたしの肚もきまるような気がいたします」
「…………」
「旦那。あたしは、いったん、亭主ときめた男を、すてて、にげ出すことができない女なんです。亭主の方から離縁されるなら、いたし方ござんせんが、自分の方から惚れて一緒になった男ですもの、いくら極道者で、世間様から爪はじきされても——いえ、それだからこそ、女房のあたしだけは、味方でいてやらねばならないと、思っていたんです」
「…………」
「でも、いま、やっと、肚がきまりました。あの人は——弥吉は、芯そこからの悪党なんでございます。戻って来たら、あたしは、骨までしゃぶられた挙句、ぼろ草履のように、すてられてしまいます。いいえ、すてられるなら、まだ、自分で生きて行く道をさがせましょうが、弥吉は、もう屹度あたしを、どこか遠方の宿場女郎にでも、たたき売るに相違ござんすまい。その時は、もう

いくら泣いてもわめいても、おそうござんす。……いま、たったいま、肚をきめて、きっぱりと、別れなければ、あたしは、救われません。……旦那、あたしに、どうぞ、ふんぎりをつけさせて下さいまし！」

――妙な据膳をくわされるものだ。

狂四郎は、内心、苦笑した。その時であった。裏口の戸が叩かれた。

「おすみ！　開けろ！　おれだ、弥吉だ！」

三

狂四郎は、女が受けた衝撃の烈しさを、いたましいものに眺め乍らも、こういう因果な夫婦の生の絆ぶりを観とどける好奇心を、ふっと、わかせたことだった。

女は、立ち上ると、よろめくようにして、裏口へ行った。

戸が開かれるのもおそしと、とび込んで来たのは、一人ではなかった。三人――いずれも、血走った形相をした入墨者たちであった。船頭姿になっている。寄場を破って、佃島の漁師の家へ押し込んで、水玉の囚衣を換えたものに相違ない。

おすみは、亭主の弥吉だけではなく、二人も水玉人足が逃亡して来たのに、言葉もなく、立ちすくんだ。

「おいっ！　二階に、はやく、牀をとれ！」

弥吉は噛みつくように、命じた。

眉目整った、精悍そのものの男であった。女房よりも、二つ三つは若いようにみえた。

「牀を——？　ど、どうおしだえ？」

「どうも、こうもねえやな。寄場でやった骰子（さいころ）の目が、おれの方にそっぽを向きやがっただけの話よ」

「…………」

おすみは、絶望の面持になった。

「へん。おかげで、おれは、こっちの勘七に二十二両、この三五郎に十七両、借りをつくっちまったい。……逃げ出して来たものの、そんな金は、どこにも隠しちゃ、いねえやな。おめえのからだで、返すより、ほかはねえじゃねえか」

弥吉・おすみの夫婦にとって、この返済方法は、いまが、はじめてではなかった。これまで、数度、経験している。

「なにを、愚図々々してやがる。早くしろい。勘七も三五郎も、急いでいらアな。はやいとこ済ませて、西と東へ、飛ぶんだい」

「お、お前さんは——？」

「おれか。おれも、飛ぶのよ。おめえもつれてってやらあ。……さ、早く、牀をとって、借りを返しちまえ」

おすみは、せきたてられて、意志を喪（うしな）ったもののように、階段を登って行った。そのあとを、勘七という男が、飢えている露骨な目を、おすみが一段ずつに裾（すそ）からのぞかせる白い脛（はぎ）へ、食いつかせ乍ら従（つ）いて行った。三五郎という男は、階段下へ、大胡座（おおあぐら）をかいて鼻毛を抜きはじめた。

女房を飢えた狼（おおかみ）に与え乍ら、平然として、台所を物色し、おすみが狂四郎をともなう途中で買

いもとめた酒を発見した弥吉は、
「へへ、極楽、極楽——」
と、舌なめずりして、それを携げると、茶の間に入って来た。
そして、そこに、黙然として坐っている狂四郎を見出して、
「な、なんでえ！」
と、目をひき剥いた。狂四郎は、口をつぐみ、腕を拱ねているばかりであった。
「なんでえ、おめえさんは？」
弥吉は、肩をいからせて、凄んだ。
「見た通り……客だ」
「客だと？　なんの用で——？」
「お主の女房を買いに来た」
「な、なんだと？」
弥吉は、もう一度、目をひき剥いた。
「こっちがのぞんだわけではない。お主の女房が売ろう、と云うから、ついて来たまでだ。いかんか？」
「いけねえ、と慍るわけには、いかねえやな。亭主は亭主でも、目下は、おっぽらかしで、食わせちゃいねえんだ。……だけどよ、こうして亭主が帰って来たんだぜ。それでも、買って行きなさるかね、ご浪人衆？」
「来たついでだからな」

「亭主が相場をきめると、高けえぜ。それでもいいかね？」

「よかろう」

「ふところに、いくら持っていなさる？」

「きいて、どうする？」

「それで、相場をきめようじゃねえか」

「人は見かけによらぬ場合がある。痩せ浪人が、もしかすれば、百両も所持しているかも知れぬぞ」

狂四郎は、そう云って、笑った。

「冗談云っちゃいけねえ」

弥吉は、ばかくさげに、かぶりを振って、小樽の栓を、歯で噛んで抜くと、五郎八茶碗に注いで、ひと息に、飲んだ。

「この素浪人の正体が、もしかすれば、大名屋敷専門に荒らしている大泥棒かも知れぬ」

狂四郎は、からかった。

弥吉は、じろっと、狂四郎を睨んだが、何も云わずに、二杯目を注いだ。

四

やがて、階段を駆け降りて来る跫音がひびいて、

「弥吉、あばよ」

と、声がかかった。

「どっちへ、飛ぶんだ、勘七？」

「舟をかっぱらって、木更津だ。そこで、二三日かくれていて、奥州路だあ。間道がいくらもあるからな」

「どこへでも、早く飛んじまえ！」

流石に、自分の女房を抱いた男に、いい気持はしないのであろう、弥吉は、五郎八茶碗になみなみと注いだのを、一息に、飲みほした。まだ一人、勘七と入れかわって、三五郎が、女房を抱きに行ったのである。狂四郎は、弥吉の様子が、酔うにつれて、次第に険しくなるのを、冷やかに見戍っていた。

「ちえっ！　くそ！　はやく、済ませやがれ！」

弥吉は、とうとう、喚いて、茶碗を、畳にたたきつけた。

「自業自得ではないのか」

狂四郎が、云うと、弥吉は、凄い目つきで、睨んだ。

「そうよ、自業自得だあ！　博奕に負けるたびに、嬶のからだで払っていたのよ！　おれの嬶を、どうしようと、他人様の知ったことか。げんに、おめえさんにも売るってえんじゃねえか。……おい、ご浪人衆、おめえさん、ほんとうに、大泥棒か？」

「そう見えぬか？」

「気を持たせるない。ふところには、いくら持っているんでえ？」

「三、四十両はあるかな」

「嘘を、こきやがれ」

「信じないなら、信じないでもよい」

「よおし、それが、本当なら、十両だ！　いいか！」

「よかろう」

「前金にしてもらおうぜ。さあ、頂こうじゃねえか」

狂四郎は、懐中から、小判を十枚とり出して、弥吉の前に抛ってやった。

「ほ、ほんとだ！　持ってやがる！」

弥吉は、わななく両手で、ひろいあげると、

「畜生っ！　こてえられねえや、こ、この山吹色！　この音色はよう！」

譫言のように呟いたが、立ち上って、ふらふらと台所に、行った。

その折、三五郎が二階から降りて来て、弥吉と二言三言交してから、裏口から出て行った。狂四郎は、弥吉が茶の間に戻って来ると、背を向けたままで、

「こんどは、わたしの番のようだな」

と、云った。返辞のかわりに、出刃庖丁が、背中めがけて、突き出された。身をねじって、その手を摑んだ狂四郎は、

「わたしの持っていた金が、お前に呉れた十両だけだったら、お前は、大層そそっかしいまねをしたことになるな」

「なにをっ！　この野郎っ！」

おのが手をもぎ取ろうとした瞬間、ぼきっと、骨の折れる音がした。弥吉は、おそろしい唸り声を迸らせて、ひっくりかえった。ゆっくり立ち上った狂四郎は、

——片づけた方が、女房のためか。

その冷たい眼眸（まなざし）を、弥吉へ落した。

途端（とたん）に、おすみが走り出て来て、弥吉を、両手でかばうと、哀訴の表情で、狂四郎を仰いだ。

「…………」

「…………」

無言で、視線の合っている数秒間があってから、狂四郎は、踵（きびす）をまわして、おもてへ出た。

月かげのある往還を歩き出し乍ら、

——あれが、夫婦というものか。

重く沈んで来る感慨が、胸裡（きょうり）に、わいていた。

修羅場(しゅらじょう)

一

眠狂四郎が、久しぶりに、凄絶(せいぜつ)きわまる円月殺法の冴(さ)えを発揮したのは、自ら望んで、その場所へおもむいた結果であった。

まだ有明の月が残っている頃あい、狂四郎は、夜露とともに歩いて来た黒い姿を、北郊の野の中に彳(たたず)ませていた。

茫々(ぼうぼう)と旗薄(はたすすき)のひろがった野の末に、ようやく、秩父(ちちぶ)の連山が、烟(けむ)ったように薄く、浮きあがって来ていた。

明けて来た武蔵野(むさしの)の広漠(こうばく)たるひろがりは、その連山の、幽艶(ゆうえん)な美しさに縁(ふち)どられて、彳む者を、無心の境地に置く。

旗薄も萩(はぎ)も枯尾花(かれおばな)も、秋を待って咲く千種(ちぐさ)の花々も、その彼方(かなた)に蜿蜒(えんえん)起伏する連嶺(れんれい)の雄大を配して、その風情(ふぜい)が生きるようであった。

この秋の原野を、死地と知りつつ、暗夜に市中から出て来て、夜明けの、荘厳で崇高ですらある、澄みきった大気の中に眺(なが)めたのは、無頼の浪人者の胸中にも、詩神が宿っていたからであろ

うか。
いささかも、明日を生きようとしては居らぬ男が、霊感に近い鋭敏な神経の働きで、おのが生命の熄る場所を、其処らあたりであろうか、と思いさだめて、足をはこんで来たのである。
赤塚六箇村、という。上赤塚、下赤塚、成増、四葉、本徳丸、徳丸脇。
武蔵野尽端の台地から、北端に流れる荒川までの入り組んだ窪地に、聚落は点在しているが、楢林にかくされたそれらの村が、そこに在ると判るのは、朝の炊事の白い煙をいくすじかたちのぼらせているためである。台地に登った狂四郎は、ゆっくりと視線をまわして、
「あれか――」
と、合点した。
懸崖をへだてて、椀を伏せたような小丘陵が在り、頂上に、天に冲する欅の老樹が、独りおのが巨大さを誇っていた。
幹に注連縄が張られ、根かたに小祠が建ててある。地下人たちの、天災地変を防ぐ信仰でも集めているものであろう。
昨日、大川端を歩いていた狂四郎に、中間ていの男が、すれちがいざまに、袂へ投げ込んだ手紙の、指定した場所が、そこであった。
差出人の名は、『時国館　分家垂白叟』と記してあった。
盂蘭盆会の頃、巣鴨村の古い寺院で、狂四郎は、その老人と出会っていた。
加賀宰相をして敬意を払わせる奥能登の名家である平大納言時忠の末裔の分家と称するその老人は、なぜか、公儀隠密に監視されていた。狂四郎は、その隠密を、果し合いの名目で、斬り伏

せていた。

『……袖振り合うも五百生の機縁とか、今度聊か考えるところありて、御貴殿様に、お願い申し度き儀これあり、一度御来駕たまわれば幸甚に御座そろ。中さば、得難き貨は人の行をして妨げしむものなれば、行末短き耆叟の願いは、あるいは、御貴殿様にわざわいをおかけすることに相成るやも知れず、と懸念されそろ。罪障の山高く、生死の海深き人の世のならいなれば、その山へ金を投げ、その海へ玉を投ぐべき人をえらぶのは、容易では御座なく、御貴殿様に伏してお願いつかまつる次第に御座そろ』

手紙には、そんな文句が書きつらねてあった。

老人が、巣鴨の家をたたんで、武蔵野の果てに移ったのは、身の危機をおぼえたからに相違なかった。

狂四郎は、一読したとたんに、

——あの老人が、急に、おれに打明ける決意をしたのは、移り住んだ其処も、安全なかくれ家ではない、とさとったからではないか！

と、直感した。

——とすれば、おれが行くのは、もはや、無駄かも知れぬ。

おのれの直感力を、憑むことに忠実なこの男が、その足で、夜の中を歩いて、江戸を出て来たのは、久しぶりに、五体を死地に容れてみようとする虚無の心が働いたからにほかならなかった。

二

丘陵の中腹に、その家は、真竹にかこまれて、草屋根を地に沈ませるようにして、ひっそりとわだかまっていた。

戸を開いた瞬間、屍臭が鼻孔を襲った。

狂四郎は、薄暗い奥の間に、老人とそのつれあいが、北向きに俯伏して、事切れているいたましい光景を、見出した。

調度らしいものは何ひとつ置かれていない、さむざむとした屋内に、ただ、屍臭だけが、ひっそりと罩もっている。

予測したことではあったが、無抵抗な老人夫婦を、容赦もなく殺した冷酷な所業を目撃させられて、憤りが湧かずにいられなかった。

——おれに、この二人のあとを追わせるつもりなら、相当の犠牲を出す覚悟であろうが、憤らせるのを策のひとつにかぞえたとは、指揮をとる者の頭脳をほめることはできぬ。

この家へ到着するまでに、林やくさむらに、かなりの人数がひそんでいることを、狂四郎は、察知していた。

そして、その布陣ぶりが、一糸みだれぬ、ほぼ完璧なものであったことを、みとめている。

しかし、かぞえきれぬ死地をくぐり抜けて来たこの男には、嵐の前の不気味な静寂の中で、敵の肚裡を読む冷徹な思念があったのである。

こうして屍臭につつまれて、うっそりと立って、待っているのも、ただ敵の出様を判断しかねているからではなかった。

まず、最初の攻撃が、どのようなものか——家の中へ入る前に、ちょっと立ちどまって、見わ

たしただけで、看破していたのである。

狂四郎は、四方から、じりじりと迫って来る気配をさとり乍ら、動かずにいる。

……突如。

唸りをたてて飛来して、烈しくぶちあたる物音が起った。

たちまち、家をかこんで積まれてあった枯木が、燃えあがる凄じい火勢のひびきに、家ぜんたいがゆさぶられた。枯木には、油が注いであったのである。

狂四郎は、羽目板が、ばりばりと燃え狂いはじめても、なお、彫像のように、微動もしなかった。

家を包囲した敵の陣営は、十名一組に分れて、五組をかぞえた。

のこらず、忍び装束であった。十名すべての得物がちがっていた。忍び槍、忍び刀、撃ち鈎、双刃鎌、鳶鈎、手裏剣、鉄菱、目つぶし吹き、投爆筒、短筒……。

一瞬裡に、紅蓮舌になめられて、濛っ、濛っと、猛煙を噴きあげはじめた家を、凝っと瞶めつつ、それぞれが、その得物を使う刹那のために、気息を四肢に張り満たしている。

表か裏かの戸口か、あるいは、縁側か、それとも窓か——いずれかをえらんで、狂四郎が、阿修羅の姿をとび出させて来るものと思って、それへ、間髪の迅さで、凶器をくれるべく、待ちかまえているのであった。

狂四郎は、それらの、どの出口からも、現れようとはしなかった。

——はてな？

すべての者の脳裡に、不審が起り、焦躁が立った。

煙と焔は、完全に、家をおし包んでしまったのである。屋内に、とどまっていられる道理が、ないのであった。

狂四郎は、なぜ、とび出して来ないのか？

五組五十名が、期せずして、焦躁を押えきれずに、一斉に、動いて、火の家へ近づいた。

三

すべての目が、戸口に、縁側に、窓にそそがれていた。

渠らの隙は、まさに、頭上にあった。

その頭上から、黒い影が、翔け降りて来たのを、みとめた者は、ほんの数名にすぎなかった。

ちら、とみとめて、

「おっ！」

「あっ！」

と、愕然となった時には、もう、閃く白刃の下に、二人の仲間が、よろめいていた。

狂四郎は、屋根を破って出て、渦巻く猛煙に身をかくして、包囲陣の輪が縮まるのを、待っていたのである。

一颯の刃風で、二名を仆した狂四郎は、次の瞬間には、九尺を跳躍して、真竹の薮で、おのが五体を守っていた。

万に一もの仕損じはあるまい、と信じていた殺戮計画が、あっけなくも、狂四郎に裏をかかれ

てしまった一団は、もはや、指揮によって動くいとまもなく、藪へむかって殺到した。

しかし、生いしげるにまかせられた真竹の一本一本を、味方にした狂四郎は、おちつきはらった態度で、敵を迎えた。

鉄菱も手裏剣も短筒も、すべての飛道具は、人をくぐらせる隙間もないくらい密生した竹が、邪魔をして、役に立たなかった。

双方にのこされている手段は、突きの一手のみであった。

そして、この一手もまた、あきらかに、孤身を自由自在に変転し得る狂四郎の方が有利であった。

この竹藪に於ては、多勢で包囲するということが、なんの意味もなさなかった。

まるで、狂四郎から一撃をもらうために、踏み進んで来たかのごとく、胸いたを、咽喉を、顔面を、無想正宗の切っ尖で、ぐさとつらぬかれて、つぎつぎと、仆れて行く……。

昏れがたのように薄闇のただよう藪の中で、目にもとまらぬ迅業を発揮する狂四郎の黒い姿は、人間ばなれのした凄味をおびていた。

忍びの術の修業を積んでいる筈の隠密たちの方が、かえって、狂四郎の鮮やかな鋭い動きに、とまどっているかとさえ、みえた。

「引け！」

一角から、その声が、かかった。

攻撃者たちは、それを待っていたかのように、後退して行った。

「指揮をとる御仁にうかがおう」

狂四郎が、呼びかけた。
「あの老人夫婦を殺めなければならなかった何の理由がある？」
「われわれは、命じられたことを、遂行したまでだ」
「誰が、お主らに、命じた？」
「…………」
「お主らが、公儀隠密ではなく、ただのやとわれ忍び、であることは、きかずとも判って居る。……お主らをやとった者は、個人の慾にかられて居るに相違ない。そいつがいくら出したか、知らぬが、金で生命を粗末にするのか、お主ら？」
「眠狂四郎、貴様の首に、千両が賭けられているとしたら、どうだ？　貴様を仕止めた者が、与えられるのだぞ！」
「おれの首が、千両のねうちがある、と云ったのか、やとい主は？」
「おう、申されたわ！」
「有難い、とお礼を申上げなければならぬようだな。どうやら、見当はついた」
狂四郎が、云いおわらぬうちに、銃声が噴いた。同時に、手裏剣や鉄菱も、飛んで来た。
狂四郎は、敢えて躱そうともせずに、立っていたが、いずれも、真竹が、代って受けてくれたことだった。

夜が、来た。
忍耐の要る一日であった。

狂四郎は、すこしずつ、位置を移し乍ら、竹藪の中に、ひそみつづけていた。幾名かずつ、近くまで迫って来て、短筒や手裏剣を投じて来るほかは、敵もまた、他にとるべき攻撃方法を知らなかった。

——月が出たな。

狂四郎は、すかし見て、さとった。

藪の中の闇が深いだけに、外に増して来る明るさが、はっきりした。

狂四郎は、脇差を抜いて、ばさっと、竹の一本を両断した。

ざざっと、音さわがしく倒れるあいだに、すばやく、動いた。

藪の中では、音をたてないようにして、移動することは、不可能であったので、この手段をえらんだのである。

狂四郎は、七本の竹を倒すあいだに、草地との境まで、出て来ていた。その間に、見張りに入って来ていた伏兵を二名、斬り仆していた。

境の窪地に、ぴたっと伏して、敵陣を、見渡した狂四郎は、

——よし、あれだ！

突破路を、決定した。

月が、雲間にかくれた瞬間、狂四郎は、身を起しざま、左右の手から、同時に、ひろいとっていた手裏剣を放った。

二本の手裏剣は、正反対の地点で、ふたつの絶鳴をあげさせた。

その時もう、狂四郎は、別の方角へむかって、風のごとく奔っていた。

「うっ――おおっ！」
驚愕（きょうがく）とともに、忍び槍（やり）をくり出して来たのを、地摺（じず）りからすりあげに、柄なかばに両断した速刃を、そのまま、頸根（くびね）へ送って、ひと刎（は）ねしておいて、狂四郎の痩軀（そうく）は、大きくころがっていた。
「出たぞっ！」
「ここだっ！」
「討てっ！」
忍びの者にあるまじき、本能的な叫びが、口々から迸（ほとばし）った。
それらの口の半ばが、それぞれ、凄（すさま）じい一撃をあびて、断末魔の呻（うめ）きを発するのに、ものの数秒も要しなかった。

四

――生きているようだな、おれは……。
朝露のつめたさに、意識が蘇（よみがえ）った時、まずその独語が胸で呟（つぶや）かれた。
この丘陵の頂きに達するまでに、幾人を斬（き）ったか、おぼえていない。
斬ってはころがり、はね起きては斬り――修羅場（しゅらじょう）が移動するにつれて、狂四郎自身もまた、鉄菱を当てられ、手裏剣を刺されていた。耳朶（じだ）を弾丸でつらぬかれていたし、足くびを鳶鈎（とびかぎ）で裂かれていた。
ここへ――欅（けやき）の根かたへ凭（よ）りかかった時は、体力も気力も尽きていた。
敵は、なお、十名や十五名は生き残っていた筈である。

——なぜ、討たなかったのか？

生きている、と知って、次に起ったのは、その不審であった。

狂四郎は、目蓋を開いた。

狭霧の中から、曠野が、すこしずつ、ひらけようとしていた。淡々とした空には、まだ雲の色もあきらかではない。

　厭はずばかからましやは露の身の
　　憂にも消えぬ武蔵野の原

宗久の詠んだ草の枕の世界が、今日も、しずかに明けはなたれようとして、天地は、ひそとしずまっている。鳥もけものも、まだ、目ざめぬようである。

——なぜ、渠らは、おれを討たなかったのか？

狂四郎は、もう一度、呟いた。

その疑問に応えるように、狭霧をつらぬいて、一騎が、蹄の音をひびかせて来た。

はるか彼方に、一点となって出現するや、急湍を飛ぶ小舸にも似た迅さで、みるみる原野を横切って来た。

いったん、楢林にかくれ、蹄の音も消えたが、次には、すぐ眼下の草地に躍り出て来た。

眸子を細めて、すかし視た狂四郎は、

——そうか、おれを死なせなかったのは、あの男の仕業か。

と、合点した。

たちまち、斜面を駆け登って来て、狂四郎の前に、ひらりと降り立ったのは、唐人陳孫であった。

「馬をひろいに行って来申した」
挨拶の代りに、まず口にしたのは、その言葉であった。
盛夏の一夜、富士浅間祠裏手の家に、千佐を拉致せんとして襲って来た忍者隊と闘った陳孫は、鉄鎖で作られた投網で捕えられて、荒川へ投げ込まれている。
どのような業が、陳孫にそなわっていたか、奇跡のように、生きのびていたのである。
陳孫は、あれ以来、ただの一度も、狂四郎の前に、姿をあらわしていなかった。
「傷口には、薬をつけておき申した故、江戸まで馬を走らせても、大事はござるまい」
陳孫は、にこりともせずに、いった。
意識を喪っているあいだに、この忠実な人物によって、手当をされていたのである。
気づいてみれば、手裏剣も鉄菱も、一本も突き刺さって居らず、血も止まり、熱もないのであった。
「お主が、わしの護衛をしてくれたとは、知らなんだ。わたしが、江戸を出て来た時から、あとを跟いて来ていたのか？」
「ご想像にまかせる」
陳孫は、目を伏せた。
なぜか、忸怩たる気色が、滲んでいる。
「…………？」
狂四郎は、黙って、見戍った。
陳孫は、顔を擡げると、

「申上げねばならぬ」
「…………？」
「お手前が、かようのていになられるまでに、それがしが、傍観いたして居ったのは、邪念があったためでござる」
「…………」
「それがしは、ひそかに、お手前が、討死されるのを、のぞんで居り申した」
「…………」
「理由は、きかれるな。……お詫びつかまつる」
陳孫は、ふかく頭を下げた。
沈黙を置いてから、狂四郎が、口をひらいた。
「千佐が拉致された時、お主は、闘って、敗れたようだな？」
「不覚――荒川へ沈められ申した」
あの宵、帰って来た狂四郎は、その林の中で、凄じい争闘が演じられたな、とさとったものであった。
陳孫ともあろう者が、なぜ、むざむざ敗れさって、千佐が奪い去られるにまかせたか。それが、狂四郎には、疑問だった。いま、陳孫の謝罪をきいて、納得できた。
――この男は、千佐を守っているうちに、いつとはなく、惚れたのであろう。
最初に、陳孫が、千佐を、その家にともなった時、狂四郎は、
「お主が、預ってくれるわけにいかぬのか？」

とたのんだ。すると、返辞は、
「美しすぎる」
その一言であった。
千佐に心を奪われた不覚によって、陳孫は、敗れたのであった。
爾来（じらい）、一度も、姿を現わさなかった理由も明らかとなった。
狂四郎は、しかし、陳孫の悲痛な告白をきき乍らも、無言で、やおら身を起すと、馬へ歩み寄った。
「眠狂四郎殿――」
陳孫は、語気をあらためて、呼んだ。
「それがしは、このまま、お手前の前から、消えるべきでござろうか？」
狂四郎は、馬上の人となってから、陳孫へ視線をくれると、微笑した。
「陳孫。味方がある、ということは、有難いものだ」
その言葉をのこして、馬腹を蹴（け）った。
陳元贇（ちんげんぴん）十三代の裔（すえ）は、遠ざかり行く騎馬を見送り乍ら、いつまでも、そこに佇立（ちょりつ）していた。

因果首

一

気まぐれな旅であった。

本所扇橋を渡りかけた時、顔見知りの船頭に、

「旦那、猪牙をやらんけえ」

と、すすめられて、ふっと、その気になって、

「行徳まで行ってもらおうか」

と、云った。猪牙が、外海へ出ることはなかったが、

「凪だから、ひっくりけえることアあるまい」

船頭は、気がるに、承知した。

翌朝、眠狂四郎は葛飾郡を過ぎて、小金ヶ原の野路を歩いていた。

野馬の群が、疾駆しているのが、眺められた。

印旛郡井野新田を越えて、臼井宿に入った時、午になっていた。茶店にも憩わずに、宿場を通りぬけて、印旛沼へ出た。

その男に、最初に出会ったのは、沼に沿うた草路に於てであった。

真綿を無数にぶちつけたように、五位鷺がとまっている朴の喬木のかたわらを過ぎようとした時、不意に、根かたに寝そべっていた男が、はね起きて、行手に仁王立った。

尾羽打ち枯らした、という形容が、ぴったりする浪人者であった。顔は陽焼けし、頸筋のあたりは、うす穢く黝み、蓬髪は埃で白くなっていた。着物は、汗と埃で色が変っていたし、脇のところなど、鍔擦れで綿がはみ出していた。

血走った形相で、凝っと瞶められて、

「合力か？」

と問うてみた。

「い、いや――」

浪人者は、なぜか、顔面を歪めて、目を伏せると、

「失礼いたした」

と、詫びた。

「お通り下さい」

――面妖な奴だな。

狂四郎は、ふところ手で、行き過ぎた。ものの十歩も遠ざかった折、

「ええいっ！」

凄じい懸声とともに、刃風の唸りが、ひびいた。

頭をまわしてみると、虚空を搏った白刃を、青眼に止めて、かっと、瞠目していた。しかし、その表情は、絶望の色を滲ませて、みじめなものだった。

兵法修業で懊悩（おうのう）しているにしては、聊（いささ）か、狂気じみて居る。
そのまま、狂四郎は、忘れすてて、佐倉城下に入った。
町家通りが坂になる。見返り坂という。
江戸下りの歌舞伎が、小屋がけしていて、笛と太鼓の音が、陽気に鳴りひびいていた。
良い日和（ひより）なので、人出が多く、そのにぎわいが、狂四郎の足を、そのまま、城下を歩み過ぎさせた。
将門山と称（よ）ばれる甕（かめ）を伏せたような小丘陵にのぼって、頂きの小祠（しょうし）の前の草地で、半刻（とき）ばかり、午睡（うたたね）した。そのむかし、平将門（たいらのまさかど）が、ここに、館（やかた）を構えて、桔梗前（ききょうのまえ）という女を寵愛（ちょうあい）した、と伝えられているが、その跡はなく、小祠は、義民木内宗吾の霊を祀（まつ）ったものであった。
小祠のわきの石華表（いしとりい）には、
『将門山大明神、承応（じょうおう）三年庚午（こうご）十一月吉日、佐倉城主従（じゅ）五位下堀田上野介紀朝臣（こうずけのすけきのあそん）正信』
と、刻んであった。
その前年、領内三百八十九箇（か）村の窮民を救わんとした木内宗吾は、三人の子とともに、刑死している。
目ざめて起き上った狂四郎が、茫然（ぼんやり）と、その石華表を眺めていると、跫音（あしおと）が背後に近づき、
「お手前も、この華表に、不審をおぼえられるかな？」
と、声がかけられた。
五十年配の、彫（ほり）のふかい、双眸（そうぼう）に鋭い光のある郷士ていの人物であった。
「いや、べつに……」

狂四郎は、かぶりを振った。

郷士は、ゆっくりと、その前に立つと、

「木内宗吾は、藩主堀田加賀守正盛公に対して、直訴におよび、その罪によって、処刑され申した。しかるに、この華表を立てたのは、正盛公ではなく、次代を継いだ上野介正信公と相成って居る。奇怪とは、思われぬかな？」

「…………」

——遠く過ぎ去ったことを、あれこれと、つつきまわしても、はじまるまい。

狂四郎には、なんの興味もなかった。

この人物は、どうやら、この地方では、畏敬される門地格式を有する家のあるじなのであろう。名門意識が旺盛で、暇が多すぎれば、故事の詮索に、憂身をやつすようになる。

宗吾事件の真相が、どうであろうが、行きずりの旅人にとっては、ききたくもない話であったが、この人物は、折よく恰好の話し対手を見つけたというところであろう。

二

宗吾、本姓は木内、宗五郎または惣五郎とも云った。宗吾という名は、藩主堀田正盛が、追諡した名である。宗吾の曽祖父は、左馬允胤忠、通称源左衛門と云い、佐倉の城主千葉介重胤に仕え、四天王の一人として英名のあった人物であった。

千葉介重胤は、小田原北条氏に属していたので、豊臣秀吉の小田原攻略によって、食邑を失い、したがって、木内胤忠も牢人して、下総国印旛郡公津の里に土着した。

胤忠より理左衛門、理兵衛の二代を経て、宗吾となった。

宗吾が、印東庄三十六箇村の割元名主となった時、下総の領主は、土井大炊頭利勝から、堀田加賀守正盛に代った。

正盛は、英才であり、将軍家輔佐としても功績あり、順風に帆をあげて進んで来た人物であったので、その自信をもって、千葉氏七百年の旧国に対して、急激なる改革を断行しようとした。

正盛は、土地固有の慣例を破壊されることを、いかに農民が苦痛とするか、知らなかった。

正盛は、従来の年貢の外に、口米、こぼれ米各一俵につき二升、十三文の口銭を増徴し、新田開墾に年貢を課し、租税未納者を厳罰に処した。さらに、寛永十七年以来、飢饉がうちつづいていたが、いささかも、減税の恩典を与えなかった。

この苛酷の沙汰に対して、農民たちは、憤激した。

この時、木内宗吾は、一身を献げて、窮民を救おうとほぞをきめ、まず支配下三十余村の未納の税を、自家の財産を抛って、ことごとく代償してしまった。そのために、祖先伝来の田畑の過半を喪失した。

その義侠は、宗吾に、一躍領内随一の名望を与えた。

他の名主たちは、その反動によって、藩命に盲従し、それを励行することを、指弾され、無情冷酷のそしりを受けた。

名主たちは、宗吾におくれまいと、必死の手段を採らざるを得なかった。強訴である。強訴は、公儀の法度である。佐倉の城下は、忽ち擾乱の巷と化した。

これを視て宗吾は、意を決した。江戸へ出て、じかに藩主へ哀願しようと——。

越訴は、国禁を破ることであった。磔の刑をまぬがれぬ。宗吾は、敢えて、一命を捨てることにしたのである。

正保二年三月、江戸へ出た宗吾は、その機会をねらった。たまたま、将軍家光が墨堤で狩猟の催しがあり、堀田正盛がこれに陪従するという便りがあった。宗吾は、悦び立った。

当日午後、家光は突然、正盛の下屋敷に臨む命を下した。

正盛は、お成りの準備を急いで為すために、少数の家臣をひきいて、馬を、下屋敷に駆った。

その途中、一人の農夫が、青竹の先に、奉書をはさんで、路上へ奔り出て来るや、

「お願いつかまつりまする！　お願いつかまつりまする！」

と、けんめいに連呼した。

正盛は駆け抜けざまに、その奉書を、青竹から、さっと把った、という。

宗吾は、とりおさえられ乍ら、正盛を伏し拝んだ。

正盛は、将軍家のもてなしをぶじにすませて、上屋敷に帰ってから、その歎願書を、くりかえし、鄭重に閲した。

翌日、願書の趣は追ての沙汰に及ぶべし、但し、宗吾儀、身名主にてあり乍ら、強訴に与し、その吟味中出奔して、越訴に及びたる科は軽からず、早々に佐倉へ護送せよ、という下命があった。

正盛は、早速に、在国の家老に対して、新政の影響、各村の実状を取調べて、至急報告すべき旨を命じた。

その結果、正盛は、おのれが課した新政三箇条を、即座に廃止することに決定した。

だが同時に、宗吾に対しては、死罪を申付けた。

正保二年八月三日、佐倉領を旧慣に復した救世主、木内宗吾は、三人の子息とともに、本佐倉清光寺畔の刑場で、磔の刑に処せられた。

「正盛公は、宗吾の偉大な義心を、認められたのでござる。ただ、法を以て理を破るも、理を以て法を破らず――この第一義の前に、全領民の哀訴をしりぞけ、宗吾を処刑せざるを得なかったのでござるのう」

郷士は、そう云って、いささか芝居じみた詠嘆をしてみせた。

狂四郎は、ようやく、問いもせぬのにきかされる長話に倦いて、やおら、腰を上げていた。

「正盛公の処置は、正しかったのでござる。にも拘らず、領民どもが、正盛公を怨んだのは、まことに、あやまりでござったな。怨んだあまりに、宗吾の霊が、堀田家に祟る、という噂を起し、いつの間にやら、誰もが、それを信じるようになったとは、もってのほかの仕儀でござった。次代の上野介正信公までが、この風説におそれをなして、とうとう、このような華表を建てられた」

郷士は、喋りつづける。

狂四郎は、歩き出そうとして、ふと、からかいたくなった。

「宗吾を磔にした堀田加賀守の肩を持つことは、この土地では、許されぬのでないか？」

「もとよりのこと。それだからこそ、それがしは、正しい史実を、声を大にして、主張したいのでござる」

「そのために、お手前が、宗吾の霊に祟られることになるのでは、間尺に合うまい」
狂四郎は、冷やかに、笑った。
「何を申されるぞ！　宗吾の霊が、祟るなど、根も葉もない、たわけた風説でござるぞ！」
郷士は、狂四郎を睨みつけた。
狂四郎は、歩き出し乍ら、
「祟るか、祟らぬか——、ひとつ、こころみに、その祠の中の宗吾の木像を、焼きすててみては、いかがであろう」

三

翌日、狂四郎は、成田に在った。
狂気じみた乞食浪人に、再び出会ったのは、不動堂の前であった。
成田山新勝寺という。本尊不動明王は、座像六尺、左右の両童子は弘法大師作と称す。もと山城国高雄寺護摩堂の本尊であったのを、天慶二年、将門が叛逆の際、広沢遍照寺の寛朝僧正が、調伏の為に、この地に移し、密法修行した、と伝えられるだけあって、形相も凄じく、敵討念願の徒に祈られる。
狂四郎は、不動堂の前の地べたに、大あぐらをかいている乞食浪人を見出して、
——そうか。この男は、仇討のために、こうなっているとみえる。
と、頷いた。乞食浪人は、合掌した両手を、はげしく顫わせつつ、大声で、
「帰命頂礼不動尊、忽ち宝剣を閃かして俗煩を断つ！　山水遊歓障礙無く、利生還って吟魂を

護るに似たり！」
と、誦していた。
狂四郎は、踵をまわして鹿島街道へ降りた。
寺台、東金子などという山里を行き、野気平の野の中の茶店に憩うている時、いつの間にか、その尾羽打ち枯らした姿が、追いついて、ずかずかと入って来た。
狂四郎には、一瞥もくれずに、
「甘酒――」
と、呶鳴った。
老爺が運んで来たのを、ひと息に飲み空けてから、懐中をさぐった。
とたんに、顔色を変えた。
「ない！　財布がないっ！」
狂四郎は、狼狽するさまを、冷やかに眺めた。
「く、くそ！　成田で、す、すられた！」
甘酒茶碗を、地べたにたたきつけると、
「お、おれは、どこまで、不運なんだ！　赤紙付きの急飛脚で、五度も国許へ頼んでやって、やっと届いた路銀だったんだ！　くそっ！」
と、呻き乍ら、両手で蓬髪を、かきむしった。
「お主、敵討のために、諸国をまわっているのか？」
狂四郎が訊ねた。浪人者は、じろっと、狂四郎を視かえって、

「中仙道、東海道、北陸道と――もう三年間、歩きつづけて居るが、敵の消息さえも耳にいたさん。……あと三年、五年、歩きつづけたところで、敵に、めぐり会えるかどうか――、国許の親類どもは、だんだん冷淡になり居って、いくら催促しても、三度に一度、五度に一度しか、路銀を送っては来ず、それも金高を減らし居って……」

こぶしで膝を拷ち乍ら、

「討たれた親爺の方に、非があった、と判って居っても、殿はじめ重役ら親類めら、藩の面目にかけてとか、孝子の一念をつらぬけとか、世間に名を挙げれば、小藩の中にも、不屈の士がいたかと、称讃されるだろうとか――つまりは、いかに当藩が、武士道の吟味のために、家臣をきたえているか、ということを天下に評判させたい野心の……その犠牲に、拙者は、されて居るような気がしてならぬ！」

「…………」

「貴殿などには、この苦痛は、お判りになるまい。……あせって来ると、出会う人が、ことごとく、敵の顔に、見えて参る。昨日も、貴殿の顔が、敵桜場伝左衛門に見えて、あやうく、斬りつけるところでござった」

「…………」

「桜場伝左衛門は、仁者でござる。拙者の親爺を討ったのは、正義のためであった。……拙者は、なろうことなら、桜場に似た顔の、悪党めを討って、国許へ持ち帰りたいくらいだ」

「それも、方便だな」

狂四郎は、うっかりそうこたえた。

「方便！　左様、方便だ。この世を渡るのは、万事要領よく、方便を用いる。それかも知れぬ。莫迦正直に、五年も十年も、敵を捜しまわって、挙句の果てに、のたれ死などしては、たまらん！」

狂四郎は、床几から立つと、浪人者の脇へ小判を三枚ばかり、置いた。

「路銀にされるがよい」

「……………」

浪人者は、大きく目をひらいて、狂四郎を視あげた。狂四郎が、おもてへ出た時、はっとわれにかえって、

「ご尊名を——」

と叫んだ。狂四郎は、こたえず、ふりかえりもしなかった。

四

潮来を巡って、狂四郎が、ふたたび、佐倉城下へ、戻って来たのは、それから三日後であった。

十六夜の月が、光を増した宵であった。

見返り坂を、ゆっくりと降りて行こうとした折であった。

突如、坂下の城下入口の橋の上で、ふたつの黒影が、もつれ合ったとみるや、吶号とともに、白刃が、閃いた。

一方は、刀を抜くいとまもなく斬られて、よろめいた。

斬った方は、仆れた者へのしかかるようにして、とどめを刺した。

狂四郎の足は、意識せずして、速くなっていた。
斬り手が、仆れた者の首を刎ねて、すばやく、羽織をぬがせて包むと、すっくと立った時、狂四郎は、橋袂まで、達していた。
屹と、こちらを睨んだ顔は、例の乞食浪人のものに、まぎれもなかった。
「本懐か——」
狂四郎が、声をかけると、対手は、意味をなさぬ異様な唸り声をもらして、首のない屍を、川へ蹴落した。

夜が、しらじらと、明けそめた頃、狂四郎と浪人者は小金ヶ原の野路を歩いていた。
朝霧をやぶって、野馬のいななきが、きこえて来た。
先を歩いていた狂四郎は、ふりかえって、羽織で包んだ首を小脇にかかえている浪人者の、異常にこわばった面相を見た。
「近くの百姓家に寄って、桶と塩をもらって、首を漬けられるがよかろう」
「そ、そうであった」
浪人者は、合点すると、道脇を流れる小川の縁へしゃがみかかって首を洗うべく、羽織をひろげた。
ふところ手で、路上に立った狂四郎は、その死顔を一瞥して、
——これは！
と、眉宇をひそめた。

将門山で出会った郷士の貌であった。
——やはり、木内宗吾の霊に、祟られたようだな。
狂四郎は、背筋を、冷たいものが匐い降り不快感をおぼえた。
浪人者が、首を洗って、羽織に包みなおして、路上へ出て来ると、狂四郎は、歩き出し乍ら、
「その首が、敵の桜場伝左衛門とやらに、よく似ているのか？」
と、訊ねた。
浪人者は、瞬間、悸っとなって、狂四郎の横顔を睨んだ。
そして、みるみる、殺気を、全身にみなぎらせた。
狂四郎は、視線をまわして、浪人者の険しい眼光を受けた。
「似ていれば、結構だ。それも方便と教えたのは、こちらだからな」
「…………」
「ことのついでに、お主のために、すこしばかり、手だすけしなければならなくなったようだ」
「な、なんと云われる？」
「きこえないか。こんどは、お主が、敵と狙われる番だ」
そう云われて、浪人者は、愕然となって、後方を視やった。
追跡して来る多勢の跫音が、微かに、地面をつたって来る。
「先へ行け！」
狂四郎は、命じた。
「あまり気分のよくない役目だが、やむを得ぬ。この場は、わたしが、引き受けた。……国許へ

帰ったら、贋首（にせくび）とばれぬようにすることだ」

海辺の決闘

一

軽輩――と、一目で判る若ざむらいであった。洗いざらした真岡木綿の単衣に、紬の袴をはいていた。かたわらに置いた差料も、鍔も鞘もきわめて、粗末なものであった。

しかし、その端座ぶりは、身にそなわったものであったし、猫脚の膳には、箸もつけて居らず、膝に両手を置いて、粛然としている様子に、緊張した気色があった。

場所が、ふさわしくない。

灯が入れば、房総の荒海を乗りまわす漁師たちが、海猫と称ばれる女たちを、ひっかかえて、飲みくらって、乱痴気騒ぎをする店であった。

三十畳ばかりの広間を、衝立でいくつもに区切ってあったが、夜が更けた頃には、衝立の蔭で、平然と淫靡な呻き声がもらされて、それを、隣りの客と女が、覗き込んで、げらげら笑いたてる光景も、べつだん噂にもならぬ荒くれた気風の土地なのである。

ひっそりしたこの真昼は、いたずらに、だだ広く、佗しい。畳の焼け焦げた跡や、衝立の破れや、壁にぶちかけられた酒の汚染はまだしも、漂うている饐えた臭気は、この店で演じられたあらゆるみだらな営みが生んだものである。

若ざむらいは、その臭気の中で、身じろぎもせぬ。

店は、大多喜街道に面していたが、白い往還に、絶えて人影はなかった。夜が明けた頃には、もう女子供までが、浜へ働きに出かけてしまっているからであった。

跫音が、遠くから、ひびいて来るのが、はっきりと耳にとどく静けさであった。

若ざむらいは、はっと顔を擡げた。そして、いそいで、膳を、脇へどけた。

はたして、その跫音は、若ざむらいが待っていた人のものであった。

入って来たのは、お高祖頭巾で顔をつつんだ武家娘であった。その衣裳が、かなりの屋敷にすまうことを、教えた。しかし、供はつれていなかった。

若ざむらいは、畳に両手をつかえた。

「待たせました」

娘は、座に就くと、目下に対してつかいなれている口調で、云った。

「斯様なむさいところを、おねがい申し、おゆるしたまわりますよう――」

若ざむらいは、頭を下げたまま、詫びた。

「かえって、このような場所が、人目につかぬと存じ……」

「どこであろうと、かまいませぬ。……わたくしは、約束通り参りました。自由に、いたすがよい」

「………」

若ざむらいは、両手を膝に上げたが、なお、目を伏せたまま、返辞をしなかった。

「この家に、小部屋は、ありましょう？」

「…………」
「あるのですね？」
「ありまする」
「案内いたすがよい」
「…………」
「なにをためろうて居ります？　宗三郎殿に、勝をゆずる代償が欲しい、と申出たのは、そなたではありませぬか？」
「…………」
「金子よりも、わたくしのからだが、欲しいと、求めたのは、そなたです。ですから、わたくしは、こうして参ったのです」
「…………」
「いまになって、明日の試合に、勝ち抜きたくなったのですか？」
「い、いいえ、お約束した以上は、決して違約は、いたしませぬ」
「それなら、何より、わたくしを抱くがよい。……時間がありませぬ。誕生寺の境内では、召使いが、待って居ります。宗三郎殿の勝利を祈禱するといつわって、本堂に入り、こっそり裏口から抜け出して参ったのです。せいぜい、四半刻の猶予しかありませぬ」
「朝路様――」
若ざむらいは、はじめて、顔を擡げて、娘を視た。
こわばった、一種悲痛な表情であった。

「うかがいたき儀が、ございます。……それがしに操をお与えなされることが、後日の悔いに、なりますまいか。……相良様にお輿入れなされた夜、貴女様が、なんの心苦しさもお持ちにならぬとは、考えられませぬ」

「修平！」

娘は、声音をきびしいものにした。

「宗三郎殿は、十人勝ち抜かねば、相良家を継ぐことは叶わぬのじゃ。廃嫡となれば、わたくしも、嫁ぐことは叶いませぬ。良人を、家老職に就けるために、妻が、婚礼前にただ一度、身をけがしたとて、神仏の咎めるところでありましょうか。よけいな懸念をしやるな！」

「朝路様！」

若ざむらいは、再び目を伏せた。

「それがしが、無法きわまるお願いをいたしたのは、あやまりでございました。今日、もし、それがしが、貴女様をわがものにいたせば、貴女様のご婚儀の夜、到底正気でいることは、できまいと存じます」

「宗三郎殿に、勝をゆずらぬ、と申すのか？」

「いえ。お約束通り、それがしが敗れまする」

「代償は要らぬ、と申すのか？」

「要りませぬ」

「どういうのです？」

「それがしは、貴女様を……」

そこまで云いかけて、若ざむらいは、口をつぐんだ。
娘は、まるでこの結果を予期していたように、眸子に、冷やかな微笑をうかべた。

二

巽修平は、朝路が立去っても、なおしばらく、動かなかった。
深い溜息とともに、修平は、やおら、立ち上った。
とたんに悸っとなった。
衝立をへだてて、隣りの席に、人がいたのである。
一瞥して、ただ者とは思われぬ、彫の深い異相の浪人者が、手枕で寝そべっていたのである。
修平は、眦を裂かんばかりに、瞠らいて、じっと、睨みおろしたが、おのれをおさえると、静かにそこを去った。
修平の姿がおもてへ消えた時、眠狂四郎は、起き上った。
手をたたいたが、応じる者はなかった。女たちは、午睡をむさぼっているのであろう。
狂四郎は、夜更けて、この店に入り、飲みつづけて朝を迎え、女たちが、寝間へひきあげたのち、横になって、睡ったのである。
――浮世には、さまざまな男と女が居るものだ。
土間へ降り乍ら、苦笑を、口辺に刷いていた。
見知らぬ他人のことである。どうなろうと、知ったことではなかった。
しかし、その冷淡な気持は、こちらだけのことで、むこうは、そうは受けとってはいなかった。

その証拠を、狂四郎は、往還をものの三町もひろわぬうちに、見せつけられなければならなかった。

　抛物線を描く平沙の浜辺に、波濤が打ち寄せて、磯馴れの松の根かたまで襲い、三間も四間も引き去る壮大な景色を右手にして、街道はつづいていた。数十羽の鵜が、波濤に追われては、舞い立ち、また水泡のこる砂地へ降りて、異様な啼き声をたてている。

　突如、松の蔭から、奔り出た件の若ざむらいが、白刃を大上段にとって、迫って来るや、狂四郎には、その姿が、いかにも、この荒々しい景色にふさわしいものに、思われた。

　あるいは、現われるかも知れぬ、という予測が、心の隅にあったせいでもあろう。

　——できる！

　狂四郎は、看てとり乍ら、

「内緒話をきかれたので、口を封じようというわけか」

と、冷やかに、笑った。

「許されい！　きかれてはならぬ相談でござった！」

　修平は、じりっと、距離を詰めた。

「お主は、どうやら、融通のきかぬ律儀者のようだが、それにしても、惚れる対手をまちがえるのも甚しい。律儀者だから、かえって、あのような悪女に惚れたのかも知れぬが……」

「えいっ！」

　修平は、総身からの気合もろとも、心形刀極意の胎内刀の一撃を生んだ。

　この若ざむらいが、心形刀を使うと、狂四郎が判じたのは、その大上段の構えに、殺気を視な

かったからである。また大上段の構えそのものも、変っていたのである。

大上段の構えには、当然、凄じい殺気がみなぎっているものである。それを体内にひそめてしまうのは、敵が如何なる業を使おうとも、おのれに一手のみが用意されていることを示している。すなわち、胎内刀である。

云うならば、心気を臍下に納めて、無念無想、滞ることなく、静かに、緩かに、進んで行き、手際も見せず、撃つ。未発の位、あるいは胎内の位、とも云う。対峙して、汐合が極まるのを待つ太刀ではないのであった。

但し、この太刀は、敵の心気が充ち盈ちて、機を発するのに合わせるのを、肝要とする。すなわち、我は、決して、殺気を迸らせず、ただ、刀身をかざして、陽に靡かせつつ、進むために、受太刀の敵の方が、自然に、そうせざるを得なくなるのである。

敵をして、先に、猛撃を起さしめるためには、あくまで、おのれの心気をかくす構えをえらばねばならぬ。したがって、その大上段も、普通とは異ったものとなる。

両手を面前にすぼめて、刀身を頭上へ水平に一文字に、後方へ流し、柄先を敵の正面へ当て、真向の偏身で、進むのであった。この姿が、母の胎内で、胎衣に包まれている赤子を連想させる故に、胎内刀と称けられたかとも思える。

顔は、挙げられた両手ではさまれ、視野は完全に限られる。敵からは、その鼻ばかりが窺える。

敵としては、胴の両脇は、隙だらけであるから、横薙ぎの一閃を欲する。

その敵の機が発した刹那、我は、さか落しに、斬り下して、腹部に突き込む。

胎内の構えより出て、敵の胎内をつらぬく一撃必勝の一手であった。

……まさしく、修平の胎内刀は、凄じい閃光と化して、狂四郎の腹部を襲った。

業も冴えていたし、えらんだ一瞬に狂いはなかった。

ただ、狂四郎の方が、故意と反撃の殺気を発したものの、抜きつけの胴薙ぎをみせる代りに、一歩退っただけであった。

一颯の太刀は、むなしく、空に流れた。

しかし、修平は、すこしもさわがず、ふたたび、静かに、白刃を上段に返した。

狂四郎は、云った。

「胎内刀を、いくどくりかえしても、無駄だな。わたしを斬ることは、できぬ。こっちも、お主のような律儀者を斬る気はせぬ」

「…………」

「人を観ることだ」

狂四郎は、すっと、踵をまわして、背中を、敵に与えた。

勿論、修平が、この瞬間をはずさずに、撃てば、狂四郎は、ま二つになって、血煙りをあげたに相違ない。

修平には、それが、できなかった。むしろ、狂四郎の、討手を無視した振舞いに、茫然となった。

狂四郎が、十歩あまり遠ざかるや、

「お待ち下され！」

修平は、呼びとめた。

三

九月九日——重陽の佳節の日に、松平備中守（二万石）の家中では、小湊誕生寺境内に於て、源平試合を行うならわしを、かなりむかしから持っていた。

五十人が、源平に分れて、勝ち抜く試合であったが、これまで、五人を抜く者はなかった。

今年、この試合が、例年に増して、大変な評判になったのは、城代家老相良宗左衛門の一子宗三郎が、三年間、武芸修業で諸国を経巡って帰って来て、父から、もし十人を抜かなければ、跡目を継ぐことは許さぬ、と宣告されたためであった。

相良宗左衛門は、息子がどれだけの腕をみがいたか、試すために、定府の士の中から、身分を問わず、業前をそなえた者を、帰国させたのである。七人が呼び戻されたが、二十俵の小納戸方心得の軽輩である巽修平も、それに加えられていた。

修平が、心形刀を学んで、かなり使う、という噂はあったが、まだ、誰も、その実力を視てはいなかった。たった一人、修平の腕前を知っている者がいた。相良宗三郎の許婚者朝路であった。

朝路は、江戸屋敷で、三年ばかり、奥方附きの腰元を勤めていた。某日、奥方代参で、主家の菩提寺へ参詣する途中、数人の無頼の浪人者に襲われたことがあった。供は、修平だけであった。

修平が、暴漢どもを一人のこらず、峰撃ちに、地べたへころがすのに、ほんの数秒もあれば足りた。どの敵とも、一太刀さえも、斬り結びはしなかったのである。

朝路は、宗三郎が、到底修平に勝てぬ、とさとって、おのが操をすてて、勝をゆずらせようとしたのであった。

試合は、明日に迫っていた。

陽が落ちて程なくの頃あいであった。

日蓮の父母の法名をとった妙日山妙蓮寺の方丈に、泊っていた朝路は、納所から、そっと、一通の手紙を渡された。

この方丈には、明日の試合を見物すべく、大多喜城下から来た、上級藩士の妻子が、多勢泊っていたので、にぎやかであった。

試合をする若ざむらいは、誕生寺方丈に泊り、主だった藩士たちは、本陣や脇本陣に、そして、その他の藩士たちは、旅籠に分宿していた。

朝路は、手紙を披いて一読すると、柳眉をひきつらせて、険しい表情になった。

先刻は、あのようにご辞退申上げましたなれど、やはり恋慕の情押え難く、この書面ご披見次第に、内浦の松ヶ鼻へお忍び下され度い、という巽修平のたのみであった。

行かなければ、修平は、宗三郎に勝つであろう。

朝路は、人目を掠めて、妙蓮寺を忍び出ると、月光のある夜道を急いだ。

灯もない漁師の家が、つぶれかかったように左右から傾いている通りを抜けて、やがて、内浦の浜辺に出た朝路は、海へ突き出た岬の岩の上に、佇立する人影を見出した。

「下郎め！」

朝路は、怒りをその一言にこめて吐き出した。

修平が、憎かった。心の底から、憎かった。もし、できるものなら、懐剣で、ひと刺しにして

やりたかった。

昼間、あのだるま屋へ会いに行った時は、操をすてる覚悟ができていた。しかし、いまは、修平の変心に対する憎悪ばかりが燃えていた。一指もふれられたくはなかった。

にも拘らず、対手の要求を拒絶できないのである。異常に勝気に生れついたこの武家娘にとって、死ぬほどの口惜しさであった。

――宗三郎殿が、城代になられたあかつきには、修平めを、何かの事にかこつけて、切腹させてくれる！

狂おしい感情を抑えるために、朝路は、心で叫んでおいて、松ヶ鼻へ、近づいて行った。

岬は、松林を抜けなければならなかった。

朝路が、松林を抜け出るのと、岩の上から人影が砂地へ降りるのが、同時であった。

一間に近よって、朝路は、

「あっ！」

と、驚愕の叫びをあげた。

対手は、修平ではなかった。許婚者の相良宗三郎であった。

宗三郎は、しかし、朝路を視ても、おどろかなかった。朝路が来るのを、待ち受けていたのである。

「朝路殿。……巽修平に、操を呉れて、わしに勝をゆずらせようと企てたのは、まことであったな」

「……………」

朝路は、何か、弁明しようとしたが、のどがひきつれて、声が出なかった。いたずらに、かぶりをふったばかりである。

「先刻、何者とも知れぬ者の手紙が、届いた。よもや、と疑い乍ら、ここへ来てみた。……手紙は、詐りではなかったぞ。そなたは、はたしてやって来た。わしを見て、愕いた。巽修平がいる筈の場所に、わしがいたからだ。……朝路！　わしが、そなたの操とひきかえに、勝を得て、よろこぶと思うか！　そんな人間に見えるのか！」

「貴方様は……、ご、ご城代に、おなりに、ならなければなりませぬ！」

「城代になって、生涯、巽修平に、さげすまれるのか！」

「宗三郎様！　わたくしは、貴方様のことを想うて……」

「黙れ！　そなたは、兵法者であるわしなど、どうでもよいのだ。城代家老の妻、という身分が欲しいのだろう。そうだろう！」

宗三郎が、一歩迫るや、朝路は、その殺気に打たれて、悲鳴をあげて、逃げようとした。宗三郎は、半ば無意識の動作を起した。

断末魔の叫びが、夜空をつらぬいた。

砂地へ崩れ落ちた朝路へ、虚脱の眼眸を落していた宗三郎は、ふっと、背後に人の気配があるのに、気づいて、振りかえった。

二間のむこうに、黒く、その影は、立っていた。

「巽修平だな」

「左様でござる」

「姦婦は、討ち果した。……一日早いが、貴様と、ここで、勝負するぞ！」

「やむなき仕儀と心得ます。お対手つかまつる」

「抜け！」

宗三郎は、青眼に構えた。

修平は、ゆっくりと、鞘走らせると、おもむろに、胎内刀の大上段をとった。

月かげは冴え、波の音は高かった。

眠狂四郎は、松林の中にいた。

宗三郎と修平が対峙するや、勝敗を見とどけもせずに、歩き出していた。

宗三郎が、どれだけの刻苦をしたか知らぬが、修平の胎内刀をはずすことは、おそらく百中九十九まで、不可能であろう、と予測が立っていた。

修平の胎内刀をはずすには、修業の腕前があるだけでは、駄目なのである。死地をいくたびもくぐった、真剣勝負の経験にもの云わせて、その刹那、けものの本能に似た動きを発揮しなければならぬ。

宗三郎は、おそらく、真剣勝負などしたことはないに相違ない。

——さて、巽修平は、勝って、どうするかだ。

狂四郎は、ふところ手で、ゆっくりと、砂地をふみしめて、決闘場から、遠ざかり乍ら、おのれが仕組んでみたことの結果に、暗然となっていた。宗三郎が、よもや朝路を斬るとは、思っていなかったのである——。

狂四郎の脳裡には——。

宗三郎を仆した後、修平が、朝路のなきがらのそばに端座して、おもむろに着物の前をかきひろげて、脇差を抜きはなつ光景が、泛んでいた。

酔眼記

一

どこに行こうというあてのある旅ではなかった。

気の向くまま、足の向くままに、房総の海辺をひろって行く日々であった。

雨のある日は、旅亭に終日、寝そべり、晴れれば、ぶらりと出て、そのまま、道をひろって行く。それも、並木のある街道は避けて、きれぎれに、消え細ったのを、えらんでいた。

広場という町を過ぎて、前原へ出、加茂川船渡しで、磯村に至り、村芝居の太鼓の音を遠くきき乍ら、浜辺を伝って、江見に着く。

洲見川を渡れば、真門、外堀、花園、柴村、仁賀などの村々が、山手にちらばる。

真浦から堺川を渡り、白渚、下三原、海発の浜を過ぎれば、温石川。

瀬戸川橋を越えれば、朝夷。雨乞塚という小山の裾をまわれば、千倉の浦。

平館、忽戸、川口、平磯、白真津を過ぎて、真間の原という野径に入り、乙浜へ出た。

そこから、三十石船が、洲崎の当国総社洲崎神社詣での講中や旅びとをのせて行くときいて、狂四郎は、おのが一人身を、まぎれ込ませた。

「旦那——」

胴の間の片隅に凭りかかって、朱塗りの小樽から、五郎八茶碗に注ぎ飲みしていると、四ん匍いで寄って来た男が、怯ず怯ずと、声をかけて来た。

視線をやると、卑屈な笑みを作って、

「お願いがあるんでござんすが……」

と、ぺこりと頭を下げると、腰に携げている印籠をはずして、

「これを、ひとつ、買って頂けませんか？」

と、さし出した。

下級武士なら、誰でも携げている粗末な代物で、江戸の古道具屋では、値ぶみもしてくれまい。

狂四郎は、これまで、旅ぐらしの無職が、すってんてんになって、たかって来たのに、しばしば出会している。こっちを、博徒の用心棒と早合点して、渡世の仁義などをきってみせて、拒絶されると、きいた風に凄んでみせたことである。

この男は、見るからに、やくざだが、その卑屈な態度に、憎めない愛嬌を含んでいた。

狂四郎が、黙っていると、男は、「へへへ……」と、頭をかいて、

「実は、それなんで……」

と、酒樽を指さしてみせた。

「その匂いを、かぐと、あっしゃ、どうにも——居ても、立っても、いられなくなるんで……。おまけに、旦那が飲んでいなさるこの酒は、滅法こてえられねえ香がしてやがるんでさ」

「嗅いだだけで、上物と判るとは、お前も相当な飲み助だな」

たしかに——これは、江見の知りあいの造り酒屋に立寄って、ふるまわれ、あまりの見事なコ

クに、感服すると、主人が、持たせてくれた一樽であった。
狂四郎が、樽と茶碗を押してやると、男は、莫蓙へ額をこすりつけんばかりにした。茶碗を樽へ傾ける両手が、こまかく痙攣しているのは、酒毒に犯されている証拠である。
……それから、半刻ばかりのうちに、男の態度が、次第に図太く変って来るけしきを、狂四郎は、面白いものに眺めたことである。
「旦那——。あっしゃね、酒はいけねえ、気ちがい水、ってことは、ちゃあんと、知ってまさ。しかし、ぷうんと、鼻に来やがると、もういけねえんだ。こいつを咽喉に落すためにゃ、お袋を質に置いても——ってえ気になるんでさあ」
「…………」
「あっしゃね、旦那、館山じゃ、ちったア世間にきこえた寺大工でござんしたよ。五代様の頃からつづいた、鉋政と云えば、ああ、日光様の御修築の棟梁かと——いや、そんなこたアどうでもいいや。つまり、名人と称ばれた親爺の跡目を継いだ時は、まだ十八でござんしたが、あっしの削った板は、てのひらに、ぴたっと吸いついたものでござんしたよ。……その鉋政が、乞食博奕を打つ無職になり下ったのも、これでさあ」
「…………」
「酔ったがために、人殺しをしているんですぜ。兇状持でござんすよ、兇状持ち——」
「…………」
「五年前の正月でござんした。館山で一番の材木屋で、丸角って親分が居りやした。年始に行って飲まされているうちに、丸角が、政、お君は、いい女だのう、と云やがった。そこから、話が

こじれて、あっしゃ、親分の面を眺めているうちに、お君を、横取りされるにちげえねえ、と思い込んで——、かっとなって、こん畜生、お君は、おれの女だぞ、てめえみてえな禿頭の妾にされて、たまるけえ、とその禿頭を、ぴしゃっ、とやった。やった以上は、もう、のっぴきならねえや。殺すか、殺されるか——野郎が摑んだ長脇差を、逆に、ひったくって、無我夢中で、突いたら、胴っ腹へ、ぶすっ、と通っちまやがった。血がぴゅっとふっ飛んで、面にひっかかった冷たさで、酔いは、いっぺんに、さめたが、もう後の祭でさ」

「…………」

「ずらかって、大坂までひとっ飛びして——もう、金輪際、飲むまい、と天満様に誓ったんだが、たった三月で、反古にすると、やけっくそも手伝って、一合欲しさに、犬の真似までして、親爺の寝酒を買って帰る子供に、一升徳利を抛り出させるところまで、あさましく、おちぶれたんだから、話にならねえ」

「…………」

「だけどよ、旦那、え、おい。あっしゃ、ちっとも、後悔は、しちゃいませんぜ。三十七になる今日まで、飲んで飲んで、飲んだくれたんだ。……もう、いいや。ここら、あたりが年貢の納め時だ。素面でいると、手がふるえるし、舌も、もつれて来やがった。……のたれ死するよりは、いっそ、丸角の倅の銀六に、仇を討たしてやろうじゃねえか。そう思い立ったんだ」

「…………」

「旦那。嘘じゃねえんだぜ。本当なんだぜ。あっしゃ、これから、館山へ戻って、丸角の銀六に、立派に討たれてやるんだ。……そうよ、討たれてやるとも！　旦那、一緒に、館山へ行ってもら

おうじゃねえか。おう、いいか、屹度だぞ。あっしが討たれるのを、見とどけてくんねえ。約束したぞ、いいな！」

二

それから二日後。

狂四郎は、館山の城下はずれの居酒屋の、白馬の暖簾をくぐった。

昏れどきで、職人や馬子や破落戸が、肩を押し合うようにして、飲んでいた。

「銀六、という男が、ここにいる、ときいたが……」

と、客の一人に尋ねて、

「あいつでさ」

と、あごで示された方角へ、視線を向けると、くたびれた半纏をひっかけ、無精髭をのばした若い男が、

「何をこきやがる。とんちきめ、世の中から、女と酒を無くしたら、何が残るってんだ」

と、大声で、喚いていた。

前にいる職人が、笑い乍ら、

「そうよ、なんにも残らねえや。おめえが、立派な証拠人じゃねえか。親爺が殺されてから、たった四年で、丸角の店を、飲みつぶしてしまやがった」

「おれが、おれの店をつぶしたんだぞ。それが、どこがわるい。他人の店をつぶしたんじゃねえや。どこからも、文句をつけられるおぼえはねえぞ、こん畜生っ！」

「なにも、悪いと云っちゃ、いねえやな。ただ、ちっと、やりすぎたんじゃねえか、と……」

「うるせえ！……やい！　おれが、女と酒で、どこの何様に迷惑かけた、とぬかしやがる。かけられた奴が一人でも、いるか。いるなら、出て来い。観世縒で、首をくってみせてやらあ」

そう呶鳴って、いきなり、台の上へ、匍いあがると、尻まくりして、大胡座をかいた。

狂四郎は、ゆっくりと近づいて、

「銀六だな？」

と、たしかめた。

「なんでえ？」

酔眼を据えた銀六は、

「おめえさんが、迷惑をかけられたと云うのけえ？」

「いや。使いをたのまれた者だ。……鉋政を知っているか？」

「なに！　知らねえ筈がねえじゃねえか。おれの親爺を、殺りやがった野郎よ。親の敵だあ」

「その鉋政が、館山に戻って来た」

「なんだと？」

「お前に、討たれに戻って来たのだ」

「べらぼうめ！　ひとつしかねえ生命を、てめえで、すてにけえって来る奴があるもんけえ。……ご浪人衆、からかうにも、程があるぜ。へん――その手に乗るけえ。おめえさん、誰かにたのまれて、おれを殺りに来たのなら、はっきり、そう云ってくんねえ。……柏崎の仙八か、長須賀の甚兵衛か、大方そんなところだろう。丸角の屋敷を、賭場にしてえあまりに、邪魔になるお

れを片づけよう、ってえのは——。そうは、問屋が、おろさねえぞ。おれはな、女と酒で、身上つぶしても、博奕じゃ、屋敷を無くさねえんだ」

——こう酔っていたのでは、話にならぬ。

狂四郎は、黙って、踵をまわすと、店を出た。

「おーい！　待てえ——待ってくれえ」

狂四郎は、ものの三町も行かぬうちに、銀六の大声をきいた。

前をはだけて、跣で、宙をひっかくような道化けた恰好で、追いかけて来る。その背後に、十数人が、わいわいさわぎたて乍ら、くっついて来ていた。

——野次馬にそそのかされたようだ。

狂四郎は、苦笑した。

これも、旅のつれづれの座興と、鉋政の使いをしてやってみたのだが、そのばかばかしさは、やはり、とんだ茶番であった、という悔いになるようであった。

銀六は、狂四郎の前に立つと、ぜいぜいと喘ぎ乍ら、

「や、やるぞっ！……親爺の、敵を、討つぞ！……政は、ど、どこに、い、いやがるんだ？」

と、叫んだ。

狂四郎は、こたえる代りに、銀六の片手を、むずと摑んで、片側の店のわきの天水桶へ寄った。

「な、なにを、しやがる！」

もがくやつの髷を摑んで、ざぶっと、頸根まで、突っ込んだ。

引き上げたかとみるや、また突っ込む——それを、三四度くりかえしてから、離しておいて、往還いっぱいに立ちはだかる野次馬たちへ、」
「貴様たちは、戻れ！　見世物ではない」
と、云った。
人間ばなれした凄味をおびている狂四郎の険しい異相に、野次馬たちは、怯えて、あとずさった。
銀六は、濡れた犬のように、ぶるぶるっと首と胴を顫わせてから、
「そ、そうだ！　見世物じゃねえや」
と、呶鳴った。
狂四郎が歩き出すと、銀六は、ふらふらと跟いて来乍ら、
「旦那！　た、たしかに、政の野郎、舞い戻って来やがったんだろうな？」
と、念を押した。
「はやく、酔いをさませ」
狂四郎は、わざと、足をはやめた。
「待って、おくんねえ。……さ、さませったって、こ、この十日ばかり、飲みつづけているんだから、そう、かんたんに、さ、さめねえや」
狂四郎は、振りかえって、銀六のうしろを、なおぞろぞろ歩いて来る野次馬たちを、睨みつけた。
「もう一度だけ、云う。貴様たち、戻れ！」

並の人間が凄んだ威嚇ではなかった。
まず、銀六が、その眼光を視て、いっぺんに酔いが、ふっとんだように、首を肩の中へひっ込めた。
銀六は、それから、そうしなければ、自分が斬られるように、あわてて、野次馬たちをふりかえると、
「そ、そうだぞ！　見世物じゃ、ねえんだぞ！」
と、喚いた。

三

汐入川に架った土橋の袂に「うどん」と染め抜いたぼろ幟をたてた店の片隅で、鉋政は、醤油樽に腰かけて、蒼い顔を俯向けていた。
台の上のどんぶりの中には、あんかけがそのまま、箸をつけられずに、さめていた。
縄暖簾が、ばさっとゆれる音に、鉋政は、びくっとなって、振りかえった。
そこに立った者のあまりに薄穢い、ぶざまな姿に、鉋政は、別の人間だと見まちがえて、また、俯向こうとした。
とたんに、
「政！」
と、呼ばれて、もう一度、視線をやり、それが、まぎれもなく、銀六であることを、みとめた。
館山で一番の材木屋の跡目継ぎが、どうして、こんな風体になっているのか？

「出ろい、政！」

銀六が、一歩ふみ込んで、呶鳴ると、その熟柿臭い息が、飽政の顔へかかった。

とたんに、飽政は、なんとも奇妙な歪んだ表情になって、

「若旦那。……たのみます。今生の別れに、一杯だけ——飲まして、おくんなさい」

と、片手で拝んだ。

「ふん。てめえ、そんなに、飲みてえか？」

「あっしのほうから、討たれに戻って来たんだ。逃げも、かくれも、しねえから、一杯だけ、飲まして、もらえたら……」

「よし、一杯だけだぞ」

「有難てえ」

飽政は、奥へ、大声で、冷酒をたのんだ。

いつの間に、尾けて来たか、野次馬が五六人、おもてに立った。

「どうした、銀六？　政はいるのか？」

「いらアな。逃げも、かくれも、しねえや。いま、末期の酒を、一杯飲ましてやるところだあ」

「莫迦な真似をするな。はやいところ、討っちまえ」

「そう云うな。政の酒好きは、お天道様もご承知だ。……酒飲みでなけりゃ、酒飲みの気持はわからねえや」

銀六は、飽政のむかい側の醤油樽に腰かけて、冷酒が飽政の咽喉を通るさまを見戍っているうちに、こっちの咽喉が鳴って来た。

「おい、姐(ねえ)や、おれに、一本つけてくれ」
と、たのんだ。表の連中が、あきれて、
「銀六、いい加減にしろ。仇討(あだうち)をやるんだぞ！」
「わかってらあい。そこに、たかって、つべこべほざくな」
「早く、政を、ひきずり出して、殺(や)っちまえ！」
「うるせえ。政が飲んでいる間、指をくわえて、見ていられるけえ」
燗(かん)のついたのが、はこばれて来ると、銀六は、
「今生の別れだあ、盃(さかずき)をくれてやら」
と、さし出した。
「すまねえ」
飽政は、卑屈にぺこぺこし乍ら、受けて、飲み干すと、銀六に返した。そして、注いでやり乍ら、
「これで、思い残すことはねえ。頓証菩提(とんしょうぼだい)で、目をつむれる」
「おうおう、縁起でもねえことを云うねえ。酒がまずくなるじゃねえか。死ぬ時はな、にっこり笑って斬(き)られろ。それが酒飲みの往生ぶりってえものよ」
「うん――」
「笑え」
「………」
「笑え」

て来い」

銀六は、盃で飲むのが面倒になって、ごくごくと、口のみにした。

表の連中が、やきもきして、

「銀六、そんなに飲んだら、討てなくなっちまうじゃねえか」

「うっちゃっとけ。余計なお節介を、やくねえ。おれが、討とうと討つまいと、てめえらから、文句をつけられる筋合はねえや。なあ、政。……そんな、渋っ面をするねえ。笑え！」

「あっしゃ、これから、殺されるんだぜ。そう、うれしそうに笑えねえ」

「殺される？　てめえが、誰に？」

三里を走って来て、いきなり、ぐい飲みした銀六は、いっぺんに酔いが出たらしい。

上半身が、ぐらぐらした。

「おめえだよ、あっしを討つんじゃねえか」

「そうだ。おれだ。親の敵だからな。待ってろ。いま討ってやる」

銚子が、はこばれて来た。

二人は、茶碗にあけて、飲み出した。

「政、てめえ、本当に討たれに戻って来たのか？　討たれるなら、討たれるように、もっと神妙にしろ。それとも、てめえ、返り討するこんたんか？」

表から、そんな呶鳴り声がした。

鮑政は、屹っとなって、

「なんだと？　返り討だと？　ふざけるねえ。あっしはな、そんな不人情な唐変木じゃねえぞ。敵だぞ、敵！　銀六の親の敵だぞ！　ちゃあんと、討たれてやるから、安心しろい」

銀六が、

「あたりめえよ、政は、親の敵だ。……だけどよ、政、おれの親爺は、いけすかねえじじいだったのう」

「うん。あんな助平な、業つくばりはなかったぞ。……あっしのお君を、横取りしようとしやがったんだ」

「そうだったな。お君は、館山小町だあ。おぼこで、気立てがよくって――おれも、惚れていたんだ。おれの親爺のような、助平禿に、やられてたまるかってんだ、なあ。どだい、六十じじいが、おぼこに手を出そうなんて、まちがってら。本当の助平じゃねえや」

「そうよ。

　おぼこのうちなら
　面見て、惚れよが、
　二十過ぎれば、心意気
　三十年増は

閨の良し、悪し
てな文句を、知っているか、銀六？」
「知っているぞ。……しかし、おれは、女よりも、酒の方がいいぞ」
「そうか、おめえもそうか。あっしもそうだ。……ははは、おめえとあっしは、兄弟みてえなもんだぞ」
「よおし、判った。……姐や、酒だ。五六本持って来い」
この時、表の連中が、怯えて、四方へ逃げ散った。
狂四郎が、ゆっくりと歩いて来たのである。
どうなる、と固唾をのんだ連中をしり目に、縄暖簾をはねて、覗いた狂四郎は、肩を組みあって、酔い痴れている二人を見出すと、微笑した。
そのまま、踵をまわして、遠ざかって行き乍ら、狂四郎は、珍しく、その口辺から微笑を消さなかった。

闇

一

——はてな？

眠狂四郎が、おのが目の不自由に気がついたのは、白浜の汀ぎわに、彳んだ時であった。

昏れかかる海上の中天に、野島ヶ崎の燈明堂の光が煌いていたが、それが、急にすうっと、遠のき、うすれたのである。

眉宇をひそめて、凝視しているうちに、燈火は、ふたたび、もとのあかるさをとりもどしたが、それは妖しい竜燈のように、不自然な光の増しかたであった。

宿酔のせいか、と苦笑して、歩き出そうとしたとたん、その光は一瞬にして消えた。そして、こんどは、いかに眸子を凝らしてみても、もはや、海上に灯は泛びあがっては来なかった。

その折、背後を通りすぎようとする者があった。髪の匂いで、女と知れた。

「卒爾乍ら——」

狂四郎は、海へ向いたまま、声をかけた。

「あの野島ヶ崎の燈明堂のあかりは、消えたかどうか、うかがいたい」

「いかがなさいました？」

訝しげに問いかえしたのは、若い女の綺麗な声であった。

「あのお燈明は、一年中、消えることはございませぬ。今宵も、美しゅうかがやいて居ります」

「妙だな」

「お見えになりませぬか？」

「左様——」

狂四郎は、頭をまわした。

空に、十三夜の月があるにも拘らず、女の貌は、闇に溶けていた。

一揖して、歩き出そうとして、足もとのおぼつかなさに、首をかしげた。

この様子を眺めた女が、

「お貸しいたします」

と、手に手を添えて来た。

「忝じけないが、若い女人に手を引かれるのは、面映いことです。旅籠は近いゆえ、すてておいて頂こう」

「旅籠にお泊りなら、わたくしにお供させて下さいまし。女の一人旅でございます。いま、二軒ばかりから、断られて、途方にくれていたところでございます」

「それは——盲目にとっては、杖をひろったことになるが……」

「わたくしも、たすかるのでございます」

女は、明るく、はずんだ口調で、云った。

狂四郎は、女に、二歩ばかりさきを歩いてくれるようにたのみ、それに跟いて行くことにした。

『稲毛屋』という旅籠の前に着くと、女は、
「わたくしを、連れ、ということにして頂いても、かまいませぬか？」
と、訊ねた。
「貴女の方が、迷惑でなければのことです」
「わたくしは、もう……」
女は、つと、狂四郎により添うようにした。
昨日から泊っている旅籠であった。ぶらりと、散歩に出て、戻って来た時に、女を連れていれば、ひろったと受けとられるだけのことである。
狂四郎は、しかし、結界の中の番頭には、べつに何とも断らずに、二階へのぼった。
行燈のともしびが、狐火のように、ぼうっと、闇に滲んでいる。そのほかに、狂四郎の目に映るものは、何もなかった。
「鳥目というやつは、こんなに不自由なものだったのか」
はじめてわずらったのである。
座に就いて、女へ見えぬ視線を向けてみた。貌の白い輪郭だけが、おぼろに看わけられた。
「わたくしのうごかしている手が、ごらんになれますか？」
女は、訊ねた。
「見えぬ」
狂四郎は、かぶりを振った。
「明日にでも、宿に、八つ目鰻をおたのみなさいませ」

「しばらく、めくらでいるのも、わるくはない」
「どうしてでございます？」
「世をすねて、ひねくれた生きかたをしている男だと、思って頂こう」
「………」
狂四郎は、女の眼眸を、感じた。
食膳が運ばれて来たが、狂四郎は、酒だけを飲んで、箸を把らなかった。女がすすめたが、世話をやかれることを好まぬ、とこたえていた。
食後に、沈黙が来て、女が、それを押し破るように、
「わたくしを、妙な女だ、とお思いでございましょう？」
と、云った。
「思わぬ、とこたえては嘘になるが、なるべく、他人様のことには、我関せずですごして居るゆえ、こちらが問わぬのに、弁明される必要はない」
狂四郎の声音の冷たさが、ふたたび女を無言にさせたようであった。

二

行燈が点けられたまま、並べて延べられた牀に、見知らぬ男と女は、仰臥していた。
廊下に、子刻（午前零時）を告げる拍子木の音がしてから、しばらく経っている。
きこえるのは、遠い潮騒と、天井裏を時折り奔る鼠の跫音だけであった。
……不意に。

狂四郎は「くくく、くくっ……」と、女がもらす嗚咽を、耳にした。掛具をかぶり、両手で顔を掩うて、必死に、歯をくいしばっていたのであろうが、怺えきれずに、ついに、もらしてしまった、と思われた。

狂四郎は、しかし、声をかけようとしなかった。

ひとしきり、歔欷いてから、女は、そっと起き上ると、着物をつけている様子であったが、しのびやかに、出て行った。

狂四郎には、浅い睡りが来た。

戻って来た女の動作は、影のように、もの静かではあったが、狂四郎に睡りつづけさせることはできなかった。

ひくい咳ばらいをして、寝返りを打った。

それに向って、女は、

「お許し下さいませ」

と、詫びた。

「……辛うて、つい――浜辺を漫ろ歩いて参りました」

狂四郎は、女に、背中を向けたまま、しばらく、黙っていたが、突然、

「抱いて進ぜようか」

と、云った。

「え――？」

「ただ、抱いて進ぜるだけだ。こちらに、抑制心はある」

「………」

「貴女が睡ってくれぬと、こちらは、睡れぬ。それだけのことで――他意はない」

「おことばに、あまえさせて頂きます」

女は、なまめいた衣ずれの音をたてていたが、やがて、

「ごめん下さいませ」

と、ことわって、狂四郎の脇へ、入って来た。

狂四郎は、胸を空けてやった。

女は、遠慮ぎみに、その胸へ、顔をうずめた。

そのまま、しばらく、じっとしていたが、

「……月が、美しく、冴えて居りました」

と、呟くように、云った。

「雲が、ひとつもなく、澄みきった空に、ぽっかり浮かんで、……それは、もう、神秘なくらい、美しくて……、眺めて居りますうちに、心が、だんだんおちついて参りました」

「………」

「……わたくしを、お嗤い下さいますか？」

「………」

「わたくしは、悪い女でございます。わたくしの心の中には、途方もなくおそろしい悪魔が住んで居ります。その悪魔が、月の光で、追いはらわれたように存じます」

「………」

女は、狂四郎に強い力をもとめるように、からだを押しつけて来た。
だが、狂四郎は、なんの反応も示さなかった。
女が、身を引いて、自分の牀へもどったのは、それから四半刻（しはんとき）のちであった。狂四郎は、ついに、なにもしなかったのである。
女が、自分の牀に仰臥した時、狂四郎は、はじめて、口をひらいた。
「貴女は、何歳になる？」
「二十八になります」
「武家の出のようだが、人の妻になったことはおありか？」
「はい。……けれど、良人（おっと）は、半年も経たないうちに、亡（な）くなりました」
「…………」
「横死でございました」
「その後、男で苦労をされたか？」
「…………」
「男が、無頼者であればあるほど、自分が尽してやらねば、誰も見向きをせぬ、と思い込む善女が、世の中にはいるものだが、貴女は、その一人のように見受けられる」
「…………」
「わたしに、尽して、死んで行った女が、そうであった」
「貴方様にも、不幸なご婦人が、おいでてでございましたか？」
女の声音（こわね）は、顫（ふる）えていた。

「わたしのような男に、惚れる女がいたのだから、この世の男女のしくみは、奇妙なものだと申せる。おかげで、貴女のような女性が、理解できるようになった」

「………」

「たとえば、貴女が、たくらみをもって、わたしに、こうして近づいているとしても、それが、惚れた男の命ずるところであるとすれば、わたしは、貴女を憎みはせぬ。死んだ女が、わたしに、それだけの理解力をのこして行ってくれた」

「………」

「……どうやら、ねむくなったようだ。失礼する」

三

次の日、午をまわった頃、狂四郎は女と連れ立って、野島ヶ崎に遊んだ。

野島ヶ崎は、上古は孤島で、船渡りであったが、元禄のはじめから陸つづきになったという。

前面は、ひろびろとした芝野になり、清水の細流れが、おのがままに、芝生の中をうねっていて、野飼いの馬が数頭、その畔にいた。

島のかたちは、匍い出した亀に似て、周囲十余町とみえた。

中央に、弁財天の祠があり、石階の下に六福神の石像が据えてあった。その奇古のさまが、参詣者に愛でられている。

この島は、山海の風色は、云うも更であったが、磯の根まわり、巌石の奇態など、房州随一の美景であった。それに加えて、近頃、海路の目当てに、燈明堂が建てられて、名物となっていた。

燈明堂は、弁天祠の隣りに建てられていた。

壮大な構造であった。外囲は、一面毎に一丈を以て八面とし、高さ二十間五尺、白壁に塗りたててあった。堂内は、二尺あまりの石磴が、扇の地紙のようなかたちに層々として、左方に鉄の欄干が設けてあり、右回りに登る階段は百以上をかぞえた。窓は、すべて硝子の戸であった。中心に柱はなく、段石を積み累ねたばかりであった。回転して登り乍ら、左の中心を見下せば、恰も井戸の底を覗くようであった。

狂四郎は、ふところ手で、ゆっくりと登って行き乍ら、跟いて来る女に、

「貴女の男は、腕が立つのか？」

と、訊ねた。

唐突な質問であった。女の足が、停った。

「わたしを討つには、よほどの手練者でなければならぬ」

狂四郎は、何気ない口調で、云いすてておいて、鉄の梁を十文字に入れた二層の中へ入り、鉄造りの階段を登りはじめた。

女は、蒼褪めた表情で、狂四郎の後姿を瞶めた。足が、すくんでいた。

——この仁は、何もかも、看破している。

この六日あまり、気づかれぬように、狂四郎のあとを尾行し、泊る旅籠毎で、狂四郎のところへはこばれる酒へ、毒薬を混じる役目をはたして来た女であった。

その鳥目は、しぜんに、かかったものではなかったのである。

——どうして、看破されたのであろうか？

看破されたとすれば、昨夜のことである。

あれほど、自然に振舞ったではないか。不幸な女であることに嘘はなかった。歔欷いたのも、なかばは、身の不幸をなげいた悲しさの故であった。

どこに、看破される不首尾があったのであろう？

女は、息をつめて、狂四郎の後姿を瞶めているうちに、悪事にはむくいがあるものと、覚悟ができたか、鉄の階段を登りはじめた。

もし、狂四郎がその気になれば、女は、はるかな地上へ落下して、みにくい屍骸をさらすことになろう。

鉄の階段は、二間余もあった。三曲りして、絶頂に達した。

そこに硝子で囲われた六尺あまりの火袋が据えてあった。内に燈窩があり、その下に数々の小車を掛け、これを轆らせて、油を上げ輪るしかけになっていた。

火袋の外には、幅二尺ばかりの回廊が設けられてあった。欄干によって、下方を視下すと、目がくらみ、膝が顫えるようであった。

狂四郎は、そこに立って、海へ眼眸を放ち乍ら、

「貴女は、昨夜、浜辺で、月を仰ぎ乍ら、一刻もすごした、と云った。一刻も、汐風にあたっていれば、からだに、汐の香がしみている筈であった。貴女のからだには、汐の香の代りに、男の匂いがあった」

と、云った。

女の唇も、肩も、指さきも、烈しくわなないた。

狂四郎が、「抱いて進ぜようか」と云ったのは、こちらの正体を看破する手段（てだて）だったのである。

「しかし、わたしの問いに対する貴女のこたえには、詐り（いつわり）はなかったものと受取ろう。貴女は、男に命じられたことを、つとめただけだ。……貴女は、見事に、わたしを鳥目にした。憤る代りに、こちらの不覚を慙（は）じておこう。……行って、男に告げるがよい。勝負は、今宵（こよい）、暮六つ――あの浜に於（おい）てだ」

狂四郎は、野飼い馬の遊ぶ芝野を、指さした。

女は、鳥目にされ乍ら、陽（ひ）の落ちた時刻をえらぶ不敵な男の異相を、茫然（ぼうぜん）と、見戍（みまも）って言葉もなかった。

四

風が、出ていた。

いったん暗くなった海原に、月の光がさして、波濤（はとう）に煌（きらめ）きを生んでいたが、芝野に佇立（ちょりつ）している狂四郎には、何も見わけられなかった。

風の烈しさを感ずるばかりであった。

光を喪（うしな）った者にとって、たよるのは、音だけである。その音が、烈風によって消されるのは、盲者にとって、絶望の状態に置かれたことになる。

狂四郎は、その最悪の条件の中に立ち乍ら、惘然（もうぜん）としていた。

のざらしになることを、いささかも悔いぬ無想が、この男をして、平然と立たせている。

近づいて来る跫音（あしおと）を、きかなかった。

しかし、二間のむこうに、黒い影が立ち停るや、狂四郎の本能に近い鋭い神経が、それをとらえた。

もとより、墨を流したような黒一色の闇が、狂四郎の視野をぬりつぶしている。対手の影の輪郭すらも、みとめることは不可能であった。

「お主——」

狂四郎は、ふところ手のままで、問うた。

「銭屋五兵衛が放って来た刺客か？」

「左様——」

対手は、こたえた。

「討つのが、眠狂四郎ときいて、引受けた。百両になる」

「百両欲しさに、女を使って、こっちをめくらにする下策をとったか」

「云うな！　いかなる手段をめぐらそうと、貴様の首を取れば、よいのだ！……勝つぞ！」

鞘走った白刃が、風を截って、構えられるのを、狂四郎は、きいた。

しかし、上、中、下いずれの構えがえらばれたか、判らぬ。

やおら、袖から両手を出した狂四郎は、そのままの静止相で、敵の肉薄を、待った。

当然、敵は、盲目が居合の業以外を使うすべはない、と知りつつ、進んで来る。

狂四郎の居合の業を、いささかも、おそれてはいないのである。これは、剣に満々たる自信がある証拠である。

この肉薄に対して、狂四郎は、居合の業を用いるとしても、それは、正常の反撃ではなかった。

剣法に謂う日影月影の虚実応変が、一刹那の裡に発揮されなければならなかった。

口伝に――、

敵の隙に入るには、日月のさし入ること、戸を開くより早からず遅からざるごとく、機、変に応ず。その隙に従うが肝要。

と、ある。

機、変に従うことは、心と目と手の作用、足の運びと剣とが一致しなければならぬ。そのひとつの目を奪われている狂四郎としては、足の運びを許されぬのであった。敵がいかなる撃ち込みを起して来るか――それに従って、一閃を放つよりほかはないのであった。

風の音が、さらに高まったようである。

風に乗って、凄じい殺気が、まっこうから、狂四郎の総身を搏った。

一瞬――。

その烈風の中から、刃風が起った。

きえーっ、と唸って来るや、狂四郎の五体は、間髪の間に、右方へ、斜横に滑走していた。

無想正宗を居合に、抜きはなったおのが動作は、まさに本能の迅さであった。

一間を躍って、ぴたっと、静止した時、左腕に、敵刃に殺がれた痛みをおぼえた。

闇の中に、「うっ――む、むっ！」と疼きに堪えようとする敵の呻きをきいて、

――斬れたようだ。

と、合点した。

敵を斃す気は、はじめから、なかった。敵の両眼を、一文字に、横薙いで、永遠の盲目にしてやるつもりであった。

確実に、それは、成功したようであった。

狂四郎は、無想正宗を、鞘に納めると、歩き出した。

ものの、十歩も歩いた時、すぐかたわらに、佇立している人の気配を察知した。

狂四郎は、ゆっくりと行き過ぎ乍ら、

「貴女は、今宵から生涯惚れた男の杖になることにきめられたようだ」

と、云った。

三歩行き過ぎた狂四郎に、女が、鋭く叫んだ。

「なぜ、斬り仆して、おしまいになりませなんだ？　盲目にされた憤りを、盲目にすることで、むくいなされましたのか？」

「貴女が背負うた業苦に、こちらは、さからわなかっただけのことだ」

狂四郎は、遠ざかり乍ら、女のきり裂くような慟哭を、きいた。

黒髪恋い

一

「卒爾（そつじ）乍（なが）ら……」
闇（やみ）の中から、いかにもよわよわしい声で呼ばれて、眠狂四郎は、頭をまわした。
峠の上の雨乞堂（あまごいどう）の濡縁（ぬれえん）に腰かけて、急に降って来た冷たい雨を、避けている折であった。
白い雨の幕が、風にゆれ乍ら、杉の林の上をなで過ぎて行くさまへ、茫乎（ぼうこ）と、無心な眼眸（まなざし）を送って、動かずにいる時間がかなりあってからであった。
下界は、烟（けぶ）って、雨の幕のむこうに溶けていたし、山中で逢（お）うた天変に、旅人の心は、孤独感でひえていた。
時刻はまだ、昏（く）れるには間があったが、堂内の闇は、物を判じ難いくらい濃かった。
狂四郎が、片手をのばして、菱格子（ひしごうし）の戸を開こうとすると、
「あいや……、そのままに、しておいて下され」
と、その声は、とどめた。
いざって来る気配に、
——病んでいるらしい。

と、知って、視線をはずすことにした。

「武士は相見互い、と存じ、お願いつかまつる」

病軀は、かなりの老齢であろうか、声音をきくだけで、いたましかった。

「うかがおう。お役に立つかどうか、わからぬが……」

「お手前は、腕前の秀れている御仁と、お見受け、いたした。……多勢を、斬って、おいでであろう、と存ずる。……後姿を、拝見しているうちに死期のせまった者の、直感と申そうか——おかくし下さるな」

「無頼の剣を、役立ててくれ、と云われる？」

「い、いや、お手前の忍びの業に、おすがり申したい」

格子から、そろそろと、さし出されたのは、一振りの短剣であった。

狂四郎は、横目で視て、受けとった。

黒塗りであったが、ただの黒色ではなく、思わず眸子が吸い寄せられる深い光沢を湛えていた。

高名な塗師の作と思われた。

「これで、何人かを、刺せと、たのまれるのか？」

「それがしが、むかし別れた、妻の、髪毛を、切りとって頂ければと、存ずる」

「御家内の頭髪を取るだけでよろしいのか？」

「左様——」

「取って、それを、どうする、と云われる？　ここへ、持参すればよろしいのか？」

「お願い、つかまつる」

「御家内は、この近辺に、住んでおいでなのか？」
「峠を、西へ下って、約二里ばかり行き申すと、公方屋敷と称ばれる家が、ござる。妻は、その屋敷に、住んで居る筈……」
公方屋敷と称ばれているからには、そのむかし、関東管領であった足利成氏あたりを始祖としているのかも知れぬ。
公方は、「公家の方」の略で、足利義満が、将軍の別称にして以来、将軍を意味するようになった。
関東管領は、もとより将軍ではないが、一階級上の呼称をもって、その地位を明示したのである。足利成氏は、古河公方とよばれた。
その後裔とすれば、名家中の名家である。
「お手前は、御家内と、久しく会って居られぬ。病軀を押して、ここまで、辿り着かれた。……そうですな？」
「ご推察の通りでござる。妻には、二十年も会って居り申さぬ」
闇の中の声は、息苦しげであった。病軀からただよう臭気も、洩れ出て来た。
「お引き受けした。……明朝までには、御家内の頭髪を持参いたそう」
狂四郎が、短剣を懐中にして、濡縁から立とうとすると、
「お待ち下され。……それがしが、なぜ、斯様なお願いをいたすか——その理由を、おたずねではないのか？」
「他人の宿運については、つとめて無関心でいるように、つとめて居る男です。……たのまれた

だけのことは、果すが、それが、どんな理由によるものか、べつに興味を起しては居らぬ」
「忝じけない。しかし、そのお言葉をきけば、理由を伏せておくことは、心苦しい。おきき下さるまいか？」
「ご随意に——」
狂四郎は、濡縁へ、ふたたび、腰を据えた。
闇の中の声は、語り出した。
「それがしは、水上淳左衛門と申す。京都奉行配下の与力でござった」

二

二十年前のことである。
水上淳左衛門は、御先手同心から転じて、京都へ上って、町奉行配下の与力になった。三十歳になっていた。
淳左衛門が、急逝した父の跡を継いで御先手同心になったのは、十七歳の時であった。三十俵三人扶持、合戦が起って将軍家自ら軍を進める時以外には全く用のない閑職の御家人の内証は、極度に窮迫していた。淳左衛門は、物心ついて以来、父親と母親の内職姿を終日眺めさせられつづけた。
御先手同心といえば、その住んでいる地域で、内職の方が有名であった。青山百人町に住む組は傘作り、根来の百人組は提灯貼り、大久保百人町は植木、といったあんばいであった。
淳左衛門も、家長になるや、たちまち内職をやらねばならなかった。そして、三十歳まで、提

灯貼りをやりつづけて、すっかり厭気がさした。
たまたま、京都町奉行所から、江戸町奉行所へ、与力数人を遣して欲しい、と依頼があった、ときいて、淳左衛門は、懇意にしている与力のところへ、自分を代りにやってもらえまいか、とたのみに行った。
与力は事実上世襲であるが、法規の上では、抱席といい、一代限りのことになっていた。したがって、伜が、親の職を継いでも、相続ではなく、採用される体裁になった。
御先手同心から、町奉行所与力に採用されることは、可能であった。実際には、そのような例はなかったが、できない相談ではなかった。
江戸から京都へ、移ることを好む与力は一人もいなかった。そこに、淳左衛門が、入り込む余地があった。
たまたま、与力の中に、卒中で仆れて、今明日の生命になり、跡継ぎもいない老人がいたのが、淳左衛門にさいわいした。
淳左衛門は、その姓を襲って、首尾よく、京都町奉行所の与力になることができたのであった。
京都町奉行所の任務は、およそ、七項にわかれていた。
禁裏御所の警固。所司代が参府（江戸行き）の際は、代って、西国一円を取締る。また、禁裏御所方の賄い、御物入りの増減などを扱う。五畿内の寺社御朱印を指揮する。すなわち、寺社奉行の任務までも兼備する。山城、大和、近江、丹波の四箇国を支配したのである。さらに、摂家をはじめ、堂上方の行跡を監視する。もし、怪しいと睨めば、取調べる権力も与えられている。また、上方代官をも支配する。

これだけの強力な職務章程を具備した町奉行所は、他の地方吏には見当らなかった。
当然、与力は、江戸では想像もつかぬほど、世間からおそれられた存在であった。
淳左衛門に与えられた任務は、寺院の見廻りであった。
世は事もなし、といった仕事であった。曽て、この仕事にたずさわった与力で、面倒な悶着にぶっつかった者は一人もいなかった。
淳左衛門は、ただ毎日、ぶらぶらと、歩きまわるだけで足りたのである。
もし、淳左衛門の任務が、多忙なものであったならば、あのような狂気沙汰をひき起しはしなかったに相違ない。
淳左衛門の見廻りは、いわば、京洛の名勝をたずねて、漫歩するのに似ていた。
三条大橋を中点として、中央部の諸寺院を三日ばかり、見廻って、次には、東山方面、それから北山方面、嵯峨方面と、足を移して行く、といったあんばいで、伏見宇治、山科醍醐と、一巡すれば、ちょうど、一月が終っていた。
桜の花の便りが、七分ばかりに咲きかかったと噂される季節であった。
淳左衛門は、その桜花をたずねるように、伏見をぶらぶら歩いて、いつの間にか、菜の花がいちめんに咲いている畑を過ぎて、とある寺院の門前に出ていた。
高い空には、ひばりのさえずりが絶えなかったし、野には、ものうげな牛の啼き声がきこえていた。
淳左衛門は、古びた土塀の上から、しだれ気味に、大きな花笠をひろげたように、咲きほこった桜花を、仰いで、しばらく、ぼんやりしていた。

跫音がして、背後を通りすぎようとしたので、淳左衛門は、なかばは無意識で、

「きれいに咲きましたな」

と、云った。

朝から、黙って歩きつづけていたので、人恋しくなっていたものとみえる。

「ほんに、美しゅう……」

とこたえたのが、若い美しい女の声であったので、振りかえった淳左衛門は、とたんに、大きく目を瞠った。

尼僧であった。

その容子が、はっと息をのませる美しさだったのである。

白絹のあいだからのぞいた切長の双眸の、黒い瞳へ、こちらの視線を合せると、そのまま、魂を吸い込まれそうになった。鼻梁や唇も、淳左衛門が生れてはじめて看る﨟けたかたちをしていた。

尼僧は、淳左衛門のあまりにぶしつけな凝視に、あえかなはじらいのそぶりを示して、一礼すると、山門をくぐって、境内へ消えて行った。

淳左衛門は、茫然と、その場へ立ちつくした。なお、しばらく、尼僧の行き過ぎたあとに、その幻影がたゆとうているような気がした。

――この世には、あんなに美しい女性もいるのか？

それが俗世と隔絶した世界に住むひとであることに、淳左衛門は、焦躁をおぼえた。

その夜、役宅へ帰ってから――夕餉の膳に向っていても、日誌をつけていても、その俤が、目

さきから離れなかった。牀に就くと、急に、烈しい本能がわき立ち、それは狂暴な勢いで、からだ中をかけめぐった。

翌日、淳左衛門は、寺院帳簿をめくって、調べてみた。

深草野にあるその尼寺は、直宮すなわち皇女が門跡となる比丘尼御所のうち、大聖寺、宝鏡寺、曇華院など、禅宗の寺の所有になる別院であった。つまり、むかし、高貴の尼僧たちが、中秋の頃、鶉の美しい声を愛でるために建てられた憩い所であった。

留守を守る尼僧は、六人いた。あの美しい尼僧は、その一人に相違なかった。

淳左衛門が、その尼僧が、清月尼という名で、上州の中仙道と例幣使道と岐れる倉賀野宿はずれに、八百年の家門を誇る扇ヶ谷氏の長女であることを、知るのに、さして日時を要しなかった。六人の尼僧のうち、五人は年配であり、一人だけ、十九歳だったからである。

扇ヶ谷氏は、鎌倉の扇ヶ谷に住んだ関東管領の執事上杉重顕の後裔で、その屋敷は、いつとなく、公方屋敷と呼ばれるようになっていた。公方の僭称は、足利成氏のものであり、上杉氏は、管領ととなえていたのであるが、さらに、世間から、一階級を昇らされて、公方と呼ばれるようになったのである。

いずれにせよ、上州随一の名家であり、公儀も、その門閥に敬意を表して、千石を扶持していた。

清月尼が、公卿の女にまさる臈けた容子を持っていたのも、当然であった。

三

水上淳左衛門が、清月尼をさらって、逃走したのは、それから半年後の中秋明月の前日の昏れ

がたであった。
百々御所（宝鏡寺）から、ひさしぶりに、直宮門跡が、鶉の美声をききにお成りになる、と伝えがあって、憩い所はにわかにさわがしくなっていた。
淳左衛門は、町奉行所よりの使者といつわって、訪れて、理由をつけて、清月尼をおもてへつれ出し、そのまま、拉致したのであった。
淳左衛門が、清月尼を犯したのは、月光のそそぐ藤の森の中においてであった。
せっかくつかんだ奉行所与力の職も抛擲する覚悟をきめるのに、半年もかかった淳左衛門である。
狂おしい暴力をふるった男に、ただ恐怖しかおぼえなかった清月尼も、東海道を東へむかって、日数を重ねるうちに、いつしか、淳左衛門の必死の誠意を汲みとることができるようになっていた。

そこまで語ってから、雨乞堂の菱格子の内の声は、ふっと、絶えた。
狂四郎は、しばらく、待ったが、語り継がれそうな気配もないので、
「いかがされた？」
と、促した。
老いた逃亡者は、どうやら、泣いている模様と察しられた。
長い沈黙が、あってから、
「お嗤い下され。往時を思い出し、つい……、不覚の泪がこぼれ申した。……それがしは、あま

りにも運のない男でござった」
「………」
「すがを——尼はすがと申した——江戸表まで、ともなって、一戸をかまえようといたした矢先、悲運が襲うて参った」
「………」
「その悲運が、どのようなおそろしいものであったか——おきかせできぬ。それがしは、すがを殺して、自裁いたそうと、懊悩（おうのう）いたした。死ぬにもまさる苦しみでござった。しかし、この悲運も、清浄な生涯を送ろうとしていた尼僧をかどわかし、犯したむくいである故（ゆえ）、業苦を背負うのは、おのれ一人にとどめ、すがをまきぞえにしてはならぬ、とようやく決意したそれがしは、くらしの道をつける間、一時、生家の公方屋敷にもどっていてくれ、と説ききかせて、別れたのでござる」
「………」
「あれから、二十年——それがしは、ついに、すがを迎えには参らなんだのでござる。……それがしは、二十年の間、すがの有髪（うはつ）のすがたを想像し乍ら、虫のように、惨（みじ）めな生命をながらえ申した。ただ一目だけでよい。黒髪をゆたかに結いあげたすがの容姿を、見たいと希（ねが）い乍ら、ついに、叶（かな）わず……、今日にいたり申した」
「お手前が、公方屋敷へ、行かれるとは、できぬ相談であろうか？」
「滅相（めっそう）もござらぬ。公方屋敷が、それがしを、門内へ一歩も入れてくれる筈（はず）はござらぬ。かりに、万が一、すがが会おうとしてくれても、それがしの方が、拒絶いたさねばならぬ。会ってはなら

ぬのでござる」

「………」

「お願いつかまつる。お手前ならば、公方屋敷に、忍び入って、すがの寝室にふみ込み、すがのねむりをさまさぬようにして、髪毛を切り取って来て下さる、と存ずる。何卒——お願い、つかまつる！」

四

亥刻（午後十時）をまわった時刻、狂四郎は、しいんの闇につつまれた公方屋敷内に忍び入っていた。

その寝室の前の廊下に立ったのは、それから半刻を過ぎていた。

下僕の一人を捕えて、すがの寝室がどこにあるか、云わせ、当て落しておいて、長い廊下を奥へ進み入ったのである。

この屋敷には、襖は一枚もなく、すべて檜戸が仕切っていた。

狂四郎は、檜戸をへだてて、誦経の声をきいた。

水上淳左衛門の依頼は、睡っている妻のあたまから、髪毛を切り取って欲しい、ということであった。

狂四郎は、廊下で、さらに、半刻を費さなければならなかった。

檜戸の隙間から、洩れていた仄明りが、消されて、かなり経ってから、狂四郎は、音もなく、開いた。

一歩入ったとたんに、
――はやすぎた。
と、闇の中で、苦笑した。
目には見えぬが、褥に横たわった者が、睡っているか、いないか――これは、直感で判った。
ねむってはいないのだ。
狂四郎は、もはや、こちらの気配を絶とうとせずに、三歩近づいて、坐った。
それを待っていたように、
「どなたです?」
おちついた声音が、咎めた。
「流浪の素浪人者、と心得て頂く」
「合力のために、押し入られましたか?」
「いや――」
狂四郎は、褥の上に、上半身を起す影を視わけ乍ら、
「いささか、仔細があって、貴女から、頂戴いたしたいものがあって、参上した」
「何でありましょう?」
「貴女の頭髪を、ひとにぎり、頂戴いたしたい」
「…………」
「いかがであろう?　まげて、ご承諾ねがいたい。仔細は、いま申上げられぬ。後日、参上して、申上げる」

あいては、しかし、こたえなかった。

長い沈黙があった。

狂四郎は、辛抱づよく、あいての口がひらかれるのを待った。

やがて——。

あいての口から出たのは、意外な質問であった。

「良人(おっと)は、生きて居りましょうか？」

「……………」

「貴方(あなた)様は、良人にたのまれたのではありませぬか？……わたくしのあたまの髪を、欲しいとねがうのは、良人以外にありませぬ」

「そう訊(たず)ねられては、かくし様もない。たしかに、生きておいでだ」

「どこに？」

はじめて、あいての声が、はずんだ。

「杖(つえ)つき峠の雨乞堂に、おいでだ。……しかし、貴女に会うことは、こばんで居られる」

「いえ、会いまする。会わねば、なりませぬ！」

はげしい語調で、云った。

「会われまい」

「いえ！　わたくしは、出かけまする」

「……………」

「なぜと申すに、わたくしは、良人に贈る髪毛を持って居りませぬ」

夜がしらじらと明けそめた頃あい、狂四郎は、白絹で頭をつつんだ婦人と、峠へのぼりついていた。

すがいは、この二十年間、剃髪（ていはつ）のすがたですごしたのである。周囲の人々が、どこかへ嫁（とつ）がせようとするのを拒否するための手段（てだて）であったし、淳左衛門が迎えに来ることをかたく信じて疑わなかったからである。すがいは、淳左衛門と一緒にくらすようになって、はじめて、髪毛をのばす心を決めたのである。

「ここで、お待ち頂こう」

堂からすこしはなれた地点へ、すがいを佇（たたず）ませておいて、狂四郎は、堂前へ近よった。

呼びかけたが、返辞はなかった。

不吉な予感は、登って来る途中に、起っていた。狂四郎は、菱格子戸を開いて、堂内へ、ふみ込んだ。

すぐに、出て来た狂四郎は、元通りに、格子戸を閉じると、すがいをそこへ呼んだ。

「貴女のしなければならぬことは、変った。そこから、ご主人の霊を、とむらうことだ。誦経がおわったら、この中を見ずに、そのまま、帰って頂く。それが、ご主人のねがいと存ずる」

堂内の板敷きに横たわった屍骸（しがい）は、ふた目と見られぬ癩者（らいしゃ）のものだったのである。

太刀洗水

一

葛飾の山野村にある富士浅間は、大社でもなく、六月朔日の祭にも、あまり善男善女は参詣して来なかった。篠崎村や稲毛村の浅間が、祭には、夥しい蝟集ぶりであるのにひきかえて、ふしぎに、さびれた社であった。

ただ、いつの頃から、そのならわしができたか、剣を学ぶ士が、黒い布でおもてを包み、跣で詣でて、一閃の太刀を奉納する姿が、時折り見受けられた。

御神体は、木花開耶姫尊であり、武術とはなんの関係もなかったが、けだし、この山が、人皇六代孝安帝の即位九十二年六月朔日、一夜のうちに噴出した奇蹟を持っている故であったろう。

剣士らは、その帰途、社よりすこし東よりの巽の方にある清水で、その太刀を洗った。蛇沼というところから落ちて来る清水で、むかし、源頼朝が、太刀を洗った、と伝えられている。

一斑の白い翳もなく、美しく晴れわたった晩秋の午後、一人の若い武術者が、富士浅間に詣でるために、松の茂った急勾配の坂をのぼっていた。

ならわしによって、覆面をし、跣であった。六尺ゆたかの大兵で、双眸は、並の人間の倍はあ

ろう、褐色の瞳に、炎を発するような烈しい光があった。
兵法を以て生涯をつらぬくために生れて来たような青年剣客であった。
頭上に、松の枝が幾重にもかさなり合っていて、木漏れ陽が、まだらな織りものを描き、登る者は、おのが五体が、明暗に染めわけられるのを、おぼえる。
鳥の声もない、明るい寂寞が、山を包んでいた。
やがて、松の茂みが切れて、青空の下に出た青年は、頂上に鎮座する社殿を、視やった。
瞬間——。
社殿の中から、煌っと眩しく、何かが光ったとみるや、光芒は、青年の双眸を射た。
反射的に、目蓋を閉じた——刹那をはずさず、矢唸りが、背後から襲って来た。
青年は、身を沈めるのと、居合に抜き放つのを、一動作で為した。
目にもとまらぬ迅さで、頭上に、円を截った青年は、足もとに、ま二つに切られて落ちた矢を、眺めた。鏃も羽根もない、いわゆる神通の鏑矢であった。富士浅間へ、世平弓に添えて奉納された品に相違なかった。
青年は、そのまま、しばらく、そこに佇立して、社殿を正視していた。
しかし、再び、その中から、光は発しては来なかった。何者かが、神鏡を把って、陽光を反射したものと、考えられる。
悪戯にしては、度が過ぎている。
青年は、白刃を携げたままで、ゆっくりと、足を運びはじめた。ただの一度も、後方を振りかえらなかったのは、第二矢が襲って来ても、両断するだけの迅業と余裕を持っている証左であろ

う。

社殿に近づいた青年は、階から数歩の地点で立ち停まると、しずかに、青眼に構えた。

待つ。

それであった。

微動もせず――構えは、絵に入ったように、完璧な姿を保った。

その足もとから、白い地面に匍った影法師が、すこしずつ、延びた。

半刻が、経った。

青年は、呪文から解かれたように、白刃を、すっと右手に下げた。

一瞬――社殿の奥の闇の中から、第二の飛矢が、襲って来た。

躱しもせず、それを、切って落したのは、青年の右手が握っている太刀ではなかった。左手で抜き放った脇差によってであった。

そして、それが地べたに落ちないうちに、青年は、向き返りざま、背後から飛び来った第三の矢を、切り払った。

社殿に対しては小刀を、参詣道に対しては大刀を、ぴたっとさし向けたなり、さらに数分の静止の姿を据えていた青年は、やがて、ゆっくりと一歩退ったとみるや、大小を、ぴたりと腰に納めた。

それから、何事もなかったかのような足どりで、階を昇って行った。

その奥に、何者かが、ひそんでいるのを、もはや、無視した落着きはらった態度で、祭壇下に正座した青年は、懐中から、奉書をとり出し、披いて、双手にかかげた。

「かしこまって申す。
誓詞の事。
今度びそれがし儀、祖法を継ぎ、その足らざる処を、潜思研鑽の工夫によっておぎない、独創の一流を開いて、天下に公布いたすもの也。
曰く、北辰一刀流。
この流、理と業を兼ね備え、心、気、力を合せ、敵の太刀を殺し、業を殺し、気を殺し、以て天下無双の秘術と為す。
日本六十余州大小の神祇も照覧あれ。
合掌。
文政十二年坤月吉日　千葉周作」

音吐朗々と読みあげて、奉書を巻き、供えて、柏手を打ちおわると、社殿を退出した。
悠々たるその姿にむかって、飛矢は再び襲わなかった。

二

周作千葉於菟松は、寛政五年正月元旦、奥州栗原郡荒谷村の山間に生れた。下総の豪族千葉常胤の後裔で、父幸左衛門は、北辰無想流の達人で、医道にも精通していた。北辰無想流は、於菟松の外祖父吉之丞の創めた剣法であった。
於菟松は、六歳から剣を学び、十二歳にしてすでに、その小太刀の迅業をもって、父の門弟を一人のこらず、撃ち据えていた。

千葉の小天狗の名が、近郷にひびいたのは、荒谷川の蜂退治であった。

斗瑩山の麓をめぐる荒谷川は、清冽で、流れもゆるやかであったので、里の子らの唯一の泳ぎ場所であった。

その岸の榎に、大きな蜂の巣があって、子供らが、しばしば、さされた。俗にカメ蜂という獰猛な種類で、その巣も、一斗樽ほどの巨きさであった。

初夏の一日、於菟松は、子供らの止めるのをしりぞけて、手頃の棍棒を摑んで、榎の幹を登って行った。

子供らは、遠巻きにして、固唾をのんで、見はっていた。

足場を計った於菟松は、巣のさがった太枝を、ひと撃ちした。

たちまち、巣の中から、群蜂が飛び出して来て、八方から、於菟松に襲いかかって来た。

子供らは、いまにも、於菟松が、目鼻口の形もなくなるまでに無慚な姿になって、落下して来るのではないか、と恐怖していた。於菟松の姿は、枝葉にさえぎられて、見えなかったのである。

棍棒を振りまわす音だけが、きこえて来た。巨樹の根かたには、吹雪のように、蜂の屍体が舞い落ちて来た。

棍棒を振りまわす音が、止んだ。

子供らが、おそるおそる近づいて来た時、巨きな空巣が、降って来た。

次いで、するするとすべり降りて来た於菟松は、わずかに、片耳をふくれあがらせただけで、すずやかな顔をしていたという。

文化六年十六歳。父幸左衛門は、於菟松をつれて出府し、その名を周作と改めさせて、旗本大身の喜多村石見守正秀に、小姓として仕えさせた。

石見守正秀が、周作にえらんでくれた剣の師は、小野派一刀流浅利又七郎義信であった。

十年の後、周作は、浅利又七郎から、免許皆伝を受けた。

さらに、腕をみがくために、周作が、師の推薦によって入ったのは、小野派一刀流の本家である中西道場であった。道場主は、四代目中西忠兵衛子正であった。

道場には、若い主人の後見役として、天真一刀流の寺田五郎右衛門、白隠禅師の内観法に則り、徳本行者の修行に従って、赫機を刃頭に摩する至妙の術を自得した白井亨、そして、音無しの構えの高柳又四郎がいた。

周作が、高柳又四郎の音無しの構えを破ろう、とひそかに、決意したのは、中西道場に入って三年目——すなわち、今年の春であった。

高柳又四郎の音無しの構えを、破る者は、中西道場にはいなかった。寺田五郎右衛門は、すでに六十半ばを越えた老人であり、白井亨は、道場に出て木太刀を把る時間よりも、書屋にとじこもって、開道論の著述に余念がなかった。他の二千人の門弟の腕前は、遠く、又四郎の足もとにも及ばなかった。

小野派一刀流は、もとは木太刀の組太刀を以て修業し、業が上達すると、刃引きを用い、防具をつけた撃ち合いの稽古を無用としていた。三代目中西忠太子啓の代になってから、時勢の流れに応じて、胴と両籠手に、撓刀を持って撃ち合う稽古をもはじめていたが、しかし、剛気の連中

は、依然として、木太刀を把っての組太刀をやっていた。

高柳又四郎もまた、防具をつけた撓刀撃ちをさげすんでいたが、寺田五郎右衛門と忠兵衛の達っての依頼によって数年前より、その稽古も門弟につけるようになった。

だが——。

又四郎は防具をつけ、撓刀を握った時から、稽古に於ても、試合に於ても、絶対に、ただの一度も、対手の撓刀を、おのが撓刀に触らせなかった。

切っ先を、二寸か三寸はなしておいて、対手の出るかしら、起るかしらを、搏ち、あるいは突き入れて、決して、その間合いを縮めさせず、対手が一歩踏み込もうとするや、間一髪の差で、こっちから一歩進んで勝ちの迅業を発揮していた。

すなわち、又四郎は間合いの見切を、完全にわがものにしていたのである。

間合いの見切、とは——。

宮本武蔵は試合にあたって、対手の撃ち込んで来る太刀先を、前額や胸部に擦れさせるかにみせて、一度もあたらせなかった。したがって、武蔵は、身をひらいて避けることもしなければ、受けとめることも、払うこともしなかった。そして、対手の剣が、掠めすぎた次の瞬間に、充分の余裕をもって、撃って、勝利を取っていた。

門弟が、その不思議を問うと、武蔵は、無表情で、次のように、こたえていた。

「これは、間合いの見切、と申すもの。すなわち、対手の太刀先と、わが身の間に、一寸の間合いを見切るのだ。一寸の間合いがあると見切れば、対手が撃ち下しても、突いて来ても、決してわが身に当りはせぬ。勝負には、これが肝要のことだ。もとより、尋常の修業では、成らぬ。ま

ず、五六寸の見切を修練して、四寸に、三寸に、二寸にと、追い追いに縮めて、一寸の見切にいたせばよい」

高柳又四郎は、この宮本武蔵の教えを、人知れず、わがものにしていたのである。

宮本武蔵がそうであったごとく、又四郎もまた、たとえ、おのれよりはるかに伎倆(ぎりょう)の劣る者に対しても、この音無しの構えをもって臨み、容赦なく撃ち据え、突き倒した。これでは、門弟たちにとっては、稽古にならぬので、一人として稽古を頼む者はなくなっていたし、又四郎もまた、敢(あ)えて稽古をしてやろうとはしなかった。

又四郎は、もっぱら、他流の者をえらんで、試合をしていたが、引分けた者すらなかった。

千葉周作は、この三年間、又四郎の無敵ぶりを、見聞していたが、いつか、

——音無しの構えを破るのは、この周作を措(お)いて他には居らぬ。

と、決意していた。

そして、又四郎と試合するために、まず、ひそかに、独創の一流を開いて、おのが決意を不退転のものにしたのである。

一流を開くことは、古法を墨守する養父浅利又七郎の許さぬところであった。

周作は、しかし、養父と義を絶っても、一流を開くことにしたのである。

周作が、その流名をつけてもらいにおもむいたのは、かねて尊敬していた富士浅間流の開祖中村一心斎呑流(どんりゅう)であった。

一心斎は、即座に、周作の外祖父吉之丞の創(はじ)めた北辰無想流と小野派一刀流を合せて、北辰一刀流と名づけてくれた。

周作は、一心斎が、若き日に、富士浅間に籠って、その流を会得したのにならって、北辰一刀流創始の儀を、まず、当社へ報告に来たのであった。

三

――何者どもが、わしを襲うて来たのか？

周作が、そのことを疑ったのは、太刀洗水へむかって、巽の坂道を下りはじめてからであった。

周作は、社殿を去るまでは、ここに詣でる兵法者に対する、富士浅間の宮司が為せる試練であろう、と思っていたのである。

だからこそ、第三矢を切って落すと、試練は終ったものと考え、社殿の奥にひそむ者を、自分に対して殺意を抱く敵などとはみじんも疑わずに、進み入って、誓詞を読みあげたことだった。

だが……。

坂道を下りはじめた時、周作は、なお、おのれにむかって、鋭い視線をそそいで来る者がいる気配を察知したのであった。

参詣をおわった兵法者をつけ狙って来るのは、宮司の試練である筈がない。

あの三本の飛矢を襲わせた者は、別のこんたんを持っていた、とはじめて解釈された。

人の怨みを買ったおぼえのない周作であった。

襲われる理由をあれこれと、思いめぐらしたが、思い当らぬままに、周作は、海神村の入口へ降り立った。

太刀洗水は、道を横切って、きよらかなせせらぎを、野にうねらせていた。

小橋の袂から、石段が設けてあり、流れはそこで、溜められていた。幾体かの石地蔵が、円形に沈められていたのである。

石段を降りた周作は、差料を抜くと、しずかに、水の中へ入れようとした。

とたんに、小橋の上に人が立ち、影法師が、水面に落ちた。

「待ちゃれ！」

鋭い声音が、周作の右手を停めさせた。切っ先が、水面に紙一重のところで、止まった。

頭を擡げた周作は、一人の老婆を視た。

尋常の面相ではない。明るい陽光に照らされて、なお、妖しげであった。

「その剣を洗う前に、お主は、為さねばならぬことがある」

老婆は、冷やかな口調で、云った。

「何を為せ、と云われる？」

「一流を創めたと、富士浅間に誓った者は、必ず立合わねばならぬ。その対手を仆したあとで、太刀を清水で洗うことが許される」

「その対手とは？」

「お主につづいて、社に詣でて、ここへ太刀洗いに降りて来た兵法者じゃ」

——この老婆が、忍びの者を使って、わしに、矢をくらわせたのか。

周作は、さとった。

「そのようなしきたりは、きいて居らぬ」

周作は、凝と、老婆を瞶め返した。

「お主が、きいて居らぬでも、避けられぬ仕儀ぞ。それが、兵法者の面目を立つることになる、と申すもの——」

「そもじは、何人だ？」

「通りすがりの見知らぬばばとも、この背負うた包みが外法箱かも知れぬ巫女とも思うてくれてよい」

「そうは、受けとれぬ。そもじが使って、わしに矢を射かけたのは、忍びの者であろう」

「……………」

「やはり、そうか。すれば、そもじも、忍法をもって立つ家のおばばか」

「どうでもよい、そのような詮議は——」

「どうでもよくはあるまい。わしを、千葉周作と知っていて、しかけた仕業であろう」

周作は、石段を蹴って、土橋の上へ、跳び上った。

老婆は、すすっ、と数尺退いた。

「おばば、邪念のこんたんならば、年寄と雖も許せぬぞ！」

周作が、睨みつけると、忍法無影流戸越家の老婆は、冷たく笑ってみせた。

「神にむかって、天下一とうそぶく一流を樹てたからには、いかなる妖刀邪剣でも、みじんに砕く業を持つと、自負いたして居るのであろうの、千葉周作殿？」

「……………」

「されば、わしが知る限りに於て、いまだ曽て、一度も敗れたことのない業剣を使う男を、お主に、出会わせようと、計ってやったまでじゃ」

「何者だ、それは？」
「いまに、ここへ、降りて来る」
「まことか？」
「待って居るがよい。……よいかな。避けてはなるまいぞ。勝負するのじゃ。彼奴を斬ってこそ、お主の太刀は、その清水で洗う資格ができる。北辰一刀流は、天下無双となろうぞ」
「なぜ、その者の名をきかさぬ？」
「きくまい。ただ、出会えば、即座に、立合って、斬ればよいのじゃ。そのあとで、きかせよう。事前に、その名をきけば、お主は、避けるおそれがあるでの……」
「この千葉周作が、その名をきいて、怯じ気だつ使い手が、この世にいるとは――」
周作は、ばからしげに苦笑した。
「ふふ……、まあ、待っているがよい。物蔭から、とくと、お主の腕前の程を見とどけようぞ」
老婆は、踵をまわすと、ゆっくりと遠ざかって行き、小松の林の中へ消えた。
周作は、土橋の上を動かずに、視線を、山へ向けた。
帯のようにうねって、坂をのぼっている白い道に、人影はなかった。
――本当に、わしをおそれさせる程の使い手が、やって来るのか？
周作は、まだ、名人とか達人とか称ばれている剣客と、一度も、勝負をしていなかった。
それというのも、中西道場にあること三年で、当流の極意をきわめた周作は、師の浅利又七郎に、養嗣子として呼びもどされ、姪の小森氏を配せられ、浅利塾の指南となっていたからである。
浅利又七郎は、塾生に、他流との試合を禁じていた。

「一刀流は、一撃必殺の剣である。抜刀すれば、敵の息の根を止める初太刀に、すべての力を結集するものだ。されば、いたずらに、木太刀や撓刀で、試合をしてはならぬ」

それが、又七郎の訓戒であった。

周作もまた、養嗣子たる以上、それを守らざるを得なかった。

しかし、剣法をまなび、二十年の刻苦精進をつづけたものとして、他流とたたかえない、ということは、苦痛であった。

周作が、養父にそむいたのは、この禁を破るためでもあった。

自ら、北辰一刀流を創めたからには、今日いま、他流の者と雌雄を決することは、のぞむところであった。

真剣の勝負こそ、剣を学んだ者にとって、その機会が来るのを願わぬ筈がない。

「来たぞ！」

白い坂道へあてていた周作の双眸が、激しくかがやいた。

この瞬間から、周作は、剣鬼以外の何者でもなかった。

ゆっくりと、坂道を降りて来たのは眠狂四郎であった。

北辰一刀流

一

——これは、ただ者ではない。
その距離が、十数歩にせばまった時、千葉周作は、微かな戦慄が、背すじを匐い下るのをおぼえた。
黒の着流しの、ふところ手の浪人者に、どことといって怪しい気配があるわけではなかった。
その彫の深い異相に、冷たい虚無の翳が落ちているほかは、ただのうらぶれた素浪人でしかなかった。
にも拘らず、周作の鍛えた神経は、ぶきみな妖気のようなものが、その瘦身から漂い出ているのを、直感したのである。
——人を斬っている男だ。それも、一人や二人ではなかろう。
周作は、わざと、対手に向って、殺気を放射してみせた。
眠狂四郎の足が、停められた。周作は、一歩出ると、
「参る!」と、一声を発した。
「…………?」狂四郎は、眉宇をひそめた。

富士浅間の宮司から急の使いが来て、今日の午後――八つ刻頃、是非来て頂けまいか、という文面に、旧知の間柄であったので、足をはこんで来てみたのであった。ところが、意外にも、宮司は恰度一月前に、逝っていたのである。

何者かが、自分をここまでおびき出した、とわかって、苦笑して、降りて来たのであった。

いま、目の前にする、見るからに、兵法をもって身を立てている青年が、自分を討つために、策を弄したのであろうか。

しかし、一瞥した限りでは、奸計をめぐらすような男とは、受けとれなかった。狂四郎ほど、無数の修羅場をふんで来ると、同じ殺気をみなぎらせた敵であっても、その殺気の質がそれぞれちがっていることを、看わけることができる。

若い剣客は、あきらかに、剣の優劣を競おうとしている。他意がある、とは受けとれなかった。

「わたしを、眠狂四郎と知って、挑戦するのか？」

狂四郎は、訊ねた。

「お主が、何者かは知らぬ。しかし、お主の剣は、無双のものと看た。いまだ曽て、敗れたことはあるまい」

「……………」

「不敗の剣客と立合うのは、兵法を学んだ者の冥利であろう」

「お手前の姓名は？」

「北辰一刀流、千葉周作」

「江戸か？」

「左様――」

江戸に住んでいる武芸者で、いささかでも、市井の人々と交っている者ならば、眠狂四郎の名を知らぬ筈はない。

この若い剣客は、武技ひと筋に精進して、おそらく、世間の噂になど、耳を仮したことが一度もないのであろう。

「挑まれて、忌避するものではないが、解せぬことがある。お手前は、ここで、わたしを、待ち受けていた模様だが、何故だ？」

「それがしが、この太刀洗水で、差料を洗おうとすると、老婆が現れて、一流を創めたと富士浅間に誓った者は、強者と立合って、これを仆してはじめて、洗うことを許される、と告げた、と思われい」

「老婆、か」

即座に、狂四郎の脳裡を、忍法無影流戸越家の老婆の貌が、掠めた。

「で――ここで待ち受けていれば、邪剣の宿業を背負うた男が、やって来ると申したのだな？」

「左様――。相違なかった。お主は、幾人も、いや幾十人も斬った御仁だろう」

「お手前は、どうか？　まだ、斬って居らぬのか？」

「斬っては居らぬ。……いま、はじめて、斬る！」

「斬られる不運は、考えぬのか？」

「断じて！」

周作は、さらに、一歩進んだ。

狂四郎は、なお、両手を懐中に置いたままであった。

狂四郎としては、おのが業念を抑えるために、剣の修業を為しただけである。たまたま、おのれに、異常な天稟があって、円月殺法を生んだ。剣をもって身を立て、生涯をつらぬく志などいささかもなかったのである。

したがって、このように、剣の極意を会得せんと、全身全霊を火と燃やしている若い剣客と、尋常の試合をすることに、一種の苦痛があった。

なろうことなら、止めたかった。

止めるのが許されぬならば、対手の生命を奪うことを避けたかった。

「参るっ！」

周作が、火を噴くがごとく一声ほとばしらせて、抜刀した。

文字通り目にもとまらぬ迅さで、白刃を、上段にふりかぶった周作の構えを、視て、

――これは！

狂四郎は、曽て、これと全く同じ構えに接したことのあるおどろきをおぼえた。

二

何処で、何者と――？

咄嗟には、思い泛ばなかった。

一刀流の構えであることは、まぎれもない。むしろ、これは、一刀流始祖伊藤一刀斎が編んだ構えを、そのままに伝襲したものとさえ、看てとれる。一刀両断の甕割刀の正統を継いでいると

みてよい。

技を衒う近世にあっては、一刀流においても、上中下それぞれの構えに、綺美を匂いたたせる風潮である。

この若い剣客は、古法そのままに、立てた白刃を、晩秋の澄んだ大気の中に溶かすように、静かなものにしている。

それから発しられる一撃をはずすのは、容易の業ではできぬ。

狂四郎は、ようやく、両手を懐中から抜くと、ひとすべり、あとへ退った。

その時、脳裡に、記憶がよみがえった。

——浅利又七郎の構えが、これであった。

五年前、浅草田圃慶印寺境内で、偶然のことから、狂四郎は、浅利又七郎と立合ったことがある。

狂四郎は、又七郎の構えを視て、はじめて、古法一刀流の極意無想剣を知った。

一刀流は、威（不転の位）移（捧心の位）写（水月の位）をもって成る。威とは、静にして勢を含む。移は、過不足なく左右に転じ守る。写とは、残心の位で、無念にして敵の想を写しとることである。

一剣一理を主として、一心不易の極にいたるという旨趣によって、一刀流と名づけられている。すなわち、一を以て、敵の二に応ずる。撃って受け、はずして斬ることである。そうではなく、受けて撃ち、外してから斬るのでは、敵の二に対してこちらも二であり、勝敗の結果はわからぬ。一を以て二に応ずることこそ肝要である。

浅利又七郎は、その古法通りに、上段から、凄じい勢いで、突きを入れて来た。

それに対して、狂四郎が、これを払っていれば、敗れていたに相違ない。払われた又七郎の剣は、そのまま、攻撃の迅業を発揮したであろうからである。

狂四郎は、流星のような切っ尖を、頸根紙一重に突かせておいて、逆に、無想正宗を、又七郎の咽喉もとへ、ぴたりと擬したのである。

又七郎は、しずかに、身を引いて、

「負け申した」

と、一礼したことであった。

いま——。

千葉周作の上段剣に対して、狂四郎は、又七郎に送ったと同じ業が用いられるか、どうか、疑った。

北辰一刀流を創めたと云いはなったこの若い剣客が、古法一刀流を使うとは考えられなかった。上段から突きに来るかわりに、いかなる秘剣を備えているのか、予測を許さぬ。

なみなみの腕前ではないのだ。

狂四郎は、居合を放つとみせて、わざと無想正宗を抜かずにいるのであったが、抜きつける余地はないように思われる。

——どうする？

無数の修羅場を踏んだ者の、不敵な度胸で、狂四郎は、対手の出様を待つ。

と——。

周作は、刀身を、ほんの微(かす)かだが、風にそよぐ葦(あし)のように左右へゆれさせた。

その刹那(せつな)から、周作の剣は、古法を脱していた。

流儀を問わず、剣の極意は、吹毛(すいもう)の剣にある、と云われる。微風に吹かれて、刃頭に触れる秋(しゅう)毫(ごう)をも切断する剣、という意味である。

利剣を使うのではなく、利剣におのが身をゆだねて、利剣のゆくがままに行く。

周作は、それを、古法から脱するために、工夫したのである。

そのむかし――。

将軍秀忠(ひでただ)は、小太刀半七という兵法者が、鉄扇をもって試合することに妙を得ている、という噂(うわさ)をきいて、これを召し寄せた。

半七は、何か特別の術があるか、という下問に対して、

「別に、なんの術もございませぬ。ただ、試合をいたします時に、なんとなく面白い心地がいたすのが、極意かと存じます」

と、こたえた、という。

これは、鉄扇のおもむくままに、おのれをしたがわせる、という意味であった。

周作が、上段にふりかぶった刀身を、ゆれさせはじめたのは、同じ理(ことわり)から発している。

これを視(み)て、何を思ったか、狂四郎が、微笑した。

三

橋上に立つ両者の距離は、約五歩あった。

対峙は、それなり、不動の固着状態に入り、陽が傾くにつれて、足もとから匍う影法師が、次第に延びた。
周作が使わんとした一撃は、狂四郎の微笑によって、はばまれたのである。
吹毛の剣が揮われようとした瞬間、狂四郎が、微笑をもって、周作の無想をみだしたからである。
——手の内、観たぞ！
狂四郎の微笑は、そう告げたのである。
はたして、手の内を観たかどうか、それは疑わしいとしても、周作の心気が動揺したことは、事実であった。
周作の上段剣は、その瞬間から、動かぬものになった。
狂四郎は、冷たく冴えた眼眸を、据えたまま、両手をダラリと下げている。
立ちつくして、みじんの疲労の色をみせぬのは、狂四郎の場合、いつものこと乍ら、周作の方が、ほんのわずかの焦躁をも、面上に滲ませぬのは、流石と云えた。
やがて、狂四郎が、一刻の沈黙を破って、次の言葉を吐いた。
「陽が落ちるが、どうする？」
周作は、しかし、応えて口をひらこうとはしなかった。
「今宵、月はない」
「…………」
それきり、狂四郎も、沈黙した。

やがて、西の山に、陽は沈み、束の間の残照が映えたが、それも徐々に消えて、二人の姿は、影になった。

闇が、急速に、そこへ落ちて来た。

対手の貌が、闇に溶けはじめた時、はじめて、周作に、烈しい焦躁が来た。

敵には、暗黒の世界で発揮する迅業がある、という意識がわいたからである。

狂四郎が何気なさそうに告げた言葉は、周作を焦躁させる効果があったのである。

一瞬――。

周作は、黒い影と化した狂四郎めがけて、

「えいっ!」

凄じい懸声もろとも、突きをくれた。

同時に、黒い影は、ま横に、川面に跳んでいた。

周作としては、敵が川面へ跳ぶことは、予測の中になかった。うしろへ退るか、居合に抜き放って払って来るか――どちらかを、えらぶであろう、と思っていた。それらに対する攻撃は、間髪を容れずに送る用意があった。

水音は、立たなかった。

黒い影は、水面へ落ちた、とみえた瞬間、はねあがって、むこう岸へ、ひらりと、飛び移っていたのである。太刀洗水には、幾体かの石地蔵が沈められて、頭を水面にのぞかせていたことは、前述した。

狂四郎は、そのひとつへ、片足かけて、跳躍したのであった。

周作は、茫然となって、往還を遠ざかる黒い影を見送った。

およそ、一町ばかり、歩いて行って、道祖神の祠の前にさしかかった時、狂四郎は、ふと、足を停めた。

「おばば」

祠の蔭にひそむ者に、呼びかけた。

「わたしの生命を狙うのは、一向にかまわぬ。気力、体力のつづくかぎり、憎悪を燃やしてくれていてよい。しかし、あのような、わき目もふらずに剣の道ひと筋に進んでいる若者を、策に乗せて踊らせる真似は、止めてもらおう」

その返答は、十歩あまりはなれてから、なされた。

闇を截って、二本の手裏剣が、つづけさまに、飛来して来たのである。

次いで――。

忍び装束の男二人が、襲って来た。

狂四郎は、これらを、一太刀ずつで、斬り仆しておいて、しばらく、道祖神を、すかし見ていた。

老婆があらわれぬと知って、歩き出したが、胸中に澱んだ重い塊を、このまま荷物にして行くことに、やりきれなさをおぼえずにはいられなかった。

四

千葉周作が、高柳又四郎の音無しの構えに、挑戦したのは、それから十日後であった。

その日、中西道場には、六百名あまりの門弟がいたが、又四郎と周作が、素面素小手で、撓刀を把って道場中央に現れるや、一人のこらず、板壁ぎわへしりぞいて、固唾をのんだ。

一礼して立つや、周作は、撓刀をすっと上段にふりかぶった。

又四郎は、型通りに、下段青眼につけて、切先を、鶺鴒の尾の様に、動かした。

近世の一刀流は、その構えを青眼にとって、目まぐるしく太刀先を動かして、刀身が死物にならぬよう、居つかぬようにするのであった。無念流のごとく、平星眼につけて、微動もせずに、敵の仕掛けを待つというのを、採らなかった。

又四郎が、切先を、上下に烈しく動かすのに対して、周作は、ゆるやかに左右にゆれさせはじめた。

周作は、眼狂四郎に、必殺の一撃をはずされて以来、その十日間の昼夜、必死に工夫するところがあった。

「やあっ！」

「やあっ！」

見戍る者の肺腑をつんざく凄じい懸声をほとばしらせつつ、両者は、間合を一寸も延縮させることなく、じりじりと位置を移して、右まわりにまわりはじめた。

周作は、足を浮かして、視線を、対手の帯のところへつけていた。

周作は、眠狂四郎に対して、視線を合せたために、失敗したのである。

上手の者との立合いに、目と目を視合せていると、想うところ、為さんとするところが、眼裡

に現れる危険がある。それをさとられないために、目のつけどころを、対手の帯のあたりへ落す。これを「帯の矩(かね)」という。

また浮足に構えるのは、対手の撃たんとする刹那(せつな)をはずさずに、飛び躍(おど)るためであった。空に居らず、地にも居らず、という構えは、一撃によって勝敗を決するための秘訣(ひけつ)である。

四半刻(しはんとき)が経過した。

音無しの構えは、依然として、上下にせわしく浮き沈みしているばかりで、一閃(せん)すらも放っていなかった。

周作もまた、撃ち込む隙(すき)がないままに、頭上で、刀身を、ゆるやかに左右にゆれさせる構えをつづけていた。

撃ち身の立合いには、どこまでも、初太刀をおのれの方から発することを気にかけて、受け身の工夫は大して必要とせぬ。だが、対手に兎(う)の毛ほどの隙間もなく、先の一撃が発せられぬとなれば、わざと誘いの隙をみせて、後の撃ちを占める法もあるが、上手の対手をむこうにまわして、自らそのような危地を生むのは、愚かのわざであろう。

周作は、待つほかはなかった。又四郎もまた、内心では、周作の構えに、舌をまいていたに相違ない。

さらに、四半刻が、流れた。

この勝負、ついに、引分におわるかとみえた。

刹那――。

又四郎の長身が、踊りあがった。

忽(たちま)ち、戞然(かつぜん)として、撓刀が鳴った。
又四郎の音無しの構えに、はじめて、音をきいた六百の門弟たちは、思わず、声をあげた。
しかし、どうして、その撓刀が鳴ったか、誰の目も、みとめてはいなかった。
周作は、又四郎の撓刀が、はねあがって来ようとした刹那、上段の一刀を、斜横に振り下したのであった。
すなわち。
又四郎は、周作が、まっ向から、一直線に撃ち下して来るのを、計算に入れておいて、おのが得物を、はねあげようとしたのである。振り降ろされる一颯(さっ)の迅(はや)さよりも、はねあげる一閃の迅さが、まさっているならば、撓刀と撓刀は、搏(う)ち合うことなく、又四郎は、周作の胴を薙(な)ぐことができるわけであった。
周作は、まっ向から、撃ち下さずに、斜横に、空間を搏った。そこへ、はねあがって来る又四郎の撓刀があったのである。
音無しの構えは破れた。
同時に、ミリミリと、床板の折れる音がした。
周作の空に居らず地にも居らぬように浮かしていた踵(かかと)が、撃ち込みざまに、床を踏みつけるや、さしもの厚板が、瓦(かわら)のように割れたのである。
「見事！」
又四郎は、一歩退くや、大きくひと息ついて、ほめた。
周作も、肩を喘(あえ)がせた。総身の力を出し尽していた。

道場主中西忠兵衛子正が、降りて来て、
「周作、北辰一刀流の秘技、たしかに見とどけた。よう工夫した」
と、心からほめた。
その時、周作の脳裡（のうり）には、闇の中に消えて行った異相の浪人者の姿が、泛（うか）んでいた。
——あの浪人者と、もう一度、立合わねばならぬ。
周作は、心で叫んだ。
——あの浪人者に勝ってこそ、北辰一刀流は、天下無双となるのだ！

待伏せ賭博（とばく）

一

左様でございます。若い頃から、薬箱を背負うて、日本全土を歩いて居るてまえが、極道をせなんだと申しては、大嘘（おおうそ）になります。てまえに似た顔の子供が、一人や二人、いたといたしましても、ふしぎはございませぬ。

この年齢（とし）になりますと、十年ぶり、十五年ぶりにやって来た土地に、また足を入れますと、そこにいたむかしの女の顔が、ふっと泛（うか）んで参るものでございますが、もしかりに、同じ家にまだ住んでいることが判（わか）りましても、別段会ってみようなどという料簡（りょうけん）にはなりませぬ。

ところが、どこの街道、どこの城下町を歩いていても、てまえの脳裡（のうり）には、

——もしや、ここらあたりで、ばったり、お会いするのではないか？

という期待をかけてみるのが、あの冷たい暗い面相をお持ちのご浪人さんだったのだから、妙な話でございます。

お別れしてから、恰度（ちょうど）、まる二年が経（た）って居りました。

信州を経て、富山へ帰ろうと、呑竜（どんりゅう）様で有名な太田を通りかかった時、偶然、あのご浪人さんが、てまえの道筋をお行きになったのを、耳にして、にわかに、胸が、はずんだものでございま

した。
碓氷峠へさしかかるてまえで、鈴を鳴らす駄馬にゆられた花嫁御を見かけて、
——これァ、もう間もなく、お会いできる。
と、縁起をかついだことでございました。
はたして、花嫁行列を追い越して、峠下の関所をむこうにする腰掛茶屋の前に来ると、なつかしい黒の着流し姿を、そこの床几に見つけたのでございます。
てまえが、ご挨拶を申上げますと、ご浪人さんは、例のごとく、眉毛ひとつ動かされずに、
「富山へ帰るのか」
一言仰言っただけで、美しく彩られた晩秋の山へ、視線を向けておいででした。
てまえもまた、例によって、とりとめない世間話を、勝手におきかせして、べつに相槌打って頂く気持も起さないのでございました。
やがて、花嫁行列が到着して、しばらく休息をとりましたが、ご浪人さんは、床几から腰を上げようともなさいませぬ。
てまえが、ふと、気がつきますと、ご浪人さんの視線は、幟わきの床几に、つつましく腰かけている花嫁御の顔へ、じっと、当てられているのでございました。
べつに、とりたてて器量よしというほどでもない花嫁御でございました。
ご浪人さんは、てまえの視線をお感じになったか、
「女心と申すものは、判らんものだな、薬屋——」
と、仰言いました。

「と仰言いますと？」

「あの花嫁の顔を見るがいい。嫁入りする、というよりも、まるで真剣勝負か、敵討にでも参るようだ。ただの覚悟ではない」

ところが、てまえには、その白く厚く化粧して、俯向いている顔は、人目の多い往還上で、ただ、かたくなっているとしか、思われないのでございました。

尤も、その花嫁御の姿は、ちょっと風変りではあったのでございます。きらびやかな打掛けをはおっていることは、変りはございませんでしたが、その打掛けが、金糸と銀糸の三角形をつないだ模様で、これは普通に鱗と申して、婚礼になぞ用いないことは、申上げるまでもございませぬ。さらに、つのかくしでございましたが、べらぼうに長い笄を右左にさしているために、つのかくしが突っ張って、いかにも、角が匿しきれない、といったあんばいで、ちょっと薄気味わるい眺めでございました。

ご浪人さんは、花嫁行列を先に出発させてから、やおら、腰をお上げになりました。なんとなく、花嫁行列を尾けて行くかたちで、峠をのぼることになったのでございます。

申し忘れましたが、行列には、異様な人間が一人、交って居りました。

花笠をかぶった先達が、間のびのした声で、「目出度やな、あアラ、目出度やなあ……」とたい午ら、杖をついて行くのに、花嫁を乗せた鈴馬がつづき、そのあとを、駕籠ではなく、四人の男に担がせた輿に、洗い髪に白装束の中年の小肥りの女が、悠然と乗っているのでございました。この女は、上州ではきこえた祈禱師でございました。てまえは、五年前に、太田へ来た時、旅籠で、若い女が何者かに殺された騒動にぶつかりましたが、お役人が、この女祈禱師を呼んで、

下手人の見当をつけさせているのを、目撃いたしまして、阿呆らしいことをするものだ、と少々あきれた思い出を持って居ります。

お武家様とてまえが、なんとなく距離をせばめた折でございました。

不意に、女祈禱師が、頭をまわして、じろりと、ご浪人さんを、視下しました。その双つの眸子は、なにやら妖しげに光って居りました。

しかし、ご浪人さんは、そ知らぬお顔でした。神経の鋭いお方でございますから、勿論その視線をお感じにならぬ筈はないのに、全くの無表情を保っておいでだったのでございます。

二

関所をくぐったのが、五つ（午前八時）ごろでございましたが、峠を登りきった時には、もう八つ（午後二時）になって居りました。

花嫁行列を追い越していれば、一刻も早く登りついていたものを、ご浪人さんは、どうしたわけか、それをなさいませんでした。

大きくうねった道のむこうに、峠茶屋の屋根がのぞいて、行列の一同が、ほっとして、ひとざわめきした折、ご浪人さんは、何をお考えになったか、右手の崖の、手のとどかぬ高処を彩っている美男かつらの赤い実にむかって、道端からひろった小石を、お投げになりました。

小枝をつけて、それが落ちて参ったのをひょいと、宙でお受けとめになったご浪人さんは、すたすたと足をはやめて、行列にお入りになると、無言で、花嫁御へ、さし出されたことでございます。

心中に何かただならぬ覚悟をきめている模様の花嫁御が、どんな反応を示すか、試してみる振舞いでございましたろうか。
そのとたんでございました。
だあん、と銃声が轟くとともに、ご浪人さんのお持ちになった美男かつらの赤い実が、ぱっと、空中に飛び散ったのでございます。
平和な花嫁行列にむかって、鉄砲が撃ち込まれたのでございます。
一同の愕きかたは、申上げるまでもございますまい。
一人、泰然としておいでだったのは、ご浪人さんだけでございました。
その視線は、その時はじめて、女祈禱師の横顔へ、冷やかに、送られていたようでございました。
花嫁行列が、輿入れたさきでの出来事は、また別の話として申上げなければなりませぬ。
ここでは、鉄砲を撃ち込んで来た者の話をおきかせしたいのでございます。
雑木林を鳴らして、どやどやと現れたのは、なぐり込みの身ごしらえをした博徒の一団でございました。
先頭に立っている恰幅のいい初老の男は、てまえも顔見知りの沓掛の相太郎という親分でございました。
「御一同さん、とんだご無礼を働きまして、平にご勘弁願います。花嫁行列に、意趣があって仕掛けた次第じゃござんせん。どうぞ、お先にお行き下さいまし。そちらのご浪人衆に、ちィとばかり、願いの筋があっての待伏せでござんす」

いんぎんな物腰で口上するあいだに、乾分(こぶん)たちは、ご浪人さんを、すばやく、とり巻いて居りました。

勿論、ご浪人さんは、ふところ手になったまま、殺気だったやくざなど、虫けらほどにも気にかけていらっしゃらぬご様子でございました。

沓掛の相太郎親分は、その態度でも判る通り、大層評判のいい、度量の大きい人物でございましたので、てまえといたしましては、

――どうなるのだろう？

と、はらはらせずにはいられませんでした。

相太郎親分は、ご浪人さんを、じっと視据(みす)えて、

「貴方様(あなた)に、どうしても、お目にかかって、三年前の勝負を、もう一度、やり直したい、と申して居る男が居ります。あっしの義弟にあたりますので、是非叶(かな)えてやり度(と)うございますので、そこまで、ご足労下さいまし」

と、促しました。

ご浪人さんは、口をつぐんでおいででございましたが、相太郎親分が先に立ちますと、それに跟(つ)いておいでになりました。街道を折れて、草径(くさみち)を一町ばかり辿(たど)りますと、古びた観音堂がございました。その前に、むごたらしい光景が、つくられていたのでございます。

堂の廂(ひさし)から下げられた縄(なわ)の端を百姓らしい老爺(としより)が、頸(くび)へ巻きつけられ、酒樽(さかだる)の上へ立たされて居ります。酒樽をひと蹴(け)りすれば、老爺は、ぶらんと縊(くびく)られることになります。酒樽のわきには、緋(ひ)の長襦袢(ながじゅばん)いちまいの若い女が、両手を縛られて、胸も裾(すそ)も乱して居ります。たったいま閨(ねや)から

ひきずり出されて来た、と見える仇姿で、事実、その髪かたちで、女郎と知れました。
堅気の衆や弱い者に迷惑をかけてはならぬ、と平常口癖にしている相太郎親分のしわざとしては、頷けないところでございました。
これは、田舎博徒の中でも、最もたちの悪い、蛇蝎になって忌みきらわせるのを得意がっているたぐいの、むごい仕打ちにほかなりません。
お代官にも一目置かせる貫禄を持った親分としては、あるまじき振舞いと申せます。
「貴方様は眠狂四郎の旦那に相違ございませんね？」
相太郎親分が、あらためて、念を押した時、ご浪人さんがおこたえになるよりも早く、
「相違ねえ。たしかに、眠狂四郎の旦那よ」
と大声がして、堂の扉が、突き開かれました。老爺と綺麗な女郎が虐められている場面には、まことにおあつらえ向きの男の出現でございました。
顔の半面が滅茶滅茶につぶれた凄じい無職だったのでございます。
「旦那、おひさしゅうござんす、と挨拶申上げても、こんな人三化七になっちゃ、思い出しては、頂けめえ。そっちの薬屋のおっさんにも、判らねえだろう」
そう云われる通り、ご浪人さんも、はてな、というご様子でございましたし、てまえも、まるっきり、見当もつかないことでございました。相太郎親分が、そばから、
「時次郎と申す男でござんす」と、告げましたが、まだ、記憶が甦りません。
時次郎という無職は、苛立った気色をむき出して、
「思い出してもらおうぜ、旦那。三年前、甲州街道の桂川めがけて、おめえさんが抛った女の黒

髪を、断崖からふっ跳んで、つかんだ渡世人がいたことをよ」

と、云いはなちました。

てまえは、あっとなりました。

忘れることのできない出来事でございました。（註・「無頼控」百話のうち「遺言賭博」）都留郡一帯を縄張りにする釜屋の文蔵という貸元が、一夜、甲府の渡月楼でお職をはった園弥という花魁を、賭け物にしたことがございます。

これを競合うて、最後にのこったのが、ご浪人さんと、この時次郎という無職でございました。実は、時次郎は、園弥と夫婦約束をした仲だったのでございます。

それを知らずに、ご浪人さんは、時次郎に勝って、園弥を取ったものでございました。

ところが、園弥は、賭場から旅籠へともなわれる途中、隙をうかがって、猿橋のまん中から、身を躍らせて、はるかな闇底の流れへ、果ててしまったのでございます。ご浪人さんが、油断をなさっていたわけではなかった、証拠は、女が身を躍らせた刹那、抱きとめるかわりに、その黒髪だけを、迅業で切りのこされたことで明らかでございました。いかにも、このお方らしい振舞いでございました。

時次郎が、ご浪人さんの前に立ちふさがったのは、翌朝の街道上でございました。

園弥の髪をもらいてえ、と迫る時次郎に対して、ご浪人さんは、次のように仰言ったのでございます。

「おれは、園弥の髪毛を賭ける。お前は生命を賭けるがいい。……下の渓流を見ろ。岩と岩があたまをならべている。その上へ落ちれば、五体が砕けるだろう。だが、岩と岩のあいだの流れへ

落ちれば、濡れるだけにとどまろう。こう見たところ、岩と水の面積は、五分と五分だ。おれがいま、この髪毛を投げる。欲しければ、跳んで取るがいい。どうだ？」

不敵と云おうか、無謀と云おうか、時次郎は、ひとにぎりの黒髪が、断崖から数尺はなれた空中へ投げられるや、それへむかって、とびつき、みごとに、つかんで、目晦むはるか下方の渓流へ、落下して行ったのでございました。ご浪人さんもてまえも、時次郎が五体砕けたか、それとも生命をとりとめたか、見とどけてはいなかったのでございます。

……時次郎は、生きのびて、三年の後に、こうして、復讐を燃えたたせて、前へ仁王立ったわけでございました。

三

「どうしようというのだ？」

ご浪人さんは、あの日のことをお思い出しになり乍らも、べつだんの気色もお示しにならずに、時次郎を視かえされました。

「おれはな、もういっぺん、ここで、旦那と、賽の目に、そこの二つの生命を賭けてみてえのよ」

時次郎は、老爺と女郎へ、頤をしゃくってみせました。

「このおいぼれは、年貢に困って、娘を、追分の女郎屋へ売り込んで、二日めに、籠脱けさせて江戸へ高飛びしようとしやがったのを、とっ捕えたんだ。……三年前、おめえさんは、おれの女をまきあげた。こんども、ひとつ、女郎をいっぴき、取ってみろ、と云うことよ」

「お前が勝ったら、父娘はどうなる？」

「じじいは、おめぇさんの目の前で、酒樽を蹴とばされて、だらんとぶら下らあ。娘の方は、おれが、この観音堂の中でなぐさんで、追分で、鼻っ欠けになるまで働かせてやる。どうだ、やるか？」

「あいにくだが、時次郎――、わたしには、この父娘を救わなければならぬ義理はない。お前が、どう料理しようと、わたしの知ったことではない」

「否やは、云わせねえ！」

時次郎は、吼えました。

ご浪人さんは、視線を、右方へお向けになりました。七八歩はなれた地点から、猟師が、鉄砲を構えて、筒口をぴたりと、ご浪人さんに狙いつけているのでございました。

「旦那は、このいいのしし太郎の腕前を、たった今、見とどけた筈ですぜ。……おう、いいな、いいのしし太郎、おさむれえに、ちょっとでも、逃げる様子が見えたら、かまうことはねえ、ぶっ放して、胴っ腹へ、風穴をあけろ！」

「前金もろうたからにゃ、仕損じはしねえ」猟師は、こたえて居りました。

「旦那――」相太郎親分が、おちついた声音で、呼びかけました。

「時次郎は、このふた目と見られぬ面相になって、勝負の鬼になって居ります。あっしも、その性根を買って、立会人になりました以上、いのしし太郎をひきさがらせるわけには参らないのでござんす。勝負をなさるか、それとも、鉄砲玉を躱して、おひきあげになるか――ご自由になさいまし」

ご浪人さんは、じろりと、相太郎親分をごらんになって、

「賽ころと壺皿が、いかさまでないことを、親分にたしかめてもらおう」
と、仰言いました。
「やるか！　よし！」時次郎は、ぎらぎらと、目玉を血走らせました。すると、ご浪人さんは、一
薄ら笑いを泛べて、
「時次郎、わたしが負けたら、あのいいのしいとやらに、遠慮なく、撃たせるがいい」
「おうっ、生命を賭けるのか！　おもしれえ。いいのしい、きいたか。眠狂四郎を仕止めたら、日本一の名人と称えられるぜ」
盆ござが、敷かれると、相太郎親分が、壺皿と二つの賽を、丹念に調べた上で、その上へ置きました。
ご浪人さんは、何気ない口調で、
「挑まれた者が、振る作法があるのではないか、親分？」と、お訊ねになりました。
「ございます。振って頂きましょう」
相太郎親分が、こたえました。
ご浪人さんは、盆ござの前に、片膝ついて、いかにも無造作な手つきで、壺皿へ賽ころをお入れになると、くるるっとひとまわしして、ぱっと伏せ、二三度ツツと小ゆすりしてから、
「勝負！」
ひくい静かな声音で仰言いました。
時次郎が、すかさず、
「半！」

と、応じました。

ご浪人さんは、ひょいと、壺皿をおあげになりました。

固唾をのんだ者たちの視線が、一斉に集中したそこから、なんと、賽ころは、二つとも、煙のように消えていたのでございます。

瞬間。

ぎゃっ、という悲鳴をあげて、いのしし太郎が、のけぞり、鉄砲は、空を撃って居りました。

同時に――。

ご浪人さんは、跳躍して、時次郎の鳩尾へ拳を突き入れて、当て落されました。

ご浪人さんは、賽ころを、壺皿で伏せたとみせて、二つとも、掌の中へおかくしになり、これを、猟師へ投げつけて、目つぶしにお使いになったのでございました。

鮮やかな手妻、と思われましたが、後でうかがったところでは、掌の中へかくすのは、手裏剣の極意の由でございます。ご浪人さんは、やおら、相太郎親分に向って、口をひらかれました。

「お立合い。……ここには、格別の悪人は、居らぬとみた。時次郎が、賽の目にとり憑かれた執念は、むしろ、あわれと申すべきだろう。この年寄と娘は、どうやら、金でやとわれて、わたしを、勝負にさそい込む囮にすぎまい。……但し、あのいのししとやらは、鉄砲自慢の外道と思われる。狙う目つきに、残忍の色があった。めくらにされたからには、あんまの修業でもさせてやってもらおうか」

そう仰言ってから、歩き出され、四五歩遠ざかって、頭をまわして、次の言葉をつけ加えておいでございました。

「親分、ひとつだけ、心得ておいてもらいたい。武士の表芸は、剣だ。賽の目など、無聊のなぐさみにすることはあっても、やくざたちのように、それに生命など賭けぬものだ、ということをな」

街道へ出た時、ご浪人さんは、こんどは、てまえに向って、

「薬屋。もうひとつ、おもしろい見世ものを、今夜あたり、お前に眺めさせることになるかも知れぬな」

と、仰言って居りました。

あの花嫁御が、到着した家で、何やら一騒動起る予感は、てまえにも、あったのでございます。

夜這い祭

一

てまえのように、日本全土を、旅して居りますと、諸国のさまざまな風俗が、目に入り耳に入り、まあこれがひとつの愉しみと申せるのでございます。

殊に、妖怪変化の話ともなりますと、その国その土地に、必ず、おそろしげに、伝わって、人人にかたく信じられているものでございます。

どこの里にも、七不思議が用意してありまして、旅籠について、おしゃべり好きの女中でもつかまえれば、夜が更けるまで、きかせてもらえることに相成ります。どこの寺の泉水には、男根の恰好をした大岩があって、水の増減にかかわらず、水の上へ出るところは、いつも同じだとか、そして、この泉水を泳いでいる魚は、鯉も鮒も鯰も、みな片目だとか。どこの明神の大榎の神木と、隣りの弁財天の森の大榎とは、夫婦で、むかし、あまり仲がよくて、ひきはなされたものであり、そのために、落葉が、必ず双方から吹き寄って、二枚ずつぴったり合わさって、何処か遠くへ、風に乗って、吹かれて行く、とか。何川のある箇処から噴く熱泉は、魔性の息がかかっていて、これで、鶏卵をゆでて喰べると、忽ち血反吐を吐く、とか。

山には、必ず人に化ける狐や狸が居りますし、川には、やはり人をだます獺が棲んで居ります。

どの村にも幽霊の出る家がございますし、どの街道にも、生霊(いきりよう)死霊の祟(たた)りを避けねばならぬ箇処があるのでございます。

まるで、日本全土に、妖怪がうようよしているあんばいで、まことに、人間は、迷信ぶかいものでございます。

江戸大坂などでは、年中行事も、明るく愉(たの)しいものになって居りますが、その土地によっては、まことに、陰惨な、むごたらしい、迷信の厄払いになっていて、祈禱(きとう)やら呪詛(まじない)やら託宣やら、人人が真剣になればなるほど、あさましゅうなっている模様でございます。

さて、ご浪人さんとてまえが、女祈禱師の加った花嫁行列を、尾(つ)けて行く恰好で、牧野様御城下の小諸(こもろ)に入ったのは、もう昏(く)れかかって居りました。

花嫁行列が、町なかを通りぬけて行くままに、ご浪人さんは、左右の旅籠からかけられる呼び込み声にはそ知らぬふりで、歩みを止めようとはなさいませぬ。あきらかに、ご浪人さんは、花嫁行列に対して、ある興味を抱(いだ)いておいででした。

城下はずれの富士見坂にある旅籠に、花嫁行列が入ると、ご浪人さんも、そこに泊ることになさいました。

ご浪人さんには一部屋ございましたが、てまえは、越後の角兵衛獅子(かくべえじし)と相宿(あいやど)になりました。

十歳ばかりの男の子と女の子をつれた角兵衛獅子の親方は、ひとしきり二人にとんぼ返りの稽古(けいこ)をさせてから、夜具にもぐり込ませておいて、夜酒をやりはじめました。

「薬屋さん、こん夜の祭を、もちろん、見物なさるのじゃろうな？」

「祭？　今夜、なんの宵宮かな？」

「ははは……、あんた、夜這い祭を見物するために、あの花嫁に、ついて来たのではないのか？」
「きかせてもらおうか。こちらは、何も知らずに、ついて来たんだ」
角兵衛獅子の親方の話は、次のようなものでございました。
ご浪人さんが、碓氷峠で、出会った時、花嫁の顔を、一瞥なさって、「まるで真剣勝負か、敵討にでも参るようだ。ただの覚悟ではない」と仰言ったものでございましたが、まことに鋭い眼力だったのでございます。
花嫁は、あの女祈禱師によって、催眠の術を施されていたのでございます。催眠の術は、大むかし、安倍ノ晴明が使いはじめたときいて居ります。巫子とか市子とか口寄せとか梓神子などというのは、みな、その妙力を応用するのではありますまいか。
「冬蛾」と名のるその女祈禱師は、祟になやむ者を、白刃の上に寝かせたり、呪法によって、ひたがくしにしていることをのこらず喋らせたりして、大層な評判をとって居りましたが、これも、催眠の術をかけるから、できた次第でございましょう。
冬蛾が、催眠に陥った花嫁をしたてて、上州から信州へやって参ったのも、迷信から出た行事のひとつでございました。
「甲賀三郎」と申せば、佐久から八ヶ岳にかけての地方においては、あまりにも有名な伝説の人物でございます。この甲賀三郎が、ある時、上州太田の呑竜様のところへ、夜這いに参って、その娘を犯したために、上野、下野、武蔵が、一月間も、豪雨の禍を蒙り、反対に、信州一円は、旱魃に苦しむことになりました。
甲賀三郎は、もとは人間であったが、兄たちに計られて、谷底へ落ち、長い洞穴をくぐり抜け

て、ようやく陽の下へ出ると、身が蛇体になっていた者で、やむなく、同じ蛇体の太田の呑竜の娘を犯すよりほかに、おのが激しい欲情をはけさせるすべはなかった、というわけでございました。

そのために、甲賀三郎は呑竜様がいかに憤怒して、豪雨を降らせようと、旱魃にしようと、毎年一度、その娘を抱きに、信州から上州まで忍んで行かざるを得ませんでした。

甲賀三郎と呑竜様の娘との淫楽の妖気が、地上に散り、たまたまそれに触れた妊婦が、生み落した子には、必ず、からだのどこかに、鱗のかたちをした痣ができている、という迷信も、上州・信州では、まことしやかに、云い伝えられて居ります。のみならず、上州では、娘のからだに限られ、信州では男に限られているということになって居りました。

豪雨や旱魃からまぬがれるためには、この痣のある上州娘と信州男を、千曲川畔の甲賀三郎をまつった祠の祭壇で、睦び合わせる、という行事が、いつの頃からか、催されていたのでございます。

そのあくどい祭は、てまえども他国者には知らせないように、きわめてひそやかに、中秋十六夜の宵に、催されて居りましたが、人々が忍んで来て、米やら銭をひねって投げるのを、こばむ次第ではありませんでした。

その祭が、つまり、今宵だったのでございます。

二

角兵衛獅子の親方が、面白おかしく、てまえに、話してきかせている途中で、ご浪人さんが、

湯から上っておいでになって、ちょっと、お寄りになりました。
お立ちになったまま、喋りたてている親方を、じっと、見下しておいででしたが、花嫁行列に対して、あれほど興味をお持ちにも拘らず、すぐに、すっと、出て行かれてしまいました。
しばらくして、てまえが、部屋へうかがうと、床の間の縁を枕に仰臥なされて居りました。てまえが、何か申上げようと口をひらきかけると、抑えるように、
「あの角兵衛とは、以前からの知りあいか？」
と、お訊ねになりました。
「いえ、相宿になっただけでございます。どうしてでございます？」
「いや、べつになんでもない」
「花嫁行列の正体を、きいて参りました」
「おれは、女中から、きいた」
「そうでございましたか。奇妙な祭も、国々にたくさんございますが、花嫁に聟を夜這わせて、拝むというのは、はじめてでございます」
「それも、ただの契りかたではない、というぞ。男の方が、花嫁の上で、悶絶するまで、腰を揉みまわすそうな」
「なんと――へえ！」
「花嫁は、みだらなけものと化す薬物を一服盛られた上で、催眠術をかけられている、というわけだな」
「ひどいものでございますな」

「どうやら、あの冬蛾という口寄せが、数年前からひきつづく天災地変から悪智恵を働かせて、無知な百姓たちをそそのかして、つくった行事だろう。花嫁行列をしたてて、自分は輿にそっくりかえってみせる趣向も、わるくない。ここらあたりの連中は、生唾のみ乍ら、待ちかまえている、という次第だ」
「ごらんなさいますか?」
てまえが、お訊ねすると、ふっと、薄ら笑われて、
「誘いには、乗らなければなるまい」
と仰言ったことでございます。
碓氷峠を登り乍ら、時おり、振りかえって、じっと視下して来た冬蛾の妖しい眼眸を、思い泛べたのでございましたろうか。
陽が落ちる前は、あれほど、すっきりと浅間山が、夕映えて、あるかないかに立ち昇らせる煙も、よく判じられていたのに、ご浪人さんにお供をして、旅籠を出た時は、十六夜の月がどこにかかっているのか、あやめもわからぬ暗さでございました。
「提灯を――」
と、番頭にたのみますと、意味ありげに、かぶりを振られてしまいました。
見当をつけて、足をすすめるよりほかはないことでございました。
ご浪人さんの方は、闇に目が利きますが、てまえには、いくら夜馴れていても、そんな修業はできて居りませぬ。

しばしば、石や草に足をとられそうになって、声をたてなければなりませんでした。
提灯を持つことがゆるされないので、月がないと知ると、人々は、はやばやと出かけて行ったとみえて、前後に跫音はきこえず、どうやら、われわれが最後に行く見物人と思われました。
千曲川の堤を辿りはじめた時、ご浪人さんが、ふっと、
「やはり、そうか」
と、独語をもらされました。
「なんでございます？」
てまえが、うかがいますと、
「思っていた通り、狐が尾けて来た。いろいろ化けかたに工夫している」
という、おこたえでした。
「狐――でございますか？」
「うむ。今年も、敵を多勢つくっておいて、江戸を出て来た。しつっこく、ねらわれることになる」
とたんに、てまえは、石に蹴つまずいて、四ツ匍いになってしまいました。
そこから約三町も辿りましたろうか。森の中に、灯が見えました。
「あれらしい」
ご浪人さんは、堤を降りかけて、ふと立ちどまり、後方をふりかえると、闇を透かしているご様子でございましたが、
「消えたな」

てまえの方は、ただもう、足もとのおぼつかなさに、けんめいに、さぐるばかりでございました。

と、呟いて、ひくくお笑いになりました。

三

森の中の祠は、意外に大きなものでございました。

祠の前には、およそ三百人あまりも、蝟集して居りましたが、これが、しわぶきひとつたてずに、固唾をのんで、おし黙っている光景は、異様な眺めでございました。

祠の中は、百目蠟燭が、幾本もともされていて、陰惨な飾りものへ、炎をゆらぎかけて居りました。

正面上段の大厨子の幄がひらかれ、涅槃釈迦のように寝そべっている尊躰が見えましたが、その貌は、なんと、三途川の脱衣婆そっくりの恐ろしげな形相でございました。

左右に並んでいるのも、いずれも凄じい顔つきをした飯縄権現や摩利支天や三宝荒神や仁王などで、また、飯縄権現の前には狐の屍骸が、摩利支天の前には猪の屍骸が供えてあるのも、ぞっとさせられることでございました。

行事はすでにはじめられ、大厨子の下に据えられた、涼み台のような台に、花嫁は、白無垢姿で仰臥させられ、両膝を立てて、裳裾をひき捲られ、若い豊かな太腿まであらわに、浮きあげて居りました。そして、その前に端座した冬蛾が、帝釈天さながらに、冠をつけ、洗い髪を肩に散らし、奇妙な扮装をした肥り身をゆさぶって、鉦を打ち鳴らしつつ、呪文を声高にとなえて居りました。

「……日本六十余州、すべての神の政所、出雲の国の大社、神の数は九万八千七社の御神、仏の数は一万三千四個の霊場、冥道をおどろかし、ここに降し奉る。おそれありや、この時に、よろずのことを残りなくお教え賜われ、梓の神、うからやからの諸精霊、弓と箭とのつがいの親、一郎どのより三郎どの、人もかわれ、水もかわれ、かわらぬものは五尺の弓、一打ち打てば寺々の仏壇にひびくめれ……」

どういうわけでありましたろうか、冬蛾のうしろの板敷は、かなり広いにも拘らず、見物衆は、一人として、そこへ入ろうとしていなかったのでございます。

ご浪人さんだけが、つかつかと足をはこばれて、冬蛾から一間ばかりの距離を置いて、お坐りになりました。

呪文がおわると、仄昏い片隅に紋服をぶざまな恰好につけていた若者が、もぞもぞと立って、脱ぎはじめました。

褌もはずして、生れたままの裸身になると、ふいに、狐を真似て、ぴょんぴょんはね乍ら、冬蛾のまわりをぐるりと踊って、大厨子の脇にかざられた竜の前で、ひれ伏しました。その竜は、どうやら、雨降らしの伊勢多度の一目竜の模様でございました。五穀豊饒のために稲荷大明神があるわけでございますから、狐のざまで、一目竜に、いい按配をたのむのも、理窟にかなっていたわけでありましたろう。

さて、それから、筋骨逞しい若者は、花嫁に、夜這いをしかけたのでございますが、それはもう、前戯もなにもあったものではなく、大仰に、何やら土俗の言葉を喚きたて乍ら、のしかかって、早速に、臀部をせっせと上下させはじめたのでございますから、ただ滑稽なけしきでしかな

かったのでございます。

そのうちに、それまで死んだようになっていた花嫁が、突如として、四肢(しし)をはねあげて、若者にしがみついた——その瞬間から、それは、決して、滑稽な眺めだなどと、嗤(わら)ってはいられなくなりました。

みだらな薬物を一服盛られ、催眠(しきかみ)の術を施された娘は、徐々に満潮のようにからだ中に盈(み)ちて来た快感を、一挙に、怒濤(どとう)と化して、噴(ふ)きあげたとみえたのでございます。

その凄じい勢いに、米俵を三俵もかるがるとかつぐほどの逞(たくま)しい若者が、思わず、呻(うめ)きたてて、もがいたほどでございました。

勢いあまって、組み合った男女は、台からころげ落ち、冬蛾へぶっつかると、こんどは、台の下へころげ込んだものでございます。

淫靡(いんび)と申すには、あまりに程遠い、いわば、男女の激しい争闘でございました。

およそ半刻も、のたうちまわってから、花嫁も若者も、ぐったりとなって、息絶えたように、動かなくなりました。

見とどけおわってから、冬蛾は、やおら、立ち上ると、向きなおって、

「一同、去りませい！」

おごそかに、命じたことでございます。

見物衆は、ついに、一人として、声を発する者もなく、祠の前から、退去いたしました。

ただ、残ったのは、冬蛾の前のご浪人さんと、物陰に蹲(しゃが)んだてまえの二人だけでございました。

冬蛾は、ご浪人さんの存在など目に入らぬように、ふたたび、祭壇へむかって、端座すると、

何やら呪文めいた文句を、ぶつぶつと誦えて居りましたが、ふっと、止めて、数秒を置き、
「ご浪人、贄となるために、そこに坐って居られるか？」
と、問いました。
「贄？……こちらは、見物しやすい場所をえらんだまでのことだ。去らずにいるのは、花嫁御が、われにかえった時、おのれがやったことをおぼえているかどうか、訊ねてみたいためだ」
「皆の衆は、贄になりたくない故に、ここへは、一人として入って参らぬ。お手前様は、それと知らずに入られたのであろうが、入られたからには、贄になってもらわねばならぬ」
「贄とは？」
ご浪人さんの問いに対して、はじめて、冬蛾は、頭をまわして、妖しく光る眸子を据えて、
「呑竜様の娘の霊気が乗り移ったわたしに、精根のかぎり、奉仕してもらおうず！」
と、云いはなちました。

四

よもや――いくらなんでも、眠狂四郎ともあろう御仁が、巫女の詐術などに、かかるようなことはあるまい、と思っていたてまえが、そのうちに、愕っとなったことでございました。
しきりに、怪しげな手つきとぎらぎらと光る眼眸で、ご浪人さんに、催眠の術をしかけていた冬蛾が、一瞬、満足げに、にたりとするのを、てまえは、認めたのでございます。
冬蛾は、次いで、おもむろに、ご浪人さんの肩へ双手をかけると、
「契ろうてや、契ろうてや……」

と、うたうように呟(つぶや)き乍ら、上半身を反(そ)らしてゆきました。

そして、ご浪人さんを、乗せざま、ぱっと、下肢(かし)を空ざまにはねあげて、がっしとばかり、腰をはさみ込んだのでございます。

その太股の、搗(つ)きたての餅(もち)のように豊満な白さは、今でも、ありありと、てまえの脳裡(のうり)にあざやかによみがえって参ります。

忽(たちま)ち、ふいごのようにあらあらしい息づかいで、中年の巫女は、その小肥りのからだの中へ、遮二無二(しゃにむに)、男を押し入れてしまおうと、躍起なもだえを示したのでございます。

――どうなる？

てまえの胸は、早鐘のように、乱打するばかりでございました。

てまえにも、ようやく、ご浪人さんが、仰言(おっしゃ)った「誘いに乗る」との言葉が、のみ込めたのでございます。

江戸からつけ狙って来た化け狐は、巫女を抱き込んで、ご浪人さんに、催眠の術を施させておいて、一挙に討ちとるこんたんだったのでございます。

ご浪人さんの愛刀無想正宗(まさむね)も脇差(わきざし)も、その足もとにころがって居ります。

たとえ、わざと、術にかかったようにみせかけていても、いま、躍(おど)りかかられては、刀を把(と)るいとまもない。

――どうなさるのだ？

てまえが、焦躁(しょうそう)を抑(おさ)えきれずに、思わず、走り込もうとした瞬間でございました。

天井から、黒い影が、ご浪人さんめがけて、飛び降りて参ったではありませんか。

てまえは、思わず、
「あぶないっ！」
と、絶叫いたしました。
いいえ、決して、あぶなくは、なかったのでございます。
黒い影が、宙を截って来るのと同時に、ご浪人さんの片足は、無想正宗の鐔を指ではさんで、鞘走らせて居りました。すでに、鯉口は切ってあったのでございます。
烈しい物音の中で、降り立った黒い影が、大きくのけぞりました。
てまえが、われにかえった時には、ご浪人さんは、衂れた白刃を携げて、大厨子の前に、うっそりと佇立しておいででした。
いつの間に、斬っておしまいになったのか、冬蛾も、朱にそまって、事切れて居りました。
おどろいたことに、天井から襲って来た曲者は、角兵衛獅子の親方だったのでございます。

貞婦の宿

一

雪闇──とでも、いうのであろう。
時刻は、まだ八つ（午後二時）をまわった頃であったが、朝からひくく垂れこめて動かなかった厚い昏い雲から、粉雪が舞い落ちはじめるや、急に、山も野も森も人家も、その白い寒花の中に、溶けてしまっていた。
遠く潮騒のつたわって来る北陸街道であった。
寒気が、視界を奪われた旅人の肌身を、鋭く刺す。
「根雪か──」
旅人は、霏々と舞う雪華を仰いで、呟いた。
これまでに降った雪は、多少つもっても、また陽が当たれば、解ける。だが、この季節から降る雪は、根雪といい、明年春が過ぎるまでは、積み重なって、五尺六尺の高さの台となる。
根雪を降らす寒気ともなれば、これからの永い冬を告げるきびしさである。
この北海の風雪に、肌をさらして、旅装束もせずに、黒の着流しに素足で、酔狂な、いったいどこへ何をもとめて、さまよって行こうというのであろう。

野の中を、二里ばかりも辿ったであろうか。雪闇に滲む火花が、すぐ行手に見わけられた。
宿場ではなかった。
それは、ここだけは熱気のこもった鍛冶屋が散らしている火花であった。
野の中に、一軒だけ忘れられたように建っている家であった。
べつに、店内へ目もくれずに、行き過ぎようとすると、
「ご浪人衆——」
声が、かかった。
うす穢い店がまえにふさわしく、顔中髯だらけの、肩ぬぎの胸毛も逞しい巨男が、打ちおろす槌の手もやすめずに、呼んだのである。
「宿は、もう近い。すこし、雪を払って、火にあたって行きなさらんか」
眠狂四郎は、入口に下げられた看板を、視た。
『上杉流御甲冑師　長曽禰虎市』
狂四郎は、視線を、あらためて、鍛冶屋へ移した。
造作の大きな面貌に、不敵な表情をうかべている。
——おれが、来るのを待っていた。
直感が、脳裡を掠めた。
「あたらせてもらおうか」
狂四郎は、火花の散る土間に入った。
鍬や犂や鎌を打ち乍らも、長曽禰虎徹の伝統を承けた甲冑師の看板をかかげているところに、

この鍛冶屋の一徹な面目があるのであろう。
鍛冶屋が、いま打っているのも、ただの百姓道具ではなく、鋭い槍の穂先のような物であった。
それを、不意に、湯へさし入れて、烈しい湯気を立てておいて、じろっと、狂四郎を視た。
「ご浪人衆、ごらんに入れたい物がある」
傍の木箱をひき寄せると、何やら取出して、狂四郎の足元へ抛った。
それは、具足の籠手であった。それが、両断されている。
狂四郎は、鍛冶屋の双眸に罩められた憎悪の色をみとめた。
「おぼえがござろう、ご浪人衆――」
「べつに、おぼえはないが……」
「お手前様が、斬ったのだわ」
鍛冶屋は、吐き出すように、云った。
「おれが――？」
狂四郎は、あらためて、籠手を見下したが、ふっと、薄ら笑いを、口辺に刷いた。
――あの忍びがつけていた籠手か。
小諸城下はずれの甲賀三郎祠で、冬蛾と名のる女祈禱師に、催眠の術を施されたとみせて、突如、天井から襲って来た忍者を、斬ったのは、十日前である。
忍者が、籠手をつけていたとは、今まで気がつかなかったことである。示されてみて、あの手ごたえは、そうであったか、と納得される。
「行きがかりで、右手を斬り落したが、心得のある忍びであった。声も立てずに、落ちた自分の

右手をひろって、消えたが……、お主の縁か？」
「いや、上杉流の忍びの術を修練した男ゆえ、上杉流の甲冑師に、忍び道具をたのんで来ただけの縁じゃ。この籠手も、わしが、打ち上げた。苦もなく両断されて、あの忍者から、大層さげすまれた。わしとしても、一念篭めて、錬えた品だけに、大根のように、やすやすと斬られては、面目が立たぬ。……お手前様が、この街道を来る、ときいて、待っていた」
「斬らねば斬られる必死の際には、人力のほかのはずみが作用するものだ」
「いいや、わしは、そうは思わぬ。お手前様の腕前と刀が、わしの鍛えかたに、勝ったのじゃ。……その差料を拝見したい」
狂四郎は、乞われるままに、無想正宗を抜いて、鍛冶屋に手渡した。
鍛冶屋は、鐔元から鋩子まで、ゆっくりと、食い入るように観やっていたが、
「毛ほどの刃こぼれもない」
と独語した。苦渋の色が、眉宇の皺に滲んでいた。
それから、やおら立って、座敷に上ると、床の間に飾ってある天衝の立物をつけた梨打ちの兜を把って、狂四郎の前に、もどって来た。
「この冑を、試して下さらぬか。もし、斬れたら、虎徹入道に書いてもらったあの看板をおろして、わしは、爾今、農具しかつくるまい」
鍛冶屋は、同じ上杉流を称するよしみで、忍者のために、籠手を鍛えたのである。斬りつけて来る手練の一撃を、腕で受け流すための、入念の作だったのである。
それが、あっけなくも、この浪人者に、腕もろとも両断されたとあっては、長曽禰一族という

矜持が、地に落ちる。

たとえ、農具を打って貧乏に耐えても、鬻ぐための具足は製らぬ、と父祖代々継承した誇と意地が立たぬのである。

おのが自慢の兜を、とり出して、この浪人者の来るのを待ちかまえていたのも、無理からぬところであった。

二

長曽禰虎市の脳裡には、おそらく、そのむかし、一族中の巨匠虎徹がやった冑試しの故事が泛んでいたに相違ない。

寛永の頃、金沢には、過ぎたるものが二つあった。すなわち、刀正次に鎧興里。

刀工の志摩兵衛正次と甲冑師虎次郎興里（後の虎徹）は、加賀の田舎には過ぎた名工であった。

刀工は、いかなる兜でも一刀両断できることを念願して百鍛千錬する。甲冑師はまた、どんな名刀をもってしても、鉢に傷もつかぬ品を、と精魂を傾けるのである。

時の藩主前田利常は、某日、重臣たちに、

「斬れる正次の刀で、斬れない興里の兜を試みさせようではないか」

と、云い出した。

正次も興里も、君命なので、やむを得なかった。

当日、城中天守閣前の広場へ伺候した二人の名工は、異様な緊張を総身にはりめぐらしていた。

まず、興里が、南蛮鉄を鍛えた桃型の兜を、白木の台に据えた。

つぎに、正次が、自作の一刀を携えて、兜の前に進み、抜きはなつや、両足を八の字にひらいて、大上段に振りかぶった。

陽光を弾ねて煌く白刃は、反りを美しく打たせ、身巾やや広く、地鉄あくまで澄んで蒼く、一瞥しただけで、魂を吸い込むような極上作であった。

その二尺五寸の大業物を、凝っと瞶めていた興里は、正次があわや振り下さんとした刹那、

「待った！」

と、声をかけた。

そして、しずしずと、兜に歩み寄ると、

「兜の位置が、気に入りませぬ」

と云って、すこし直しておいて、自席にもどった。

正次は、出鼻をくじかれて、総身に、不快の感情がかけめぐるのを、払いきれぬままに、再び身構えた。しかし、もはや、無念無想の鋭気は、五体に湧かなかった。

——興里め、計り居った！

その憤りと口惜しさが、盛ろうとする鋭気の邪魔をした。

正次は、無理に乱れる感情を抑えて、気合凄じく、白刃を振り下したが、兜の八幡座を、わずか一寸ばかり截ち割っただけであった。

刀を置いて、俯向いた正次の面相は、死人のように蒼白になっていた。

しかし、利常は、一寸も兜を割ったのは正次の刀が業物であればこそ、また兜が真二つにならなかったのは興里の鍛えが冴えていた証拠である、と双方に花を持たせた。

後刻、興里は、下城して来ると、二人の弟子を呼んで、

「わしが、待った、を入れなければ、兜は両断されていたであろう。思えば、卑怯な振舞いであった。わしは、今日かぎり甲冑師をやめて、刀工となる。斬られる兜より、斬る刀を打つために、金沢を退転して、江戸へ出る」

と、宣言したのであった。

興里が刀工虎徹として、その名をあらわしたのは、それから、五年後であった。

長曽禰一族の末裔である虎市は、甲冑師興里を抜いて、いかなる手練者、どのような名刀をもってしても、両断できぬ兜を、鍛えあげることを、生涯の念願にしている男であった。

「ご浪人衆、お願いつかまつる」

虎市は、促した。

狂四郎は、なんともこたえずに、その兜を、見据えていた。いかにも、鈍重な作物であった。こんなかたちの冑は、遠い戦国の時代の実戦用であって、とても、当今の武家屋敷の床の間を飾る品ではなかった。

時流から遠く置きすてられた、北陸の名も知れぬ宿場外れの鍛冶でなければ、このような鈍重な作物を仕上げるのに、幾年いや幾十年の精進をつづけられるものではない。

「斬れぬな」

狂四郎は、なんのてらいもなく、あっさりと、投げ出すように、云った。

この古めかしい形をした、鈍重な冑は、おそらく、無想正宗を、一寸と食い込ませぬであろう。もし、腕の冴えによって、二寸も割ったとしても、冑は白刃を噛んで、離さず、無理に引けば、

刃こぼれさせるであろう。狂四郎には、この兜を両断しなければならぬなんの執念も、闘志も、湧きあがって来そうもなかったからである。

「なに！　斬れぬ？　試しもせずに、なんの怯懦でござる？」

虎市は、睨みつけた。

狂四郎は、冷やかに、こたえた。

「かりに、飛将上杉謙信が、小豆兼光をふるっても、据物斬りにこの兜を両断することは、不可能であろう。但し、川中島で、武田信玄が、これをかぶっていたとすれば、その限りではあるまい」

「申されたな。お手前様は、この冑を、是が非でも斬らねばならぬような仕掛けが欲しい、と申される。判った。……行かれい」

三

狂四郎が、黙って出て行こうとすると、虎市は、呼びとめた。

「今夜の宿をお教え申そう。亭主に先立たれて、後家を通している貞女の家が、三町ばかりさきの、庚申塚の右方にある。そこなら、江戸の無頼のさむらいでも、泊めてくれよう。他の家では、他国者には、檐下も貸さぬ」

事実、この街道筋は、定められた宿場以外では、旅人を受け入れてくれる家は、なさそうであった。

次の宿場までは、まだ二里の道程があって、この雪である。

虎市が、狂四郎を呼び入れて、時間をとらせたのも、おのれののぞむ家に泊らせよう下心があったからに相違ない。

当然、その家には、生命の危険が待っていると知るべきである。

狂四郎は、しずかな足どりで、ますます繁く舞い狂う寒花の中を、往還をひろって行った。

教えられた通り、三町ほど行くと、庚申塚があり、細径を十間ばかりつけたあばら家が、灯を洩らしていた。

狂四郎は、案内も乞わずに、その家の土間に入った。

広い板敷きとを仕切る破れ障子が開けられ、暗い座敷から、女が出て来た。三十ばかりであろう。顔だちは整っているが、胸でも患っているのか、異常なほど痩せほそり、立居振舞いに、陰惨とも云える暗い翳をゆらめかした。

農夫の女房というよりも、地侍の妻女とでも云えそうな風情であった。

「むこうの甲冑師にすすめられて来たが、一夜の宿を願えるか？」

「是非がございませぬ」

女は、ろくに、狂四郎を視ようともせずに、承諾した。

通された部屋が、どうやら、この家で畳を敷いてあるただの一間のようであった。まん中に、炉が切ってあり、自在からつるされた大鍋から、粥の湯気が昇って、旅人に空腹を気づかせた。

甲冑師・虎市の言葉には、矛盾があった。

他国者には、檐下も貸さぬ因習の土地柄だと云い乍ら、若い後家が、見知らぬ浪人者を泊める、という。話の筋が通らぬのである。

尤も、ただの変りばえせぬ旅籠よりも、こんな曰くありげな家の方が、狂四郎にとっては、ふさわしい、と云えた。

女が、一切口をきこうとせぬのも、気楽であった。

大鍋から芋粥を、古ぼけた椀によそって、狂四郎にすすめるのも、無言であったが、大鍋に煮られている芋粥の量は、あきらかに、客が来るのを知っていたことを、示していた。

白酒が片口に入れられたまま、置かれてあったが、狂四郎が、手をのばそうとせぬのを知ると、女は、毒味をしてみせてから、その盃を、そっと、膳へ置いた。

その仕草を眺めて、この女には敵意はない、と狂四郎はさとった。

いつか、ずっと以前に、これとそっくりの夜をすごしたような錯覚が起った。

木彫のように動かぬ表情の男と女が、交す言葉もなく、おし黙って対座して、時折り弾ぜる粗朶の火の音を、きいている。あばら家の外は、白魔が音もなく舞い狂って、地上を銀世界にしてゆくのである。

――予想される筋書では、この女が、淫婦ということになるのだが……。

狂四郎は、わざと、冷たい眼眸を、女の横顔へ、しばらくのあいだ、当てていた。

しかし、女は、なんの反応も示さぬ無表情をつづけていた。痴呆でないとすれば、虚脱しているのであろうか。

やがて、芋粥と白酒と粗朶火で、からだがあたたまった時、狂四郎が、はじめて、口をひらいた。

「泊めてもらうとすれば、この部屋のほかにないようだが……」

「貴方様さえ、およろしければ――」

「それは、こちらが申すことだ」

横になる位置が定められたわけである。姿のない敵が、指示したことになる。

狂四郎は、これまで、数多くの手強い忍者を対手にして闘って来ている。あの上杉流の忍者よりも技においてはるかに秀れている忍者を、幾人かかぞえることはできる。しかし、無声の術に於ては、曽て知らぬ達人であった、とみとめざるを得ぬ。

甲賀三郎祠にあって、天井から襲って来るまで、狂四郎は、そこにひそむのを予知することができなかったのである。その右腕を両断できたのは、間一髪の好運がこちらにあった、とも云える。

女が、急に、自分の方から、口をきいた。

「七日間の精進潔斎をせよ、と申して居りましたが、今日で、あるじの仕事はおわったのでございましょうか？」

「そなた、あの甲冑師の妻女か？」

「はい。物忌みのあいだは、ここに別居させられて居ります」

「やすませてもらおう」

女は、炉の火に灰をかけると、その上に、炬燵櫓を据え、茣蓙をかけた。綿の入った夜具の代りに敷かれたのは、藁とすりきれた緋毛氈であった。

「どうぞ、こちらへ――」

女は、南枕の牀をすすめた。

自分の牀は、その横に、東枕にとってあった。
灯心一本だけの点し火が、隙間風にゆらぎ乍ら、横たわった男女の顔に、深い陰翳を織った。
この深沈たる寂寥の中で、上杉流忍者は、無声の極意をもって、忍び寄って来る。
冑をつけているのか。
どこから、襲って来るというのか。
狂四郎は、薄闇に大きく眸子をひらいて、向うむきに寐た女の襟あしのあたりを、瞶めている。
この無表情の女は、痩せこけたからだに、意外な烈しい淫欲をみなぎらせているのかも知れぬ。
——お前の亭主は、このおれに、女房を犯すなら、犯してみろ、と挑戦している。
——しかし、据膳のくらいかたも、ふた通りある。こちらがあさましくのしかからずに、女の方から、痴情をむき出して来るのを、ゆっくりと待つという方法もある。
狂四郎としては、めずらしく、思念に迷いがあった。
この男らしく、奇襲の刹那まで、からだから一切の力を抜いているのは、いつもの危機に面した時と変りはなかったが、こうして、じっと横になっていることに、微かな焦躁が起っていたのである。
およそ、一刻が過ぎた。
と——。
不意に、女が、莫蓙をはねて起き上ると、狂四郎の上へ、身をなげかけて、顔へ顔を寄せた。
次の瞬間、狂四郎は、女をはねのけざま、無想正宗を摑んで、立った。
床下から、鋭い細身の槍の穂先が、藁と緋毛氈をつらぬいて、突き出された。

狂四郎は、目にもとまらぬ迅さで、その槍を、畳もろとも、斬った。

翌朝――。
狂四郎の痩身が、ふらりと、鍛冶屋の店さきに立った。
「あるじ、教えてくれた家は、たしかに、貞女の宿であった」
こうした場合、皮肉をあびせる冷やかな微笑は、狂四郎独特のものだが、それは、今朝の貌にはなかった。
まじめに、そう告げたのである。
昨夜、女が、狂四郎に身をなげかけて来たのは、勿論、淫欲を抑えかねたためであったが、もうひとつ理由があったのである。
女は、顔へ顔を寄せると、
「男の匂いがします。だれか、床下に……」
と、囁いたのであった。
良人に命じられて、七日間も淫欲を抑えて、精進潔斎していた女は、その嗅覚が、男の匂いに対して、極度に敏感になっていたのである。
上杉流の忍者の無声の術も、女の本能に敵わなかった。
狂四郎は、懐中にしていた物を、とり出して、虎市の前へ抛った。
それは、忍者が、切断された右手にはめていた、槍の穂先をつけた兜型の籠手であった。
籠手は、虎市の膝の前で、真二つに割れた。

雪女郎

一

「むかし――昔があったと申すと……」

齢を刻むとともに、その小柄な軀を縮めつづけて、いまは、ひとにぎりほどになった、と形容しても誇張にはならぬ老婆が、炉端に、身をふたつに折って、木皮のようにかわいた両手を、粗朶火にかざし乍ら、今宵も、昔噺をきかせようとする……。

ほかに相客もない、人の往来が一月も絶えた、吹雪の底の小さな湯の宿であった。

火は、その囲炉裏にしか焚かれないので、客も、終日、その端に、坐っていなければならないのであった。

老婆が、

「むかし――昔があったと申すと……」

と、語り出すのは、きまって、夕餉がおわった時刻である。

もとより、客に向って、きかせようとするのであったが、五日前から泊っているこの異相の浪人者は、あいにく、きかせ甲斐のない客であった。

ただの一度も、相槌を打たず、ただ、黙然としているばかりであった。どんなおそろしい場面、

いかにむごたらしい情景を語り募られようと、眉宇ひとつ動かさなかった。五感の働きをどこかに忘れて来たように、冷然としているばかりであった。

もっぱら、忠実な聞き役をつとめるのは、若い嫁であった。

いったん、加賀百万石の城下に入ろうとして、ふと、気が変って、雪が道を閉ざしたこの山奥の湯宿へ、眠狂四郎が、ひどい難渋の末に辿りついたのは、薬屋の松次郎から、

「しばらく、そこに逗留なさいまし」

と、すすめられたのを、思い出したからであった。

甲斐の国にも、信玄の隠し湯というのが、いくつか、あるように、此処は、上杉謙信の隠し湯のひとつであった。戦さで傷ついた武辺らに、療治と安息を与える場所であった。同時に、大将自身も、敵国の暗殺者が絶対に侵入して来ない憩い処にして、ゆっくりと次の政略の想を練ったのである。

したがって、いかに嗅覚の鋭い忍び者にも判らぬように、通い路さえも、ところどころふさいでしまってある人外境であった。

戦国時代そのままのたたずまいが、狂四郎の気に入るであろう、と薬屋の松次郎は、考えたのである。

ひとつには、絶え間なく、刺客から、つけ狙われていては、いかに不死身の狂四郎と雖も、時には、放心する場所を欲するのではあるまいか、と思いやったのである。

しかし、狂四郎は、松次郎からすすめられた時、その好意は、かえって、こちらの神経を休ませることにはなるまい、と考えたことだった。

なぜなら、狂四郎は、その上杉流の忍びの術を備えた刺客の右手を、肱から両断している。上杉流を修業したからには、当然、この謙信の隠し湯を知っているであろう。忍者が傷の治療をするに、最もふさわしい宿である。

狂四郎は、その予想を、しかし、渠が、ここへやって来る可能の率は高かった。
　おのが神経は、絶え間なく、刺客につけ狙われるために、きたえられているようであった。五体を憩わせていても——たとえ、深い睡眠におちていても——敵に備える神経だけは、本能のように、冴えているのであった。もし、神経が衰えた時は、どうやら、生涯を終える予告がなされた、とあきらめるまでのことである。
　おのれを知っている男であった。

二

　檜皮葺きの屋根に、五尺も雪をかぶった宿は、かなりの間数のある構えであったが、使用しているのは、囲炉裏のある広い板敷きの間のほかに、六畳の客室と、老婆と嫁のやすむ納戸だけであった。
　あるじは、冬場を出稼ぎに行き、嫁一人が、老婆につかえて、客の世話をし、終日立働いていた。
　老婆は、昔ならば、さしずめ、語りべ、というところであったろう。夕餉を摂り了えて、嫁も炉端に坐った時、昔噺をするのを、唯一の愉しみにしている模様であった。
　噺の数は、尽きることがないように、思われた。しかし、それは滞在して五日目の客の、少々

やりきれない気持であって、聞き役の嫁にすれば、たとえ噺の数が百あっても、しばらくすれば、また同じ噺をきかされることになる。

にも拘らず、色白で、すこし眇眼の嫁は、どの噺を、老婆が語り出しても、いまはじめてきくように、熱心に耳をかたむけ、せっせと相槌をうち、先をたずね、悲しいくだりでは、いまにも泣き出さんばかりに表情をゆがめ、滑稽なところでは、さも愉しそうに、けらけらと笑い声をたて怖ろしい場面には首を縮め、登場人物たちの幸運不運に、いちいち、手をたたいたり、嘆息してみせたりしているのである。

最初の夜は、狂四郎は、嫁を眺めて、

——これは、よほど利発か、それとも狡猾な女だ。

と、思ったものである。

ところが、三日も経つと、狂四郎は、気がついた。嫁は、物忘れの名人なのであった。ありようは、頭脳が弱かったのである。それが、かえって顔だちを、品よく、おっとりとしたものにしていたのである。

ひどく、臆病なのも、ただの身振りではなかった。風の音、雪の崩れる音にも、すぐ、老婆のそばへ、すり寄って行く。傭い人もいない宿で、むしろ、嫁の方が、老婆を、たよりにしているようであった。

この老婆の息子はよほどの親孝行者に相違なかった。頭脳が弱いのを承知で、嫁にもらい、お袋の昔噺の聞き役にしたてているのである。嫁は、耳に入れたそばから忘れてゆき、いつも新しい噺として、感心しているのであった。

狂四郎の食事は、そのたびに、老婆が、注意した。さもないと、一刻(とき)も一刻半も、おくれるのは、平気であったし、また、時には、朝食の膳(ぜん)を二度も、狂四郎の前に据えて、老婆に叱(しか)られ、おかしそうに笑い出したりするのであった。

狂四郎は、この宿が、気に入った。

食膳は、まことに貧しく、毎日が同じ一汁一菜であったし、夜は、炉端で、退屈きわまる昔噺をきかなければならなかったが、それらを我慢するに足りる宿であった。

狂四郎としては、いままで知らなかったくらしであった。

吹き募る吹雪の底で、老婆のお喋(しゃべ)りを、その吹雪の音と同じに、遠いものにきき乍ら、じっと、粗朶火の炎を瞶(みつ)めていると、身の内に澱(よど)ませていた業念(ごうねん)が溶けて、いつしか、血が澄んで来るようであった。

剣聖と称(よ)ばれる人々が、血なまぐさい行状ののちに、俗世を去って、山奥に草庵(そうあん)をむすび、孤独をまもり乍ら、世を果てたのが、なんとなく判るような気がした。

さて、今宵も――。

「むかし――昔があったと申すと……」

老婆の次の噺が、はじまろうとした。

流石(さすが)に、狂四郎も、狐狸(こり)や欲ばり和尚(おしょう)の、同工異曲には、いささか当惑ぎみだったので、注文をつけることにした。

「おばば――」

狂四郎は、はじめて、老婆へ視線を向けた。

「まだ、この地方で名物の雪女郎の話を、きいて居らぬが……」
そう云ったとたんに、嫁は、姑（しゅうと）にすがりつき、語りべは、何やら困惑の表情で、ちらりと客を、見かえした。
戸外では、粉雪を吹き散らす風が遠くから鳴って来て、また遠くへ去っている。
長い沈黙があった。
狂四郎は、腕を組んで、返辞を待った。
やがて、老婆は、いつにも似ずに、重いものを押し出すような声音（こわね）で、
「それを、知ってい乍ら、この宿へ来なさったか。……お武家というものは、さても、気の強いものじゃの――」
「雪女郎から抱かれる心地（ここち）は、この上ないもの、ときいて居るが……」
「そのかわり、出会ったがさいご、百に百まで、いのちはないぞよ」
狂四郎は、微笑した。
昨夜のことである。
湯殿で、首までつかって放心していた時、どこからともなく、のびやかな唄声（うたごえ）が、ひびいて来たのである。
風がぴたりとおさまって、しんしんと雪が降りつもる静寂がこめていたが、それをやぶって、湯口からもれてでも来るような、ひくい、しゃがれぎみの男の唄声であった。

　色は、まっ白けで、
　心は魔物、

抱かれ心地は、この上ないが、
聞けば、
会うには命がけ

狂四郎は、耳をすまして、きいていたが、総身の神経が急にひきしまったのは、その最後の「命がけ」という文句をきいたとたんであった。

——来たな！

そうさとったのである。

音の反響というものは、その場その場で、微妙に変化するものである。狂四郎にも、対手（あいて）が、どこで唄っているのか、判断しかねた。

ただの唄い手ではなかったのである。

隠れ場所を気どらせぬように唄っていたのである。

隻腕（せきわん）になった上杉流忍者は、こちらの予感たがわず、この山の湯へ、やって来たのである。

しかし、おのれ自身は、二度の奇襲に敗れ、傷ついて、闘う意志を喪失しているかに思える。

忍び寄って来て、のどかな民謡を唄ってきかせるのは、

——眠狂四郎よ、お主に、おのが身を円月殺法で守る自信があるならば、試（ため）しに、雪女郎と果し合いをしてみるがよい。

その意味であったろうか。

民謡は、くりかえして、三度唄われたのである。

狂四郎は、ざあっ、と湯をこぼすのを、返辞をする合図にして、無双窓（むそうまど）を開くと、

「お主(ぬし)が、のぞむなら、果し合いを、やってもよい」
と、こたえておいた。

三

狂四郎が、雪女郎の話を、所望したのは、そのためであった。
老婆は、もう十いくつの昔噺(むかしばなし)を語ってい乍(なが)ら、まだ、雪女郎の話だけは、口にしていなかった。
こちらには、催促する理由がある。
「ご存じならば、かくしだてしても、詮(せん)ないことじゃが……」
老婆は、語り出した。
禁句になっていれば、心の底には、かえって、いつかは、のこらず、喋(しゃべ)ってみたい、という衝動があったに相違ない。
いまそれが許された、とでも云いたげな語りかたであった。
「謙信様の頃から、ここらあたりは、雪女郎のすみ家でおじゃった。木枯が粉雪を呼べば、粉雪の精が凝(こ)って、女郎のすがたに化(ふ)けると申すものじゃ」
老婆は、物みなすべて、ころふけるものと信じているようであった。
ころふける、を文字に当てれば、古老化ける、となろう。
生命のない物でも、永い永い時間を経ると、生きものに変るのである。大むかしの大仏殿の朱の盆が、その名の通り、化け物になった。八幡宮の大傘(おおからかさ)も、宝蔵の中にしまわれているうちに、一脚のお化けになり了(おお)せた。みな、そのたぐいである。

「……昔むかしのことで、おじゃる。この谷あいの、奥の、またその奥に、赤松の大木がおじゃったげな。……年毎に、木枯が襲うて来て、その枝を、ひゅうひゅう、と吹き鳴らし、吹き鳴らしているうちに、しだいに、古老化けて参ったげな。ある年のことじゃ。その赤松の根かたに、千年に一度しか見られぬ、と申す白松茸が、にょきりと、生え申した。知っておじゃるか、これは、不老長寿の目出度い茸での。そのまっ白な、ふっくらとしたすがたは、けだかい上臈にも似たげな。赤松は、そのすがたを、眺めおろしているうちに、とうとう、心をうばわれてしもうたぞや。……その折、にわかに、木枯が吹きつけて来た、と思いなされ。赤松のたましいは、ふうっと、その風に乗って、飛んだ、と申す。そうして、白松茸のまわりを、かけめぐり乍ら、想いのたけを、かき口説こうというあんばいじゃ。したれども、白松茸は、木枯が呼んだ粉雪の中に、みるみる埋まって、その優しいすがたを、かくしてしもうたげな。……そこで、木枯の中の赤松のたましいは、躍起に狂いまわった、と申す。狂いまわれば、まわるほど、粉雪が飛んで来て、つもる雪は、いよいよ高くなるばかりであったぞや」

赤松の精は、こうして、風野郎になったのだ、という。

女郎恋し、と叫び乍ら、声ばかりであって、物も形もないのが、風野郎なのである。ところが、白松茸の方は、その精が粉雪に乗り移って、雪女郎となったが、ついに、声を持つことが叶わなかった。

姿のない風野郎と、声を持たぬ雪女郎が、ひそかに密会する場所がある。

それが、この湯宿から一里さきの天狗の鼻岩と呼ばれる断崖の下であった。

なんとも名状すべくもない風野郎の叫び声が狂いまわるうちに、その中に、雪女郎のすがたが、

幻のように浮かび出るのである。

だが、この現場を、見とどけようとした者は、十人が十人ともに、生きて還ることは許されぬ。なぜならば、風野郎に、恋し恋しと口説きたてられて、ついに姿を現した雪女郎は、あわれや、風野郎の声をきくばかりで、影も形もない対手に、抱いて欲しい、と願うことも叶わずに、焦躁するよりほかにすべはないのである。

そこへ、男が近づけば、満たされぬ欲情に、身もだえていた雪女郎は、忽ち抱きついて、息の根が止まるまで、離さなくなるのは、是非もない仕儀であった。

「おお、木枯が吹き居る」

老婆は、戸外の激しい唸りに耳を傾け乍ら、

「今夜も、風野郎が参り居ったぞや。……いままでに、何人、屈強な若い者が、雪女郎退治に行って、それきり還って来なんだことか――」

その嘆息をきいてから、狂四郎は、やおら、腰を上げた。

「どうやら、雪女郎退治は、私の番にまわって来たようだ」

老婆と嫁の驚きと懼れの表情を、しり目にかけて、狂四郎は、身仕度をするために、客室へ戻って行った。

四

一刻あまりの後、膝まで埋まる雪坂を登って、狂四郎の黒い痩身は、天狗の鼻岩の下に立っていた。

素朴な名称通り、雪闇の空中へ、ぬっと突出した断崖を、仰いだ時、狂四郎は、風の音に、二段にも、三段にも、変化があることを知った。
それは、ききかたによっては、まさしく、恋に狂う妖怪の悲痛な叫び声と、受けとれた。
——なるほど、風野郎は、いるらしい。
断崖の下は、空地になって居り、吹きつける烈風は、岩壁に突きあたって、巻き狂う模様であった。
空からの雪は歇んでいたが、烈風が運んで来る粉雪が、空地の中央に、高くつもって、噴きあがるように、舞いあがっていた。
しばし、凝然と、その舞い狂う粉雪の柱を、瞶めているうちに、狂四郎は、柱の中から、優美な雪女郎らしい姿が、おぼろに、輪郭を現して来るのを、観てとった。
狂四郎は、ゆっくりと、無想正宗を鞘走らせると、地摺り青眼に構えた。

宿の炉端では、老婆も口を緘んで、風野郎の叫びに、耳を奪われていた。嫁は、その袖をしっかと握っている。
「……男というものは」老婆は、そっと、呟いた。
「行くなと、止めても、肯きはせぬのじゃて」
風野郎が叫び狂った次の朝、里人たちが、天狗の鼻岩の下へ登りついて、吹きだまった雪を掘りかえしてみると、制止をふりきっておもむいた若者が、雪女郎を抱きかかえたかたちで、凍死しているのであった。

……また、一刻が過ぎた。

風野郎の声が、遠のいたようである。

嫁は、怕わ怕わ、戸口の隙から、外を窺った。

また、音もなく、粉雪が降って来ていた。

その中から、黒い影が、ゆっくりと近づいて来た。

近づくにつれて、その一歩一歩が、蹌踉として、堪え難い苦痛を怺えているものに、見てとれた。

「も、もどって来なさった！　もどって！」

嫁は、狂気のごとく、戸をひき開けて、とび出すと、狂四郎の腕を、肩にかけた。

土間に入って、粗朶火に照らされた狂四郎の面貌は、死相に似たもの凄さであった。

やがて——。

狂四郎は、湯殿へ入った。

浴槽に身を沈めると、燈心一本の暗さの中にも、みるみる、黒い油が、湯を汚すのが見わけられた。

狂四郎は、槽縁に、後頭を凭りかからせて、目蓋を閉じた。

雪女郎に対する狂四郎の円月殺法は、四半刻それ以上も、つづけられたであろうか。

いましばらく、雪女郎が、立ちつづけていたならば、その場へ仆れ、凍死したに相違なかった、と思う。

唸る旋風が、粉雪の円柱を立てている時間には、限度があった。

こちらが仆れるより先に、雪女郎は、消えたのである。

——それにしても、と狂四郎は思った。

——おれの円月殺法が、生命も持たぬ自然の変化現象に、勝ったとは！

円月殺法は、殺気をみなぎらせた生きている人間に対してのみ、その冴えを発揮する業であった。

おのれ自身は、人の生命を奪う業念に呻きつつ、対手を、虚空の中に喪神せしめ、その喪神の状態から、撃って来るのを、一太刀に斬るのであった。

ところが、岩壁に突きあたって起った旋風の生む雪女郎に、円月殺法に誘われる生命があるべくもなかった。

それを、雪女郎と信じ、魔気があると思い込むのは、精神の弱さである。

白い円柱が消えるまで、ふみこたえたのは、おのが心にうち克った証左である。描きつづけた円月が、おのが心にうち克たせた、ということになる。

——これを悟り、というのか。

狂四郎は、自分に呟いて、ふっと、笑った。

悟るために出むいたとしても、それだけの身仕度はして行ったのである。全身にくまなく油を塗って、風野郎から体温を奪われないようにして行ったのである。

その心がけがなかったならば、いかに狂四郎と雖も、四半刻以上も、無想正宗に円月を描きつづけさせることは、不可能であったろう。

と——またしても、湯口に声がした。

「お見事な円月殺法、たしかに拝見つかまつった」
狂四郎は、その讃辞をきくと、目蓋を閉じたまま、
「忍び殿、お主にたのもうか」
と、云った。
「承わろう」
「あの天狗の鼻岩とやらを、お主の手で、崩してもらおう。あの奇妙な岩が、空中に突出している限り、毎冬、旋風は雪柱を立て、血気の冒険好きを、誘い殺すであろうからな」

梓巫女（あずさみこ）

一

「おう、おう——みんな、びっくりしやがるな」
街道すじの居酒屋へ、地廻りらしい若い男が、縄（なわ）のれんをはねて入って来ると、大声をたてた。
店には、仲間らしいやくざ装の男たちが、四五人、屯（たむろ）して、陽（ひ）はまだ高いにも拘（かかわ）らず、酔っていた。
「誰が、びっくりすると云った。とんちきめ。おらあ、婚礼の晩に、嬶（かかあ）が土器（かわらけ）でも、平気の平左だったんだぞ」
「やい仙公（せんこう）、河童（かっぱ）に、釜（かま）でも抜かれたと云（い）やがるのか」
「そんなんじゃねえや。昨夜な、死んだ女房と三年ぶりにめぐり逢（お）うてよう、赤い湯もじを解かせて、なつかしい棚（たな）っ尻（ちり）を拝んだんだぞ。それでも、びっくりしやがらねえか」
「嘘（うそ）をこきやがれ。寝ぼけやがって、裏の小便担桶（たご）で、面（つら）を洗って来い」
「本当なんだぞ。おめえら、大庄屋に、梓巫女（あずさみこ）が来て、亡者を呼び出しているのを知らねえのか」
「きいてら。梅干婆あだろう。間抜けめ、てめえ、婆あに裾（すそ）をまくられて、死んだ嬶のものだと、

拝ませられやがったのか。頓馬野郎！」

げらげらと、野卑な笑いをあげて、やくざたちは、さらに、聞くに堪えぬ猥雑な土語を、吐きちらした。

それと対蹠的な光景が、広土間とを仕切る破れ衝立の蔭の畳の間に、在った。

ふる里へ、まわる六部は気の弱り——という川柳があるが、おそらくは、能登あたりへ帰ろうとする者であろう、旅に疲れた老いの身に、この寒さがこたえたか、激しいさしこみに堪えかねた巡礼が、痩せたからだを、二つに折って、俯伏していたのである。

かたわらに、孫らしい十二三の少女が、しょんぼりと坐っていた。

そして、すこしはなれた場所に、眠狂四郎が、黙然として、濁醪を盛った五郎八茶碗を、口にはこんでいたのである。

路傍に、笈摺に凭りかかって、呻いていたのを、見過しにはできずに、ここまで連れて来てやった狂四郎は、聊か当惑のていであった。

日が昏れるのは、もう間近い。狂四郎としても、宿をとらねばならないが、行きがかりにひろった年寄と少女を見すてるわけにはいかなかった。この居酒屋の小女を走らせて、薬を買って来させたが、一向に効目はあらわれてはいなかった。

ひとつには、無智で粗暴な庶民の世界の中で、おのが孤独を守ることに馴れている狂四郎も、この居酒屋でさわぎたてているやくざたちの、あまりの下種ぶりには、いい加減うんざりしていた。

泰平の世のはきだめから生れて来たくそ蠅どもは、どこの土地でも、下種さに変りはないのだ

が、いま土間で騒ぎたてている連中のいやしさと来たら、流石の狂四郎をして、思わず、舌打ちさせたくなる。

なかでも、兄哥きどりの奴は、頭のてっぺんから出すような疳高い声で、わざと女の言葉づかいを得意げにやり乍ら、手拭いをひねくりまわして、男根そっくりの形につくりあげるや、小女をとっつかまえて、口へ押し込んでみたりして、悦に入っているのであった。また、一人は、殊更に、漆で黒く塗った大蛤で片目をかくして、いかにも凄味のある悪党面にみせかけ乍ら、しきりに、利いた風の口のききかたをしようとしているのだが、泥くさい駄洒落は、聞くだに鳥肌がたつようであった。

五月の蠅ならともかく、冬の蠅なら、もうすこし神妙に、天井の片隅にへばりついているべきだ、と狂四郎は、そろそろ我慢も限度に来た気持でいた。

仙公のすぐあとから、縄のれんを怯ず怯ずとくぐって、入って来たのは、赤い角巻きを頭からかぶって、藁沓をはいた女であった。角巻きの蔭からのぞいた白い顔は、まだ十八九のものだった。

「おうっ、赤貝様のご入来だぞーっ」

「へっへっへ、今年の田植えで、泥鰌と田螺をおどかした娘っこじゃのう。

タタタ、田の中で

おぼこが可愛いや、水鏡

どじょうが、びっくりして泥もぐり

たにしが、はずかしゅうて蓋をする」

「おらあ、泥鰌になりてえぞ。泥にもぐり込む代りに、股ぐらの方へもぐり込みてえ」
娘は、しかし、かたくこわばった面持で、土間に入って来ると、
「どなたか、これを、買って下されませぬか？」
と、言葉づかいも鄭重に、紫色の袱紗に包んだ品を、とり出してみせた。
「お――合点、おらあが、引き受けた」
一人が、さっと、寄って、ひったくるようにして、受けとると、うやうやしく、頭上へ捧げてみせてから、袱紗を披いた。
「こりゃ、どうだ。開けてびっくり――お大名持ちの金蒔絵だあ――」
指さきに吊したのは、たしかに見事なつくりの印籠であった。
「さあ、お立合い。これなる金蒔絵の印籠に入れましたるは、これはこれ、唐伝来の鶯命丹――腹は立たずに魔羅が立つ。腎虚をなおすに、手間ひまとらさぬ。もらさず、萎えずに、女が悦ぶ。ありますものは、玉鎖丹に人馬丹。陰陽丹に地黄丸、得春湯に西馬丹、床の海から乱れ髪……。さあさあ、どうだ。なんぼで、買う？」

二

やくざたちが、勝手なふみ値を喚き立てた時、突然、じゃんと金属音が、飲み台で鳴った。革財布が、衝立のむこうから、抛られたのである。音が、その重さを示した。
店内が、一瞬、しーんとなった。
「その印籠を、ゆずってもらおう」

狂四郎は、まだ、そこに坐ったまま、云った。

黒蛤の男が、小ずるい手を、財布に、さしのべた瞬間、狂四郎は、

「まだ、取るのは早い」

と、云った。

「た、高けえぞ」

印籠を持った若いのが、叫んだ。

狂四郎は、やおら、腰を上げると、土間へ降りて、その印籠を取った。

小女に、湯を一杯持って来るように命じておいて、印籠の蓋を抜いた。黒い丸薬が、幾粒か入っていた。

「これを、あの巡礼に飲ませてやってくれ」

湯を持って来た小女の掌に、三粒ばかりのせておいて、狂四郎は、抛った財布から、一両小判を一枚とり出すと、印籠の売り手へ、渡した。

「有難う存じました」

娘は、無表情で、頭を下げると、出て行った。

やくざたちは、尾羽打ち枯らしたかにみえる素浪人が、どうやら、三四十両も入った財布を持っていることに、あきれて、声を出すのを忘れていた。一両小判など、三年に一度も、手にしたことのないような連中だったのである。

狂四郎は、元の座に戻って、再び、濁り酒を飲みはじめた。

その丸薬の効能は、覿面であった。老巡礼は、呻きを止めると、身を起し、ほっと深い溜息を

ついて、「いのちびろいを、いたしました」と、云った。

狂四郎は、冷たい眼眸で、その様子を見戍っていたが、

「爺さん、芝居は巧いな。どうやら、祭礼から祭礼へわたりあるいて行く緞帳芝居の役者のなれの果てでもあるのか」

と、云った。

老巡礼は、顔色を一変して、あとずさった。

「たったいままで、だまされていたが、やはり宮地芝居のどさ臭い役者では、尻尾をかくしきれぬようだ。恢復のしかたに工夫が足りなかったようだな」

狂四郎は、薄ら笑った。

それから、不意に、眼光を鋭いものにすると、

「この印籠を持っていた分限者は、さきほど、そこの破落戸たちが噂していた、梓巫女を逗留させている大庄屋だな？」

と、問うた。

巡礼に化けた田舎役者は、怯え乍ら、頷いた。

狂四郎が、この年寄を、贋巡礼と看破したのは、ただ、さしこみがなおったふりをする演技が下手だったばかりではなかった。

今日の午頃、狂四郎は、この平野へ降りるとある峠の上の茶店で、身なりのいい主従に出会っていた。下男が、遽に、腹痛を訴えて、蹲み込んでしまうと、主人は、いそいで、印籠を腰からはずして、口にふくませてやった。すると、下男は、みるみる元気をとりもどしたことだった。

やはり、越中に入ると、薬の名所だけあって、よく効く薬を持っているものだ、と感心したものであったが……。
主人は、名字帯刀を許された、しかるべき大庄屋と、見受けられた。
その大庄屋の腰にあった印籠に、はからずも、半日後に、こんな居酒屋で、再会したわけである。折も折、さしこみで苦しんでいる巡礼をひろった狂四郎の前に、持ち運ばれて来たのである。
偶然にしては、できすぎていた。何者かが、筋書きを作ったのではないか、という疑惑が、ふっと湧いた瞬間から、狂四郎の老巡礼の様子を看る眼眸が、鋭くなったのである。
どうやら、狂四郎にとって、一泊する今夜の宿は、おのずと決定した、というべきであろう。

三

狂四郎は、雪道の白さだけが昏れのこった時刻、その大庄屋の大層な構えの長屋門をくぐった。
玄関に立って案内を乞い、出て来た若い男に、
「旅の浪人者が、今宵の宿をお願いする。これは、ほんの挨拶のしるしまでに、御主人のお手許に——」
と、印籠を、膝の上へ抛った。
由緒ある家柄であろう、ただの民家の造りではなく、通された座敷の襖も天井も、位を持った公家武家を入らせるに足りる格式を示していた。
上座を設け、御簾まで垂らしてあった。壁ぎわに立てられた地獄変を描いた六扇屏風も、古いものらしく、銭形の円い革で、扇をつないであった。

——よほどの旧家だな。

合点した狂四郎は、ふっと、まだ見ぬ奥能登にある「時国館」を連想した。

別の若い男が入って、鄭重な態度で、

「すでに、夜のことなれば、あるじは、明朝罷り出まして、失った印籠をおひろい下さいましたお礼を申上げたい、と申して居ります。お食事のあとは、ごゆるりとご休息頂きとうございます」と、挨拶した。

若い男が立たぬうちに、膳部が運ばれて来たが、狂四郎は、

「寒さしのぎに、すでに酒を入れて居り申す。膳はお下げ頂こう」

と、辞退した。

若い男は、敢えてすすめず、

「片田舎のこととて、江戸のお方をおもてなしするすべとてございませぬ。ただ、庭の雪景色など、すこしは、おもしろうご覧ねがえるか、と存じ、灯をともしておきました故、お気が向きましたならば、縁側へお立ち下さいますよう——」

と、云いおいて、下って行った。

狂四郎は、障子を開けてみた。

幾月ものあいだ、雪に掩われる土地だけあって、庭の造りも、そのことが配慮されてあった。

しかし、狂四郎は、その風雅なたたずまいを観賞する前に、心字池のむこうの築山の上に並んだ物へ、じっと、視線を止めていた。

それは、雪で造られた四基の墓であった。灯が、その墓に、細い炭をはめて描いた一字を、浮

きあがらせていた。

「霊」

そう読めた。

その形も、その一字も、これは、あきらかに、江戸郊外の渋谷の丘陵にある狂四郎の母、美保代、静香、そして狂四郎自身が入るであろう墓を摸(も)したものであった。

いやがらせである。

おのれが背負うた業苦を、あらためて、さとるがよい。そういう意味の作為であろう。

「いやがらせとしては、上出来だな」

狂四郎は、苦笑した。

これまで、数知れぬほどの手段で、敵がたから、その宿業をあざけられ、死の世界へ送る予告をされた男であった。したがって、おおよそのいやがらせに対しては、冷然として来ている。印籠を小道具に使って、招き寄せ、亡(な)き母や妻の墓を、雪で造ってみせるとは、なかなか手がこんでいる。

これは、こちらで、率直に、みとめてやるべきであろう。

狂四郎は、しばらく、縁側に佇立(ちょりつ)して、四基の雪墓を、眺(なが)めてやって、動かずにいた。

座敷に戻った時、すでに、褥(しとね)が延べられていた。

無想正宗(まさむね)を、枕元(まくらもと)に置き、そのままの装(なり)で、横になると、目蓋(まぶた)を閉じた。

……母と美保代と静香の俤(おもかげ)が、つぎつぎ、泛(うか)んで来た。

三人の不幸な女性(にょしょう)との思い出を、記憶に甦(よみがえ)らせようとして、雪墓を造った敵がたのねらいは、

効果があったわけである。

しかし、狂四郎の心をみだしておいて、その隙を衝くのが目的とすれば、それは、徒労であったことになる。

湿った感慨を催す心と、忍び寄る刺客へくばる神経とは、完全に別にきりはなせる狂四郎であった。

——いつ、襲って来るか？

それを、むしろ、待っているのである。

……半刻が、過ぎた。

何事も起らなかった。敵が、いかに気配を断っていても、こちらには、霊感ともいえる冴えた神経の働きを用意してある。

たとえ、音もなく、どこから、襲って来ても、間髪の間に、自由に動けるように、心にも身にも、充分に、余裕を持たせ、力を充足してあるのであった。

敵が、こちらの睡るのを待っているとすれば、それも、無駄であろう。ねむりつつも、本能となっている神経は、冷たく冴えているのである。

その自信がなくして、どうして、わざわざ誘いに乗るものであろうか。

狂四郎は、睡ろうとした。

その折であった。寂寞たる夜気を破って、

びーん

びーん

と、弦の音が、ひびいて来たのは。

四

狂四郎は、闇にまなこをひらいた。

居酒屋で、仙公というやくざが、死んだ女房に会った、と告げていたが、その霊媒をした梓巫女が、作業を開始した模様である。

やくざの一人は、巫女が梅干婆あだと云っていた。

狂四郎の脳裡には、忍法無影流戸越家の老婆の貌が、容易に、描かれていた。

梓巫女というのは、梓弓の弦をはじき乍ら、その単調な音で、願い人を催眠の術にかけて、所望の死霊、生霊を呼び出して、幻影を眺めさせ、その声をきかせるのであった。

弦の音は、執拗に鳴らしつづけられる。

かなり遠い部屋から、ひびいて来るのだが、深沈とした雪の中の静けさは、針の音ひとつ落ちても、はっきり、きこえさせるばかりなので、この音を、遠くへ押しやることは、不可能のようであった。

と――。

ひくいむせび泣きの声が起った。

その泣き声も、かなり長く、つづいた。

やがて、それがおさまると、いかにも、かぼそげな声音で、かきくどきはじめた。

「……狂四郎殿。わたくしです。……おわかりでありましょう。母じゃ。母です。……そなたは、

わたくしの許へ、つぎつぎとあわれな、不幸な女子を、送って寄越された。そなたは、そなたの従妹の静香を、わたくしの許へ、はこんで来やった。次いで、妻の美保代のなきがらを、背負うて来やった。……そなたは、出会うた女子を、つぎつぎと不幸にしやった。あたら、花の盛りを、散らせたのは、そなたがひとえに、悪業を積むゆえじゃ。……狂四郎殿。そなたは、また一人、不幸な女子を、つくられたな。……千佐と申す女子のことじゃ。そなたは、千佐を、見すてて、江戸を出て来やった。千佐は、静香や美保代と、同じ、死出の道を、歩もうとして居りまするぞ。……それでも、よろしいのか。歩ませても、平気でお居やるのか。……千佐を、あの世へ送っても、平然としていやるのか。……おのが業苦を、あさましゅうは、思われぬか。あわれや、千佐は、江戸で、血を喀いて、病いの牀に臥して居りますぞ。……はよう、戻って、看てやるが、よい。……狂四郎殿、おのれの目をさまして、尋常のくらしをする秋が、参ったのじゃ。……江戸へ、戻るがよい。……一日も、一刻も、はよう、戻るがよい。千佐は、死にまするぞ。そなたが、戻らぬと、千佐は、たった一人で、さみしゅう、この世に別れを、告げますぞ……」

きいているうちに、狂四郎は、猛然とはね起きて、その部屋へ躍り込み、巫女を一刀両断にしたい衝動にかられた。

敵の陰険な策に乗るまい、と制える理性が乱れたわけではない。

ただ、亡き母の口を借りて、こちらを誘発しようとする敵の卑劣が、許せなかった。

「——斬るか！」

ついに、狂四郎が、口走った。

その時、狂四郎の総身が、鋭くひきしまった。

気配ともない気配が、近くに、迫り寄ったのを、察知した。どの方角かは、さだかでなかった。
不意に、地底からつたわって来るような忍び声が、耳にとどいた。
「敵意は、あり申さぬ」
そう云った。
「先般、お手前に、右腕を斬り落された上杉流忍び者でござる。寒川笑左衛門と申す。お手前を討つべく、この一ト月、昼夜つけ狙(ねら)って、果さず、ついに、お手前に、頭を下げ申す。……いや、これをしも、忍びの謀(はか)りごとと、受けとられるな。まことでござる。いま、庭にて、お手前を襲わんとしたそれがしの仲間を二名、仆(たお)し申した。墓もとりはらい申した。……それがしは、裏切り者になり申した」
「…………」
「お願いつかまつる。そのまま、しずかに、お睡り下されい。それがしが、ここにて、警護つかまつる。かまえて、お動きめさるな」
「…………」
狂四郎は、目蓋を閉じた。
——おれが、裏切り忍者の護衛で、ねむる。
闇にうかべた微笑は、穏やかなものであった。

おのが道

一

夜が明けた。
眠狂四郎は、褥(しとね)から起き上ると、
——よく睡(ねむ)った。
と、おのれに呟(つぶや)いた。
これほど、前後不覚に睡ったのは、幾日ぶりであろう。
絶え間なく、つけ狙(ねら)われていることには馴(な)れている身であったし、それに備えたねむりかたを心得ている男であった。そのために、身心が疲労するということはなかった。
しかし、前後不覚の熟睡をしてみて、護衛者のいることが、いかに、気楽なものかを、はじめて知った。
「お目ざめか」
姿もかくれ場所も知らせぬ護衛者が、声をかけて来た。
「お主(ぬし)のおかげで、夢もみずに、ねむりこけた。礼を云わねばなるまい」
「礼を云ってもらうのは、まだ早い」

「なぜだ？」
「いずれ、わかる。……むこうの、炉の切ってある部屋で、この家のあるじが、お手前の起きるのを、待っているようだ」
狂四郎は、縁側へ出た。
空は美しく霽れて、一片の雲影もとどめていなかった。庭の雪が、朝陽に、まぶしく反射している。
本間佐兵衛という、この大庄屋は、彼方にかすむ山岳の麓まで、おのが土地だけを踏んで行ける、という。いや、その山岳さえも、わがものだという。
その大分限者が、なぜに、忍者団に、荷担するのか？
狂四郎は、茶室風のその座敷に入って、炉辺に、端座している人物を、視た。
白髪の、瘦せた年寄であった。風格はあるが、想像したのとは、およそかけはなれた容貌で、目もとや口もとには、旧家のあるじにふさわしからぬ険があった。
狂四郎が入るや、円座を下って、両手をつき、
「昨日は、失せ物をおとどけ下さいまして、忝のう存じました」
と、印籠の礼をのべた。
印籠を小道具につかって、おびき寄せておき乍ら、何食わぬ態度である。
「失礼でございますが、失せ物をご判じなされたのは、易でもおたしなみなさいますか？」
点前ののち、大庄屋は、ぬけぬけと、その質問をしかけて来た。
「あいにくだが、他人のことには無関心だし、おのれのことは、身の末が瞭然としているので、

易などとは無縁に生きて居る」

「身の末がはっきりしている、と仰言いますと？」

「のたれ死するであろう、ということだ」

「成程――」

対手は、平然ときいた。

瞬間――。

狂四郎は、

――この老人自身、もしかすれば、忍者かも知れぬ。

という疑惑を持った。

「うらないごとなど、信じないので、昨夜は、程よく睡らせてもらった」

狂四郎は、皮肉を投げた。梓巫女が、亡き母を呼び出して、くり言を云わせたことであった。

こちらは、それに、乗らなかったのである。

このあるじが、そのことに不審を抱いていない筈はないのである。

あるじは、狂四郎を、じっと見据えて、

「江戸へ、おもどりになるように、お察し申しますが、およろしければ、江戸まで通しの早駕籠を、用意いたさせましょう」

と、云った。

「なにせ、これから西へは、街道がふさがって居ります」

加賀へ入るのを中止して、江戸へ帰るなら、こちらには、鄭重に扱う用意がある、という謎で

あった。

狂四郎は、それにこたえるかわりに、膝の前に置かれた菓子盆から、竹箸を把った。

菓子をつまむためではなかった。

炉火にあたためられた座敷の空中を、冬の蠅がいっぴき、うなりをたてて、舞っていた。

狂四郎は、目に見えぬ速度で旋廻するそれへ、視線をゆっくりと配っていたが、一瞬、さっと、宙へ竹箸を、突き出した。

あるじは、凝然として、狂四郎の為すことを、見戍っている。

竹箸は、見事に、蠅を捕えていた。

狂四郎は、それを、炉火の中へ、落した。

それから、あるじへ、冷たい眼眸を返して、

「風韻を旨とするこうした雅びな部屋にも、作法を知らぬ糞蠅が、迷い込んで来る。気をつけたがよい」

そう云いすてると、立ち上った。

あるじは、言葉もなかった。

二

狂四郎は、そのまま、大庄屋の屋敷を出て、雪道を踏んで行った。

すべてのものが、ふっくらと、白一色に掩われた景色は、虚無の男の心をも、その清らかな風情の中へ溶くようであった。

道が、四つに岐(わか)れる辻(つじ)に出て、狂四郎は、加賀への街道へ、目を置いた。
とたんに、
「思案されい」
その声が、かかった。
人影はなかった。
狂四郎は、東側に建つ古びた阿弥陀堂(あみだどう)へ、視線を向けた。
堂内にひそんで、待っていたのである。
狂四郎は、歩み寄ると、檐下(のきした)に入って、わざと内部を覗(のぞ)かぬように、濡縁(ぬれえん)へ腰を下して、穏やかな朝陽(あさひ)の盈(み)ちた宙へ、眼眸を据えた。
「忠告を、きこうか」
「申上げる」
狂四郎に片腕を両断されて、闘志を喪(うしな)った上杉流忍者は、こもり声で、語りはじめた。
「お手前の行手に、待ち伏せる忍者は、五派からそれぞれ、えりすぐられた達人と心得られい」
「五派とは？」
「上杉流、武田流、真田(さなだ)流の三流のほか、古流を誇る源氏・平家の二流でござる」
「やとったのは、前田宰相か、それとも銭屋五兵衛か？」
「やとったのが、加賀百万石の権力であろうが、銭五(ぜにご)百万両の金力であろうが、そんなことは、問題ではござらぬ。お手前が、心されねばならぬのは、集った五派の忍びたちが、独立不羈(ふき)の性根に、戦国以来の矜持(きょうじ)を植えていることでござる」

思えば――。
戦国の時代にあっては、日本全土に割拠した群雄は、権謀術数を為す上に、当然、おのが領土に、忍びの術者をやしなった。
孫子の兵法にも、
「凡そ師を興すこと十万、出でて征すること千里、百姓の費、公家の奉、日に千金を費し、内外騒動し、事を操るを得ざる者七十万家。相守ること数年、以て一日の勝を争う。而るに、爵禄百金を惜しみて、敵の情を知らざる者は、不仁の至なり。人の将に非ざるなり。主の佐に非ざるなり。勝の主に非ざるなり」
国土に最大の犠牲を強いる以上は、戦いに勝たねばならぬ。それには、まず、敵情を知っていなければならぬ。
「先ず知るは、鬼神に取る可からず、事に象る可からず、度に験す可からず、必ず人に取りて敵の情を知る者なり」
敵情を予め知るには、鬼神にきいたり、卜筮で占ったり、他事に擬象して推測したり、また日月星辰の運行の度を計ったりしても、所詮無駄で徒労である。すべからく、人間の耳目をもって、探るべきである。
すなわち、間諜を用いる。
戦いというものは、正を以て合し、奇を以て勝つ。その奇の極まるところに、忍びが生じる。
ところが、元和偃武から二百年を経て、忍法を継ぐ者たちもまた、表向きの知行取りとなり、氏名まで明かにして、門戸を張って、その秘術を、錦の袋に入れて床の間に飾った巻物の中で、

紙魚にくらわせている。

伊賀衆、甲賀衆と称して、江戸の一区劃に屯し、他の旗本と聊かも変らぬ日常生活をいとなんでいるのが、その証拠である。小普請方、御広敷、七つ口、御錠口番、空屋敷番、城内郭内の番士などを勤めるのに、骨身を削るような忍びの修業など、必要ではなくなっていたのである。

そのむかし、伊賀者、甲賀者は、剽悍無比の忍び武辺であった。

天正十年六月、織田信長が、本能寺に斃れた際、徳川家康は、泉州堺に在り、変をきくや、急遽東帰の計を案じた。

本街道を経由せず、大和より木津川の上流に出て近江信楽、甲賀の山中を経て、伊賀より伊勢へ出ることにした。

わずか数十騎で趨るのであったから、途中無数の山賊、野伏の襲撃を覚悟しなければならなかった。ところが、木津川の上流をのぼらんとした時、忽然として、異様な黒装束の一団が出現して、家康一行の前後を護った。すなわち、服部半蔵を頭領とする忍者二百人であった。家康は、おかげで、伊賀の上柘植より東行して、鹿伏兎の深山嶮路を無事に越えるを得た。後年、家康は、服部半蔵を隊長とする伊賀衆三百人を江戸へ呼んで、同心として、その功にむくいた。

また、甲賀衆は、関ヶ原の合戦に於て、発生した。甲賀の忍び士を率いた山岡備前守景友入道は、大鳥居に於て、長束大蔵少輔正家の手勢を四散せしめ、桑原城を襲って、氏家内膳正兄弟を降し、さらに、神戸、亀山、水口等の城を次々と陥落せしめて、大津に到着したものであった。家康は、この功を賞して、後年、討死した甲賀の忍び士の子息らを呼び寄せて、同心にとりたてたのであった。

これら抜群の働きをした伊賀・甲賀衆も、代が移るにつれ、泰平の治世になっては、本来の職掌である密偵、敵城潜入の秘術を忘れて、その名ばかりをとどめるのみである。

いま、狂四郎に立向って来る五流派の忍者らは、それら伊賀・甲賀衆とは全く対蹠的な存在であった。

戦国の乱世に、主家が滅び、あるいは、強権に屈服するや、ひそかに去って、山野に忍びかくれて、その密を伝え継いだ面々であった。忍という意味からすれば、正統と認むべきであろう。氏も素姓もかくして、異常の術を承け継いで、忍び徹したのである。

上杉流は、すでに、登場している。その無声の極意は、狂四郎にさえ、その存在を知らしめないのである。主家上杉家が転封されてのち、山中にこもって、ついに、越後を去ることがなかった。

この上杉流に対抗して、死闘を演じたものに、武田流があった。武田の軍学が、世におもねって江戸へ出ても、忍法ばかりは、八ヶ岳にのこって、もっぱら狩猟を生活と修業に兼ねて、その業を研磨して来たのである。

上杉・武田の二流に対して、真田流は、主君幸村にしたがって、その土地を変えている。しかし、真田家にあっては、その旗本はじめ、足軽にいたるまで、忍びの術に長じていた事実がのこっている。大国に挟撃されつづけた真田家としては、奇兵を以て敵の意表を衝く戦略を専らにしたためであろう。

領地を失って、高野山麓九度山に、真田昌幸・幸村父子が、隠棲した時、つき従うた三百八十騎は、悉く一流忍者であった、という。

もとより、忍者には、城を枕に討死する気風はない。忍者が自らを殺すのは、敵に生捕られ、重傷を蒙っていて、万に一も遁れる可能がないとさとった時のみである。味方の軍勢が潰滅した時は、ただ、おのれらは姿を消すのみであった。

真田幸村が、大坂落城後も、平然として、生き残っていたことに不思議はない。白髪翁となってからも、自ら隠れ五万石と称して、黒部渓谷を館とし、その数奇な生涯を、そこで閉じている。真田流が、この地に伝承されたゆえんであり、人跡未踏の黒部の奥に在りという幻の滝を本尊とする修験道の集団が、その苗裔であろうか。首領の名さえ、単に「影」と呼ばれているだけだ、という。

変幻をきわめるその秘法は、他流から最も畏怖されている。

三

扨、以上の上杉・武田・真田の三流を近体というなら、古流と称すべきは、源氏・平家の二流であろう。

源氏流は、木曽に伝えられている。木曽義仲の豪勇を生んだ尚武の世界から生れたものである。平家に非ずんば人に非ずと、その鷙兇の翼を張った清盛時代に、ひそかに、木曽山中に武技を練った古武士の風格を伝えるものである。

およそ、源氏一門は、人と為りが豪壮勇健で、廉耻を守り、名節を以て相磨礪し、誓って凌辱を受けず、法刑未だ加えざるに、先ず自ら刃に伏すの気風があった。

保元の乱に――。

源義朝は勅命によって已むなく、諸弟を喪わんとした。その時、九歳になる鶴若は、

「何しに我らをば失わんとするか。我ら四人は郎党百騎にも勝りなんずるものを」

と、なげいた。

すると、十三歳になった乙若が、

「あな心憂の者共の云いがいなさや。我らが家に生れる者は、幼けれど心は武しとこそ申すに、斯く不覚なる事を宣うものかな」

と、云って、従容として死に就いた、という。

近体から観れば、甚だ荒削りで、素朴な面目であろうが、身心を最も苛酷な条件の下に虐め抜く忍びの術の修業に堪えるためには、この上もなくふさわしい気概と云えた。

義仲が、平家の公達の率いる大軍を、倶梨伽羅峠に迎え撃って、牛の角に、松明をゆわえつけ、この狂牛の群を、一挙に敵中へ追い落したごとき、まことに、源氏流の面目躍如たるものがある。近体が、六無の技術にこだわりすぎるきらいがあるのに対して、古流の豪快な勇猛ぶりは、かえって、忍法本来のすがたとさえ、思わしめる。

源氏と対照するに、平家は、やはり節操名節を砥礪することに於ては同じだが、地下人の粗野から脱して、薩摩守忠度、三位行盛の如き鉄中の錚々たる者にして、行陣の間に静かに心を風月の境に馳せ、三軍を叱咤する余暇に吟咏諷誦を以てその懐を遣る、高雅の趣をそなえていた。事を処するに、柔軟であった。

平家の落武者たちは、未開の山谷原野に遁れても、そこに都ぶりの生活をつくりあげたのである。

その落武者らが、生んだ忍法もまた、柔軟であった。美しい虫の音、鳥の啼き声を、口笛に吹いて、対手の警戒心を解くがごとき技は、平家流が生んだものであろう。

孰れも、面のように表情をひと色に保って、行動するのである。

以上の独立不羈を誇る五つの流派から、それぞれ一人ずつえらんだのは、加賀百万石の権力か、銭五百万両の金力かは知らず、事態の容易ならぬことを示している。

眠狂四郎を、加賀の領域に入れてはならぬのである。

単独行動を本領とする忍者が、組を織てる場合、当然そこに約束が生じる。二人組の場合を、「割符」という。木片・紙片・貝殻などを二つ割にして、それぞれが持つ。山と問えば、川と答える合言葉も、それである。

単独行動に比せば、陰・陽の双術を同時に使える利点があるのは、勿論である。

三人組を「鼎」とも「三羽鴉」ともいう。鼎が三本の脚で立つことは、いうまでもないが、三羽鴉というのは、熊野で起った独特の忍法であり、天・地・人を表し、実践行動をする者を、他の二人が、天と地——即ち、上と下から支援する。

伊賀衆などは、「鴉」とは、暗夜に飛行する術と心得ているが、かりに、屋根から屋根へ飛び移って行く姿を見たとしたならば、それは、地上の仲間の行動を援けるため、敵の目を晦ます虚術であった——という場合が、すくなくないのである。

四人組を、四天王という。東西南北の意味である。包囲体勢から、同時に行動を起して、たとえ三人は仆れても、最後の一人が目的を達する非常の手段に徹しているのである。

五人組を、五色という。これは、他流同士の術くらべを意味する。凡そ隠微な行動を生命とする術者として、組を織てるのは四人が限度である。五人が集るのは、それぞれ、順位を定めて、一人ずつが、敵に向って行く場合のみである。その順位を定めるのは、籤を引く。これに、五色を用いる。

由来はさだかではない。その色に、各々名称がついていて、黒主、赤染、黄門、青竜、白虎となる。

各流からえらばれた五人の術者は、その順位によって、一術ずつを発揮して、敵を撃たんとするものである。

いわば、他流に対して、おのが秘術を公開するわけであるから、これはよほどの高い報酬が約束されていることになる。

上杉・武田・真田・源氏・平家の五流の忍者たちは、その順位をいかに定めたか知らぬが、その得意の秘術をもって、眠狂四郎に、立ち向って来る手筈を、ととのえている、という。

阿弥陀堂内からの忠告を、ききおわった狂四郎は、この男としては珍しい明るい微笑を、その異相に刷いた。

「孫子にあるな。声は、五に過ぎざるも、五声の変は、勝げて聴く可からず。色は、五に過ぎざるも、五色の変は、勝げて覧る可からず」

「…………」

「ところが、わたしの前に立ちふさがる忍者たちは、それぞれ、一色だけを、術に用いようとす

る。そうだな？」
「左様――」
「とすれば、この痩浪人にも、反撃するに、さまでの苦労は要るまい」
色というものは、黒、赤、黄、青、白それぞれが、単独であれば、色盲でない限り、常に覧るを得る。ただ、それらが、文采錯襍するにいたっては、どの色とどの色がまざったか、容易に弁別し難い。
五流の忍者が、一色ずつの術をもって襲って来るのに、なんのおそれるところがあろう。
狂四郎は、不敵にも、そう言ったのである。
堂内の忍者は、沈黙した。
狂四郎は、立ち上った。
無限かと思われる白皚々の平野が、行手にひろがっていた。
狂四郎は、歩き出した。
しりぞくことを知らぬ男にとっては、それは、進むべき唯一のわが道であった。

富田流小太刀

一

うらうらと、柔らかな陽ざしが宙に盈ちた佳い正月日和であった。

煤掃いの師走なかばから、ずうっと日和がつづいていて、この北陸の旅路にも、何十年ぶりかのあたたかさが、おとずれていた。

越中も、能登に近いとある峠の頂上にも、休み茶屋の藁屋根の片側に、雪がのこっているばかりで、松の梢のあわいに望む海原の色も、おだやかであった。

谷あいにかくれた里から、紙鳶がのぼって、ゆっくりとゆれている。

そして、茶屋の前では、羽根が、カチン、カチンと、打ち上げられているのであった。

羽子板を振っているのは、ともに十五六の、華やかな緋鹿子すがたの踊子であった。

茶屋の落間には、五人ばかり、これはかなりな年増も交る女たちが、花笠をぬいで、喰べるのと、お喋りに、いそがしそうである。

歯切れのいい口調は、江戸の盛り場育ちと判る。

と――。

一人が、花笠を把って、落間を出ると、向いの路傍に並ぶ六地蔵に近づき、その石頭のひとつ

へ、ひょいと被(かぶ)せた。

「姐(ねえ)さん、この趣向は、どうかいな」

「なんだい？」

「これさ」

花笠を、取って、石頭をぽんとたたいてみせた。

「はじめは、いつもの派手な花笠踊りをやって、花笠と衣裳(いしょう)をすてて、六地蔵になるという趣向さ。変り身が早ければ早いほど、うけるよ」

「それなら、歌にもいいのがあるよ。一昨日(おととい)泊った旅籠(はたご)の三助から習ったのさ。……ほれ、千代と加代、あたしが、唄うから、合せて、踊ってごらんな」

座がしららしい大年増が、三味線を把りあげた。

羽子板を振っていた踊子たちが、六地蔵の前に、神妙な顔で、肩をならべた。

「こないだ教えた糸繰歌のふりでやるよ。みんな、手拍子をとっとくれ」

にぎやかに、三味線の音と手拍子と唄声(うたごえ)が起った。

　春で、おぼろで、ご縁日
　石の地蔵さんもうかれ出す
　ホレ、
　主は、今頃、起きてか、寝てか
　思い出してか、忘れてか

いろは四十八あるその中に、
いやのやの字が、なけりゃよい
サッサ、トセエ

家はきびしゅうて、外へは出れぬ
猫さ、結構な屋根づたい
コレサ、アレサ

女郎泣くのと雲雀（ひばり）の啼（な）くは
啼くは鳴けども、空で啼く
ヤーレ、セッセエ

踊子たちが、踊りおわって、地べたへ片膝（かたひざ）ついて、お辞儀をした時、端で手拍子とっていた一人が、隣りの床几（しょうぎ）に腰かけている客を、横目でにらんでおいて、

「ちょいと、みんな、このおさむらいさんが、ちっとも、おもしろくない、って顔をしておいでだよ」

と、云った。女芸人たちのほかに、客は、編笠をかぶった黒の着流しの浪人者一人だけであった。

「唐変木（とうへんぼく）にゃ、あたしたちの芸は、わからないわさ」

座がしらが、ずけずけと云ってのけた。

すると、一人が、口三味線の義太夫を、うなりはじめた。

「冬編笠の赤ばりて、紙子の火打ち、ひざのさら、笠ふきしのぐ、忍ぶ草——」

それを一人が、受けて、

「忍ぶと知れど昔の、花は嵐のおとがいに、今日の寒さをくいしばる」

「はみ出し鐔も神さびて」

「尾羽打ち枯らし、うらぶれし」

「あわれや」

「そなたは、素浪人！」

さいごの一句を、七人全員が、大声で云った。

たいていの武士ならば、ここで、堪忍袋の緒を切るところである。

眠狂四郎は、依然として、耳を持たないかのように、塑像宛然に、無反応の態度を保っている。

この連中とは、昨日から、後になり先になり、何度も出逢っていた。昨夜の宿も同じで、隣りあわせたおかげで、そのさわがしさには、充分馴らされていた。

それにしても、いくら尾羽打ち枯らした素浪人と視ても、聊か、からかいかたが、露骨すぎる。

刀を抜かれるのを、おそれていないのである。

一匹のおそろしく猛々しい巨きな白犬が、女ばかりの旅の護衛に従いているからであった。

小牛ほどの巨軀を、茶屋の前に、ゆったりと据えて、昂然と頭を擡げている様子は、いかにも、女七人を護衛する自信に満ちている。

投げられた大きな握り飯を喰べたほかには、微動もせぬ。

もし、女たちを脅す者があれば、猛然と立って、その牙をひき剥くであろう鋭気が、金色に煌く双眼に湛えられている。いかに腕自慢の武芸者でも、この猛犬に襲われては、たじろぐに相違ない。

女たちは、その安心感で、浪人者一人など、まるで、眼中にないのであった。

二

ところで、踊子たちが、身振りよろしく六地蔵の前で踊っている頃、この峠へむかって、西の麓から、足をはこんで来ている者があった。

総髪で、筒袖に軽衫袴をはいていた。腰には小刀を一本佩びているばかりであった。年齢は三十に達していよう。

加賀の者ならば、この人物に出会えば、例外なく、敬意をもった眼眸を送るであろう。富田流小太刀の正統を継ぐ富田五郎左衛門入道勢源の苗裔・小太郎一政であった。

渠が、この峠へ登って来たのは、その頂上を一生一代の正念場にするためであった。

富田小太郎一政が、おのれ自身を、ここまで追いつめていることには、多少の説明を要する。

渠が伝承している富田流小太刀の秘法「血汐薪」は、前田宰相お止め芸であった。

三十歳の今日まで、小太郎は、ただの一度も、小太刀も竹刀も持ったことはなかった。父から家伝の剣を仕込まれた時は、必ず白刃を持たされていたのである。そして、それは、飛燕に似た迅業を生む「型」であった。

「型」以外の試合というものは、一度さえもしていなかった。絶対に許されなかったからである。

その流麗にして、しかも、目にもとまらぬ迅さを生む秘法「血汐薪」は、常に、対手なしに被露されたために、いわば、芸能に似ていた。勝負して、その秘技の鮮やかさを発揮した記録は、ただ一度、始祖勢源が作ったばかりである。

永禄三年庚申中夏のことである。

富田勢源は、美濃の国に遊んだ。時の国守斎藤山城守義竜は、兵法を好み、その師として、常陸鹿島の住人梅津賛之丞を迎えていた。

梅津賛之丞は、関東一円に名をひびかせた神道流の達人であった。富田勢源が来たときいて、すぐさま、門弟を遣して、中条流小太刀を拝見いたしたい、と申入れさせた。

勢源は、かぶりを振って、

「それがしは、未だ兵法が熟さず、ご覧に入れる域に達して居り申さぬ。亦、中条流は、仕合をつかまつらぬ」

と、こたえた。

梅津は、この返答をきいて、

「わが兵法は、関東に隠れもない。三十六名の相弟子は、わが太刀先に屈して、悉く門下となった。勢源は、越前に於ては広言を吐いて居ったであろうが、当国に参って、それがしが在るときいて、怯じ気立ったか」

と、うそぶいた。

梅津の高言をきいた斎藤義竜は、武藤淡路守、吉原伊豆守両老臣を使者にたてて、勢源の旅宿先である朝倉成就坊宅へ、おもむかせた。

勢源は、しかし、あくまで、「中条流には、仕合はござらぬ。無益の勝負は、詮(せん)なきことでござる」と、固辞した。

使者たちは、戻って、義竜に、報告した。義竜は、自ら筆を把(と)って、仕合所望の一書をしたためて、再度、使者を送った。梅津賛之丞の過言は他国迄(まで)のあざけりなれば、偏(ひとえ)に尋常の勝負を頼みたい、という文面を読んで、勢源もついに承諾した。

試合場は、武藤淡路守邸の広庭が、えらばれた。

梅津は、その前夜、湯がかりして、信心をなした。勢源は、この旨をきいて、心が直(ちょく)なれば祈らずともその利があろう、と笑った。

早朝、成就坊宅を出た勢源は、試合場へおもむく途中で、売買黒木の薪物(たきもの)が積んであるのを見つけて、つと寄ると、一尺二三寸の割木をえらんで、携(ひっさ)げた。

一方、梅津は弟子数十人をひきつれて、その一人に、八角削りの三尺五寸の木太刀を錦(にしき)の袋に入れて持たせていた。器量骨格、いかにも人に勝(すぐ)れて見えたので、すべての人が、梅津の勝利を予想した。

試合場に入ると、梅津は、検使に、なろうことならば、白刃をもって立合いたい、と申出た。

検使は、勢源に、その旨を告げた。

勢源は、

「対手方(あいて)の得物は、何にても苦しからず。それがしは、この割木を用い申す」

と、こたえた。

梅津は、ただちに、身仕度(みじたく)して、広庭の中央に現れたが、木太刀ではなく、白刃を携げていた。

一方、勢源は、なお、縁側から降りようとせずに、敵を見戍っているばかりであった。

梅津は、勢源が降りて来るのを待たずに、ツツ……と、縁側に迫るや、気合もろとも、その足を、横薙いだ。

縁側はせまく、勢源の背後は、檜戸であった。

当然、勢源は、飛び上って、この横薙ぎの一閃をさけるものと、梅津は考えたに相違ない。勢源が、縁板へ降りた刹那をはずさず、電光のごとき突きを入れて、勝負を決する肚であったろう。

勢源は、飛び上らなかった。

ピーン、と鋭い金属音とともに、白刃がなかばから折れて、はねとんだ。

勢源は、飛矢よりも速い梅津の剣を、片足で、踏みつけたのである。

同時に、割木で、梅津の右腕を搏っていた。

梅津は、よろめいた。

だが、次の瞬間、左手で脇差を抜いて、跳び上りざまに、勢源を突き刺そうとした。

勢源は、余裕をもって、梅津の頭蓋を、ま二つに割った。

検使は、梅津の折れた白刃と、勢源の割木を持って、城へ帰り、試合のさまを、つぶさに、義竜に報告した。

義竜は、舌をまいて、勢源に、鵝眼万疋、小袖一重ねを贈ることにした。

ところが、勢源は、その贈りものをことわった。

中条流小太刀は、勝負禁制である故、褒美としての被下物は、受納しがたし、という口上をのこして、飄然として立去った。

爾来――。
富田流小太刀の秘法「血汐薪」は、連綿十三代の当主に、受け継がれ乍ら、ただ一度も、敵を斬っていないのであった。
十四代目の当主小太郎一政が、いま、はじめて、その禁制を破ろうとしていた。

三

小太郎に決意をさせたのは、江戸から一人の浪人者が、加賀の地に入り込もうとしているのを、抹殺せねばならぬ、と重役の一人から、きかされたからであった。
眠狂四郎というその浪人者は、稀世の邪剣使いで、その円月殺法は未だ曽て一度も敗れたことはない、という。
重役は、あからさまに、小太郎に禁制を破って、眠狂四郎を斬ってもらいたい、とは云わなかった。
しかし、極秘の評定で決定したことを、打明けたのは、そのたのみにほかならなかった。
加賀藩としては、一流忍者数名をやとって、放ってあるので、よもや、眠狂四郎が、国境を侵して来る、とは思われぬが――、と重役に意味ありげに云われた瞬間、小太郎は、三百年の禁制を破るほぞをきめたのであった。
峠をのぼって来る小太郎の懐中には、重役から手渡された眠狂四郎の人相書きがあった。
不意に――。

茶屋の前に蹲っていた猛犬が、すっくと立つと、ゆっくりと、道のまん中へ出て、「うう……」と、ひくく唸った。

数間むこうに、忽然として、人影が出現したのを、みとめて、遽に、敵意を示したのである。

何気なく、編笠の蔭から視線を送った狂四郎は、

——これは！

と、身のひきしまるのをおぼえた。

その人物に、険しい殺気があったわけではない。武道で謂う「自然体」が、その姿にあるばかりであった。未だ発せざる、静かな立姿は、並の人間の目には、なんの変哲もないものとしか映らぬが、無数の強敵と闘って来た狂四郎には、それがただならぬ剣気を内にひそめているものであることが、直感できたのである。

そして、猛犬は、それを、本能でさとったのである。

富田小太郎が、ゆっくりと近づくにつれて、猛犬が、尾を尻へ巻き込んで、あとずさりした。

その様子に気がついて、女たちが、息を呑んだ。

小太郎は、茶屋の落間に腰かけている編笠をかぶった浪人姿へ、光る眼眸を当てた。

数秒の沈黙を置いて、小太郎は、おもむろに、懐中から、一枚の人相書きをとり出すと、狂四郎へむかって、さし示した。

「眠狂四郎殿は、お手前であろうか？」

その問いに、声で応える代りに、狂四郎は、編笠をはずした。

小太郎は、合点すると、

「富田勢源の末裔富田小太郎一政、お手前に、勝負を所望いたす」
と、さわやかな声音で、云った。
狂四郎は、薄ら笑って、
「お止め芸を使って、この素浪人一人を斬ろうというのは、加賀の家中に、頼りになる使い手がほかに居らぬことだな」
と、云った。
女たちは、狂四郎の異相を見戍って、ただもう、きもを縮め、すくみ上っていた。
江戸における、眠狂四郎の名は、あまりにも高い。さんざからかった素浪人が、その人物だったのである。
小太郎は、狂四郎の痛烈な皮肉に、眉宇も動かさず、
「富田流小太刀の秘法・血汐薪を、ご披露つかまつれば、円月殺法とやらを拝見いたしたい」
と、云った。
狂四郎は、やおら、床几から腰を上げて、路上へ出た。
距離は、一間あまりあった。
「いざ！」
ひくく吐いて、小太郎は、小刀の柄へ、右手をかけた。
ひと呼吸ののち、その小刀が抜かれるのと、無想正宗が、鞘走るのと、全く同時であった。●
小太郎は、入り身の型をえらんだ。狂四郎は、常の地摺り青眼をとった。
固着の対峙は、さして時刻を移さなかった。

「とおっ！」

澄みきった山気をつらぬいて、小太郎は、入り身の型を矢止めの型へ転じた。

攻めから受けに変え乍ら、その剣気は、全身から無数の光芒を閃かせるような鋭さを加えていた。

——これは、できる！

受けの強さが、これほど五体にそなわる、ということは、並たいていの修業ではない。のみならず、狂四郎の地摺り青眼を視て、そのおそるべき吸引力を直感するや、咄嗟に、型をそのままに、受けに転じさせたのは、よほどの余裕をもっている証拠である。

当然、無想正宗は、その反動で、浮舟の形に——まっすぐに、さしのばされていた。

「…………」

「…………」

双方の眼眸には、やはり、おのが踏んで来た剣の道を顕わすおのずからちがった光が湛えられていた。

小太郎のそれには、ただ、一念をこめて闘わんとする者の冴えた鮮烈な光があったし、狂四郎のそれには、業念が生む氷のように冷たい光があった。

やがて——。

浮舟の構えの中から、無想正宗が、しずかに、小円を描きはじめた。そして、その円周は、徐徐にひろがって行く。

その動きにつれて——無想正宗の切っ尖が上段に移れば、小太郎の構えは攻めの入り身になり、

切っ尖が地摺りに向うと、矢止めに変った。

と――一瞬。

狂四郎は、どうしたのか、前の高い松の梢（こずえ）を指（さ）す上段に、切っ尖を移すや、そこで、ぴたっと動きを止めた。のみならず、この男としたことが、目に見えた烈（はげ）しい異様な気色を、顔面に刷（は）いた。

さらでだに血の気のない顔色が、さらに、しだいに蒼白（そうはく）になった。

額には、うっすらと、油汗さえが滲（にじ）んだ。

眠狂四郎が、突如として、進退谷（きわ）まろうとしたのである。

おそれを知らぬこの男が、名状し難い戦慄（せんりつ）が、全身をつらぬくのをおぼえた。

進退が谷まる刹那（せつな）――どうおのが身を転じさせるか、そこに生死の岐（わか）れ目がある。

進退が谷まる刹那までの数秒間を、狂四郎は、堪えた。

わずか数秒間が、狂四郎の生命力の殆（ほとん）どを消耗させた、といえた。

「たあっ！」

孰（いず）れの口から噴（ふ）いた懸声（かけごえ）であったか。

小太郎と狂四郎の速影が、二つ巴（どもえ）のように飛び交（か）った。

ばっ――と血飛沫（ちしぶき）が、宙を彩（いろど）った。

路上によろめき、虚空を摑（つか）んだのは、小太郎でもなく、狂四郎でもなかった。

女芸人の一人が、脳天から真二つに割られたのである。

その左右に――十歩の距離を置いて、小太郎と狂四郎が、それぞれの構えをとっていた。

小太郎の小太刀の切っ尖から、ぽとり、と血汐がしたたった。

狂四郎は、ゆっくりと構えを解くと、

「秘法・血汐薪、たしかに拝見した」

と、云って、無想正宗を腰に納めると、歩き出していた。

仆れている者のかたわらを過ぎがてらに、一瞥をくれると、その貌は、男のものに変っていた。くノ一の術を使って、女芸人に化けていた忍者だったのである。

くノ一の術は、平家流が生んだもの、ときく。とすれば、これは、刺客にえらばれた五色の忍者のうち、黄門と名づけられた平家流の手練者であろうか。

富田流小太刀の秘法と円月殺法の汐合が極まった瞬間、ここぞと、短剣をかざして、狂四郎の背後から襲った忍者に、誤算はなかった。ただ、それが、気合の頂点であったればこそ、かえって、狂四郎に刹那の変り身を生ましめた、といえる。

円月殺法が、誘い入れたのは、むしろ、富田流小太刀ではなく、忍者の術であった。

小太刀は、それを真っ向から斬り下げたのである。

小太郎は、遠ざかる狂四郎の後姿を、茫然と見送った。凄絶の闘いのあとに来た虚脱の中にいたのである。

白虎(びゃっこ)狩り

一

名前こそ「花子」と称(よ)ばれて、可愛らしいが、遠くから一瞥(いちべつ)しただけで、道を避けたくなる巨大な義畜(いぬ)なのであった。

悠々(ゆうゆう)たるその歩行ぶりは、まさしくあたりを払う威を示しているといえた。げんに、出会った土地犬が、尾を尻(しり)に巻き込んで、草地へ逃げた。道行く者は、誰しも、脇(わき)へ身を寄せて、固唾(かたず)をのんだ。

目につくといえば、これほど人目をそばだたしめる存在はなかった。

巨狗(きょく)は、道案内に立ったように、眠狂四郎の前を進むのであった。ときどき、振りかえって、新しい主人を視(み)、距離ができていれば、待っている忠実さを示しているのである。

新しい主人。花子は、勝手に、そうきめたようである。

孤独を身上とする旅の浪人者にとって、これは迷惑な話であった。目下のところ、行手に、こちらもかぞえきれぬ敵が、待ち伏せている、と覚悟しなければならぬ道中である。それが、巨大な目印をつけて、歩いていることになる。

しかし、慕ってくれるものを、無下に、斬(き)りすてるわけにもいかず、

――どうにかなろう。

と、例によって、この男らしく、自ら知っていて、追剥ぎ原へ螢狩、といった度胸をみせているのであった。

巨狗のあるじである平家流「くノ一の術」の忍者は、その眼前で、富田流小太刀の名手・富田小太郎一政によって、真っ向から唐竹割りに、斬り殺されたのであった。

富田小太郎は、巨狗にとって、生れてはじめて、怯えなければならぬ人間であった。

その恐るべき剣気を湛えた人間と対峙したのが、眠狂四郎であった。

狂四郎とは、なんとなく、三日ばかり前から、着かず離れずの状態で、道中を倶にして来ていたのである。

狂四郎が必死の迅業をもって、富田小太郎に、おのがあるじを斬らせた、とは、もとより畜生の哀しさで、判るべくもなかった。

花子は、おのがあるじが生命を狙っていた狂四郎を、次の主人にすることを、勝手にきめてしまったのである。

女芸人たちが四散してしまったあと、花子は、当然のことのように、狂四郎に跟き従って来て、狂四郎が歩けば、歩き、停まれば、停り、そしてもう、狂四郎から、二度も、食餌を与えられていた。

異端の浪人者と、不具かともおぼしい程の巨軀を持った白い義畜は、こうして、思い思いの心で、昨日から道行きをしているのであった。

街道は、片側が荒海、左手はゆるやかな傾斜になっている疎林の間を、まっすぐにのびていた。

このあたりは、雪が舞っても、すぐに寒風に払われるとみえて、野も山も、陽の当らぬ場所のみを白く彩っているだけであった。

風もない日で、陽ざしが明るく、潮騒ものどかなひびきをつたえて来る。ただ、寒気だけが、凛冽として、肌身を刺す。

事情を知らぬ他人の目には、平和な旅、と映らぬこともない。

しかし、進んで行く当人にすれば、早朝旅籠を出てから、そろそろ巳の刻（午前十時）をまわろう、というのに、一向に、敵影を見ないのが、かえって訝しいのであった。

と——。

不意に、花子が、立ち停って、うう……、とひくい唸り声をたてた。

行手に——三十歩のむこうに、編笠の武士が、忽然として立ったのである。

旅装束の加賀藩士である。

——家族と水盃でも交して来たか。

三十歩へだて乍ら、もう殺気を放射して来る気負った姿を、冷やかに見戍って、狂四郎は、薄ら笑った。

「眠狂四郎に、加賀の土地を踏ませてはならぬ」

重役の下知を奉じ、お家大事と覚悟をきめた一人であろうが、あいにく、遠く一瞥しただけで、底の知れた修業しかできて居らぬ。

すれ違いざまに、居合撃ちをしかけるこんたんであろうが、この距離を置いて、殺気をむき出してみせたのは、むしろ、あわれであった。

犬にさえも察知される未熟さは、おのが心胆を、距離がせばまるにつれて、縮めて、花子が唸りつつ一間余に近づくや、思わず、路傍へ、身を下らせてしまっていた。
狂四郎は、ふところ手で、すれちがった。
その後姿を見送る藩士の息づかいは、乱れていた。

二

ものの三丁も行って、こんどは、尾羽打ち枯らした風体の浪人者が、近づいて来た。
二十歩の距離に来て、花子が、唸った。
これも、討手の一人であった。
——おれを斬れば、仕官が叶うのか。
前の藩士よりは、いくらかましな腕前を持っているらしい、と看てとれた。
しかし、一間に迫って、いきなり、花子から躍りかかられるや、悲鳴をあげて、ぶざまにのけぞった。
狂四郎が制しなければ、花子は、存分に、その咽喉を噛んだに相違ない。
浪人者は、小溝に落ち、泥まみれになって匐い上るや、可笑しいほどの懸命さで、遁げた。
それから、一里あまり行って、片側が森になり、梢の上に八幡宮の屋根がのぞき、街道とつなぐ詣で路に鳥居が立っている地点に来た。
「花子、唸るな」
狂四郎は、あらかじめ、巨狗をたしなめておいた。

鳥居をくぐって、出て来る人影があった。宗匠頭巾をかぶり、杖をついた老人であった。
狂四郎は、そ知らぬふりで行きすぎようとすると、
「あいや、待たれい」
と、呼びとめた。
視線をくれた狂四郎へ、老人は、ゆっくりと近づいて、懐中から、一枚の紙をとり出すと、
「これを、御覧願おう」
と、さし出した。
狂四郎が、受けとろうとする隙をえらんで、老人は、その齢に似合わぬ烈しい気合を発して、杖に仕込んだ白刃を、送り込んで来た。
老人は、見事に、眠狂四郎を真二つにした。しかし、本人ではなく、その人相書きをであった。
狂四郎は、わずかに身をひねっただけで、同じ場所を動きもせず、老人が、一間を奔って、辛じてふみとどまり、青眼に構えるのを待ってから、
「年寄の冷水を、誰にそそのかされたな？」
と、訊ねた。
老人は、喘ぎを必死に抑え乍ら、
「前田藩剣道指南役須貝又十郎が、最後のご奉公と知れい！」
と、叫んだ。
「道場を、伜にゆずった隠居の身が、伜を遣って、敗れさせては、末代までの名折れ、と自身で買って出たのか。所詮は、伜可愛さの依怙心が振舞わせているのではないのか」

あざけられて、老人は、呶号しざま、斬り込んで来た。
狂四郎は、跳び退って、第一撃を躱し、つづけさまの二の太刀を空に流しざまに、当て身をくれた。
がっくりと、地べたへ崩れ落ちた老人へ、不快げに、暗い眼眸をくれて、
「悲壮がっただけ、無駄であったな」
と、吐きすてた。
人相書きを与えられたこれらの人々は、加賀藩重役に、踊らされている、といえた。
重役は、眠狂四郎を討ち取ることができるのは、ひそかにやとった忍者たちの一人、と思っている。
思ってい乍ら、家中から、討手を志願させ、許可を与えている。のちの言訳のためである。
加賀藩の面目にかけても、と気負い立って、志願した者は、尠くあるまい。
このぶんでは、こういう襲撃が、何度くりかえされるか知れぬ。
こちらは、なるべく、家中一統を刺戟せぬように、斬ることを避けたいのである。
しかし、配られた人相書きの枚数がかなりのものだとすれば、そのうち、一人や二人、斬りすてざるを得ない事態が生じるかも知れぬ。
意識を喪った老人をすてて、歩き出した狂四郎は、ようやく、多少の当惑をおぼえていた。
さらに数丁を辿ってから、急に、花子が、鼻を鳴らして、地面を嗅ぎ乍ら、脇径を、左手の疎林へ入ろうとした。

兎の足跡を発見したのである。

「…………」

黙って、犬の動作を見戍っていた狂四郎は、ふっと、口辺に、冷たい微笑を刷いた。

兎の足跡は、故意につけられたものと、判断できた。

眠狂四郎が、犬をつれている。この偶然の条件を、忍者が、看遁す筈はないであろう。

狂四郎自身、道みち、

——犬をつれているおれに対して、それを利用する攻撃方法は、当然思案されるであろう。

と、考えていたことである。

はたして、敵は、罠を設けていた。

本街道に、つぎつぎと刺客を待ち伏せさせていたのも、忍者のしかけたいやがらせかも知れぬ。

犬に、兎のにおいを嗅がせて、脇道へ誘い込もうとするのは、その奥に、一挙に勝負を決する場所を用意していることを意味している。

狂四郎は、不敵にも、そのまねきを、こばまなかった。

三

ゆるやかな登りになる疎林を抜けて行くと、まだらに雪を残した世界は、次第に荒寥たるものになった。

いつの間にか、雲がひろがって、陽光をさえぎったせいもあろう。彼方に、鈍色の海原がひろがり、幾段もの列を引いて打寄せる波浪の動きが、いかにも、船影など一艘もとどめさせぬきび

しさに見える。

丘陵を越えると、眺めは、さらに、人界とは遠くへだたった険しいものになった。落葉樹の裸枝が、さむざむと天を刺している景色に、風情や趣きを添える美しさは、何もなかった。陽が当るのと、当らぬのとでは、こうも、自然のたたずまいを変えるものであろうか。消えのこって枯草にへばりついた雪も、妙に黝んでいる。

かなりひろびろとした草原へ出たが、陰鬱な曇天の下で、そこに見出したのは、すべてが死に絶えた寂寥だけであった。

疎林が、周囲を掩うている。

花子は、草原の中央へ、嗅ぎ出て、立ち停ると、突如、じりじりと、あと退った。

枯草の塊が動いたのである。

狂四郎は、覆面から手足のこしらえまで、朽葉色で統一した忍び装束の者が、すっくと立ち上るのをみとめた。

忍者は、花子に、一間の近くへ寄るまで感づかせないくらい、完全に気息を絶っていたのである。身を起しても、それは一本の朽木のように見えたばかりである。

「お待たせしたようだな」

狂四郎は、静かな声音で、云った。

「昏れるには、まだ、かなり間がある。それに、此処は、人里離れた場所ゆえ、相対で話合うにも、気が散らぬ。ひと休みされい」

忍者が、足もとをひと蹴りすると、どういうしかけになっているのか、落葉が、一時にぱっと、

四方へ散って、下から、緋毛氈が、灰色の地上に目ざめるような鮮やかさで、浮きあがった。
狂四郎は、平然として、それに端座した。
犬もまたおとなしく、狂四郎の前方へ、ゆったりと坐り込んだ。
「わたしを饗応してくれる準備は成っているようだな」
「左様——」
目ばかりに面をつつんだ忍者は、頷いて、
「お主のような稀代の使い手を饗応するには、これ以外の手段はない、と案じて為した。お主にとって、此処は、全き死地と申せる。闇が落ちて参るまでの生命でござれば、もはや、あわてても詮ない仕儀ゆえ、まずは、ゆるりと、小手調べなどを、ご覧下され度い」
「お主の忍び流は？」
「武田流。山中にこもって二十五年、俗世の人間と親しく言葉を交えたのは、幾年ぶりか喃」
——かなりの年配ということになるな。
狂四郎は、対手の双眸の不気味な光を、またたきもせずに、受けとめていた。
「小手調べとは？」
「左様——、先ず、この白犬を、狩ってご覧に入れようか」
そう云われたとも知らず、花子は、周囲の林へ、警戒の目をまわしていた。
方二町ばかり、ほぼ完全な円を描いた草地の、林との境に、いつの間にか、同じ朽葉色の忍び装束した人影が、音もなく、次つぎと出現していた。
「素浪人いっぴき捕えるために、大層な頭数の勢子をそろえたものだな」

「お主に対して、敬意を払って居ればこその処置だ。……猛獣の王を、虎とする。虎の中でも、最も劫を経たのを、白虎という。ご覧に入れるのは、武田流白虎狩りだ。……すなわち、お主を、白虎と見立てて進ぜた」

云いおわると同時に、男は、躍り上って、九尺あまりを跳び退っていた。

いつの間にか、草の中に匿していた三間ばかりの長さの握り太の竹竿を左手に摑んでいた。

その凄じい勢いに、白い巨狗は、はじかれたように、はねあがるや、猛然と、忍者めがけて、襲いかかった。

瞬間――忍者は、その長い竹竿を、花子の頭上で、ぶーん、と旋回させた。

とみるや、竹竿の尖端から、白烟が噴いた。

いや、白い煙と見まちがえるほど、細い細い絹糸が、投網が打たれたごとく、ぱあっと、宙に拡ったのである。そして、その無数の白い繊条は、あっ、という間に、巨狗に、かぶさり、包み込んだ。

花子は、吠えたてて、狂いたけったが、たちまち、あがけばあがくほど、頭も頸も胴も四肢も、生きもののような細絹にからみつかれて、自由を失って行き、ついに、草の上へ倒れて、身動きさえも不可能になってしまった。

「如何でござろうか、眠狂四郎殿――」

武田流忍者は、昂然と、肩をそびやかして、うそぶいた。

「絹の糸一本一本に、粘り汁が塗ってある。蜘蛛めが尻から吐き出す糸と思えばよい。得物で撃って来れば、得物にからむ。いかに、お主の腰にある無想正宗とやらが名剣であろうとも、空中

にひろがった一千本の絹糸を、悉く截つことはできまい。ひとたび、からみつけば、その一本で、お主の頸を締めて、殺すことも造作はない。……どうじゃ、白虎殿、この網を、くぐり抜けるてだてがお主にあろうか？」

武田流蜘蛛網の術を使う忍者は、千本の絹糸を吐かせた三間の竹竿を直立させて、哄笑した。

おそかった、といえば、それまでのことである。

狂四郎の眼前で、犬狩りが演じられているあいだに、林と草原の境では、配下の勢子たちが、一斉に、同じ竹竿を振り廻し振り廻し、たちまち、裸の樹木の幹と枝へ、白い繊条をからみかけて、強靱な粘り蜘蛛網を、幔幕のように、張りめぐらしてしまったのである。

勢子は、その後方に並び立って、陣形を敷いた。

まさしく、全き死地であった。

白虎を、方二町の狩猟場へ追い込んで、せいぜい狂いまわらせて、生捕ってみしょうという、自信に満ちた忍びの術策であった。

だが――。

白虎自身は、この全き死地に追い込まれ乍ら、依然として、無表情であった。為したことは、緋毛氈の上から、やおら立ち上って、草履に痩身を乗せたことだけであった。

――おのれが窮寇となったことはまぎれもないが、眼前に立つこの男も、まだ、なお、蜘蛛網の中にいるではないか。当然、この男には、脱出の手段がつくられている。とすれば、おれにも、その余地がないとは、いえぬ。

狂四郎の心中には、その独語があったのである。

「参るぞ！」
忍者は、竹竿をふりかぶった。
狂四郎は、素手のままで、身構えた。千本の粘り糸に対して、無想正宗は、防禦の役に立たなかった。
抜く時は、対手を斬る時であった。
唸りをたてて、竹竿が旋回するや、白い網が宙に拡って、狂四郎を襲って来た。狂四郎は、跳び躱した。
竹竿が唸る。蜘蛛網が拡る。狂四郎が、遁げ跳ぶ。
この闘いが、三度びくりかえされた。
「ふむ！」
狂四郎が、にやりとした。
竹竿は、絹糸を悉く吐きつくした、と看てとったのである。
はたして——。
忍者は、こんどは絹糸の代りに、槍の穂先を尖端から噴かせて、狂四郎に突撃して来る、とみせて、突如、身を翻して、林の一角めざして、疾駆しはじめた。
狂四郎は、猛然と、それを追った。
しかし、走術にかけては、狂四郎と雖も、到底忍者に敵わなかった。
忍者は、みるみる距離をひらいた。
めざしているのは、蜘蛛網を張った樹木の中でも、最も梢のひくいあたりであった。

三間の竹竿を用いれば、その梢の上を飛び越えるのは、容易の業(わざ)である。

とみとめた狂四郎は、奔(はし)り乍ら、脇差(わきざし)を抜きつけに、投げた。

宙を縫った白刃は、忍者が摑(つか)んでいる竹竿に、発止(はっし)と当った。三間の竹竿は、両断されて、片方は草地へころがった。

「しまった！」

声にこそ出さなかったが、咄嗟(とっさ)に、両刀を抜いて、向きなおった忍者の態度が、そう叫んでいた。

無想正宗は、はじめて鞘(さや)から走り出た。

こんどは、狂四郎が、じわじわと、敵を追いつめて行く——。

一歩、一歩後退した忍者は、ついに、粘り綱を張った林との境に追い詰められた。

「かあっ！」

怪鳥(けちょう)が、啼(な)くにも似た叫びとともに、忍者は、草地を蹴って、おのが身を、空中のものにして、狂四郎の頭上はるかを、朽葉色の身を回転させつつ、跳び越えた。

次の瞬間、振りかえった狂四郎めがけて、双手(もろて)の大小の白刃を、同時に放った。

その刹那——狂四郎もまた、気合凄じく、宙へ、はねあがった。

敵の放った二刀をよけたのではない。

蜘蛛綱(いかき)の外から——樹間から抛(ほう)られた三間の竹竿が、飛んで来るのを、宙で、むずと奪いとったのであった。

狂四郎は、右手の無想正宗を地摺(じず)りに、左手の竹竿をたかだかとふりかぶって、にやりとした。

「蜘蛛綱(いかき)にかかるのは、この眠狂四郎ではなくて、編み出したお主の方であったな、武田流氏(うじ)！」

奇習の村

一

眠狂四郎にとって、その日は、もの静かな一日であった。

尤も、それは、狂四郎が、五流の忍術者たちの仕掛けて来る罠を避けて、すごし得た一日、という意味であった。必ずしも、身辺が無為であったわけではない。

武田流蜘蛛網の中から遁れ、荒寥たる丘陵を越えて、荒海に沿うた間道へ出た狂四郎は、そこが越前へ通じる街道から、かなりの道程を逆行しているのをさとって、そのまま、辿って行ったのであった。

ひとまず後退するか、まっすぐに加賀領へ押し入るか。

熟慮すべき時を迎えていた。

端倪すべからざる秘術を用意して、忍者たちは、待ち伏せている。これを突破するのは、おのが自力のみでは、不可能であろう。天佑にも似た偶然の利が、おのれの側に生じなければならぬ。

くノ一の術を使って女芸人に化けていた平家流忍者を富田小太郎に斬らせたのも、武田流蜘蛛網の術を破ったのも、自力の発揮のみではなかった、と思い返されるのである。

しかし、これから、幾段にも、構えられた罠を、ことごとく、偶然の利によって突破できると

は、到底考えられなかった。

心中にあるひとつの意志が、奥能登(おくのと)を指向していることは、慥(たしか)であるとしても、それは、誰人から依頼されたわけでもなく、おのれ自身に誓ったことでもなかった。我あるいは他人(ひと)の為でもなく、また道義のため、という次第でもなかった。

引返しても、侮蔑(ぶべつ)する者があるわけでもない。

にも拘(かかわ)らず、狂四郎は、奥能登へ行き着く意志を、みじんも動揺させてはいなかった。この男の特質である虚無の不敵さが、明日を考えさせていないのであった。

ただ、前進するにあたって、ひとまず後退して日時をかせぐか、まっすぐに険路をえらぶか、それとも、海へ出るか――その選択に、決断が要(い)ったのである。

その決断のために、狂四郎は、もの静かな一日をつくった、といえる。

そこは、名も知らぬ漁村であった。

狂四郎は、漁師の家の一軒をえらんで、旅塵(りょじん)を洗いすてて、穏やかな冬陽(ふゆび)のさし込む一間に寝そべり乍(なが)ら、凪(な)いだ海を眺(なが)めていた。

巨(おお)きな岩ばかりの磯(いそ)を彎曲(わんきょく)させた岬(みさき)が、視界をさえぎっていたが、その岬の端(はな)に、五百石積ぐらいの船が、停泊していた。

舳先(へさき)にひるがえった旗は、(銭)と染め出していた。銭屋五兵衛が、海に出て来る眠狂四郎に対して、手を打っているのであろうか。

――どうでも、おれを、能登に入らせまいとしている。

狂四郎は、他人事のように、冷やかな眼眸(まなざし)を、銭五船へ向けている。

脳裡には、昨日の出来事が、泛んでいた。

二

白虎狩りの死地から脱出して、荒海に沿うた間道を辿るうちに、道は、せばまって、山に入り、やがて、一上一下する坂を過ぎて行くうちに、沼地に入ろうとした。

とある地点で、狂四郎は、ぴたりと足を停めた。

何やらおそろしげな伝説をつくられているらしい、どんよりと鉛色に重い水面を湛えた古沼が前方に在った。その畔で、道は、左右に岐れていた。

道標が立っている。

朽ちて、倒れかかった棒杙であった。

月のうち一人か二人、猟師か木樵のほかには足跡をのこしそうもない、人里から遠い杣道に、誰が親切に、道標を立てたのか。

そのかたわらには、魚一尾も棲まぬ瘴気をひそめたような古沼が在る。

狂四郎の口辺に、微笑が刷かれた。

この男が、屡々自分自身を生地獄から救ったカンが、霊感のごとく、いまも、働いたのであった。

狂四郎は、曽て、飛騨山中で、右方へのみ指示して、左方へ何も記していない奇妙な道標を発見して、指示なき一方へ足を向け、峡谷の底に、夥しい砂金をかくす村へ到着したことがあった。

その経験が、ものを云った。

佇立した其処から、二十歩ばかりの距離を置いた道標は、見た目には、いかにも、古びている。

しかし、はたして、それは、古いものなのか？

その道標に至る沼に沿うた細径に、狂四郎は、作為を直感したのである。

孫子に、次のような戦術があるのを、狂四郎は、読んだおぼえがあった。

ある時、孫子は、宿敵の侵入の時刻を計って、削った白木を、路傍に立てておいた。

昏れがた、其処へ到着した敵は、その白木に、何が書かれてあるか読もうとして、灯をつけた。

白木には、

「汝、いま、ここに死す」

と、予告されてあった。

読み了った刹那、灯めがけて、無数の矢が飛来した、という。

はじめての道を辿る旅人としては、道標こそ、たすけである。道標が、彼方にあると知れば、旅人は、思わず、近づいて行くに相違ない。

――ここから、あの道標までの二十歩の間に何かがある。

狂四郎は、推測した。

ゆるやかではあるが、擂鉢の底の地形をもったこの沼地は、敵が罠を仕掛けるには、絶好といえる。

急に、狂四郎は、身を翻して、道をひきかえした。

すると、雑木林の中から音もなく、影のように、一人の男が行手に立った。

上杉流忍者・寒川笑左衛門と判った。その右手が無かったからである。

「お戻りなされるのか？」

目ばかりに包んだ覆面の蔭から、抑揚のない声音で、問うた。
「べつに、この山路を行かねばならぬ義理はない」
「何を察知なされたのか？」
「仕掛けの罠は、何かは知らぬ。ただ、あの沼のほとりにある道しるべには、眠狂四郎ここに死す、とでも書いてあるような気がした。……お主の仕業か？」
この寒川笑左衛門は、狂四郎を討つべく一箇月のあいだ、つけ狙って、果さなかったばかりか、右腕を切断されて、闘志を喪い、味方を裏切って、狂四郎に対して忠告者になっていた人物である。
だからといって、狂四郎に、家来の誓いを為したわけではない。
いつまた、狂四郎を討とうという闘志を燃えたたせるか、予断し難かったのである。
狂四郎としては、油断は禁物であった。
「それがしの仕業ではござらぬ。それがしは、裏切り者でござる。いまは、ただの傍観者に、すぎ申さぬ。……御明察の通り、あの沼には、お手前に、断末魔の狂舞を演じさせる罠がほどこしあり申す。仕掛けたのは、それがしの同門——それがしと、幼い頃から術をまなび、競うた男でござった」
そう告げて、笑左衛門は、視線を、木立の一角へ向けた。
雑木の下に、一個の屍骸が俯伏しているのが、見わけられた。
笑左衛門は、先に立って、沼の畔へ近づくと、残った左手に摑んでいたものを、道標めがけて、投じた。

パッと黄色い烟霧が噴いて、道標を包み、地面から、木立へ、水面へと、拡った。

そして、それがうすれた時、沼を中心とした湿地一帯が、みるみる真赤に変ったのである。

狂四郎の総身が、寒気立った。

それは、土中にひそんでいた幾万という百足が、一斉に、蠢き出たのである。

もし、狂四郎が、道標の前に立っていたならば、油を塗った鉢の底に投げ込まれた蟻と同様、無慚なのたうちを演じなければならなかったであろう。

敵は、毒虫の群のまっただ中に立った狂四郎めがけて、手裏剣を投げつけて来て、底なしの沼へ追い落すまでは、攻撃を止めなかったに相違ない。

「上杉流赤染の術でござる」

笑左衛門は、説明した。

「昔、上杉謙信公が、春日山城の西方のかために用意されたもの。幾千の兵でも、わずか数名をもって防禦することができるように工夫された秘法でござるが、ついに、実戦には使用されずに、今日まで、われら流派のひそかに承け継ぐところでござった」

不敗の術を敷備して待ち伏せていたおのが同族を、敢えて討ち果した笑左衛門の心理を、推し測ることは、無駄のようであった。

あるいは、幼少からの競争者であった故に、和解し難い確執が生じていたのかも知れぬ。

狂四郎が、黙って離れて行こうとすると、

「三町ばかりさきの雑木林を右方へ、くぐって参られい。海辺へ出申す。そこの漁村でなら、静かな一日をすごすことができるかと存ずる」

ぬよう——」

「たぶん、源氏流青竜の術でござろう。かねてより高言を吐いて居り申す故、かまえて油断され

「おれに、次に、襲いかかって来るのは、何流か、お主、知っているか？」

狂四郎は、振りかえって、

と、すすめた。

笑左衛門は、そう忠告して、鄭重に頭を下げたものだった。

三

もとより、その海辺の村に、旅籠などあるべくもなかった。

砂地を踏んで、人家へ近づきかけた狂四郎は、磯馴れ松の根かたに腰かけている一人の老婆を見かけて、泊めてくれる家を教えてもらえまいか、とたのんだ。

老婆は、狂四郎を、足もとから、ずうっと見あげてゆき、訛のひどい古風な言葉で、所持する路銀の高を問うた。

「十五両あまり——」

狂四郎がこたえると、老婆は、右手をさし出した。

宿泊料を要求しているのだと判ったが、言葉の意味を解きかねて、三度もくりかえして訊ね、その一割以上を貰わねばならぬ、と云っているのだ、と判った。

あきれたことである。

「おばば、正気か？」

たかが、一夜の泊り代に、一両以上寄越せとは、法外もきわまる。
「そのかわり、おぬしは、一年が二年でも、泊らっしゃるがよかろ」
老婆は、狂四郎から二両受けとると、立ち上って、曲り腰をのばし、のこのこと歩き出した。
老婆が狂四郎を案内したとある台地には、おそらく大漁を報らせるために設けられたであろう鐘楼が在った。
老婆は、小さな梵鐘を、撞木で三度鳴らした。
それに応えて、急ぎ足に集って来たのは、四人の若い女であった。最年長でも二十歳ばかり、いちばん若いのは、まだ十五六歳に見えた。
老婆は、狂四郎から受けとった二両を示し、何やら呪文めいた文句を大声で云って、撞木の麻苧綱から、四本ひき抜いて、女たちに、さし出した。
籤が当ったのは、いちばん若い娘であった。
「わしらが家へおじゃれ」
娘に促されて、歩き出した狂四郎は、途中で、ふと気がついて、どうして老婆から宿泊料をうけとらなかったか、と訊ねた。
「村の所有でござるぞえ」
娘は、こともなげな口調で、こたえた。
それをきいたとたん、狂四郎は、先刻から気がついていたことに、理由がつくような気がした。
小さな貧しい漁村の娘にしては、四人とも揃って、整った面立をしていたのである。この娘には、気品さえも与えられている。

——落人部落に相違ない。
四五十軒はあろうこの漁村は、おそらく、戦国の頃に、主家が滅びて、此処に、自給自足の共同生活をはじめたに相違ない。
集団が生きのびるためには、おのずと、掟が設けられる。秩序を保つ上には、個人の自由を束縛する。
老婆が、多額の宿泊料を要求したのは、その掟にしたがったからであろう。
娘は、狂四郎をわが家にともなうと、
「わし一人ゆえ、ごゆるりと休まれませ」
と云った。
「そなたは、親きょうだいが居らぬのか？」
「ほほほ……、良人がおじゃるぞえ」
娘は、笑い声をたて乍ら、こたえた。
「良人？　そなたのか？」
「あい——」
平然として頷く、少女としか云い様のない娘を、狂四郎は、唖然として、見戍ったことであった。
「そなたの良人は、漁に出て居るのだな？」
「あい」
「いつ、戻って参るのだ？」

娘は、かぶりを振って、

「老いて居るゆえ――」

と、呟いた。

「そなたの良人は、年寄か？」

「あい。六十になります」

狂四郎は、再び、唖然とさせられた。

「この村には、若い男は居らぬのか？　それとも、そなたの良人は、この村の長で、そなたを無理強いに、女房にしたというのか？」

稚い妻は、しかし、その時は、沈黙を守った。

狂四郎は、幾日ぶりかで、午睡をとった。

夜着が、そっとかけられるまでを覚えているだけで、この男らしくもなく、睡魔に身をまかせて、どれくらいが経ったろう。

「……もし」

肩へ手をかけられて、狂四郎は、はっと目がさめた。

対手は、澄んで綺麗な眸子を、覗き込ませ乍ら、小声で云った。

「わたしと契られるなら、はよう、なされ」

「…………？」

狂四郎は、まだ熟していない貌に、すこしも羞恥の色がないのを、訝った。

二両の大金を取ったのは、泊めるのに、別の意味もあったのである。

狂四郎は、起き上って、

「なぜ、夜を待たぬ？」

と、訊ねた。

睡ったのは、意外に短い時間で、まだ、冬陽は、斜めになったばかりであった。日が昏れるまでには、一刻以上ある。

稚い妻は、目を伏せた。

「主の戻りは、いつになるか判らぬ、と申していたではないか。……夜まで待てぬ理由をきこうか？」

「………」

「やはり、主は、戻って来るのだろう？」

「いえ。主は、一昨日、戻る筈でおじゃった。その一昨日は、大時化でおじゃった」

「では、死んだかも知れぬ、というのだな？」

「あい——。主の生死は、今宵、判るのでおじゃる」

難破した船の破片は、海流の関係で、沖あいにわずかに頭をのぞけている兜岩に漂着する。

いま、村の若い衆が、それをたしかめに、舟を出している、という。

「すると、主の不幸を知って、見知らぬ旅の者などに、身をまかせるのは、仏罰があたる、というわけか」

「いえ——」

つよくかぶりを振って、意外な言葉を、口にした。
「主が戻らぬと判れば、わたしの身は自由になるのでおじゃるぞえ」
「………？」
稚い妻は、説明した。
この漁村四十二軒に、私有物というものは、何ひとつなかった。
家も舟も漁網も、悉く共有の財産であった。
良人が死ねば、それらは、村へ返さねばならぬのであった。
「したれど、舟も網も無くなれば、女子は、極楽のからだに、なるのでおじゃる」
稚い妻は、にことした。
娘に課せられた掟は、十五歳になるまでは、それこそ、男に手を握らせただけでも仕置の鞭をくらわせられるほどの厳しいものであった。そして、十六歳になると否応なく、結婚させられる。いや、娘は、男を選ぶ権利を与えられるのであった。
ここで、娘は、ふたつの方法を採ることになる。かねて好いていた若い男の女房にしてもらうか、もしくは、老人の後妻になるか、であった。
意外にも、娘たちの大半は、老人の方を求めて、若後家になろうとする、という。
後家になれば、村の共有財産になるのであった。未婚の若者たちが、入れ代り、夜毎忍んで来るのを迎えるだけで、遊びくらすことが許されるのである。いわば、若者たちに身をまかせるという義務のほかは、若者たちの貢ぐもので、気ままがつくせる後生楽が与えられるのである。
村の規律は、最年長者三人が合議する。しかし、ずっと以前から、三人のうち二人までは女で

あった。女の方が長生きするからであった。すなわち、この村は、女権によって支配されていたのである。

狂四郎は、この掟に、なんの疑いも持たぬばかりか、老爺に嫁いで半年も経たぬうちに、若後家になろうとするうれしさを、すこしもかくそうとせぬ稚い妻を、一種のおぞましさで眺めた。

「わたしは、ただ、この家を旅籠の代りにしたいだけだ。そなたを抱く気は毛頭ない」

そう云いすてて、海へ目を向けてしまったのである。

稚い妻は、狂四郎の心中を解きかねて、しばらく、その横顔をまじまじと瞶めたことだった。

四

陽が落ち、夕闇が、幾段にも列をなして打ち寄せる波濤の白さだけを昏れのこして、視界を掩うて来た頃、その浪を乗りこえて、三艘ばかりの小舟が、帰って来るのが、見わけられた。

稚い妻は、庭に走り出た。

期待が、全身からあふれている。

その様子を眺めて、狂四郎は、不快の念を催した。

しかし、すぐに、

——老いた漁師は、この稚い後妻を半年間抱いたことに満足して、海へ消えて行ったのかも知れぬ。再び還らぬことは、若い男女への贈りもの、という考えもまた、この村の掟のひとつであろうか。

と、思いかえした。

四半刻のち、一人の若者が、息せき切って、駆け込んで来ると、狂四郎には、意味のわからぬ叫びをあげて、舟の破片を、稚い妻に、さし出した。

老いた良人は、死んだのである。

稚い妻は、こっくりと頷いて、それを受け取ると、家へ入って、仏壇に供えた。

若者は、そのまま、泊った。

襖をへだてて、若い男女のひそひそ話を、きくともなしに耳に入れ乍ら、狂四郎は、奇妙な感慨になやまされた。

狂四郎は、夜半に、その家を立去った。

青竜の術

一

加賀国富樫村の船底山に在る曹洞宗・大乗寺は、二十六世月舟を中興の開基とし、足利尊氏が暦応三年に祈願所として以来、公方歴代の帰依があった名刹である。

文明三年、蓮如(火宅僧親鸞より八世)が、京師より北国へ下って、越前、越中、加賀、能登に、その宗義を伝播して、人民の信仰が熱狂的になるや、その弊風に扇がれて、土寇が蝟のようにむらがり起り、賊魁がいたるところに割拠した。

そして、大乗寺は、釈賊の本拠となり、大坊主と称ばれ、国中高田派の諸院を破壊し尽す指揮所となった、という。

こうした歴史を有つ当寺には、いまでも、土寇の後裔かとおぼしい怪しい人物が、しばしば、訪れて、幾日か逗留して行く。

いまも、方丈の炉室で、古稀の住職と対座しているのは、ただの武士ではなかった。

総髪で、右眼をつぶし、兎唇であった。皮膚が異常に血の色をみなぎらせ、顴骨がおどろくばかり高かった。

双眸の光は、常人がまともには受けとめられぬくらい凄じかった。

これに対する老僧の風貌は、古歌にある「悟りとは悟らで悟る悟りなり、悟る悟りは夢の悟りぞ」の境に至って、哀楽を超えた枯淡の滋味を湛えていた。

いわば、一方が、物の盈ちた驕をあふらせているとすれば、片方は、数の終りの老に会得している対蹠を示している。

客は、木曽ノ源三郎、といった。

飄然として訪れて、二十一日の坐禅をおわったばかりであった。

住職寛如の点前を受け乍ら、しきりに、無我というものについての言葉をもとめているのだが、返答が一向に得られず、どうやら、聊か苛立っている様子であった。

と――。

何気なく庭へ視線を投じた木曽ノ源三郎は、心字の泉水に架けられた石橋の上に彳む人影を、みとめた。

「御坊――あれは、何者でござろう？」

雲水のすがたをしているが、一瞥して、ただ者ではない、と直感したのである。

「陳孫と名のる、拳法者じゃそうな」

「陳孫？　少林寺を継ぐ者でござるな」

木曽ノ源三郎は、すっと立って、ツカツカと、広縁に出るや、

「卒爾――申し入れたき儀がござる」

と、高声を懸けた。

唐人陳孫は、頭をまわして、こちらを視た。

源三郎は、二間を跳んで、その前に立った。
「陳孫と名のられるからには、陳元贇の裔人でござろう?」
「………」
陳孫は、黙って、視返しているばかりであった。
「それがしは、忍法源氏流の嫡流者にして木曽ノ源三郎と申す。陳元贇が少林寺拳法を承け継がれた御仁と出会い申したのは、千載一遇なれば、術を競いたく存ずる」
「思うところあって、わしは、おのが空手を封じて居る」
陳孫は、なにやら気重そうな口調で、こたえた。
「心の煩いか、それとも、身の衰えか?」
木曽ノ源三郎は、あざけるように、昂然と、肩をそびやかした。
「孰れと受けとってもろうてもよい」
陳孫は、面倒くさげに、視線を、水面に落した。美しい大きな緋鯉が、幾尾も、悠々と泳いでいる。
「ふん——。鯉の自由な泳ぎを、うらやむほど、心気五体が羸憊し果てて居るのであれば、話にならぬ」
木曽ノ源三郎は、云いすてて、踵をめぐらそうとした。
瞬間。——
陳孫は、凄じい気合を発して、泉水の上を飛んだ。
その石橋から、南の池畔まで、三間余あった。陳孫は、おどろくべきことに、その水面をすれ

すれに、一直線に、掠め飛んだのである。のみならず、池畔に立った時、いつの間に摑みとったか、その右手に、一尾の大緋鯉を、バタバタともがかせていた。

「ふむ！」

木曾ノ源三郎は、にやりとした。

「されば、源氏流の秘術を、御覧に供する」

云いざま、橋縁を蹴って、水面へ躍った。

とび込む、とみせて、片手で、水をひと蹴りするや、宙で、その巨軀を、くるっと一廻転して、橋上へ戻った。

その時、一尾の緋鯉は、源三郎のひと蹴りで、空中高くはねとばされていた。

とみた——刹那。

源三郎は、橋から、ぱっと姿を消した。

翔けあがる速影は、まさしく、目に見えぬ翼をそなえている、とも錯覚された。

橋袂から、太幹をそそり立てた老松の、とある高処から泉水へさし出た太枝へ、ひょいと、片手でつかまった源三郎は、空高くはねとばされて、ひらひらと落下して来た緋鯉を、ひょいと、摑みとった。

「木に拠って、魚を獲る——如何に？」

うそぶいておいて、その緋鯉を陳孫の足もとへ、抛りつけた。

二

しばらくの後、木曽ノ源三郎と陳孫は、炉室で対座していた。住職寛如は、座をはずしていた。

「陳孫殿。明朝、犀川にござれ。源氏流青竜の術を御覧に入れ申す」

源三郎は、云った。

「…………」

陳孫は、口を緘んだまま、香木を、炉にくべた。

「浪人者が一人、加賀へふみ込んで参った。こやつを、片づける。……こやつ、相当の兵法者で、平家流くノ一の術を破り、武田流蜘蛛網をやすやすと抜け、上杉流が仕掛けた赤染の法をも、これを事前に看破いたして居る。で――こやつの前に立ちふさがる番が、それがしにまわって来た次第。敗退した他流どもは、いわば、小細工を弄した、と申せる。源氏流が、他流どもと相違いたすところは、正々堂々たる軍法に則っている点にある。思い観よ、九郎判官義経殿の英邁にして武略ある、木曽義仲殿が剛壮にして勇武なる――その功名は、ことごとく、正々堂々たる軍法を駆使することによって、挙げたるものでござるわ！」

たしかに、その高言に、いつわりはなかった。

源義経は、ようやく成年に達して、まだ鞍馬の東光坊の許に在った時、たまたま、陸奥の鉄商人・吉次と知りあった。

吉次から、陸奥を治める藤原秀衡の所領は八箇国、兵は五十万騎を下らず、ときくや、丁と膝を搏って、

「その五十万騎のうち八万騎を請い受けることができれば、見ン事、平家を討ち滅ぼしてみしょう」

と、云いはなつや、画箋をひろげて、筆を把り、さらさらと走らせはじめた。その八万騎を率いて、坂東に討って出たならば、坂東八箇国は源氏に志ある国々ゆえ、十二万騎は相違なく集るであろう。八万騎を合せた二十万騎のうち、十万騎は、伊豆の兵衛佐殿（頼朝）に奉り、十万騎は、木曽義仲殿につけ、我身は単身、越後国にうち越え、鵜川、佐橋、金津、奥州の軍勢を催して、越中、能登、加賀、越前の軍勢を靡けて、十万騎をつくり、荒乳の中山を馳せ越えて、西近江より大津の浦に出て、坂東の二十万騎の到着を待ち、うちそろって、逢坂の関を越えて、都へ攻め上り、十万騎をもって天子の御所に参らせ、あとの二十万騎をもって、平家の軍勢を西国に追い散らすに、なんの造作はない。

「ああ！　八万騎が、我にあれば！」

わずか十五歳の美童の描いてみせる鮮烈な軍略図を、吉次は、感動をもって、眺めさせられた、という。

源氏の兵法は、このように、正々堂々たるものであった。陰険な謀攻、狡猾な奇策はつとめて避けたのである。

義経が常に携えたのは、六韜三略であった。一ノ谷の役に、鹿が通るなら、馬の通らぬ事やあると、鵯越の断崖を、釣瓶落しにすべり落ちたのも、臨機応変の正攻であった。また、木曽義仲が、平家の公達の率いる大軍を、倶梨伽羅峠に迎え撃って、牛の角に松明をゆわえつけ、この狂牛の群を一挙に敵中へ追い落したごときも、まさに、孫子が曰う「激水の疾き、石を漂わすに至る者は、勢いなり」の衝撃作戦であった。

「眠狂四郎なる素浪人め、死地を巧みにくぐり抜ける鋭い反応力をそなえているに相違ない。こ

れを撃つには、張りつめた弩の勢いあるのみ。当るべからざる兵勢と電撃を以てこそ、幽鬼に等しい敵を仆すことができ申す。そうは、思われぬか？」

木曽ノ源三郎は、うそぶいて、剛快な笑い声を発した。

陳孫は、じっと、この驕傲の忍者を見戍っていたが、

「たかが、素浪人一人を、大層に買いかぶられて居るようだが……」

わざと、ひくく、呟くように、云った。

忽ち、源三郎の眉宇が、びくっと痙攣した。

「買いかぶって居るのではない。ただ、狂犬を捕えるに、万全を期して居るまでだ」

——狂犬か。

陳孫は、心の裡で、嗤った。

——狂犬は、貴様の方であろう。いかにも、孫子を能く学んでいるようなことを、うそぶいて居るが、その孫子に、将軍の事は、静にして幽、とあるではないか。先程からの、得意げな振舞いやら高言は、まさに、狂いたったざまとしか思われぬ。おのれの勢いとやらは、いわば、狂勢であろうか。

陳孫は、軽侮した。

しかし、同時に、この忍者が、用いるであろう青竜の術とやらが、源氏流秘伝の中でも、最もおそるべき攻めであろうことも、容易に想像されたのである。

翌朝、針一本で突いても亀裂の入りそうなほど、寒気のはりつめた野を、風の迅さで奔って、

陳孫は、犀川のほとりに出た。

おのれが、いま太陽の昇る東天にむかって立っていることに気づいた陳孫は、

——そうか！

と、合点した。

四神のうち、東方の神を青竜と称う。東方の流水に対して、用いるのが、すなわち、青竜の術に相違ない。

平蕪の中に、巾の広い流れは、海へそそいでいる。しかし、その川口が湊をなしていないのは、上流から押し流された土砂が積もって、荷船を入らせるのを、さまたげているからであろう。海岸には、わずかな数の漁師の家が、点在しているばかりであった。

ただ、沖あいに、銭の旗をひるがえした巨きな櫓船が、碇泊していて、それが、陳孫の目を牽いた。

川の両岸には、さむざむと蘆荻が生い茂っているばかりである。

街道は、この流れに遮断され、渡し舟を通しているところだけ、かたちばかりの桟橋が設けられている。厳冬の季節には、人も荷も渡るのが稀なせいか、一艘の舟が、ひっそりと、桟橋に着けられて、船頭の姿も見当らぬ。

陳孫は、東岸からまっすぐに地平へ消えている街道へ、目を置いた。

——眠狂四郎は、はたして、この街道を歩いて来るのか？

誰よりも、狂四郎の性格を知っている陳孫は、死地に向って平然として進んで来る以外の姿を想像することはできなかった。

この西岸には、狂四郎を迎え撃つ陣形が、整然と成っている。生い茂った蘆荻の蔭には、数十人の伏兵が配置されているのを、陳孫は、察知したのである。

陳孫であればこそ、察知できたのである。並の人間ならば、蘆荻のすぐそばへ寄っても、伏兵があると、さとることは不可能であろう。

伏兵は、蘆荻をそよともさせぬ、生気をひそめた物体と化して、鎮(しず)まりかえっているのである。

陳孫には、判るのだ。数十の伏兵はのこらず、水に顔をひたしているに相違ない。

気息を断ち、敵に、その所在を知らしめぬためには、伏兵は、敵を眺めてはならぬ。ただ、将一人が、その立つべき時機を測っていればよいのである。これが伏兵の法である。

将の下知(げじ)によって、伏兵は、一斉に、水中から、顔を擡(もた)げる。そのまなこは、洗われて、敵を視(み)るに炳(あきら)かとなっている。

三

跫音(あしおと)もたてずに、陳孫の背後に、木曽ノ源三郎が近づいて来た。

陳孫は、振り向かなかった。

源三郎は、並んで立つと、口をきった。

「眠狂四郎は、この川を渡らずに、西進はできぬ。昨夜は、これより五里彼方(かなた)の落人部落に泊った。夜半に漁師の家を発足した彼奴(かやつ)は、もうそろそろ姿を現わす時刻だ。……あの舟着場の小屋には、彼奴を慕う白狗(しろいぬ)がつないである。新しい主(あるじ)の彼奴が、近づけば、吠(ほ)えて尾を振るであろう。……彼奴は、白狗をみとめて、われらの挑戦を予告されたと知る。挑戦されて、後退する彼奴で

はない。川面を見渡して、平然として、船頭に舟を出せと命ずるに相違ない。何故ならば、流れは、巾こそ広いが、底が浅い、と水の色で看てとるからだ。夏ならば、旅人どもは、徒歩でも渡り得る。万が一の場合は、水中に降りても、充分に闘える――と彼奴は、判断する。その判断に、あやまりはない。

だが――。

彼奴の意表を衝く戦法が、こちらにはある。舟が、川の中央まで漕ぎ出された時、上流の両岸から、一斉に、軽舸がすべり出て、その渡し舟めがけて、殺到して行く。十挺の軽舸には、柴が積まれてある。柴には、油がふりかけてある。……軽舸の群が、半円を描いて、渡し舟を包囲した瞬間、そこの蘆荻にひそむ伏兵が、一斉に、起って、火矢を放つ。十挺の軽舸は、燃えあがって、渡し舟を、火焔の中に包む。すなわち、青竜は、紅蓮舌を吐いて、眠狂四郎を嘗めるのだ。

彼奴は、たまらず、水中に身を躍らせるよりほかに、すべはない。ところが、水は浅く、流れはゆるやかであっても、水底にならんだのは、苔の生えた丸石ばかりである。ぬるぬるとすべる丸石の遠浅を渉ることが、いかに困難であるか、知る者ぞ知る。

そこを狙って、川下から、新たな軽舸の一団が、一斉に、奔り出る。あの沖に泊っている銭五船の水主どもを加えて、催す漁りと思ってもらおう。

地曳きの網と、投網の中に、眠狂四郎は、身を置くことになるのだ。水中をくぐって遁れるには、かえって水底が浅すぎる。……眠狂四郎に、たとえ翼があっても、この包囲陣から脱出する手段は、無い。……陳孫殿、お主に彼奴を救うことが、できるか？」

源三郎は、陳孫へ、凄じい眼光をそそいだ。

——成程、全き死地だ！
陳孫は、頷(うなず)くよりほかなかった。
咄嗟(とっさ)の間に、この青竜火攻に対抗する妙案が泛(うか)ぶべくもなかった。狂四郎が、未然に察知すればともかく、いったん、渡し舟に身を容(い)れたならば、もはや、たすかる方法はない、と断言できる。
「来たぞ、彼奴！」
源三郎が、叫んだ。街道の彼方に、ぽつりと小さな黒い影が現れるや、対岸の小屋から、犬が吠(ほ)えはじめたのである。
編笠(あみがさ)をかぶった黒の着流しの浪人者は、ふところ手で、船頭を先に立て、巨(おお)きな義畜(いぬ)を後に従えて、ゆっくりと、桟橋へ降りて来た。
目もかすみ、耳も遠いらしい年寄の船頭は、渡し舟の綱を解き、棹(さお)を把(と)ってから、空を仰ぎ、
「今夜あたりから、また、雪でがんすかのう」と、云った。
舳先(へさき)に腰を下した黒い姿は、黙然としている。
舟は、流れの中へ出た。
艪音(ろおと)が、単調に、のどかに川面を渡る。
曇空の下で、動くものと云えば、その舟影だけであった。
恰度(ちょうど)、それが川の中ほどに来るや、伏兵は、一時に、起った。
上流の蘆荻を倒して、一斉に出現した柴積みの軽舸十挺は、水面をすべる、というよりも、飛

ぶがごとくに、殺到して来た。
それらのかたちは、「兵法神武雄備集」にみえる盲船というのであろう、乗った者の姿を完全にかくしていた。しかも、物見の疾舟、または浪潜舟の特徴を巧みにとり入れた構造であった。あっ、という間に、偃月の陣形から雁行に移って、忽ち、渡し舟を、押し包んでしまった。この時すでに、下流から舷の高い水戦用の軽舸十挺が、蘆荻を鳴らして出現していた。
と――。
西岸から、四十人あまりの伏兵が、どっと立つや、先が松明となっている火矢に、火をつけて、びゅんびゅんと、弦の音をひびかせた。
包囲した柴舟の柴には、毒煙を有つ焔硝がかくされてあったとみえて、火矢を受けるや、みるみる、十挺とも、濛っと黄煙を噴かせた。
奇怪だったのは、渡し舟の舳先に腰かけた黒の着流し姿が、この猛攻に遭い乍ら、自若としていることであった。巨狗花子だけが、狂ったように吠えたてた。老いた船頭は、艫で、腰を抜かしていた。
木曽ノ源三郎は、渡し舟が、黄烟に完全に掩われたのを視て、
「かかれいっ！」
と、幡連をうち振った。
すると、かたわらに立っていた陳孫が、不意に、独語するように云った。
「火攻めに遭っているのが、はたして、眠狂四郎であろうか」
「なにっ?!」

はっとなった源三郎の視野の一隅に――上流から、すばらしい迅さで、下って来る一艘の黒塗りの舳先が金物造りの胴突舟が、映った。それに乗っているのは、渡し舟に乗っている者と同じく、編笠をかぶった黒の着流し姿であった。

「彼奴っ！」

源三郎は、狼狽した。眠狂四郎に、この虚位実船の変化の用意があろうとは、夢にだに予想しなかったところである。

狼狽からたちなおるいとまはなかった。胴突舟から、突如、白煙が、爆発の凄じい勢いで、奔騰して、猛毒の黄煙を追いちらし、みるみる川面いっぱいに、濃霧宛然に、拡った。

白煙が薄れた時、胴突船は、すでに、下流から襲った軽舸十挺を突破して、はるかな彼方を馳せ下っていた。舟には、いつの間にか編笠姿が、もう一人ふえていた。

「彼奴！　上杉流の寒川笑左衛門めが、荷担し居った！」

源三郎が、呻いた。

「ふふ……、敗れたな、源氏流氏――」

陳孫は、あざけりの声をのこして、源三郎の頭上を、翔け越えるや、下流めがけて疾駆しはじめた。

狂四郎が、銭五船へ向って行く、と看てとった陳孫は、追跡して来る軽舸を、河口で、くいとめてやろう、とほぞをきめたのであった。

狂四郎叫ぶ

一

北陸の荒海は、空に風がなくても、波浪を高くうねらせていた。

犀川の渡し舟は、その荒海へ出て、枯葉のように、浮き沈みし乍ら、沖あいに碇泊している(銭)の櫓船にむかって、進んでいた。

ただの小さな川舟が、波浪を乗りきることは、不可能にちかいことなのだが、漕ぎ手の技の巧みで、かなりの速度で、銭五船に近づいていた。漕ぎ手は、僧形の陳孫であった。

眠狂四郎は、舳先に腰を下して、遠ざかる陸地へ、冷たい昏い眼眸を置いていた。

もはや、陸地には、人影さえも、みとめられなかった。

この川舟が、犀川を脱出して、なおしばらくの間は、河口では、凄絶の闘いが演じられていたのである。

河口には、かなり大型の関船が、待ちかまえていて、源氏流忍者が二人、銭五船の水主十数人を指揮していた。

それにむかって、狂四郎と寒川笑左衛門の乗った胴突船が、突入して行った。

たちまち、左右から、投網が打たれたが、笑左衛門には、棹をふるって、これを払いのける業

がそなわっていた。

とみるや、敵の水主らは、一斉に、とび込んで、水底をもぐって来たのである。

たちまち、胴突船の底は、破られ、水が噴きあがって来た。

陳孫が、先廻りして、汀から川舟をひろって、漕ぎ寄せて来たのは、その時であった。

沈みかかる胴突船から、狂四郎は、その川舟へとび移った。

笑左衛門の方は、逆に、関船にむかって、身を躍らせていた。関船は、いわゆる小早という、艪十五挺立ての快速船であった。

これに追跡され、海上で、襲撃されたならば、小さな川舟は、ひとたまりもなく、転覆してしまうに相違なかった。そこで、笑左衛門は、おのが身をすてて、関船を、沈めることにしたのである。

狂四郎は、笑左衛門が、敵の忍者二人を、斬り仆すのを見とどけ乍ら、

——このおれのために、死んでくれる！

と、胸の奥底に、痛みをおぼえていた。

笑左衛門が、その二人を斬り仆した時には、すでに、上流から、軽舸の一団が、殺到していたのである。

狂四郎は、一瞬、視線をそむけた。

関船が、轟然と、火柱を噴き上げたのである。笑左衛門の五体は、四散して、果てた。

木曽ノ源三郎は、しかし、そのまま、攻撃を止めて、狂四郎の乗っている川舟を見送ったのである。

完全な死地を、見事に突破し去った狂四郎に対して、敬意を払ったのであろうか。それとも、

海上に於ける相討ちを、きらったのであろうか。

狂四郎に、唐人陳孫が附いている限り、海上に追えば、対手を討つことに成功はしても、同時に、おのれも生命を落すことになる、と覚悟しなければならなかった。

狂四郎をつぎつぎと襲った忍者たちは、孰れも、加賀藩にやとわれた者たちであった。前田宰相に忠誠を誓った家来ではなかった。狂四郎を討ち果せば、莫大な報酬が得られるから引受けたのである。仕損じれば、黙って消え去ればよかった。武士の面目とか、栄誉に、すこしも拘泥する必要はなかったのである。

忍者とは元来そういう存在であった。

木曽ノ源三郎は、遠ざかる川舟を見送って、おそらく、

——いつの日にか、一騎討ちの機会があらば！

と、思ったに相違ない。

二

陳孫は、黙々として、漕いでいたが、狂四郎が、銭五船に視線をめぐらそうともせぬのを訝る表情になった。

黒い船体が、大きく、目前に来た時、陳孫は、ついに、訊かずにはいられなかった。

「いかがされる？」

「…………？」

「われら両人だけで、船を奪取できるものとは、考えられ申さぬ」

当然、船にも、強敵が待ち伏せている、と解釈するのが、妥当であった。二人だけで、乗り込むのは、あまりにも無謀にすぎるようである。

陳孫は、河口を脱出した時、狂四郎に、あの船を目ざしているのか、と訊ねたところ、

「奪るのだ」

と、いう返辞をもらっていたのである。

その時は、いかにも狂四郎らしい度胸だ、と思ったのだが、漕ぎ進むにつれて、これはあまりにも無謀だ、と思えて来たのである。

「唐人――、お互いに、生きる上で、短を舍てて長を取るような、是非の取捨に心をつかってては居るまい」

「それは、そうでござるが……」

「険を歴、危きに乗るは、麒麟も狐狸に如かず、と戦国策にあるが、これは、経綸をふまえての話だろう。おれたちは、その逆の道をふんでいる。生命ひとつ、どこにすてても一向にかまわぬ、となれば、むしろ、すすんで、険を歴、危きに乗ってみようではないか」

そう云う狂四郎の異相の、冷たさ、静けさに、陳孫は、ふっと、打たれた。

千佐という女性が、この浪人者に、自身でも、どうしようもない烈しさで、必死の慕心を捧げているのが、判るような気がした。

――この人物と、深く知り合うたことが、不運というものだ。この人物が、進む道に、こちらは、否応なく、従うことになる。

陳孫は、自分に、云いきかせた。

ふしぎな魅力なのだ、この浪人者のすべてが——。
狂四郎が、それきり口を緘むと、陳孫も沈黙をまもった。
川舟は、ついに、船腹へ着いた。
舷側から、首をのぞける人影は、なかった。
不気味な静寂が、船内を占めていたのである。
過半数の水主が、狂四郎を狩るために動員されたとしても、幾人かの手練者は、この中に残っているに相違ない、と考えるのが当然である。
それが、気配をひそめているのが、不気味なのである。
「それがしが、先に——」
陳孫は、艫綱のさきに、狂四郎から渡された小柄を結びつけるや、舷側めがけて、投げ上げた。
小柄は、舳の絞車座のどこかに突き刺さった。引きしぼって、試してみた陳孫は、逡巡わずに、するすると、登って行った。
流石に、狂四郎は、固唾をのんで、見戍った。
いったん、舷側を越えて、垣立の指板の蔭にかくれた陳孫は、すぐに、袖垣から、縄梯子を投げおろして来た。
「気配は——？」
陳孫のそばに立った狂四郎は、ずうっと見わたし乍ら、問うた。
陳孫は、かぶりを振った。
狂四郎は、鋭く神経をくばりつつ、舷に沿うて、犬走りを歩いた。

この船はまさしく、兵船として、造られていた。一層の櫓の上には、いつでも、天主台が建てられるような構造になっているし、垣立の内側には楯を立てる広さがとってある。

帆柱は、腰当梁のところに一本立てるのが普通だが、この船には、舳近くに、弥帆柱を立てる用意があった。

舵の大きさも、兵船と化す証拠である。舵の大きいのは、船の横流れを防ぐためである。

——前田宰相の持船であったのか？　それとも、銭屋五兵衛自身が、造ったのか？

この船は、遠く南洋まで趨ったであろう、と想像された。

小間（船首の甲板）へ出た狂四郎は、一瞬、

——いるな！

と、直感した。

ふところ手で待つ狂四郎の前に、櫓の上から姿を現したのは、意外にも、忍法無影流戸越家の老婆であった。

「おばばか——」

狂四郎は、苦笑した。

「眠狂四郎、このばばは、生きている限り、おのれを討ちとる執念をすてはせぬぞ。この前も申しておいたぞ。かぞえきれぬ悪業を積んだおのれは、千人の指さすところ、病無くして死すじゃ。……勝負せい、眠狂四郎！」

「おばば、お許は、わたしを討とうと躍起になって、いろいろの策を弄してみたが、ひとつも、成らなかったではないか。徒労を重ねて、何になる」

「こんどは、ちがうぞ。無策じゃ。正々堂々と、勝負してやる」
「おばばが、わたしとか？」
「ふん。無念乍ら、このばばに、おのれを討つ力があるわけがあろうか。わしの代りに、おのれと勝負する者を、つれて参って居るわ」
「よかろう。……尤もこちらは、現れた対手を、選り好みする権利がなくはないが……」
「なにを申すぞ！　おのれに、そのような権利があって、たまろうか！」
「では、選り好みをすまい。そのかわり、条件をつける」
「申せ！　きくだけは、きいてやろうず」
「きくだけでは、困る。条件をのんでもらおう」
「中せ！」
「のむか？」
「む——」
「のむのだな？」
「よ、よし」
老婆は、巧みに追い込まれて、頷いた。
「わたしが、勝ったならば、この船から、おとなしく、去ってもらおう。そして、再び、わたしの前に、現れてもらうまい」
「…………」
「おばば、条件をのむ、と約束したぞ！」

「…………」

老婆は、凝っと狂四郎を睨みかえしていたが、急に、ふっと、残忍な微笑を、口辺に刻んだ。

「勝てるかの？」

「対手が、鬼神でない限り――」

「ふふ……、もし、勝てなんだら、どうするぞ？」

「こちらが、海の藻屑となるまでだ」

「いやさ、お主が、対手を斬れぬ時の話じゃわい」

「斬れぬ？」

「そうさ、斬れぬのじゃ」

「わたしに、斬れぬ者をともなって来た、というのか？」

「斬れるか、斬れぬか、いま、出て参るわ。……もし、斬れなんだら、お主、なんとするぞ？」

「…………」

「その右腕を、わしに斬り落させるか？　それとも、盲目になるか？」

「どうとも、のぞむがままだ」

三

櫓の蔭から、幻影のような白いものが、動いた。

視線を、向けて、狂四郎は、はっとなった。

一糸まとわぬ裸女が、大小の剣を、双手に携げて、歩み出て来たのであった。

——小波(ささなみ)!

狂四郎は、息をのんだ。

この男が、生れてはじめて出会った稀世(きせい)の美女、といっても誇張にはならぬ女性であった。﨟(ろう)けた、という形容は、この女性のためにつくられたか、とさえ思われる。鼻梁(びりょう)の線に、遠い王朝の頃の典雅が匂(にお)うて、もしかすれば、その時代に生れて、どこか——武蔵野(むさしの)の片ほとりに、ひっそりと、数百年間、生きつづけた、と語られても納得できそうな美しさは、狂四郎の心を灼(や)いたことであった。

いまはじめて、厳冬の薄ら陽(び)に、惜しげもなくさらした裸身は、その﨟けた美貌(びぼう)をのせるにふさわしい繊細な、嫩(やわら)かな雪膚を、息吐(いきつ)かせていた。

詩賦に讃(たた)えられるべきその雅(しなやか)な肢体(したい)に、狂四郎は、一度触れてみて、焼鏝(やきごて)でもあてられたように痙攣(けいれん)する反応を起させたことがある。季女(しょじょ)だったのである。

季女が、一糸まとわぬ全裸となって、出現するためには、羞恥(しゅうち)を押し伏せる非常の勇気を要した筈(はず)である。

なんの理由があって、その勇気をふるい起さなければならなかったのか?

狂四郎は、石のように動かぬその白い貌(かお)から、その心情を、看(み)てとることは、できなかった。

「おばば——」

小波から、視線をはなさず、楼上に立つ老婆へ、声をかけた。

「はだかになれ、と命じたのは、おばばか?」

「ちがうぞ! 小波殿が、自らのぞんだことじゃ。……ふふふ、斬れるかの、眠狂四郎?」

「…………」

狂四郎は、小波に、これはなんの戯真似か、と訊ねたかった。

だが、小波のおもてには、いかなる質問をも拒否する硬い無表情があった。

老婆に捕えられて地下の石牢にとじこめられていた狂四郎を脱出させておいて、遠くへ去った小波であった。

狂四郎としては、そのような恩を蒙らなくても、生涯忘れられぬ、神秘とさえいえる、妖しく美しい女性であった。

綾瀬川を小舟で去る小波を見送って、

——もはや、ふたたび、会うことはあるまい。

と、深い感慨を、胸に湧かせた狂四郎であった。

その俤は、永く、狂四郎の脳裡にのこっている筈であった。

——判らぬ。

狂四郎は、まばたきもせずに瞶める小波を、視返し乍ら、胸中で、叫んだ。

小波は、すっと、一間の距離に迫るや、長剣を上段に、脇差を中段に、構えた。

その構えに、微塵の隙もなかった。

——どういうのだ？

嫩かな白桃に似た胸の隆起が、滑らかな腹部の線が、ほんのりと玄い下腹の茁が、そして、大きく踏み開いた肉の盈ちた下肢が、空間に鮮烈に浮き立って、狂四郎の目を眩ます——。

「ええいっ！」

帛を裂く気合とともに、その皓い裸形が、跳躍した。

数尺を遁れた狂四郎の眉間に、朱線が引かれ、たらたらと、こめかみを血汐がつたい落ちた。

――おれを、必死に、斬ろうとする！

狂四郎は、われにかえったように、殺気の放射する光身を、視なおした。

その殺気は、なみなみならぬものだった。業が、それにともなっている。

あしらって、その二刀を搏ち落すことは不可能であった。

小波が、老婆に躍らされているとは思えなかった。本当に、この眠狂四郎を、斬ろうとしているのだ。

狂四郎は、これまで強敵と対峙した時と同じく、斬らねば斬られる立場に置かれたのである。

狂四郎は、ゆっくりと、無想正宗を鞘走らせた。

地摺り下段にとるや、

「そなたを、あの世に送る理由はないが……」

と、ひくく云いかけた。

小波の縫唇は、かたくむすばれたままである。

「…………」

「…………」

無想正宗は、徐々に円月を描きはじめた。

狂四郎の双眸は、燠火のように、沈んだ深い色で、彩られていた。もはや、その痩身に満ちているのは、敵を討ち仆す冷酷な業念のみであった。

これに対して、小波の眸子は、妖しい光芒を煌らと放っていた。しかし、それは、もはや、殺気をみなぎらせたものではなく、女の魔性が白昼にあらわにされたら、それか、と思わせるような妖しさだったのである。

小波は、殺気をほとばしらせて、秀れた迅業で、狂四郎の眉間を、傷つけた刹那から、その殺気を超えて、この世のものではない化生の世界に心身を置いた、とさえみえる。

……無想正宗は、ついに、切っ尖を、天に指した。

その瞬間——。

狂四郎は、小波の白い貌に、法悦にも似た恍惚とした笑みが、滲み出るのを、看た。

——小波は、死を望んだのだ。

そうと判った。

しかし、もはや、おそかった。

小波は、ただ、斬られようとしているのではなかった。おのがそなえた秘術の極意を揮って、死のうとしているのであった。

狂四郎自身が、この瞬間、斬るのを止そうとすれば、斬られるのであった。

小波が、死の一刹那前に、歓喜の笑みをうかべたのは、もはや、人間ばなれした生きものと化したことを、意味した。

狂四郎は、はじめて、円月殺法を使うさなかに、慄然となって業念をすてた。

——神が在るなら！

胸中で叫ぶや、目蓋を閉ざした。

その一瞬、小波は、甲板を蹴って、斬り込んだ。
刃と刃は、嚙み合わなかった。
本能の迅さで、斜横へ一間を奔って、ぴたっと、停止した狂四郎は、無想正宗に、手ごたえさえ感じてはいなかった。

四

狂四郎は、皓い光身を血海の中に俯伏させた小波へ、視線をまわす勇気はなかった。
突如、櫓上から、狂気したような罵詈が、あびせかけられた。
「けだものめ！　外道！」
老婆は、狂四郎の面へ、べっと唾を吐きかけた。
「おのれが想う女子へ、よう刃をくれることが、できたものぞ！　けだものめが――。おのれ自身が、千人の指すところ、病無くして、死ぬ身と知って居り乍ら、なぜ、絶好の死場所を、えらばなんだ。やい、外道――小波殿は、おのれを斬って、自身も、死ぬつもりであったのじゃぞ！　おのれ、なぜ、生き残り居った！　百年に一人も現れぬほどの美しいからだを、無慚に、血噴かせておいて、ようも、ようも、生き残り居ったわ！　おのれは、悪魔じゃ！　羅刹じゃ！　のろわれい！　未来永劫、のろわれい！」
喚きたてる老婆を、瞶めかえしているうちに、狂四郎の五体に、凄じい憤怒が勃然と渦巻いた。
「おいぼれっ！」
この男としたことが、はじめて、われを忘れて、身を躍らせるや、櫓上へ、とび上りざま、白

刃をふりかぶった。

「いま、すぐ、去せろ！　去せないと、その皺面から、股ぐらまで、まっ二つに、割るぞ！　去せろっ！　去せぬかっ！」

老婆は、思いがけぬ狂四郎の凄じい逆上ぶりに、恐怖をあふらせて、たじたじと、あと退った。

陳孫が、さっと奔り寄って、老婆をかかえあげるや、艫へ行き、無言で、縄梯子を指さして、川舟へ降りよ、と命じた。

陳孫が、ひきかえしてみると、狂四郎は、全き痴呆のていで、荒海の果てへ、うつろな眼眸を投げていた。

だが、かくれていた数人の水主が、おそるおそる、小間へ出て来ようとすると、狂四郎は、再び、凄じい権幕で、

「ひっこんでいろ、舟虫ども！　さもないと、うぬらの目を、斬るぞっ！」

と、呶鳴りつけた。

折柄、雲が割れて、陽光が、朱にそまった裸の屍へ、容赦なくそそいでいたのである。

忍者「影」

一

能登半島の裔端を、珠洲岬という。

珠洲岬とは、諸岬の総称で、南北の二角に分つ。

南——富山湾側の内浦に、長手崎があり、北にむかって、遭崎、金剛崎、禄剛崎の三岬が、並ぶ。

禄剛崎を越えれば、鳳至の外浦であり、輪島に至る。

この珠洲岬の沖を越えて行くのは、容易の業ではなかった。

鋸状の岩礁を、北海の高浪が、吠えかかり、噛み狂う難所であった。

大小無数の岩礁は、干潮時には、鮫の牙のように水上に現れ、満潮時には、水中に隠れて、近づく船の底を、截ち裂く。

さらに、船頭たちを恐怖させるのは、潮流が、渦をなして、この岩礁地帯めがけて、船を吸い寄せることであった。

船頭たちは、水魔が、そこに棲息すると信じていた。

禄剛崎の傍に、狼煙という名の里落がある。狼煙は、烽火の別名で、王政の盛代に、海上警戒

のために、その備えがあったが、これを水魔がきらったので、近世は、すたれて、故蹟となってしまった。

珠洲岬こそ、灯台がなければならぬ場所であるにも拘らず、船頭たちが、敢えて要望せぬのは、水魔の迷信に抗らう勇気がないためであった。

ただ――。

十年あまり以前から、禄剛崎の岩礁上に、赤い鳥居が建てられ、一対の石造りの灯台が築かれて、一年のうち、幾日間か、あかあかと、十海里を照らすようになっていた。

これは、銭屋五兵衛が、厳島神社の分社を勧請したのである。

一年のうち、ほんのわずかの夜だけ、灯火が入れられるのは、銭五船を航行させるためであったろう。

銭屋五兵衛が、ここに、灯台を設け、狼煙の里に、一社を建立したのは、勿論、おのが持船の安全をねがうためであったが、ひとつには、この豪商にも、煩悩の犬がつきまとうた秘めた事実を物語っている。

銭屋五兵衛にも、女人を恋う心があったのである。

日本一の富豪となり、自ら千石船を駆って遠くアメリカまで渡る気宇をそなえていても、所詮は、封建の時世に生れて育った町人には、抜きがたいひがみがあった。劣等感である。

銭屋五兵衛は、その金力をもってすれば、どんな美女でも、おのが意のままにできないことはなかった。しかし、それは、あくまで、身分も地位も栄誉もない世界のむすめという制約からまぬがれることはできなかった。

望することは、許されなかった。

五兵衛は、その条件をも、おのが金力で、破りたかった。さりとて、大名の姫君を妾として所

五兵衛が、おのが生涯に於て、最高の女性として、選んだのは、奥能登の「時国館」の女であった。

「時国館」については、この物語で、いくたびか紹介しているので、あらためて述べぬが、平時忠の末裔として、大納言の格式をのこすその館は、加賀藩主前田氏をして、おのれが中納言であるために、縁金の折上げ格天井の一隅に白紙を貼らしめた程の名家であった。

名家であるがために、尋常の家とは縁組がととのわず、時国館では、代々、生涯嫁がずに終る婦人がいた。

五兵衛が、某年、館を訪れて、一瞥するなり、

――この女性をこそ！

と、胸を躍らせたのも、そうした不運の一人であった。

すでに、三十八歳になっていて、もはや、館から出て行くことをあきらめていた。

五兵衛の目には、しかし、その﨟たけた貌は、二十歳のものとしか、映らなかったのである。

五兵衛は、思案の挙句、兄の当主にむかって、近いうちに、禄剛崎に、厳島神社を勧請するゆえ、お妹御のつれづれをおなぐさめいたしたいので、月に一度、参籠なされては如何でありましょう、と、巧妙にすすめて、承諾させたのである。

いわば、五兵衛は、婚期を喪った一人の婦人を手に入れるために、神燈をかかげる一社を建立したのであった。なみなみの失費ではなかったが、高貴の女を抱きたい執念の前には、千金をす

てるのに、聊かの悔いもなかった。
気位の高い老嬢を、曽々木の浜から、船に乗せて、禄剛崎まではこんで来るためには、将軍家の姫君を迎える程の神経が配られた。
ただ、はこんで来てしまえば、その清浄なからだを、わがものにするのに、ほんのわずかの腕力を揮えば足りた。
爾来、三年のあいだに、五兵衛は、鳳子というその老嬢を、禄剛崎へ十数回も、招いていた。

二

久しぶりに、江戸から帰って来た五兵衛は、狼煙の社裏手の別邸で、ひととき、鳳子の白い肌を、責めおわって、座敷に寝そべっていた。
檜戸をへだてて、湯音がしている。
広い板敷きの間に、湯槽を据えて、鳳子が入浴しているのであった。
源平時代のしきたりを守って、時国館では、湯殿や厠を設けずに、座敷に用具を持ち運んで来て、済ませていたのである。
五兵衛は、よろこんで、鳳子のために、用具を造ってやり、召使いを附けてやっていた。
垣間見る嗜虐も、鳳子との逢瀬の愉しみのひとつにかぞえていたのである。
五兵衛は、かねて、将軍家とか御三家とか大大名の夫人や息女が、厠に入っても、自ら手を使わず、召使いに、拭き役がいる、ときいていて、そういう羞恥というものを持たぬ女性たちのくらしぶりに、興味を抱いていたのである。

凰子は、まさしく、その一人であった。

五兵衛は、はじめて、凰子を、この屋敷に迎えた日の宵、用便のさまを、垣間見て、異常な刺戟に、固唾をのんだものである。

輪島の塗師に命じて作らせた優美な御虎子を、座敷の中央に据えさせ、凰子は、召使いに、裳裾をたかだかとかかげさせておいて、それに、跨って蹲むや、勢いよく、小水を噴き落した。

皮を剥がれた檜の幹のように真白な太股を大きく拡げて、ひと叢の恥毛をくろぐろと浮きたて乍ら、用を足す姿態は、人目に曝すべきものではない。曝すべきものではないからこそ、男の嗜虐趣味を満たすには、これ以上の姿態はない、と云える。

すれからした女郎といえども、この姿態だけは、男に覗かれるのを、拒否する。

自ら高貴の生れと誇る女人が、平然として、人目をはばからぬのである。

五兵衛には、そこが、面白いのであった。

いま――。

寝そべって、湯音をきき乍ら、五兵衛は、ひとり、にやりとした。

――どうやら、わしも、公家のぬけぬけとしたくらしぶりが、理解できるようになって来た。

礼儀三千威儀三百、といわれる時世であったが、社会百般にゆきわたった規矩整然も、これは、もと、堂上公卿が、つくりあげたものである。

一寸の余地も剰さぬまでに形式の美をつくりあげ、それを武家の世界に移しておき乍ら、公家自身は、なお、人間本来の姿態だけは、原始のままの営みの中に、平然として、のこしているのであった。

すなわち、閨房や厠における、人目にふれてはならない営みを、決してかくそうとせず、召使いをはべらせておいて、行っているのであった。徳川将軍家では、この破廉恥までも、公家作法として、とり入れたのである。

五兵衛は、いわば、三代将軍家光がはじめて禁廷から皇女を迎えた時のように、閨房に召使いをはべらすように所望されて、とまどったことである。

禁廷や大奥で、訓練を受けた召使いではなかった。十八歳の召使いは、豪腹な主人が、名家の老嬢を、聊か手籠めに似たかたちでわがものにする有様に出会い、全身を石のようにかたくして、終始俯向きつづけて、一度も目撃する勇気がなかった。

その召使いの様子が、逆に、五兵衛に、いままで知らなかった新鮮な興奮をおぼえさせた。

五兵衛が、閨房に、目撃者を据えるようになったのは、その時からであった。金沢や江戸の女たちは、それをいやがったが、五兵衛は、許さなかった。

なまめいた湯音をきき乍ら、五兵衛は、心地よい疲れの中で、ほぼ満足した状態にあった。

三

湯音が已み、鳳子が寝所へしりぞいてから、しばらく経って、音もなく檜戸が開き、忍び装束の人物が、はいって来た。

目ばかりに面を包んでいるばかりか、十指までも、同じ鼠色の布で包んでいた。

銭屋五兵衛も、この人物の貌を、いまだ、一度も視たことはなかった。

「影」と称されるこの人物は、真田流忍びの術を承け継ぐ唯一の術者である、という。

その祖先は、石田三成に、隠れ仕えをした稀代の忍者であった。

いまなお、江戸には、「影」という忍者についての伝説が、市井で語り継がれている。

寛永十一年九月なかば、将軍家光は、江戸城吹上に於て、名流の剣士を徴して、試合を覧た。世に、これを寛永御前試合、と称する。

その際、家光は、勝者の方に、秘蔵の無銘太刀一振を与えた。

試合は、十試合が行われた。したがって、十振の太刀が、家光の手から、勝者に渡された。

ところが、その勝者を襲い、拝領太刀の切尖三寸を、切断して、奪い去って行くおそるべき曲者が出現した。それが、「影」と称する忍者であった。

十振の無銘太刀は、大坂城に在った太閤秀吉の遺品であった。

「影」が、御前試合の勝者をつぎつぎと襲って、その太刀の切尖三寸を奪ったのは、いずれかの一振のそこに刻まれた謎語を読むためであった。

謎語は、治承四年に平家一門が福原へ遷都する際、はこびきれぬ財宝を地下へ埋め、その場所を示すために、青江恒次に命じて、焼刃に刻ませた呪文であった。

その剣は一振ではなく、同じものを幾振か打ちあげて、将来頭領たるべき公達が、その腰に佩びたようである。

「影」は、平家秘宝を獲んとして、凄絶の決闘を演じたのである。「影」の後楯が、実は、大坂夏の陣で影武者をして討死させて、生き残り、江戸西郊渋谷丘陵の蔭に、館を構えていた真田左衛門佐幸村であった。

「影」は、ついに、その呪文剣一振を奪ることに成功し、謎語を幸村に解いてもらい、洛西の猿

田彦を祀る丘から、財宝を掘り出して、運び去った、と伝えられている。
その財宝は、幸村によって、日本全土にちらばった豊臣家遺臣とその遺族に、頒布されたとか――。
「影」自身は、幸村に従って、人跡未踏の黒部渓谷に入り、幸村が八十翁となって、生涯を閉じたのちは、首領の座に就いて、子孫に、秘法を授けたが、同時に、末代までも、「影」とのみ称することを家憲にした、という。
ともあれ、変幻をきわめるその秘法は、他流から、最も畏怖されているところである。」
銭屋五兵衛は、この「影」を、このたび、一千両贈って、呼んだのである。

四

五兵衛は、対座した瞬間、この忍者が、自分と鳳子との痴戯図を、のこらず見とどけたに相違ない、と直感した。
五兵衛は、しかし、けろりとした面持で、
「眠狂四郎めは、犀川で、木曽ノ源三郎殿に、討ちとられましたろうかな?」
「いや――鮮やかに、突破した」
「ほう!」
五兵衛は、狂四郎の冷たい異相を思い泛べ乍ら、
「業運とでも申せるものを、あの男、有って居りますな」
「突破したのみならず、お主の持船へ、乗り込んで来た」

「成程――」
「小波という女を斬り、戸越家のばばを追いはらい、水主を降服させ、帆をあげさせた」
「しかし、昨夜は、大時化でありましたわい」
「左様――。帆柱は折れ、舵を流し、自由を失った」
「時化に乗じた、お手前様の仕業ではありませんかな？」
しかし、「影」は、それには、応えずに、つと立って、障子を開けた。
宵闇の中に――。
はるかな沖合を、鬼火のような焰が、明滅するのが、視わけられた。
五兵衛は、瞥と「影」へ視線をくれてから、海上の余炎へ、目を据えた。
「ふむ！」
「船は、あそこの岩礁に乗り上げて、炎上いたした」
船を焼いたのは、この忍者の仕業であることは、きくまでもない。
「お手前様は、なぜ、船中で、眠狂四郎と、決闘されなんだ？」
「…………」
返辞がなかった。
五兵衛は、鋭い目を、「影」へ向けた。
「お手前様は、わしの味方でありましょうな？　念のために、うかがっておきましょう」
すると、「影」は、抑揚のない声音で、こたえた。
「それがしは、お主にやとわれたおぼえはない」

「なんと申される！」
五兵衛は、憤然となった。
「わしは、お手前様のお手許に、千両箱を、運んでおきましたぞ」
「贈与の品を、べつに拒む理由はなかった」
「し、しかし——それは！」
「銭屋。お主は、いかなる事も、金力でおどかせば、通らぬものはない、と傲慢にかまえているようだな。……まちがって居る」
「失礼だが、お手前様のような忍び衆から、説教をききとうはない」
「説教ではない。金力で左右されぬ者がいることを、お主は、知るがよい、と申して居る。すくなくとも、お主の知る者のうちで、二人居る」
「お手前様と、それから？」
「眠狂四郎だ」
「あの男のそこが、気に入って、敵にはまわらぬ、と申されるのか？」
「そうは、申して居らぬ。眠狂四郎と申す人物は、生涯二度とはめぐり会えぬ強敵と看た。闘志が湧く」
「それなのに、なぜ、船で、決闘されなんだか？」
五兵衛は、憎悪をこめて、「影」を睨んだ。
しばし、沈黙を置いてから、「影」は、こたえた。
「眠狂四郎が、お主の秘密を、はたして、さぐり当てるか否か——それが、見とどけたくて、手

控えた」

「なに?!」

「お主が、この狼煙の里に、厳島神社を勧請したのは、あの時国館の未婚女を弄ぶ目的だけではなかろう。必ず、此処に、秘密を置いて居ろう。それがしは、そう看た」

「……………」

「但し、そう看ただけで、調べてみたが、それがしにも、判らぬ、と正直に申しておく。……それがしにも判らぬ秘密を、眠狂四郎が、はたして、独力で、能くさぐり当てるかどうか——これは、興味がある」

五兵衛は、微かな戦慄を、背筋に這わせた。

とんでもない忍者を、味方につけようとしたものである。

一千両を贈られ乍ら、味方として働く意志を持たぬのだ。

船を焼いたのは、狂四郎を殺すためではなく、狂四郎が、どのような行動をとるか、眺めるためであった。

「お手前様は、この銭五を、あなどって居られる!」

「あなどりはせぬが、所詮は、物欲と色欲が旺盛なだけの商人としか、思えぬ」

「申されたことだ!」

五兵衛は、全身の血が、憤怒でたぎった。

「影」は平然として、

「お主が、それだけの人物でしかない、と断定するのは、ひとつ、理由がある」

「うかがいましょう」
「きかせようか。お主は、上﨟にあこがれ、時国館の未婚女を、手に入れて、北叟笑んだ。しかし、もし、未婚女の方が、お主のこんたんを知りつつ、すすんで、此処へ参って、身をまかせた、としていたら、どうだ？」
「……………？」
「時国館のあるじは、加賀宰相のひそかな依頼を受けて、お主の秘密をさぐる肚をきめていた。たまたま、お主が、おのれの妹に目をつけたのをさいわいに、妹に操をすてて、お主の秘密をさぐれ、と命じた。お主は、それを知らずに、上﨟を手に入れたことに、有頂天になった。笑止と申すものではないか」
そう云ってから、「影」は、すっと立った。
「それがしが、このことを告げておくのは、一千両贈られた答礼のひとつ、と思ってもらう」
音もなく消えさる「影」を、五兵衛は、茫然と見送った。
それから、小半刻すぎてから、五兵衛は、鳳子の寝所に、ふみ込んでいた。
いきなり、鳳子の上へ、馬乗りに跨がると、
「銭屋五兵衛を、甘く見ると、どうなるか、思い知らせて進ぜる！」
と、脅しつけた。
鳳子は、思いがけぬ暴力に、鋭い悲鳴をあげて、もがいた。
その抵抗が、あまりに物狂おしいのに、五兵衛は、

――やはり、そうだったか！

と、夢中で、頸を締めた。

ぐったりと、息絶えた鳳子の上から、のろのろと身をどけて、ほっと、深く吐息した時であった。

不意に――。

どこからともなく、笑い声が、ひびいた。

愕然と、われにかえった五兵衛は、次の言葉を、きかされなければならなかった。

「銭屋。お主は、所詮ただの商人でしかなかったな。その未婚女が、お主の秘密をさぐる智能など、そなえている筈があろうか。お主の愛撫が欲しゅうて、ただ、いそいそと、かよって来ただけの、あわれな女子にすぎぬ。……それがしは、お主を、ちょっと試したまでだ。あさはか、と申すもおろかだぞ。一千両が、一万両贈られても、お主のために、働くのは、ご免を蒙る。それがしが、眠狂四郎と決闘いたすとすれば、それは、お主の秘密を奪い合う時だと知れ」

「おのれっ！」

逆上して、突っ立ち上った五兵衛は、しかし、姿なき忍者に対して、拳をふりあげるおのれの惨めさを思い知らされたばかりであった。

孤島の砂金

一

厳冬の能登の海が、波浪を立てぬのは、稀なことであろう。

眠狂四郎は、古びた漁船にゆられ乍ら、凪いだ海原へ、じっと、眼眸を置いていた。

漕いでいるのは、松の皮のように、日焼けた皮膚に無数の皺を刻んだ老人であった。

船は、禄剛崎に向っていた。

三日前、狂四郎の命令に従って、銭五船は、能登半島をまわって、佐渡をめざしていたが、禄剛崎で、突如、火焔を噴かせたのであった。

水主たちは、銭屋五兵衛の配下である。こういう事態が起ることは、覚悟しているべきであった。

狂四郎は、水主が遁れ行く先が何処か、唐人陳孫に見とどけるように、たのんでおいて、おのれは一人だけ、伝馬を一艘取った。

波浪が、山となり谷となる大時化のなごりを示している荒海では、伝馬が流れるにまかせるよりほかはなかった。

狂四郎は、曽々木海岸へ着いて、時国館をおとずれてみようと、考えていた。

ところが――。

伝馬が、転覆をまぬがれて、流れついたのは、本土からはるかに遠い孤島であった。

周囲一里もあろうか。平坦で、山はおろか、丘らしい台地もなく、樹木も殆ど、見当らなかった。

人の頭ほどの礫が敷きつめたような海岸へ近づくや、伝馬は、暗礁のひとつにぶちあたって、砕けた。

やむなく、狂四郎は、白い波に腰まで洗われ乍ら、苦心して、断崖まで辿りついた。

断崖をよじのぼるのも、容易ではなかった。

ようやく、平地に立ってみると、ぼうぼうと枯れ蘆が叢生していて、鬼気が迫るばかりの荒涼たる景色であった。

――無人の島だな。

もしかすれば、鬼界島の俊寛にされるおそれがあるな、と自嘲し乍ら、枯れ蘆の中を、南へむかって、しばらく進むと、屋根に石を置いた人家が、十数軒並んでいるのを発見した。

ほっとしたのは、束の間であった。

聚落に入ってみると、どの家の中も、人が去って久しい空虚な冷気が漂うていたのである。

人間から見捨てられた島だったのである。

「いよいよ、俊寛か――」

自身を嗤って、聚落を出ようとした折、彼方の枯れ蘆の中で、人の動くのがみとめられた。

待っていると、近づいて来たのは、潮風と波浪に幾十年も打たれた貌の年寄であった。

まがり腰をのばして、狂四郎を視たが、べつだん、怪訝の表情も示さなかった。
狂四郎が、曽々木へ着くつもりが、風と浪に抗しきれずに、この島へ漂着して、舟を喪った、と告げると、黙って頷いて、一軒へ案内した。
その家だけは、住むに足りる用意がしてあった。
炉に火を起してから、老爺は、粥を煮て、狂四郎にすすめた。
腹が盈ちてから、ようやく、会話がはじめられた。
舳倉という孤島であった。
輪島の港から西北十六海里の沖に、七つ島という無人の岩嶼がある。その七つ島から、さらに北に十四海里へだてて、この舳倉島が在った。
「お主のほかには、誰も住んで居らぬようだが……。くらせなくなって、島を見すてたのか？」
「いいや。ここは、夏だけの島での」
老爺は、説明した。
輪島に、海士の親方がいて、毎年八十八夜になると、海士の一団が、渡って来て、二百十日まで、鮑を採るのである。
海中にもぐるのは、女ばかりで、父や亭主や兄弟が、その生命綱を扱うのだ、という。
「冬場は、島から引きあげて、灘回りじゃ」
灘回り——すなわち、能登半島一帯を、船で巡り乍ら、海産物と農産物を物々交換するのである。
海士のくらしは、変っている。親方を中心にして団結はかたく、他所者とは交際せず、用事以

外のことは口をきかぬ。かれら同士だけに通じる言葉を持っていて、他所者には全く判らない。それでいて、人情は厚い。この島を出て行く時には、漂流民の万一を慮って、米一石と塩一俵を、一軒に納めて置くことを常法としている。

「海士の世界ではの、女子が生れると祝うが、男の子が生れると、団子の子というて、一向に悦ばれないものでの」

濁醪の酔いがまわったか、老爺の口は軽くなっていた。

「爺さん、お主は、どうして、この島に、留守居をしているのだ？」

「動くのが、面倒での」

「子や孫は、いないのか？」

「倅が一人いたが、七年前に、海に奪られた」

「愉しみは、その酒だけか？」

「そういうわけじゃの」

とりとめのない会話が、しばらく交されてから、就寝すべく、老爺は、立って、押入れから、夜具をとり出そうとした。

ひどく酔っているので、狂四郎が、手つだおうとすると、妙に慍った身振りで、その手をふりはらった。

そして、とり出した夜具をかかえたなり、大きくよろけて、押入れの戸にぶっつかった。

押入れの戸もろとも、倒れたので、狂四郎が、抱き起そうとしたとたんであった。

押入れの天井板が、はずれて、重い包みものが、落ちた。

狂四郎は、足もとにころがったその包みが破れて、中から、さらさら流れ出たものに、眼眸を鋭く落した。

それは、砂金であった。

二

老爺は、一時に酔いをとばして、非常な狼狽を示した。

砂金の包みを、かばうように、両手で掩うのに、狂四郎は、つめたく笑った。

「爺さん、見られてしまったものを、かくしてもはじまるまい」

「な、な、内緒に、して、下され。……わ、わけて、進ぜる」

「どうやら、お主が一人で、この島に居残っているわけが読めたが……、この島に、砂金が採れるのか？」

「い、いんや――」

老爺は、かぶりを振った。

狂四郎は、老爺を凝視した。老爺は、小心者とみえて、その凝視に堪えられずに、

「佐渡船から、ひ、ひろうた」

と、呟くように、云った。

「佐渡船？」

「時化をくらった佐渡船が、逆流れて……、こ、この舳倉へ打ち寄せられての……そ、それで――」

「砂金を運んでいたのであれば、役人もいたであろうし――、船頭や水主は、どうしたというの

だ？」

「そ、それがの……、ふしぎなことに、難破した船には、一人も居らなんだ。ゆ、ゆうれい船になって居ったのじゃ」

「それは、奇怪だな」

「わしは、嘘を、ついて居らん。……ほ、ほんまに、船には、人は、影も形もなかったのじゃ」

「信じてもよい。但し、砂金だけが残っていて、人が一人もいなくなっていた、という謎は、解くことにしよう」

「こ、この砂金を、お前様は、取り上げる、というのか？」

老爺は、恐怖の色を、皺面いっぱいにあふらせた。

「それは、爺さんの財産とみとめよう。そのかわり、わたしの問うことに、頭をすこし働かせてもらおうか」

狂四郎は、生涯を、この能登の荒海ですごした老爺の経験を語らせることにした。

狂四郎の脳裡には、佐渡の金銀に関する不正が、泛んでいた。

西丸老中水野忠邦の側頭役・武部仙十郎から、きかされたことである。

水野忠邦は、十名の隠密を佐渡へ送って、金銀山の盛衰の運びに関する秘密調査を、やった。

過去十年にわたってなされた、公儀下げ金と、上納高の不正に就いてであった。

佐渡の金銀は、公儀財政上、大きな力となっている。

十年間の、年平均の年貢金は、約九十万両である。佐渡の上納高は、十一万両。

それほど、佐渡から送られて来る金銀が、公儀財政には、大きな比重を持っている。

したがって、ひそかに、行われる不正も大きいのである。

その不正が、どのようにして行われたか。

それを調べた十名の隠密は、一人も、江戸には帰って来ていなかった。すなわち、ことごとく、本丸老中側から遣(つかわ)された隠密たちの手で、あの世へ送られたのである。

いや、たった一人、戸越嘉門が、生き残って、狂四郎の面前に姿を現しているが、それきり、消えてしまっている。おそらく、何処(どこ)かで、殺されたに相違ない。

十名の隠密が、生命をすてて、残した調査によれば、五年間に、山出金五十三貫、金値にして一万五千両が、何処かへ、消えているのであった。

しかし、それが、いかなる方法によって、消えたか、隠密たちは、調べあげてはいなかった。

上納金の輸送に関する限り、怪しむべき点は見当らなかった。

「お金送り」は、佐渡奉行所一ヵ年間の、会計検査兼予算決算でもあった。すなわち、鉱山一年間の経費は何程、採鉱高は何程、差引送り高はこれだけ、という訳であった。

幕府の勘定奉行が、この数字を丹念に調べて、不審な箇処(かしょ)には、寸毫(すんごう)の容赦もせず、中開きを要求する。その限りでは、一年間の帳簿と送り金との間に、不正はない。

「お金送り」の金は、箱詰(だ)にされ、厳重な封印が施される。一年間の帳簿も、箱詰にされた。

帳簿だけでも、馬一駄分あった、という。

相川(あいかわ)から小木(おぎ)まで、そして、越後(えちご)出雲崎(いずもざき)から沿道の町村へは、宿役人宛(あて)に、先触れが出て、伝(てん)馬(ま)と人足が徴発される。沿道の領主は、「お金送り」が、おのが領内に入ると、出迎え、見送りをする。大身は家老格が出迎え、代官は自身が出た。

泊り泊りの本陣では、厳重な倉に入れて、数十人が不寝番をつとめた。信州善光寺に宿泊の際などは、それが一番安全だというわけで、開帳以外に開かぬ如来(にょらい)様の御扉内に、据えて、一夜を明かした、という。

毎年送られた金は、金がおよそ一万数千両、八箱。正銀五百貫、五十箱。灰吹銀二百貫から三百貫、三十箱。馬に積んで、四十五頭。ざっと、そういうところであった。

五六月の最も天候のよい時が、選ばれ、相川から陸路小木に出て一泊、木崎神社で渡海の安全を祈って、御船手の本船で渡ることになるが、出帆しても、一寸雲(ちょっと)が出たとか、風が変った、ということがあれば、すぐ漕(こ)ぎ戻って来るのだ、という。

「五月晴(さつきば)れ佐渡のお金が通るとて」

小林一茶(いっさ)の句が、年に一度の「お金送り」の様子を、巧みに表現している。

しかも、なお――。

佐渡金銀山には、不正が行われていたのである。

三

「爺(じい)さん、佐渡船というのは、どんな船だ？」

狂四郎は、訊(たず)ねた。

「養生船とも、病い船ともいうての、金穿(かなほり)大工や山留(やまどめ)や穿子(ほりこ)の患(わずら)った者を、送りかえして来る船じゃが……」

金銀山の水替人足は、江戸から送られて来た無宿者たちが従事していて、これら人足たちは、病み倒れたら、野良犬のごとく、すてられるのである。
しかし、金穿大工や山留や穿子は、特殊の技能を要する者たちなので、患えば、出雲崎へつれもどして、養生させてやるしきたりであった。
佐渡船とは、それらの病人を乗せる船だという。
狂四郎の直感力が、鋭く働いた。
「そうか。病い船なら、難破しても、べつに、あとで論議するねうちもない、というわけだな」
その病い船に、砂金が乗せてあった、ということは、佐渡奉行が本丸老中側に命じられて為した不正の方法を示している。
「その佐渡船は、どこの船主が引受けている？」
「銭五船じゃ」
「ふむ！」
狂四郎は、にやりとした。
——銭屋五兵衛が、この不正に、一役買っている！
これで、札が揃った、というわけである。
「では、もうひとつ、訊くことがある、爺さん」
まだ怯えている老爺を瞶め乍ら、
「かりに、爺さんが、その佐渡船に、乗っていた、とする。時化に遭った。船が、どこへ流れるか、爺さんには、判るか？」

「判らいでか。船は、この能登へ流れて来るわさ」
「風が、丑寅（うしとら）に吹いても、戌亥（いぬい）に吹いてもか？」
「どっちゃに吹こうが、海には、潮の流れがきまって居るぞい」
「つまり、舳倉島（へくらじま）に、流れ着くというわけだな？」
「うんにゃ。この島へ流れ着いたのは、まだ、楫（かじ）があった証拠じゃ。つまり、わざと、この島をめざして来たものよ。……したが、島へぶち当った時には、人は居らなんだが……」
老爺は、当惑の面持だった。
――おそらく、この島を見つけたあたりで、二派にわかれて、砂金を奪いあい、殺しあったに相違ない。そして、一人のこらず、海の藻屑（もくず）となりはてたのであろう。
「では、どこへ流れ着くか、その場所を、はっきりと、云い当てられるか？」
「珠洲岬（すずみさき）にきまって居るわい」
「珠洲岬？」
狂四郎は、いそいで、能登半島の地図を、脳裡（のうり）に、描いた。
「爺さん、そこを、教えてくれ」
狂四郎は、火箸（ひばし）をさし出して、炉の灰へ、描くように命じた。
老爺は、不器用な手つきで、灰の上に、能登半島を描くと、
「ここじゃ」
と、示し、
「ここの……たぶん、禄剛崎のあたりかの」

と、云った。
これをきいた瞬間、狂四郎は、江戸を出発する際、銭屋五兵衛について調べておいたことが、いま、役立つのをさとった。
「爺さん、禄剛崎の近くに、狼煙(のろし)という里があろう？」
「ある」
「そこに、銭屋五兵衛の勧請(かんじよう)した厳島(いつくしま)神社があるのではないか？」
「あるある。銭屋様は、船を守るために、そこへ、灯台をつくりなされた。したれど、水魔は、灯台をきらうでの、佐渡船が、つぎつぎと、沈むはめになったのじゃ。この二年うちに、五艘も沈んでしまったそうな」
——どうやら、判って来た。
狂四郎は、合点した。
病人を乗せた佐渡船を、小木の港から出す時に、その夜のうちに、時化が襲って来る、と見さだめておく。
はたして、時化をくらって、佐渡船は、帆柱を折られ、楫(かじ)を失って、小山のような巨浪に、きりもみにもまれて、漂うままに、運を天にまかせる。
船は、やがて、珠洲岬へ、流れ着く。その時、病人たちは、一人のこらず、船内から、いなくなっている。
船もまた、岬(みさき)の岩礁にぶつかり、砕けて、沈んでしまった——ことにするのだ。
自然の猛威を利用して、巧みに筋書き通りにはこぶわけである。

「爺さん、お主(ぬし)はまだ、舟を漕ぐ力をのこしているだろう？」
「へえ――まあ……」
「わたしを、禄剛崎まで、送ってもらおうか」
「どうするつもりかの？」
「お主は、ただ、送ってくれれば、それでよい。わたしを、禄剛崎で降ろしたら、さっさと、この島へもどって、この砂金に添い寝していれば、それで、よいことだ」
「わ、わしは、お前様が、半分寄越せ、と云うのじゃと、思うていたが……」
「欲しければ、お主を斬(き)って、全部奪う」
わざと、冷やかにあびせると、老爺は、亀(かめ)の子のように、首を縮めた。
で――。
一夜明けたこの日、狂四郎は、老爺に古びた漁船を漕がせて、禄剛崎めざして、やって来たのである。
「あそこじゃ、ほれ――鳥居が見えようがの」
老爺から、彼方(かなた)の岩礁上に立った朱の鳥居を、指さされたとたん、
――はてな？
狂四郎は、突然、はっとなった。
銭五船が、火焔(かえん)を噴(ふ)いて、走るのを止めたのは、このあたりではなかったか、と直感したのである。
三日前は、深夜であったし、時化直後の闇(やみ)が、海を閉ざしていた。

しかし、たしかに、このあたりのような気がする。

——そうか。敵が銭五船を焼いたのが、このあたりとすれば、話のつじつまが合う、というものだ。

「爺さん——あの鳥居へ、着けてくれ」

狂四郎は、命じた。

「へ、へえ……」

老爺は、ためらった。

「どうした？」

「わしら、灘回りの海士は、あそこへだけは、近づかんことにして居るが……」

「なぜだ？」

「あの鳥居の下あたりに、水魔が棲んでいるちゅうことじゃでの」

そういう迷信がゆきわたっていれば、普通の船は、絶対に、避けるに相違ない。

すなわち、秘密を、そこに置く者にとっては、絶好の場所、ということになる。

「着けろ！」

狂四郎は、鋭く、命じた。

「……南無あみだぶ……南無あみだぶ……」

老爺は、口のうちで、ぶつぶつと、となえ乍ら、船を近づけて行った。

風もなく、綺麗に澄んだ海上に、岩礁上に大きくそびえる鳥居の朱色が、鮮やかであった。

——おれが、ここで、生命をおとすか、おとさぬか。算木でもあれば、ひとつ、うらなってみ

るところだ。

狂四郎は、平然として、そんな独語を、胸中にもらしていた。

船は、鳥居下に、着いた。

生命の座

一

「魚の骨、しわぶる迄の老を見て」という句がある。

たしかに、囲炉裏をへだてて、眠狂四郎と対座した老爺の、魚の喰べぶりは、それであった。小骨のひとつひとつを、一本のこらず歯の抜け落ちた口で、もぐもぐと綺麗になめつくして、皿の上へ並べていたのである。

浦の苫屋というにふさわしいこの古びた家の中には、鉱泉の臭気が漂うている。

舳倉島から、この珠洲岬へ、漁船を漕ぎ寄せて、狂四郎が、腰をおちつけるには、恰度恰好の場所であった。

狼煙の里から、峠ひとつ東の入江の、波浪が岩礁を嚙んで、飛沫を、板羽目へあびせる荒磯に建った湯宿であった。

葭ヶ浦の湯、という。

能登は、蝮の多い国である。その蝮に嚙まれた者に生命をとりとめさせる特効をもつ唯一の湯が、この葭ヶ浦に湧いている。湯が発見されたのは、戦国の頃であった、という。

宿は、その戦国の頃から、この一軒が建っているばかりである。

あるじは、いま狂四郎の前で、魚を骨までしゃぶるこの老爺であった。ほかには、聾唖の小娘が一人、台所で、蠢くように立働いているばかりであった。
老爺は、もう八十近いかとみえる。耳も遠く、歯無しの口から洩らされる声は、殆ど言葉を成さないのであった。尤も、言葉を成しても、能登の裔端の里言葉では、狂四郎には、大半意味がくみとれまい。
狂四郎の膝の前にも、魚や鮑がならべられているほかに、餅を細かく切って焙烙で炒ったのが、素焼きの丼に盛られている。
狂四郎は、しかし、ただ、地酒だけを、飲みつづけていた。
唖娘が、異様に醜い歩きかたで、上って来ると、老爺に、しきりに手真似してみせた。
老爺は、頷いて、何やらひくい声音で返辞した。
客だったのである。
狂四郎は、何気なく、上って来た客へ視線を向けて、見覚えがあるその貌に、しかし、べつに、その無表情を変えはしなかった。
客は、世相道人だったのである。
この男は、狂四郎に対して、一度ならず二度までも死を予告した。狂四郎が、その死をまぬがれ得たのは、自力ではなく、偶然が幸いしただけであった。
この不吉な男は、三度び、狂四郎の前に現れた。
「お主が現れたところをみると、わたしの鼻梁の人中停には、まだ横死の翳がさしているとみえる」

「横死の翳が、さしているか、居らぬか――あらためて拝見させて頂きたくて参った」
「お主のもってまわった云いかたも、三度きくと、聊(いささ)か不快をおぼえる。……はっきり云ってもらおうか」
啞娘が、世相道人の前にも、狂四郎と同じ料理をはこんで来た。
世相道人は、わざと、磊落(らいらく)そうに、くつろいでみせ乍ら、
「二度までも、予言をはずされては、かるがるしゅうは申せぬが、それがしの看(み)るところ、どうやら、この能登が、お手前の終焉(しゅうえん)の土地でござろうか」
「銭屋五兵衛に、そう予言して来い、と命じられたのか？」
「なんの……、銭屋は、お手前と手を打つ所存になって居り申すよ。ただ、これから、お手前の前に立ちふさがるのが、只者(ただもの)ではないことを、お教えいたしたくてな」
「…………」
「影、と名のる忍法者が居るのを、きいたことがおありであろうか？」
「知らぬ」
「それがしの観(み)るところ、お手前と影との勝負は、五分と五分。だから、それがしは、こんどは、かるがるしゅう、お手前に、予言はいたさぬ。……正直な本音を吐き申そうか。今度は、それがしは、お手前に勝って欲しい。お手前が、勝てば、それがしが、案内いたす場所がござる。……この奥能登は、それがしの生れ故郷でござれば、銭屋五兵衛が、何故(なにゆえ)、禄剛崎(ろくごうさき)に、厳島(いつくしま)神社を勧請(かんじょう)したか――掌(たなごころ)を指(さ)すがごとく、説き明かしてごらんに入れられる」
これをきくと、狂四郎は、ふっと、冷たく笑った。

「お主の易学も、底が割れたようだな。勝負の結果に、算木が置けぬとは、欲が出たせいであろうか」

「ははは……、欲がな。諺にござるな。火を恋う青蛾は焔に焼かれ、花を貪る粉蝶は蜘蛛の巣に捕えられる、となん。それを知りつつ、欲を張るのが、人の情でござろうて」

そう云って、地酒をくらい、二尾めの魚へ箸をつけようとした世相道人は、はじめて、ふと、妙なことに、気がついた。

「これは、面妖しい。この干魚は、川魚ではないか。荒磯の湯宿で、川魚をくらわすとは？」

眉宇をひそめて、老爺を視た。

すると、それまで、平伏宛然に身を二つに折っていた老爺が、やおら、端座の姿勢をとった。

「左様——これは、黒部の渓流で釣りあげた珍魚ゆえ、汐をくらった海魚などとは、味のこまかさは、比べもならぬ」

明晰な、冴え冴えとした声音が、その口から吐かれたのであった。

流石の狂四郎も、愕然となったことだった。

世相道人の双眼が、くわっと眦を裂いた。

「か、影かっ！」

叫ぶとともに、全身を硬直させ、忽ち、苦悶の色を、顔面にみなぎらせた。

炉の中へ、のめろうとするからだを、痙攣する十指で支えたが、堪え得ず、がっくりと横臥しになった。

二

老爺――「影」は、しずかに、世相道人のそばへ寄ると、仰向けにした。

服毒者の喘ぎは、鞴のように、せわしく、間断のないものだった。

「影」は、小さな革袋を、いちめんに汗を噴かせた顔の上にかざして、

「ここに、解毒剤がある。これを嚥まぬと、お主の生命は、あと半刻も保たぬ。……云うがいい。お主が、この眠狂四郎氏を案内しようという場所は、何処だ？」

と、尋ねた。

世相道人は、醜く顔面を歪め、粉を噴いたように白くなった唇を、顫わせた。

「お主は、云ったではないか。火を恋う青蛾は焰に焼かれ、花を貪る粉蝶は蜘蛛の巣に捕えられる。火からはなれ、巣からのがれるには、泥をはかねばなるまい」

促されて、世相道人は、苦しげに、かぶりを振った。

「わ、わしは……、実は知らぬ。……琉球の、糸満の……男に、問うて、くれ」

「どこに居る？」

「……知らぬ。銭五が、飼って、居る。……さがすが、いい。……た、たのむ。そ、それを――」

世相道人は、わななく手で、革袋を摑みとると、口紐を、嚙みきり、中身を、口腔へころがし込んだ。

ややあって、その喘ぎは、止った。世相道人は、起き上った。

狂四郎は、その表情が、完全に痴呆と化しているのを視て、忍者の冷酷を知った。

「お主が、影と称ばれる真田流の忍士か？」
「左様——」
「この眠狂四郎に、毒を盛らなかった理由は？」
「理由は三つある。ひとつ、眠狂四郎が生きていなくては、銭屋五兵衛が、それがしの要求を容れぬ、とみた。ふたつ、貴公との勝負は、生涯二度とないものに思われる故、面目を立てねばなるまい。三つ——それは、まだ、申せぬ」
突然、狂四郎は、正座したまま、右手で無想正宗を把るがはやいか、左手で、抜きつけの一閃を、影へ送った。
容赦のない迅業であった。
しかし、影は、間髪の差で、この一撃から遁れて、一間を跳び退って、立った。
「成程——」
影は、にやりとした。
「当方に、一瞬の油断でもあったら、ま二つにされていたな。お主の剣の凄さは、充分に見とどけた」
「…………」
狂四郎は、黙って、立つと、宿を出て行った。
影は、再び、炉端に坐ると、ひくく、笑い声をもらした。
狂四郎にくらわせたのは、黒部の渓流にのみ棲む香り魚であった。忍者は、その香によって、くらった者の行路も処在も、的確に察知し得るのである。いわば、影は、狂四郎に、目に見えぬ

紐(ひも)をつけたようなものである。

ゆるやかな斜面に、いじらしいほど小さな麦畑が、蓆(むしろ)をならべたように、無数に区切られて、ひろがっている。

その中の細径(ほそみち)を辿(たど)り乍ら、

——ただの忍びではなかったな。

と、狂四郎は、考えていた。

上杉流、平家流、武田流、源氏流——この数日の間に、行手に立ちふさがって来た各流忍者は、孰(いず)れも、その独特の忍び業(わざ)をきたえあげた強敵であった。

その秘術から遁(のが)れることができたのは、必ずしも、こちらの智能(ちのう)と業が、まさっていたとばかりは、云えないのである。

ただ、進退が谷(きわ)まった刹那(せつな)に、無数の死地をくぐり抜けて来た者のみが備えている本能化した応変の処置が、ことごとく、おのが利となったのである。

これは、四派の忍者たちが、こちらを討つことに、あるいは生捕(いけど)ることに、あまりに躍起になり、余裕がなかったために、こちらの応変の処置に対して、咄嗟(とっさ)に、ほどこすすべを失ったといえる。

策略は、あまりに完璧(かんぺき)を期すれば、完璧の故に、樹(た)てた者自身が、余裕をなくするおそれがある。張りつめた綱は切れやすく、たわめた綱は切れにくい。

殆(ほとん)ど無策にひとしい態度で、死地へ身をはこんで来た狂四郎は、いずれの罠(わな)も、脱出してしま

ったのである。

ところが——。

五番目に、狂四郎を迎えた真田流・忍者「影」は、どうやら、罠をつくってはいない。

ただ、湯宿の老爺に化けてみせただけであった。

生捕れば生捕れたものを、平然として、看遁（みのが）しているのである。

これは、狂四郎が、これまで出会ったいかなる強敵よりも、恐ろしい存在に考えられる。

——もしかすれば、世相道人の予言は、当るかも知れぬ。

狂四郎は、ふっと、自嘲（じちょう）の微笑を、口辺に刷（は）いた。

影の冷たい眼眸（まなざし）を、背中に感じたのである。

三

雑木の疎林をぬけると、峠の頂上であった。

そこに、狂四郎を、一挺（ちょう）の駕籠（かご）が、待っていた。

番頭風の男が、いんぎんな物腰で、

「銭屋の使いでございます。主人より、お迎えして参れ、と命じられて居ります。お乗り下さいまし」

と、すすめた。

これは、罠かも知れなかった。

しかし、これまで、罠と知りつつ、平然と、招きに応じて来た狂四郎であった。こんどだけ、

断る、というのは、首尾がととのわぬことになる。尤も、対手は、こういうこちらの気性を読んでいて、迎えを寄越したのであろうが……。

狂四郎は、駕籠に乗った。

風はつめたいが、よく晴れた日であった。

道筋には、寒椿の花が咲いていた。潮騒が、遠くからひびいて来る。

ぼうぼうとひろがる荒海が、明るい陽をあび乍ら、なお昏い灰色を漂わせて、層を為す波浪の白いつらなりに凄味をうかべている。

北陸のさいはてでは、寒椿の花の色にも、きびしさが含まれているようであった。

人間の私欲が、この僻陬の荒磯にも、牡蠣のように、へばりついているのを、狂四郎は思った。

駕籠は、やがて、厳島分社裏手の銭屋別邸へ、入った。

狂四郎が、五兵衛と対座するのは、久しぶりのことであった。

「ご健在にて、何よりのことに存じます」

五兵衛は、まず、その皮肉を挨拶にした。

「お主には、いろいろと、迷惑をかけた」

狂四郎は、云った。

狂四郎は、これまで、二度も、五兵衛から、抜荷の品を奪っている。

一度は、甲州街道の布田五ヶ宿はずれで、これを護る前田藩士七人を、一太刀ずつで斬り仆して、奪っている。そして、もう一度は、加賀宰相の行列が立寄った湯島四丁目円満寺に忍び入って、そこに匿されていた外国から仕入れた珍貴の品々を、巧妙な奇策で、まきあげている。

五兵衛にとって、八つ裂きにしてもまだ足らぬ憎むべき素浪人であった。にも拘らず、五兵衛は、狂四郎に対して、好意とまではいかずとも、ある種の親しみを抱いているふしがある。

いまも、その笑顔には、親しみの色が含まれている。

「眠様。手前が、これまでの恨みを、さらりと西の海へ流して、千石船を一艘、お贈りいたしましょう、と申上げたなら、いかがなさいますな？　勿論、修練を積んだ水主どもを、添えてでございます」

「どういうのだ？」

「いえ、ただ、それだけのことでございます」

「おれに、日本を出て行け、とすすめるのか？」

「失礼でございますが、お手前様のからだの中には、異邦の――遠い欧羅巴の国の血が、流れていなさる。――譬えが当っているかどうか存じませぬが、鳥は飛べば故郷に反り、狐は死する時は、必ず丘に首す、とか。お手前様にも、父祖の土地へ帰ってみたい、という本能が、おありではなかろうか、と存じます。口はばったいことを云わせて頂くならば、国を鎖してしまった徳川様のこの天が下では、お手前様の血は、無頼にひねくれるよりほかはないが……もし、欧羅巴の母国へ帰られるならば、本来の魂をとりもどして、おのずと愉しく生きる道を見出されるのではなかろうか――などと、愚考つかまつります」

「ご親切な忠告だな」

「聊かもかけひきのないおすすめをしているつもりでございます」

「おれという存在が、お主にとっては、それほど、目ざわりか？」

「眠様。この五兵衛が、心からおすすめしていることを、曲げてお受けとりになるものではありませぬ」

「お主は、いつぞや、おのが野望は、開国にある、と云ったな？」

「申しました」

「その野望のために、将軍家に麻薬を与えて、痴愚にしようともした。そうであったな？」

「はい」

「銭屋！」

「なんでございます？」

「開国の夢想は、お主の我欲から、出ているのだろう？」

「その通りでございます」

「この頑冥（がんめい）不霊の国土を開くことが、お主の目の黒いうちに、可能かどうか、考えてみるといい。お主が、大義の理想のもとに、その実現を夢想しているのであれば、おのれは中道で果てても、子孫に、その志を継がせる、という気概を持つであろう。我欲というものは、その人間一代のものだ。実現不可能な野望を、我欲より発するのは、愚の骨頂であろう。……お主が、もっと大儲（おおもう）けをしたければ、お主自身が、外国へ渡り、そこに根をおろして、枝葉を張ったらどうだ」

「これは、反対に、お手前様のご忠告をうかがうことになった。有難う存じます。あるいは、そうすることになろうか、とも存じます。……ともかく、手前の方からおすすめすることも、ご勘考頂きたいと存じます」

「無駄なことは、くりかえして、すすめてくれぬがいい」

「眠様。さしあげる千石船には、美しい上臈（じょうろう）も、お乗せいたすのでございますよ」

「上臈？」

「左様でございます。お手前様が、江戸城中からおつれ出しなされた志保様――将軍家の異母妹様を、手前は、お預りいたして居ります」

狂四郎にとって、志保という女性（にょしょう）もまた、めぐり会わねばよかった不幸な身上を持っていた。いうなれば、救い様のない女性であった。

で――狂四郎は、江戸城から志保をつれ出すと、佃島（つくだじま）にいる銭五船へ、送ったのであった。それへ乗せれば、もしかすれば、五兵衛が、志保を、彼女が帰依した宗門の本拠ローマへ、はこんでくれるのではあるまいか、と思ったのである。

「志保をまだ、お主は、金沢に置いているのか？」

「左様でございます。志保様を、欧羅巴へおつれになるのも、眠様のお役目ではございますまいか」

そう云ってから、五兵衛は、立ち上ると、

「何はともあれ、せっかく、お招きしたのでございますから、一献（いっこん）さしあげたく存じます。あちらに、ささやかな用意をいたして居りますれば、ご案内いたします」

と、促した。

狂四郎は、立った。

その刹那（せつな）であった。

五兵衛が、突如、二間を跳躍して、広縁へ、遁れた。
狂四郎から、殺気をあびせられたのである。
向きなおったその貌は、もはや、銭屋五兵衛のものではなく、全く別人であった。
狂四郎は、無想正宗を、右手に携げているだけであった。
わざと、凄じい殺気を放射してみせただけであった。
狂四郎は、薄ら笑った。
「影が、おのれの影に、怯えたようだな。……いや、うまく、化けた」
これに対して、忍者の方も、ふふ……、とひくい笑い声をたてた。
「してやられた。それがしの方は、さいごまで、貴公をだまし了せるものと思っていた。……貴公、対座してから、どれくらいで、それがしであることを看破したな？」
「みごとに、だまされていたことを、みとめよう。……お主が、背中をみせたのが、不覚であった。背中というものは、他人に化けることはできぬようだ」
「それは、それがしの未熟と申すもの」
影は、庭へ降りた。
「いずれ——」一言、のこした。
ほんものの銭屋五兵衛は、奥の一室で、意識をうしなって、倒れていたのである。

無常の丘

一

寒風の吹き荒ぶ日であった。

老人や子供ならば、この風の中には、立っていることもかなうまい。珠洲岬の冬は、こうした日が普通で、凪いでいるのが稀なことであろう。

眠狂四郎は、素肌に、その寒風をしみ通らせ乍ら、狼煙の里から、山伏山への道を辿っていた。「影」の跳戦に応じたのである。

いったん、葭ヶ浦の湯宿にしりぞいた狂四郎に、二日を置いて、「影」から、手紙がとどいたのである。

銭屋五兵衛が、佐渡の養生船を難破せしめて、奪取した砂金は、禄剛崎の岩礁上に立つ厳島分社の鳥居を目じるしにして、その沖の海底に匿してあることは明白であること。銭五が傭っている琉球糸満の海士は、すでに当方の手で捕えてあること。凪ぎ日を待って、海士をもぐらせて、砂金を引き上げる手筈はととのったこと。但し、お手前が、当地に在る限り、漁夫の利を獲ることは、叶わず。鷸蚌の争いを看た漁夫としては、これを僥倖となすことに、誇りが許さぬ。雌雄を決せんには、さいわい、互角の腕あり、海底の宝価を二つにせざる為には、闘わざるべからず。

歯墜ち、舌存するが如き結果をまねかざれば、さいわいであろう。

そんな意味の内容であった。

狂四郎は、この手紙を読んで、微笑した。これまで出会った平家流や上杉流や源氏流や武田流の忍者とは、おのずからちがった風格をそなえている敵であった。敗れて、悔いのない対手であった。

江戸の千佐へ宛てた遺書を、湯宿へのこしておいて、狂四郎は、決闘場へ向ったのである。

山伏山の中腹は、地下人の謂う蛇の道の難所で、北国の風雪によって、風化された洞窟が、かなりの数をかぞえる。

そのひとつ——役の行者の息吹き穴、と称される洞窟の中は、およそ、五十畳敷きの広さであった。

この朝、此処には、およそ、三十人あまりの、いずれも貧しい身装の漁師・木樵・百姓たちが、集合していた。夜のうちに、一人一人ばらばらに、ひそかにやって来て、黙々として坐ったのである。

八方にともされた灯が、三十人の影を、岩壁へ匐わせ、妖怪のようにゆらめかせて、この沈黙の光景を、いよいよ不気味なものにしていた。

狂四郎が、入口に立った時、恰度、集合者たちは、一斉に、その沈黙を破っていた。

狂四郎は、切支丹のおらしいょをきいた。

踏み入った狂四郎は、斉唱する黒い群のむこうに——石に刻んだ巨きな十字架の祭壇を見出した。その祭壇下に、こちらに向って、一人の女が坐っている。

志保にまぎれもなかった。

生けるさんた・まりあ像が、つくられていた。臈たけた貌が、金色の後光に映えて、神々しい。

――「影」は、隠れ切支丹であったのか。

志保を、銭屋五兵衛から奪って、信徒たちのあがめる女神にしたてた趣向は、賞されてよい。

狂四郎は、祈禱の最中に、自分を呼び寄せた「影」の心中が、奈辺にあるのか、読みとりかね乍ら、岩壁に倚って、しばらく、傍観者の立場にいることにした。

おらしょをとなえおわると、末座に、一人はなれて、蹲っていた男が、よろめき立って、進んだ。それは、見るも無慚に、面貌の崩れた天刑病者であった。

男は、志保の前に、ひれ伏すと、ひくく、おらしょをとなえ乍ら、裳裾へ、口づけした。

志保は、立って、祭壇に供えた大きな木椀から、聖水を汲むと、男の頭へ、そそぎかけつつ、何やら呪文めいた一言を、もらした。

男は、しばらく、死んだようにひれ伏していたが、やがて、のろのろと身を起すと、こちらへ向きなおった。

そして、わななく両手で、しずかに、顔面を撫でおろした。

固唾をのんで見戍っていた信徒たちが、驚愕と感動のざわめきを起した。

その醜怪に崩れはてていた相貌の下から、みるみる、健康な顔が、現れたのである。それは、五十年配の滋味のある顔であった。

奇蹟であった。

狂四郎は、にやりとした。

――「影」の素顔が、これか。いや、そうではあるまい。この忍者には、素顔というものはないのかも知れぬ。

そう思った。

この時、これは狂四郎の予期しないことであったが、祭壇の石の十字架が、ゆっくりと、天井にむかって、せり上って行き、その下に、暗い抜け穴が、ぽっかりと、口をひらいた。

まず、志保が立ち、それにつづいて、信徒たちが立った。

志保を先登にして、信徒たちが、抜け穴へ、しずしずと吸い込まれて行くのを見送って、狂四郎は、「影」が、祈禱の最中へ自分を呼び寄せたのも、このしかけがあったからなのだ、と頷いた。隠れ切支丹の集合場所には、当然、退路が設けられている、と察しなかったこちらが、不覚であった。

洞窟内には、奇蹟を演じた男がただ一人、残った。

二

双方、無言であった。

この決闘に、問答は、無用であった。

と――。

狂四郎が、ゆっくりと二歩進んで、無想正宗を、鞘走らせた。

抜き撃ちで、斬れぬ対手であることは、再度まで試してある。

切っ尖を、爪先前三寸のところへ落す地摺り下段にとった瞬間、対手は、音もなく躍って、後

方へ跳び退った。文字通り、「影」は、完全な影と化してしまった。
八方にともる洞窟内の灯火を利用して、どう姿をくらませるのか、すでに、その実体は、いずことも判別し難かった。
ただ、四方の岩壁に、拡大された八つの影法師だけが、独得の構えで、双手を大きく左右に延ばしているのであった。
どの影法師に、実体がひそんでいるのか？
その目晦しが、狂四郎に、円月殺法を用いさせることを、さまたげた。
これを、まさしく「影の忍法」というのであろう。
狂四郎をして、身動きさせなかったのは、地面と天井に、さらに、二つの巨大な影法師を増したことである。
「七方出」とは、忍び衆が七つの変装術を使うのを謂う。これは、「十方出」とでも称すべき変化法であろうか。
狂四郎の地摺り下段は、そのまま、動かず、永い時間を移して行った。
そのあいだ、十の影法師は、奇妙な舞踏を踊るがごとく、くねくねとうごめきつづけていたのである。それは、嘲弄とも受けとれた。
苛立って、そのひとつを斬れば、手裏剣が飛襲して来るのは、判りきっていた。
「影」の手裏剣は、おそらく、曲線を描いて飛んで来るに相違ない。その立つ地点を知らさぬ秘法である。
うかつに動くことは、墓穴を掘ることになる。

但し――。こうした窮地に置かれた場合、眠狂四郎という男の頭脳は、常人とちがった判断力を働かせる。

固着の対峙の時刻は切れた――と、さとった時、狂四郎は、動くともない動きを示して、あと退り、一方の岩壁に寄った。

そして、一瞬、灯のひとつを、斬って落した。

とたんに、飛来した手裏剣は、これを頭上に流した。

普通ならば、忍者を対手の闘いには、さらに多くの灯火が欲しいところである。しかし、「影」の忍法が、灯の数を利用しているのだ、と判ってみれば、その数を減らすのが、唯一の手段とさとった狂四郎である。

はたして、八つの灯のうち、二つまで消したが、影法師の数に変化はなかったが、三つめを消した時、天井の影法師がふっと失われた。四つめで、地面のそれが消えた。

五つめを消し、五本めの手裏剣を躱した狂四郎は、残る三つの灯火が、岩壁に匐わせる影法師が、三つではなく、二つであるのをみとめた。狂四郎は、さらに、その一灯を、斬ってすてた。

瞬間――。岩壁の二つの影法師が、さっと左右へわかれて、洞窟の入口と、抜け穴とに向って、奔り出した。

狂四郎は、躊躇なく、抜け穴めがけて、疾駆した。

三

抜け穴は、巨きな巌蔭からまだらに雪を残した荒寥たる杉の林へ通じていた。

林は、急勾配の山腹に、密疎の濃淡を描いて、麓へつづく。

彼方にぼうぼうとひろがった鈍色の海原から吹きつけて来る寒風が、この山腹で、渦をまくような鋭い唸りをたてて、樹木をゆさぶっていた。

木立をかいくぐって、駆け下る「影」とそれを追う狂四郎の速影は、飛翔する鳥が落す影にも似た。

たちまち——。麓に達するや、突如「影」は、立ち止まった。

その彼方に、志保と、それに奉仕する信徒の群が、ひとかたまりになって、ひそと息をひそめていた。

「影」とその一行のあいだには、どす黒い沼が、横幅ひろく、よこたわっていた。

妖しい伝説を与えられているに相違ない沼は、ところどころに薄氷を張っているだけで、一面泥を溜めていた。踏み込めば、たちまち、もがく五体は、ずぶずぶと沈んで、頭を没するに相違あるまい。えじきを待っている泥魔と、みてとれる。

「影」は、一行を迂回させて、対岸に待たせておき、此処を、雌雄を決する最後の場にきめていたのである。いわば、ここまで、狂四郎を、誘い出した、ということになる。

「影」は、狂四郎に対い立つと、はじめて、腰の短剣を抜きはなった。

文字通り、背水の陣であった。「影」の背後の泥沼は、縦幅が十数間あった。いかに、稀代の忍者と雖も、これを跳び越えることは、不可能である。

「影」は、狂四郎の円月殺法に対して、いかなる秘術をそなえている、というのか。

もはや、この対峙になっては、忍法を使うことは許されぬ。剣には剣をもって、闘わざるを得

ない。

ところが、二尺三寸の無想正宗に対して、「影」の得物は、一尺六七寸の短いものであった。

「影」は、これを、おのが顔の正面に、直立させたのである。狂四郎の視線に対して、おのが顔を、二つに割ってみせたのである。

狂四郎には、その時まだ、「影」が如何なる防ぎの業を揮わんとするのか、看破できていなかった。

こちらは、円月殺法を用うばかりである。

地摺りの切っ尖が、徐々に、円を描きはじめた。

「影」は、双眸をやや細めて、微動もせぬ。

無想正宗が、水平の線上に達した時、

「影」の黒い姿が、吸い寄せられるように、迫り寄りはじめた。間合は、すでに、狂四郎の方が、取っていたのである。

「影」の前進は、無想正宗の刃圏内へ、望んで身を容れることを意味した。これは、剣法の常識では、無謀以外の何ものでもなかった。

無想正宗が、完全に天を指した時、「影」の五体もまた、完全に、その一閃の圏内に入っていた。

途端に、ぱっと、跳び退ったのは、狂四郎の方であった。

狂四郎は、その刹那に、「影」の業の特異性をさとったのである。「影」の業は、対手の間合に入り乍ら、斬り下して来る対手の太刀を、半ばから両断する——それと、看た。

そして、次には、半ばになった対手の刀身を、さらに、その半分に両断する。

この秘業をそなえているからこそ、「影」は平然として、狂四郎の間合の内へ、滑り入って来たのである。

跳び退った狂四郎は、すでに、無想正宗を、地摺り下段にもどしていた。

「影」は、無想正宗が再び円を描きはじめるや、躊躇なく、その間合の内へ、進んで来た。

狂四郎は、再び、跳び退った。

跳び退った瞬間には、狂四郎の左手には、脇差が握られていた。

「………」

無言裡に、狂四郎は、敵に対して、もはや、一歩も退かぬことを、示した。

無想正宗を上段に、脇差を中段水平に構えたのである。その脇差は、対手の短剣との一撃をねらっていた。

脇差と短剣が搏ち合った刹那に、無想正宗は、「影」の頭上めがけて、一閃するであろう。

狂四郎に、電光のごとき迅業がある限り、「影」が、これを躱す余地があろうとは、思われぬ。

こんどは、狂四郎の方が、しずかに、前進を開始した。

「影」は、後退した。

……ついに。「影」の背後には、退るべき地面が、一尺も余さなくなった。

——どうする？

狂四郎の冷たく冴えた眼眸が「影」に問うた。

それに対する「影」の応えは、横へ、徐々に、地歩を移すことであった。

一瞬、狂四郎は、はっとなった。

「影」が移行して行くところに——泥沼の岸辺に、かなり大きな嵩の莚が巻いて、置いてあったのである。

「えいっ！」

凄じい気合とともに、狂四郎は、地を蹴った。

間髪をいれず、「影」は、短剣を狂四郎めがけて、飛ばしざま、横へ一間を跳んだ。

跳んだとみるや、巻き莚を、ひと蹴りした。莚は、沼の泥面上を、くるくるところがりはじめた。

と同時に「影」のからだは、ひろげられる莚の上を横転させて行った。そして、みる間に、縦幅十余間を、渡りきってみせた。

「影」は、向う岸に、すっくと立つや、

「眠狂四郎、如何に！」

と、叫んだ。

「影」と狂四郎の間には、長い莚が、泥面上に、まっすぐに敷かれてあった。

狂四郎は、大小の剣を腰に納めると、

「影殿は、女も金も、おのれの隠れ家へ、つれて行くつもりか？」

と、問うた。

「お主とは、引分けた。海底にねむる砂金を採ったならば、半分渡さねばなるまい」

「影」は、こたえた。

すると、狂四郎が、

「日本全土に、隠れ切支丹は、どれだけひそむのか、きいておこう」
「およそ三万七千九百人」
「影」は、明快な数字を挙げた。
「お主が、その頭領ならば、金はいくらあっても、足りまい」
そう云いすてるや、狂四郎は、踵をまわしていた。
じっと、見送る「影」のそばへ、志保が、そっと寄って来た。
影は、独語するように、云った。
「頭領には、わしよりも、あの男の方が、ふさわしいのだが……」

四

眠狂四郎が、飄然として、江戸へ帰って来たのは、それから、一月後であった。
狂四郎が、まっすぐに、立寄ったのは、水野忠邦邸の武部仙十郎の長屋ではなく、講釈師、立川談亭のぼろ家であった。
「千佐に、会わせてもらおうか」
狂四郎が、云うと、談亭は、ひどく真面目な面持で、
「ご案内いたします」
と、頷いた。
それから約一刻のち、二挺の駕籠が、渋谷の丘陵を登っていた。
「へい。先生、到着いたしましたよ」

声をかけられて、狂四郎は、垂れをはねた。
まだ裸枝のままの櫨の巨木の根かたに並んだ四基の墓を、狂四郎は、視た。
母と美保代と静香の墓は、この手で、据えている。のこる一基は、狂四郎のおぼえのない墓である。
「おれが、お前さんにたのんだ、おれの墓が、これではないのか？」
狂四郎は、それに近よって、談亭に、訊ねた。
「そうでござんしたな、十日前までは――」
談亭は、不服げな口調で、こたえた。
「十日前？」
「たしかに、十日前までは、下は、からっぽでございましたよ。あっしの目の黒いうちは、この下は、からっぽになっているものだ、と信じて居りましたがね」
「千佐が、この下に、ねむった、というのか？」
「遺言でしてね。……いじらしい遺言じゃ、ござんせんか。生命のともしびが、消えかかったのは、先生が、江戸を出てお行きになってから、程なくでした。その時、もう、遺言なさいました。先生の墓に、自分を埋めて欲しい、ってね」
「………」
狂四郎は、またたきもせず、第四の墓を、瞶めた。
また一人、不幸な女性を、逝かせたのである。
しかも、この千佐に対しては、出会った時から、そうなる予感があった。

狂四郎は、ふっと談亭を振りかえった。
「千佐は、自害したのではないのか？」
そう訊ねたい衝動が起った。
しかし、それをたしかめたところで、どうなろう。
狂四郎は、黙って、踵をまわした。
駕籠屋が待っていたが、乗らずに、斜面を下って行き乍ら、
「談亭——」
「なんです？」
「おれが死ぬまでに、まだ、二つや三つ、不幸な女の墓が、あそこに並ぶかも知れぬ」
「ぶるぶる——まっ平。冗談じゃない」
談亭は、かぶりと手を振ってから、
「どうもいけませんや、先生は——。敵の刃では疵つかない御仁だが、自分の言葉で自身を傷つけなさる。止してもらいましょう。縁起でもない」
立ちどまって、あらためて、頂上へ向って、合掌した。
狂四郎は、足を停めずに下って行き乍ら、ひくく、謡曲・苅萱を、うたっていた。
有為の転変を見るに、芝蘭は散じ易く、瑠璃はもろし、本の雫、末の葉露の下草の、後れ先だつ世のならい、今はじめたる嘆きと、思わず……。

解 説

箱根の塔の沢のKという旅館に、「眠狂四郎御定宿」の大きな木札がかかっている。温泉街道といわれる早川沿いの国道をあがって、橋を渡ったすぐのところだ。なんでも柴田錬三郎がそこにこもって「眠狂四郎」を執筆したということらしいが、それを「シバレン様御定宿」とせず、「眠狂四郎御定宿」としたところが、いかにもおもしろい。

そういえば『眠狂四郎孤剣五十三次』には、「箱根の決闘」と題した話もあった。箱根七湯のひとつ木賀ノ湯などもその背景になっている。「眠狂四郎」は作品の上では何度か箱根の関を往復した計算になるが、それは柴田錬三郎の場合も同様であろう。

「眠狂四郎御定宿」とする商魂をいうまえに、その木札がまかりとおるところに、眠狂四郎自身の大衆的人気が厳として存在するのだ。その意味では、眠狂四郎はすでに、立派な独立した人格をもっているといえるかもしれない。

洋の東西を問わず、虚構の人物が実在化し、虚説が実説と同居するようになったケースは数多くある。熱海の〝お宮の松〟をはじめとして、日本ではいたるところに虚構から実像へくらがえした存在がみられるが、外国でもその例にもれず、ハーシェクの「二等兵シュベイク」にゆかりのある酒場「ウ・カリハ」(盃で)では、おなじみの従軍牧師や連隊長シュレーダーやルーカッシュ中尉などの画像の下で、十二度のピルゼン・ビールを喫することができた。大衆の中に生き

る人気者の像は、いったん作家の手をはなれると、今度は独立した存在と化し、勝手に動きはじめる。眠狂四郎は柴田錬三郎の想像力の産物だが、今では大衆の中に生きているアイドルというべきだろう。

『眠狂四郎殺法帖』は昭和三十八年四月から翌三十九年三月へかけて『週刊新潮』に五十回にわたり連載された長編である。眠狂四郎の誕生は昭和三十一年だから、すでに十数年になるわけだが、その間『無頼控』『独歩行』『殺法帖』『孤剣五十三次』『虚無日誌』などがつぎつぎと生み出された。

『殺法帖』はそれまでの眠狂四郎シリーズと同様、読切り連載形式をとっているが、一話ずつが完結することなく、むしろ全体を通して流れる主題がある点も、『独歩行』と同じ趣向になっている。『独歩行』では幕府の転覆をはかる風魔一族と、それを迎撃する隠密黒指党の戦いが背景となっていた。『殺法帖』では将軍家斉につながる本丸老中と、世子家慶にしたがう西丸老中一派の、幕閣内での政権争奪が遠景に据えられ、佐渡金山に関する不正問題や、銭屋五兵衛の密貿易などの諸事件が、複雑にからみあって話が展開する。

眠狂四郎は西丸老中水野忠邦の側頭役・武部仙十郎につながる影の男だ。話は水野忠邦が佐渡の金銀山の盛衰に関する秘密調査のため、十名の隠密をおくり、過去十年にわたってなされた公儀の下げ金と上納高の不正をさぐることからはじまる。しかし派遣された十名の隠密は、本丸老中側からつかわされた隠密たちの手で葬りさられ、わずかに一人生き残った戸越嘉門もやがて姿を消す。中﨟の千佐が大奥より下り、水野忠邦の上屋敷にあいさつに立ち寄り、ひそかに秘密書類をはこび出すところを眠狂四郎につきとめられる第一話から、波瀾にとんだ物語の展開が興味

ぶかく暗示されるが、その佐渡金銀山の不正事件よりも、眠狂四郎をはじめとする超人的な術者たちの壮絶な活躍ぶりに、おもしろさの焦点はあるようだ。

狂四郎の特技である円月殺法もでてくるが、たとえば「忍び尼」で尼僧の法衣を前から後ろへ白刃でつらぬき、股間の秘処へ刃をふれさせ、身じろぎさえ許さぬ状態に釘づけにするなど、いかにも狂四郎らしい残忍な光景だ。ただし彼の残忍酷薄のふるまいは、けっしてサディズムからうまれたものではなく、むしろ孤独な自意識のあらわれなのだ。

眠狂四郎の過去には、暗い出生の秘密がある。一見無頼にみえる彼の残忍な行動の裏には、孤独な虚無の業念がうずいているのだ。そのことを狂四郎は、誰よりもよく知っている。

狂四郎は千佐にむかって、「……わたしには、不幸な育ちかたをした者のみが持っている翳が、わかるのだ」と告白するのも、また唐人陳孫から、「孤単放浪の風流人には、お主は、やはり弱いようでござる」といわれるのも、そのことと無関係ではあるまい。

『殺法帖』には少林寺派拳法の陳元贇十三代の末裔である唐人陳孫や、下忍の捨丸も登場し、狂四郎に劣らぬ孤独のかげをひきながら、話の展開にからんでくる。

ここではあらためて筋の紹介はしないが、銭屋五兵衛の野望が大きな縦糸となっているのも、ひとつの特色だろう。五兵衛は開国の夢を実現するために、将軍に麻薬を与えて痴愚にしようとするほどの人物だが、隠れ切支丹の問題や、銭五の開国の夢がからむ点も、作者の空想力のひろがりを暗示する。

だが私は狂四郎シリーズにおなじみの講釈師立川談亭などという脇役に、たまらないおもしろみを感じる読者の一人であることを告白しておきたい。作者の文章によると、この立川談亭のア

イデアは、直木三十五の『南国太平記』に登場する講釈師南玉によるものだそうだが、そういった脇役の一人一人にまで、エンターテインナーとしての力量が感じられる。

眠狂四郎シリーズは、大衆文学の正統である伝奇小説の流れをひくもので、その戦後におけるよみがえりをしめすものだが、それは作者が過去の日本の伝奇小説に学んだということでは、必ずしもない。むしろ柴田錬三郎の文学には、ニヒルな側面をふくめて、近代的なダンディズムがつよく、それが狂四郎の造型にあたってもつよく作動しており、既成のものと一線を画す新しみともなっている。したがって眠狂四郎を、戦前の机竜之助や堀田隼人、あるいは新納鶴千代と同一次元でとらえることはできない。その違いは、十五年戦争を経過したものと、しないものとの意識の違いでもある。

おもしろいことに、戦後の大衆文学はその中間化の傾向に従って、純文学の書き手までが動員されることになるが、自然主義からの系譜ではなく、むしろ浪曼主義的な書き手のなかから、多くの作家が育っているのだ。柴田錬三郎や五味康祐など、佐藤春夫門下の逸材が、つぎつぎと大衆文学の畑に進出してきた昭和三十年代の状況は、まさにその好例といえる。

自然主義的な系譜からではなく、浪曼主義的な分野から、大衆文学の新しい書き手が育ったことは、けっして偶然ではなかった。それは日本的自然主義にたいするアンチテーゼの意味を、浪曼派の諸作がもっていたからだ。柴田錬三郎と五味康祐の共通の師が佐藤春夫であったことは、けっして偶然とはいえない。

別のところにも書いたことがあるが、佐藤春夫は頼山陽の『日本外史』をすぐれた大衆読物だといい、大衆作家の鼻祖で、直木賞の名称を山陽賞と変えてはどうかと発言しているのを読んだ

ことがある。いかにも茶目っ気たっぷりな先生の言葉だが、その同じ座談会で柴田錬三郎が佐藤春夫の言葉をうけて、「大衆作家と思っていないのは、大衆作家の不名誉」だと述べていたのを記憶している。

大衆作家としての自覚のないところに、大衆文学のすぐれた創造はあり得ない。柴田錬三郎は、「小説というものは、元来、嘘をかくものである」といった発言でもあきらかなように、小説が虚構にもとづくことをはっきりと認識した書き手の一人だ。日本の純文学は、大衆のロマネスクな夢を忘れて、自己の内心を凝視することにかたより過ぎた。大衆文学は一部に通俗的なものをふくんでいたとはいえ、もともとロマネスクな大衆の文学意識を回復する欲求に根ざした創造のいとなみだったといえよう。柴田錬三郎はその文学造型の戦後における代表選手なのだ。

『眠狂四郎殺法帖』のなかに、狂四郎が柳生但馬と本丸老中水野忠成の中屋敷で、御前試合を行うくだりがある。将軍家お手直し役の柳生但馬もひくにひけない勝負だ。狂四郎はその試合で肺が破れて喀血したとみせて、真紅の液体を吐きつけ、危機一髪のところで戦いを回避し、白刃を本丸老中の席近くとばす。こういった場面を読んでいると、殺しの場面がみごとな美感覚にささえられているような思いさえしてくるほどだ。

もともと、大衆文学はチャンバラの殺しの妙味に尽きるといわれる。だからこそまた殺しの剣を〝ラスコーリニコフの斧〟とみなす論者もあらわれたのだ。狂四郎の円月殺法をはじめ、好色がかった官能的な剣のひらめきまで、ひとつひとつに作者の時代感覚がこめられている。

では眠狂四郎は何にむかって、あのニヒル剣を一閃させているのだろうか。柴田錬三郎はその答は提示してくれない。その解答は、読者個々が考えるべき問題かもしれないのだ。

円月殺法の中には、そういった時代の鬱屈したものを切り開いてゆくような何かがこめられているように私は思う。

尾崎秀樹

文字づかいについて

新潮文庫の文字表記については、なるべく原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは現代仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、一般には常用漢字表以外の漢字も音訓も使用する。
四、難読と思われる漢字には振仮名をつける。
五、送り仮名はなるべく原文を重んじて、みだりに送らない。
六、極端な宛て字と思われるもの及び代名詞、副詞、接続詞等のうち、仮名にしても原文を損うおそれが少ないと思われるものを仮名に改める。

眠狂四郎殺法帖（下）

新潮文庫　し－5－15

昭和四十五年九月二十五日　発行
昭和六十二年五月二十日　二十五刷

著者　柴田錬三郎

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替東京四―八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所

ISBN4-10-115015-X C0193